平成20年度文部科学省・
筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

—帰国隊員報告会—

報告書

主催：文部科学省，国立大学法人筑波大学
共催：独立行政法人国際協力機構
平成21年1月10日
国際協力機構国際協力総合研修所

平成21年2月

筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）
文部科学省国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

平成20年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職教員の活躍

—帰国隊員報告会—

報告書

主　催：文部科学省、国立大学法人筑波大学
共　催：独立行政法人国際協力機構
平成21年1月10日
国際協力機構国際協力総合研修所

平成21年2月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

はじめに

平成13年度に文部科学省により青年海外協力隊への現職教員特別参加制度が制定されて以来、本シンポジウムも 5 回目を迎えました。本シンポジウムは派遣現職教員の方々の海外での活動と帰国後の活動の充実を目的として開催されますが、年を追うごとに先生方の活動がより充実してくるのを感じています。

本年度のシンポジウムでは、帰国されたばかりの 18 年度派遣教員 16 名、拠点システム構築事業代表者 6 名、教育委員会関係者 2 名、特別参加制度以前に青年海外協力隊に参加した現職教員 1 名の方々が報告をされています。派遣教員の方々の発表からは海外での活動の困難さだけでなく様々な喜びや手応えに富んだものであること、任地においても帰国後の活動に向けた準備に余念がないことが分かり、一般隊員とは異なる現職教員の使命感のようなものを強く感じます。派遣現職教員以外の方々からの報告は、現職教員の方々の熱心な活動態度をいかに支援するかということに関わるわけですが、今回の教育委員会の方々を含めた報告では、日本の教育現場における国際理解教育の課題と同時に派遣現職教員に期待される役割や意義がさらに明確に浮かび上がりました。こうした教育委員会の皆様方との連携を深め、変わらぬご支援ご指導をたまわりたく思います。

今後も本シンポジウムを通して、派遣現職教員の海外での活躍と日本の学校現場での取り組みを紹介していけるよう期待しています。全国からお集まりくださった 144 名の参加者の皆様にお礼を申し上げるとともに派遣現職教員に対する今後のより一層の支援をお願いしたいと考えます。

平成21年2月

筑波大学教育開発国際協力研究センター
センター長　中田　英雄
佐藤　眞理子
礒田　正美
鎌田　亮一

目次

開会挨拶

筑波大学教育開発国際協力研究センター長　中田　英雄 …… 3

青年海外協力隊の重要性

文部科学大臣官房国際協力政策室長　浅井　孝司 …… 5

独立行政法人国際協力機構（JICA）
青年海外協力隊事務局長　伊藤　隆文 …… 7

派遣現職教員の活躍

分科会１

西浦　信幸　（18-1，ブータン，小学校教諭）（墨田区立横川小学校） …… 9

清野　真輝　（18-1，ドミニカ，小学校教諭）（新潟大学附属小学校） …… 19

平本　洋康　（18-1，バングラデシュ，小学校教諭）（札幌市立西白石小学校） …… 29

白銀　有紀　（18-1，セネガル，小学校教諭）（伊勢原市立比々多小学校） …… 41

分科会２

沢登　祐子　（18-1，フィジー諸島，小学校教諭）（練馬区立早宮小学校） …… 49

鳴海　麻衣子　（18-1，中国，日本語教師）（川崎市立はるひ野小中学校） …… 57

森山　美鈴　（18-1，ホンジュラス，小学校教諭）（豊中市立北条小学校） …… 71

石井　洋　（18-1，ブータン，小学校教諭）（留萌市立緑丘小学校） …… 81

分科会３

加賀　裕子　（18-1，カンボジア，理数科教師）（留萌市立緑丘小学校） …… 91

今泉　浩和　（18-1，ナミビア，理数科教師）（新城市立作手中学校） …… 101

鈴木　祐二　（18-1，タンザニア，理数科教師）（北海道釧路東高等学校） …… 121

冨永　栄治　（18-1，エチオピア，理数科教師）…… 133
（宮崎県延岡市立東海中学校）
分科会４
川村　ひとみ　（18-1，パラグアイ，養護）…… 147
（横浜市立東小学校）
大内　比呂子　（18-1，ソロモン，家政）…… 165
（滋賀県立彦根西高等学校）
因幡　智寿子　（18-1，バヌアツ，体育）…… 183
（名古屋市立御幸山中学校）
上田　祐之　（18-1，ミクロネシア，幼稚園教諭）…… 199
（芦屋市立西山幼稚園）

派遣現職教員サポート活動報告
鎌田　亮一　（筑波大学教育開発国際協力研究センター・研究員）…… 215
：CRICEDの行う派遣現職教員のサポート活動の紹介
浜野　隆　（お茶の水女子大学文教育学部・助教授）…… 219
：幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上
佐々井　啓　（日本女子大学家政学部被服学科・教授）…… 225
：海外派遣隊員の家政分野に関連する活動支援教材等の開発
松嵜　昭雄　（鳴門教育大学大学院学校教育研究科）…… 233
：日本国内での実践知を反映したハンズオン素材の集約
村松　隆　（宮城教育大学附属環境教育実践研究センター・教授）…… 237
：海外教育協力者に対する環境教育実践指導と教育マテリアルの支援
藤原　義博　（筑波大学特別支援教育研究センター）…… 241
：障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポート体制の構築

派遣経験を生かした教育活動に関する報告
藤原　一絵　（9-1，ボリビア，小学校教諭）…… 245
「個人の力を生かすネットワーク」（京都市立明徳小学校）
林　賢三　（18-1，モンゴル，特殊教育）…… 253
「これからの教育の中で、帰国隊員に望むもの」（京都市教育委員会総合支援育成課）
村　良弘　「本県における現職教員特別参加制度の実態」
（愛知県教育委員会教職員課）…… 261

閉会挨拶
筑波大学教育開発国際協力研究センター教授　　佐藤　眞理子 …… 265

平成20年度帰国隊員報告会プログラム修正案

2009/2/16

プログラム1

10:00～10:05 （国際会議場）	開会挨拶　（中田英雄　CRICEDセンター長）
10:05～10:10	青年海外協力隊派遣の活動支援について（浅井孝司，文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長）
10:10～10:15	青年海外協力隊派遣の活動支援について（伊藤隆文，JICA青年海外協力隊事務局長）

プログラム2

午前 （分科会）	分科会1　国際会議場	分科会2　セミナー室201	分科会3　セミナー室202	分科会4　大会議室
10:25～10:50 （20分発表＋5分質疑）	1 西浦　信幸　小学校教師 ブータン　東京都	5 沢登　祐子　小学校教師 フィジー　東京都	9 加賀　裕子　理数科教師 カンボジア　神奈川県	13 川村　ひとみ　養護 パラグアイ　神奈川県
10:55～11:20 （20分発表＋5分質疑）	2 清野　真輝　小学校教師 ドミニカ共和国　新潟県	6 鳴海　麻衣子　日本語教師 中華人民共和国　神奈川県	10 今泉　浩和　理数科教師 ナミビア　愛知県	14 大内　比呂子　家政 ソロモン　滋賀県
11:20～11:30	Q&A	Q&A	Q&A	Q&A

プログラム3

11:40～11:45 （国際会議場）	CRICEDの行う派遣現職教員のサポート活動の紹介 （鎌田亮一　筑波大学教育開発国際協力研究センター）
11:45～12:00	幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上 （幼児教育　浜野　隆　お茶の水女子大学文教育学部）
12:00～12:15	海外派遣隊員の家政分野に関連する活動支援教材などの開発 （家政教育　佐々井　啓　日本女子大学家政学部被服学科）
12:15～12:20	Q&A

（昼食）

12:20～13:25　「世界に飛び出すみんなの先生」DVD上映

プログラム3

13:25～13:40 （国際会議場）	日本国内での実践知を反映したハンズオン素材の集約 （ハンズオン教材 松嵜 昭雄 鳴門教育大学大学院学校教育研究科）
13:40～13:55	海外教育協力者に対する環境教育実践指導と教育マテリアルの支援 （環境教育　村松　隆　宮城教育大学附属環境教育実践研究センター）
13:55～14:10	障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポート体制の構築 （特別支援教育　藤原　義博　筑波大学特別支援教育研究センター）
14:10～14:15	Q&A

プログラム2

午後 （分科会）	分科会1　国際会議場	分科会2　セミナー室201	分科会3　セミナー室202	分科会4　大会議室
14:25～14:50 （20分発表＋5分質疑）	3 平本　洋康　小学校教師 バングラデシュ　北海道	7 森山　美鈴　小学校教師 ホンジュラス　大阪府	11 鈴木　祐二　理数科教師 タンザニア　北海道	15 因幡　智寿子　体育 パヌアツ　愛知県
14:55～15:20 （20分発表＋5分質疑）	4 白銀　有紀　小学校教師 セネガル　神奈川県	8 石井　洋　小学校教師 ブータン　北海道	12 冨永　栄治　理数科教師 エチオピア　宮崎県	16 上田　裕之　幼稚園教諭 ミクロネシア　兵庫県
15:20～15:30	Q&A	Q&A	Q&A	Q&A

プログラム4

15:40～16:00 （国際会議場）	個人の力を生かすネットワーク（藤原一絵・京都市立明徳小学校）
16:00～16:20	これからの教育の中で、帰国隊員に望むもの（林　賢三・京都市教育委員会総合支援育成課）
16:20～16:40	本県における現職教員特別参加制度の実態（村良弘・愛知県教育委員会教職員課）
16:40～16:45	閉会挨拶（佐藤眞理子　CRICED）

17:00～	懇　親　会

開会挨拶

中田　英雄
（筑波大学教育開発国際協力研究センター）

皆さん、新年明けましておめでとうございます。本日は、平成20年度文部科学省筑波大学国際教育協力シンポジウム開発途上国における派遣現職教員の活躍の帰国隊員報告会にお集まりくださいまして誠にありがとうございます。さて、本日のシンポジウムでは北は北海道から、南は宮崎県まで、駆けつけていただきました16名の帰国隊員の皆様による、任地における活動の成果を発表していただきます。また、文部科学省国際協力イニシアティブ平成20年度教育協力派遣形成事業において青年海外協力隊派遣現職の支援事業を担当しています、お茶ノ水女子大学、日本女子大学、宮城教育大学、鳴門教育大学、筑波大学の活動報告もあります。さらに、京都市教育委員会及び、愛知県教育委員会の方々によります、派遣経験を生かした、教育活動に関するパネルディスカッションがあります。本日のプログラムは、以上の三本立てになっております。

ところで、私は、派遣された現職の先生方が任地の学校現場で職務した体験や問題、そして感動的な出来事などに関心があります。先生方は、学校現場での体験や問題にいかにして対応されてこられたのでしょうか。日本での経験がそれに役立ったのでしょうか。これらのことは、今後のより効果的で組織的なサポートシステムを作っていく上での参考になると思います。具体的な例をあげてご発表していただけると幸いです。子供たちや、同僚との触れ合いを通して、あるいは生活の中で、多くの感動と喜びを体験されたことでしょう。これらの体験は、血となり肉となり、計り知れない財産となります。これからの長い教育生活でこの財産を有効に活用して教育現場や地域社会に還元してほしいと願っています。どんな還元の仕方があるのでしょうか。それは、本日のパネルディスカッションの場でもあります。途上国にあたる教育協力経験を通して、先生方はコミュニケーションの能力、異文化理解能力、困難な状況に直面し、それに対応する能力、日本の教育と途上国との教育を比較し、相対的にみる能力、を身につけてこられたのだと思います。このような能力を確実に身につけた先生方は、今後の教育現場で貴重な人材となることは間違いありません。

本シンポジウムを開催するにあたって、文部科学省及び、国際協力機構の皆様方にご指導とご支援を賜りましてこの場をお借りしてお礼申し上げますとともに、今後のご支援をお願い申しあげまして、大会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。活発なご討論と、ご意見をお願い申し上げて私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

プログラム１

青年海外協力隊の重要性

文部科学省大臣官房国際協力政策室長
浅井孝司
独立行政法人国際協力機構（JICA）
青年海外協力隊事務局長　伊藤隆文

青年海外協力隊現職教員特別参加制度の意義について

浅井　孝司
（文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長）

皆様、新年明けましておめでとうございます。本日は多くの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。本シンポジウムの開催にあたりまして、文部科学省を代表して、一言御挨拶を申し上げます。

はじめに、平成20年度に帰国された現職教員の皆様方に、非常に遅ればせながら海外青年協力隊としての活動に対して、心から感謝を申し上げたいと思います。派遣期間中の2年間にわたる経験は、それぞれに異なることでしょうが、いずれの方も厳しい生活環境の中で、異文化に接し、さまざまな苦労をされてきたとお察しいたします。実は、私自身も、皆様と同じ時期平成18年5月から平成20年7月いっぱいまでバングラデシュの日本大使館に勤務していました。途上国での生活は、私にとって初めての経験でした。皆様に比べれば、恵まれた環境の中での生活であったと思いますけれども、それでも、何度か体調を崩したりと、健康に対する管理や日々のストレスへの対応などの苦労を、私自身も実感してきました。しかしながら、派遣期間中を振り返ってみるとわかると思いますが、そういった、苦労だけでなくきっと、楽しかった経験や、得難い経験が心に残っていると思います。海外で直接御自身が経験されたこと、すべてが必ず自分自身の発展につながるものと思っております。

文部科学省としましては現職教員の方々は、児童・生徒に対する密着した教育経験を有していることから、我が国の教育経験を生かした、国際貢献活動に寄与していただくことができると考えております。さらに、現職教員の青年海外協力隊への参加は、国内の教育にとってもメリットがあると期待しているところです。ひとつは、教員が途上国において、さまざまな障壁を克服して国際協力に携わることにより問題への解決対応能力や指導力の向上というものが実践できると考えております。また、帰国後は教育体験を現場に還元でき、ひいては我が国の教育の質の向上につながると思っております。文部科学省といたしましては、青年海外協力隊現職教員特別参加制度によって、ひとりでも多くの先生方が参加できるよう、努力している次第であります。皆様のような、貴重な体験をされて帰国されてきた方々が、ぜひその経験を子供たちだけでなく、職場の同僚あるいは、地域の地元の方々に対しても、お伝えししていただきたいと期待しております。

現職教員特別参加制度設立以来、7年間で516名の現職教員の方々が、世界各地に派遣されています。今年度から、同制度の適用を日系社会青年ボランティアにも拡大したことから、来年度は海外青年協力隊として、76名。日系社会青年ボランティアとして10名の、合計86名の現職の方々が派遣されることになっています。本日は、派遣予定の方も多くおい

でになっていると伺っております。本日のシンポジウムで、帰国された先輩隊員の皆様方、それから派遣準備をされている方々、さらには、国際教育協力に携わっておられる方々の交流の場となるとともに、本シンポジウムが意義深い報告や議論の場となり、皆様方に共有される実り多い機会となることを願っています。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたり、多大なるご支援をいただいた、JICA海外青年隊事務局及び、開催に御尽力いただいた、筑波大学教育開発国際協力研究センターの関係者の方々に対しまして、深く感謝を申し上げると共に、皆方のますますのご健勝を期待しまして、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

青年海外協力隊派遣の活動支援について

伊藤　隆文
（JICA 青年海外協力隊事務局長）

皆さん、おはようございます。ただいま、ご紹介いただきました、JICA 青年海外協力隊事務局、事務局長をしております伊藤と申します。本日のシンポジウムの共催者ということで、JICA を代表いたしまして、一言挨拶申し上げます。

青年海外協力隊の現職参加制度でございますけれども、平成 14 年から始まりまして、今年で 7 年目を迎えております。青年海外協力隊は、1965 年に始まった事業でして、40 数年間にわたり、83 カ国に 3 万 2 千名を超える隊員を派遣してきております。この中で、現職の先生方がたくさん出ていただいてるわけですが、制度ができる前の平成 13 年以前は合わせて 659 名の先生方が派遣されています。この制度ができました平成 14 年以降は、516 名の先生方が派遣されています。今日現在 50 カ国で 155 名の先生方が、各地で活躍されております。日本の社会の中で外国人の姿を見る機会は増え、社会に定着してきたと思います。昨年の秋以来、アメリカでの金融危機による不況の影響で職を失って残念ながら、帰国する外国人の方もいるという報道も聞いていますけれども、恐らく長い目でみますと、日本の経済とか社会のある部分を外国人が支えるという構造は今後変わらないのではないかと考えております。現在 200 万人近い外国人登録があり、7 万人もの人が、日本の公立学校に通っているというデータもございます。このような社会背景のなかで海外経験をもち、深い異文化理解のできる、さらには語学力を含めたコミュニケーション能力をもった人材を育成することの必要性が増しているのだと思います。現職教員特別参加制度の意義は、益々高まってゆくものと考えております。JICA では、協力隊やシニア青年海外ボランティア以外にも中南米の日系人社会からの要請に基づいて、ボランティアを派遣する日系社会青年ボランティア、日系社会シニアボランティアも合わせて行っておりまして、現職教員特別参加制度は、日系社会青年ボランティアにも適用され、今年の 4 月から 10 名の現職の先生方が、ブラジルに派遣予定でして、この制度が発展することは、大変喜ばしいことでございます。

本日は平成 18 年度に派遣されまして、昨年の三月に帰国されました先生方の中から、16 名の先生方に報告していただくことになっております。帰国された先生方には、2 年間大変ご苦労になられたと思います。ありがとうございました。また、この場には平成 21 年度に派遣予定の先生方も参加されておりますので、帰国された先生方、それから派遣予定の先生方。そして、この制度に関心をお持ちの皆様に、この制度につきまして、あるいは JICA のボランティア事業につきまして、いっそうの理解を深めていただければと思います。現職教員特別参加制度とは別に、先ほどのような社会状況を踏まえまして、いくつかの自治

体や教育委員会のほうで、帰国隊員の採用特別枠というのを設けていただけるところが増えてきまして、これはとてもありがたいことであり、推進していきたいと考えております。今日お集まりの皆様方には、現職教員特別参加制度と合わせまして、帰国隊員採用特別枠につきましても、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますけれども、本日のシンポジウムの開催につきまして、非常にご尽力いただき、日ごろからお世話になっております文部科学省。それから、筑波大学の教育開発国際協力センターの皆様方に対し厚く御礼申し上げますとともに、今後のご支援をお願いしまして、私のご挨拶とさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

プログラム２

派遣現職教員の活躍

分科会１	分科会２	分科会３	分科会４
西浦信幸 教諭 墨田区立横川小学校 ブータン 小学校教諭	**沢登祐子** 教諭 練馬区立早宮小学校 フィジー諸島 小学校教諭	**加賀裕子** 教諭 横浜市立寺尾中学校 カンボジア 理数科教師	**川村ひとみ** 教諭 横浜市立東小学校 パラグアイ 養護
清野真輝 教諭 新潟大学教育学部附属新潟小学校 ドミニカ 小学校教諭	**鳴海麻衣子** 教諭 川崎市立はるひ野小中学校 中国 日本語教師	**今泉浩和** 教諭 新城市立作手中学校 ナミビア 理数科教師	**大内比呂子** 教諭 滋賀県立彦根西高等学校 ソロモン 家政
平本洋康 教諭 札幌市立西白石小学校 バングラデシュ 小学校教諭	**森山美鈴** 教諭 豊中市立北条小学校 ホンジュラス 小学校教諭	**鈴木祐二** 教諭 北海道釧路東高等学校 タンザニア 理数科教師	**因幡智寿子** 教諭 名古屋市立御幸山中学校 バヌアツ 体育
白銀有紀 教諭 伊勢原市立比々多小学校 セネガル 小学校教諭	**石井　洋** 教諭 留萌市立緑丘小学校 ブータン 小学校教諭	**冨永栄治** 教諭 宮崎県延岡市立東海中学校 エチオピア 理数科教師	**上田祐之** 教諭 芦屋市立西山幼稚園 ミクロネシア 幼稚園教諭

NORBU のブータン話

西浦　信幸
（18 - 1，ブータン，小学校教諭，墨田区立横川小学校）

みなさんおはようございます。それでは初めに自己紹介したいと思います。私生まれも育ちも葛飾柴又の近く、下町出身の西浦信幸といいます。今墨田区立横川小学校というところに　の後に戻りまして、3 年1組の担任でやっともうすぐ1年が経とうとしています。アズマ橋の近くですので、もし近くにお寄りの際は皆さん是非、墨田区立横川小学校に遊びに来てください。名前のノルドーなんですけど、私ノブユキといいます。その名前を初めてブータンという国の方にお会いした時に、君の名前はノルドーといってすごくいい名前だぞということを教わりました。ノルドーというのは。

では、ここでクイズを出します。ノルドーというのは宝石・宝玉という意味で、それでブータンの国旗にも出ていまして、とても大切になされるそうで、自分はそんなに大事なものではないんですけど、嬉しいなと思いました。

話をどんどん続けさせていただきます。まず、なぜ協力隊ということでオカシマ校の校歌に「　」という歌詞がありまして、その歌詞を見て横川小学校にいた時になんかひらめいてしまいました。昔は海外に行ったりしてお仕事をしてみたい、そして困った海外の子供たちのために人生の中で少しでも働いてみたいと思いました。それがもう私 40 になって、40 目前でやっぱりやらなきゃいかんなということでひらめきまして挑戦してみようと。

面接ではですね、そちらにいらっしゃる　先生とご一緒だったこともたしかあったかとおもうんですけども、個人面接であなたは仕事を辞めようとしてませんか、私は今年で 18 年目なんですけども、仕事に疲れてませんかとか、仕事を辞めようと思ってませんかなんていうことも聞かれまして、その時僕は答えました。僕はこの仕事に向いていると思います、なんて格好つけて言ってしまったんですけど、そんなことでなんとか受かりまして、一度しかない人生だから 2 年間くらい世界の中で暴れてきてもいいだろうということで挑戦することにしました。隣に書いたのが卒業生に送った言葉で、こうやって生かされているからにはなにかできるんじゃないかというようなことを 2 年前の　に、日本の教え子の人たちに送らさせていただきました。

では、ブータンについて紹介したいと思います。ブータンはヒマラヤの仏教王国でこの？にも出るので皆さんすごくご存じだと思うんですけど、とても自然の美しい国です。花鳥風月、本当に花が綺麗ですね。今後ろにいらっしゃる隊員の石井さん、帰ってこられた石井先生も、よく一緒に山を歩きましたが、本当に花が美しい国で、鳥の鳴き声で朝目が覚めます。私の場合は鳩だったんですけども、いつも鳩が家の窓にとまって、目が覚めました。風の音が聞こえます。風の音、なかなか日本にいると感じられること少ないんですけ

ども、風の音を感じました。そして月も綺麗でした。

けれども、犬がたくさんいます。ロチというのはブータン語で犬という意味で、本当に犬怖いです。毎年隊員の人も噛まれています。私も何度も囲まれたことがありましたが、大体どこの国でも似たり寄ったりの危険はつきまといますので、さきほど　先生もおりましたが注意が必要だなと思いました。ちなみにブータンでは（犬を追い払う際に）シッシと言わないで、チッチと言うんですね。チッと言うと多分後ろまでよく聞こえるんじゃないかと思うんですけども、これ子供を追っ払うときなんかにもよくチッチと言って子供たち寄ってくるなというような感じでよく使われていました。

衣食住を？ということで、僕が着ているのがブータンの民族衣装のほうで、これがこちらでの背広と同じです。これがすごく向こうでは正式、正式にはこれにもうひとつマントみたいのを被るんですけども、これも失礼のない服装と言われています。ちょっとミニスカートみたいな感じで、すね毛とか出て恥ずかしいんですけども、ハイソックスをはいています。こんな感じで。でも脱ぐと結構大きいんですね。学校でも子供たちに紹介するときはこんな衣装を着て紹介させていただいています。

激辛、有名な話ですが、女性はまたケラ（？）という衣装があるんですけども、ブータンの食べ物は激辛で困りました。本当に辛いです。これに耐えて慣れていかないとなかなか暮らしていくことは難しいかな、ブータン人の人と仲良くやっていくのは難しいかなと思いました。けれども、だいぶ最後のほうには慣れまして、今でもやめることなく七味唐辛子をたくさんかけて食べるようにしています。

仕事は向こうの小・中学校一緒になったような学校、幼稚園クラスからあるんですけど、そこで主に体育を教えていました。体育といっても結構休む先生も多いので、急遽休む先生の補強というんですか、向こうの言葉でいうと substitution もかなり多くて、教室でいろんなことを教えることも多かったです。なかなかコントロールが難しかったですね。でも子供たちがとても良くしてくれて、楽しく勉強してこれたかなと思います。

日本の学校と似ていてびっくりしたことはやっぱり、ちょっと言葉を恐れず言うと dangerous mother が多かったということで、おばちゃん先生、そういった女性の先生がすごく多くて、教育を、ブータンを支えているのは女性、特に初等教育を支えているのはやはりこういう女性の先生の力なのかなと思いまして、すごく似ていたのでびっくりしました。また、そういう方にすごく親身に面倒みてもらうことになりました。プライベートということで卓球をやっていまして、なんと、ちょっと卓球で自慢させてください。ブータンチャンピオンになってしまいました。卓球で、ダブルスなんですけど、ブータンチャンピオンに。とまあブータン選手権といっても町の、昔の卓球場あるじゃないですか。昔の方は覚えているかと思うんですけど、町で 100 円・200 円払ったら打てる卓球場。あんな感じでやっていたのでそんなに大したことないんですけど、でも卓球を通して交流ができたんじゃないかと思っています。こんな感じでやっていました。

本はたくさん読みました。よく本の話をさせていただいて、とても読書をする時間が持

てました。

旅がすごく好きなのでブータン国内を、そしてインドなどを旅して、健康を考えたかなと思います。　ですごく便利なところは、この袋の中に色々とものが入るので、いろんなものを出せるとかいいと思います。

今日の話では主にブーダンでの出会いについて話していきたいと思います。青年海外協力隊員の仕事や学校のことなど、ブータンの学校などについてはこの後午後、ブータンから帰ってきた北海道の石井洋先生のほうが詳しくお話してくださると思いますので、そちらのほうを是非皆さん聞かれてきてください。美人　　さん、一番の親友　　さん、この後写真映します。日本語を教えた　　さん、バドミントン、朝からバドミントンをしました。体育館がないので外でやりました。なくなってしまった　　ということで、そんなブータンでの　　、　　、他の隊員の仲間、応援して下さった先生方、家族ということでこの後話していきますが、写真を　　したいと思います。

まずこれがブータンの学校での記念撮影で、この方が友達の事務員の　　さんという人でいつも仲良くしていました。私が持っているのがチリ　　と言いまして唐辛子の　　ものです。それがとても辛いんですけど、向こうの人は普通にティータイム　　。ブータンの人たちはとても英語がうまいので、英語の先生は多いですね。

そうだ、ブータンクイズを出すのを忘れてました。すみません。ここでブータンクイズを少し出したいと思います。私、英語もブータン語もほどほどだったんですけど。どこの国でもそうだとは思いますが、ブータン語は意外とジェスチャーが上手で、山の国なので、遠くの人に伝えるために特にこれを使います。(手を捻る)さて、これは、なんでしょうということですが、これは、「それ、何？」「どこいくの？」なんでというときには、何でも使えます。あと、向こうにいって変わったのは、日本人なら「イエス」というときに、首を縦に振りますが、インドやブータンでは、「イエス」というとき首を横に振ります。最初は、なんでかなと思っていましたが、帰国する時には、自分もそうしていました。こんな感じで挨拶をするので、多分街でそういう友達とかに会ったとしたら、その人は、インドや、ブータンの国から暮して帰ってきた可能性が高いです。

この人は、すにえさんといって今、日本に留学に来てまして三重大学の大学院で勉強しています。時々会ったりして一緒にお酒を飲んだり、話をしたりしています。子供が、こんなちっちゃい子供が生まれたのですごい大変でした。トータル 6 ヶ月ぐらい断水がありまして、水がないのにすごく苦労しました。これはどこの国でもそうだと思いますが、海外に行くと水ってすごく大変だなと思いました。

これはチャンガン小中学校の子どもたちです。この子が亡くなってしまったタシオ君って言うんですが、去年の正月に亡くなってしまったんですけども、とても仲良くしてたのでお葬式やお通夜に行ってかわいそうだなって思ったんですけども、ブータンの人の考え方なんですけども、不思議なことに、亡くなってよかったって向こうの人は言うんですよ。なぜかって聞いたら、もう生まれ変わってるっていうことを言うんですよね。仏教の考え

方だと思うんですけど、ブータンの人はどうしてこういう風に考えるのかなって、どうしてこういう生活なのかなっていうのをよく考えたほうがいいのかなと。どの国に行ってもそうだと思うんですけど、自分なんかはチベットやブータンについての本なんかを読んで、どうしてブータンの人がこう考えるのか、どうしてこう生活するのかっていうのを考えながら生活、生きていたと思います。そうすると、一概におかしいんじゃないのっていう風にはならないじゃないのかって思って、海外に行くときはこういうのは普通なのかなって思って自分では思っています。

卓球部の仲間ですね。今卓球を頑張っています卓球部のみなさんです。本当に卓球部の人達との交流は楽しかったですし、これからも、来年の横浜の世界選手権に、子どもたち。たぶんこの子かこの子が来れるかと思うんで、応援に行けたらいいなって思っています。

真ん中にいる石井さんですね。こんな感じで何と北海道の盆踊りを、北海道の子どもたちが知らないという盆踊りを石井先生は教えてくださいました。

今、ブータンで一番有名な日本人、関大（せきたい）ですね。こういう仲間がいまして、この人は本当にブータン語が上手で、やはり言葉は大事だなと、僕はあまり上手くはないんですけど、特にブータンではみんな英語が上手なんですけども、英語、造花、それからブータンの言葉、ブータンの関西弁、そして、様々な、ネパール語、ヒンディー、英語は挙げましたね。だいたい一人五つぐらいの言葉を話せますので、私たちも早く語学の勉強をもうちょっと、自分もやっておけばよかったなと反省しています。この人は造花や向こうの言葉が得意なんで、これからも英語は大事なんですけども、現地の言葉っていうのは大事なのかなって、向こうの人は喜んでくれますので、そういうことを感じています。

これは家族で。家族も来てくれました。このグラウンドでサッカーした後に撮ったんですけども、思い出の一枚です。

これはちょっと自慢で有名な人と一枚。この人です。中田さん。中田さんですね。サッカーの、ブータンに来まして、中田さんと結構話をさせていただきました。この人が国連で勤めていらっしゃる田中さんと言う方なんですけども、すごくお世話になりました。サッカーの中田さんとも結構話す機会がありまして、何とか笑わせようかと思ったんですけども、無理でした。質問でいい答えがあったのは、語学の習得法はありますかって聞いたら、やはり、発音を真似ることだねって言っていました。あとは、野菜は苦手だそうですね。

ブータンで学んだこと。すみません、その前に忘れていました。今一番後ろに座ってらっしゃる墨田区の桑原先生にもブータンに来ていただきまして、授業までしていただきまして、そして、他にも来ていらっしゃった先生がブータンで美術、図工の授業もしていただきまして、体育も大事なんですが、体育、図工そして音楽といった情操関係がこれかは大事なのかなということで、今取り組まれていると思います。たぶんこの後、石井先生からお話があると思うんですけど、評価の問題も大事なのかなとブータンでは私たちは思いました。ブータンで学んだことということで、「孤独と退屈に耐える」。これはブータンで

尊敬してた先生から、ツガさんって方から教わったんですけど、孤独と退屈に耐えることは大事だと。向こうで生活していければ50点、友達が出来れば70点、80点。最後に何かちょっとできれば100点満点だというようにして励ましてもらいました。ブータンは仏教国ですので、はやり仏教に少し興味を持って、ちょっと勉強してみました。「四苦八苦」と言われますが、八苦の方が不思議だなと思いまして、例えば、愛している人と別れなければいけない悲しみとか、憎たらしい人とも会わなければいけない悲しみなどがあって、少し気楽に生きられるようになったかなと思います。そういうことで「人生に無駄なことは無い」と思いました。「足るを知る」ということで、ブータンなどの人、発展途上の人が、ある程度貧乏ですし、適当なんですけども、ハッピーに生きていますね。だから、目の輝きとか、それから、表情とかね、そういうのをスマイルっていうんですか、そういうのを身につけていきたいなと、自然にでるといいなと思いました。「教育は人なり」。やはり、授業は大事ですけども、一人一人の子どもの名前を覚えて、そして、子どもの名前を呼んであげて、元気かと、頑張れよというようなことが私たち教師の仕事じゃないのかとすごく向こうにいって再確認させてもらいました。やはり段々一年過ぎる頃からブータンの人の名前、同じ人の名前、例えば、ゼニチョキA,B,Cとかいたりして覚えにくかったりするんですけども、だいぶどんどん子だもたちの名前が、たぶんここにいる先生方もそうだと思うんですけども、名前が頭に入ってくるんですよね、どんどん。その子がやっていることやその子の表情などがどんどん浮かんでくるようになって来ました。やはり、このように子ども名前を覚えてあげて、呼んであげて、励ましてあげるということが一番大事なんじゃないかなと原点に帰らせていただきました。そして、「火・水・日の有難さ」。火は暖かくていいですね。本当に隙間風が吹いていて、冬は家が寒くて辛かったですね。逃げ場もない寒さでしたね。そして水。水がないと体までちょっと乾燥してきますので、女性の方気をつけてください。本当にあの、かかとが割れて、手が切れて、あまり経験がなかったんですけど、そういうことがありました。そして、太陽の光が当たるととても暖かいです。太陽の光っていうのはすげーなと、すごく感じます。それから、これはJICAのブータン所長から褒めてもらったことなんですけど、「ピンチになるとアイデアは閃く」ね、ということで、ピンチになると、それを考えていると、何かアイデアが閃いてくるんじゃないかなと思いました。例えば授業で言うと、一斉授業はすごく難しい。どちらかというと、途上国の子どもたちには。ていうことで、一人ずつ見ていくしかないんじゃないかとことで、よく中学校とかで使われているかもしれませんが、ちょっと体育でもテストしたりして、評価してあげると、縄跳びとかに取り組み始め練習に励むようになりました。このように色々なアイデアが浮かばなくなったとき、この仕事は結構アイデア勝負なとこがあると思うので、そういうのが大事かなと思いました。最後に「国際協力は誰でもできる」ということを考えました。僕みたいな普通の、ごく普通の教員でもできるんだと、誰でも出来るんじゃないかとみたいな、気軽な気持ちにはならせていただきました。

帰国後ですね。帰国後、横川小学校での活動ということで、このような格好で最後歌を

歌ったりして、帰国報告会の方をさせていただきました。そして、総合的学習の時間にブータン話などをさせてもらいました。ブータン話で一番子どもたちに受けたのは、ブータン語といって、結構他の国でもやってと思うんですけど、ペットボトルなどの水を飲むときに、口をつけないで、こう飲むんですけども、これがとても受けまして、このようなことを紹介して子どもたちとこうして世界の子どもたちは生活してるんだよという話をさせていただきました。それから、学校公開や道徳の授業などでも話をさせていただきます。保護者会でも毎回少しずつですが、紹介させていただきました。

その他の活動としまして、三重大学の大学院に留学。さっき紹介したスニールさんっていう人と交流していまして、今年で彼も卒業だと思うんですけども、ブータンに帰ってからも仲良くしていけたらなと思っています。まず、卓球コーチの人との交流とやり取り。向こうで芸術、美術を教えてる方、美術家の方とも交流があって、何とか今後子どもたちを通して交流ができたらなと思っています。現ブータン隊との交流ということで続きます。さっきもお話でありましたけども、どうやって今後日本に子どもたちとブータンの子どもたち、日本の先生とブータンの先生をつなげていくことが私の使命というか、今後の仕事なのかなと思って、何とか色々なアイデアを浮かべさせながら頑張っていきたいと思っています。

最後の前に国際協力ということで、チベット世界、ブータンで有名な絵を紹介したいと思います。日本の桃太郎に似てるんですが、一番下に象が描かれています。そして猿、ウサギ、そして鳥。そして、この四つが、違う動物なんですが、協力して果実を得るというか、ゲットする。そのようなことで、キパグシーと言われてまして、チベット世界でとても有名な絵です。協力を表すことを象徴することで、ダライラマなども紹介したらしいんですけど、教室に貼ってあるんですが、尊敬と感謝の協力だよということをいつも話しています。

（歌）お父さん、お母さんいますか？お兄ちゃん、お姉ちゃんいますか？

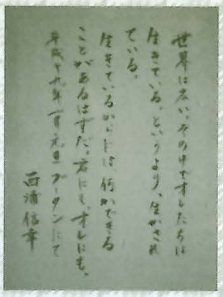
恋人いますかってことですね。ていうことです。すみません。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

NORBUのBHUTAN話

墨田区立横川小学校
３年１組　西浦信幸

なぜ協力隊に？

「今に世界にとぶわれら」
横川小学校の校歌を聞いて閃いた。
　面接では、「あなた仕事をやめようとしていませんか？」厳しい質問も。
　ともあれ、一度しかない人生だから、２年間ぐらい世界の中で暴れてきてもいいだろう。



卒業生におくった言葉

BHUTANについて

①ヒマラヤの仏教王国
　花鳥風月の美しい国、
　そしてデンジャラス・ロチ
②衣食住
　ゴー＆キラ、激辛、
　ネズミと断水
③仕事
　日本の学校と似ていて
　ビックリ
④プライベート
　芸は身を助ける
　（卓球、書道、読書、旅）

☆ブータンクイズ

写真上・ツェリンガン
写真下・全ブータン卓球選手権

一期一会、ブータンでの出会い

■BHUTANESE

美人カウンターパートのTさん
一番の親友Kさん
卓球コーチのDさん
日本語を教えたSさん
朝からバドミントンやフットサルを楽しんだSさん
なくなってしまったT君

■JAPANESE

ブータンでの師・二人のTさん
Y所長と事務所のみなさん
H隊員、S隊員、U隊員その他ブータン隊の仲間
日本から応援してくれた先生方
家族

ブータンで学んだこと

一、孤独と退屈に耐える
一、四苦八苦
一、人生に無駄なことは無い
一、足るを知る
一、教育は人なり
一、火・水・日の有難さ
一、ピンチになると
　アイデアは閃く
一、国際協力は誰でもできる

帰国後の活動

■横川小学校での活動

帰国報告会（児童集会）
ブータン話（総合）
学校公開での授業
保護者会でのブータン紹介

■その他の活動

三重大学の大学院に留学中のSさんとの交流
卓球コーチDさんとの交流
現ブータン隊との交流

「算数指導のシステム化」で、子どもに豊かな教育を！

清野　真輝
（18－1，ドミニカ共和国，小学校教諭，新潟大学教育学部附属新潟小学校）

こんにちは。これから私の発表をさせていただきたいと思います。

最初に皆さんにお伺いしたいことがあります。21 年度で派遣をされるという方、挙手をお願いします。結構いらっしゃるんですね。中南米の方に行かれるという方，そのまま挙手を。まさか、ドミニカ共和国に行かれるという人。ありがとうございました。

それでは早速、発表に移らせていただきたいと思います。私の方は，ボランティア業務ついて限定してお話しさせていただきたいと思います。お話したいことはいっぱいあるのですが，ご了承ください。

それでは，まず派遣された小学校、そして要請内容等，順をおって説明させていただきたいと思います。

まず、私の派遣先の小学校の紹介です。まず、ドミニカ共和国はどこにあるかということですが、こちらのアメリカ、フロリダ半島が見えますね。そのすぐ近くに位置します。位置的にも社会的にも非常にアメリカの影響を受けていまして、先ほどの先生が民族衣装を紹介されましたが、私の仕事のスタイルはクールビズ、スーツでした。そして、学校のあるところですけれども、こんな感じの校舎、そして教室、そして休み時間に遊んでいる子ども達、こんな感じの学校でございました。私の学校はパストール・アバホ小学校といって、ドミニカ共和国第二の都市、サンディアゴ市の郊外にある中規模校で，一年生から四年生が大体 500 名いらっしゃるような学校でした。私自身はその学校に隊員二代目として派遣されまして、一代目の方と 3 ヶ月間一緒に働くことができました。なかなかこういったケースはないそうなので、この点をメリットとして有効に活用しました。

この写真はですね、一番右の方が校長先生、若いですね。左側の人が生徒指導主任でしょうか。そして、私の左側の女性の方が副校長先生です。

要請内容についてですが、「教員の算数指導力の向上」ということで、私が直接授業を行うことが目的ではありません。そして、校内で算数指導力を向上させるための「校内研修の構築」という二本柱がメインでございました。

それでは、校内の組織図はどうなっているかといいますと、校長、副校長、教務主任、そしてその下に各学年が位置します。これは日本でも一般的に見られる形ではないかと思いますが、この学校の場合はこの教務主任の役職がいませんでした。そのため、私が算数指導においてのみこのポジションに入り、一年生から四年生まで全 13 学級を担当していくことになりました。簡単に言えば、教務主任的なお仕事と研究主務的なお仕事、この二つをしていたとイメージしていただければ結構です。

それでは、「教員の算数指導力の向上」、そして「校内研修システムの構築」が主な仕事だと言いましたが、実際現地に派遣されて現状を見ると，そう簡単には進められそうもありませんでした。なぜなら，先生方は算数の指導をしたがりませんでした。なぜかと言うと、算数に関する教材，教科書やドリルなどはなく、先生方の頭の中にある算数の知識、これだけに頼って指導していました。ですので，毎日の授業の内容を先生方は考えなければならないので，負担が非常に大きいわけです。そして，先生方が指導内容を個別に考えるものですから，学級間で差が出てしまいます。同一学年、例えば同じ三年生であっても指導内容が全くバラバラ。足し算ばかりやる学級もあれば、掛け算をやる学級もある、というような状態でした。そこで、いきなりこの要請内容にはとてもじゃないけど向かえないと思い、私はまず、校内における算数指導の体制を確立させようと思いました。これについては算数指導のシステム化というところでお話します。そしてその後に校内研修の構築をと，上から順々にやっていこうと方針を立てました。その際の活動の基本方針として、二つのことを考えました。一つは、「公教育の理念からすべての子どもたちに，“同質かつ最低限の教育”を与える」というものです。もう一つは、「先生方の負担を軽減し算数指導への意欲を高める」、要するに意欲から指導力を高める、そういうふうなプロセスをとろうと思いました。

それでは、やってきた活動とその成果についてお話します。まず一つ目の「算数指導のシステム化」についてですが、これは何かといいますと、教員の算数の知識や指導経験の差によらず、全ての教員が「一定の質の学習内容」を教えることができる指導システムのことを言います。これに従って指導すれば，誰でも最低限のことはできるということを目指したものです。具体的には、まず教材がなければ始まらないと思いまして、１年生から４年生の毎時間の学習プリントを作成しました。そして，その学習プリントを使うための教師用の指導参考ガイド、そして指導参考ガイドは渡すだけでは徹底できませんので、学年会を実施して指導内容や指導方法の徹底を図りました。さらに学習進度の管理が大切で、ある先生は進度が遅い、ある先生は早いというようでは，結果的に指導内容に差が出てしまいます。実はこの学習進度管理は，算数指導のシステム化における“影の生命線”であって、譲れないものでした。そして、効率を図るために、教材・教具の作成と管理、そして最後に自分の算数指導のシステム化がうまくいっているかどうかを，毎日いろいろな学級に顔を出して，モニタリングを行ってきました。こういった取組を全部ひっくるめて、「算数指導のシステム化」と私は勝手に呼んで取り組んできました。

で、実際にどうだったかと，評価の話をいたします。まず一つ目は、このシステムは年間を通すことで定着しました。先ほど申し上げたように、最初に前任者がいて意気投合しまして，派遣された直後からすぐにこの活動に取り組むことができました。ですので、年間を通して先生方もこのシステムに慣れていくことができました。また、試験が一年間に二回，定期的にあるんですけど、その試験においても、子どもたちの正答率に向上が見られました。ちょっと見ていただきたいと思います。二年生ですけれども、真ん中の赤い点

線の左がこのシステム導入前です。システム導入直後は49.5%でしたが、その後77%になりました。それでも，レベルが低いと思われるかもしれませんが、これが現状です。また、ひき算、これは繰り下がりのあるひき算ですが、こちらの方も少しずつ正答率が上がってきました。しかし，７割以上の壁はなかなか厳しかったです。また、他の学年を見ていくと、三年生のひき算、繰り下がりのあるひき算ですが，なかなか伸びません。また、四年生の繰り上がりのあるかけ算においては、あまり成果は見られません。この二つに関しては、今まで指導がなされていなかったためで、なかなか簡単に数値が上がるわけではないなということもよくわかりました。その他としては、一年間にこれまでにない新しい単元を指導することができました。計画的に進めるので、指導内容がどんどん前倒しに行うことができました。例えば，わり算です。これはあまりのないわり算ですが、今まで全くやってきていなかったんですけど、ある程度九九を覚えれば，これぐらいはできるようになりました。また四年生では，今まで指導していた単元がどんどん前の学年に下りていくので，新しい指導内容が飛躍的に増えました。昨年度よりも６つの新しい単元を行うことができました。そういったところがよかったな、と思います。そして最後ですけれども、このシステムは引き継ぐことができ，後にも残ります。現地の先生、そして現在も私の次の三代目の隊員の方が入っております。そういった方に引継ぎができるということで、良かったなと思っています。

そして二つ目の「校内研修システムの構築」についてです。日本で言えば授業研究を通じて行うことが多いのですが，もちろん授業研究などドミニカ共和国にはありません。どのようにやればいいのかな、と非常に悩みました。「算数指導のシステム化」を最優先にしていたため，全１年９ヶ月の活動の、１年３ヶ月くらい経ってからの取り組みとなりました。まず何をすればいいかなと考えたのですが、まず「テーマ」を絞ろうかなと考えました。そして実態を考慮して考えたのが，「子どもたちのプリントの効果的な丸つけの方法を探ろう」、要するに，丸付けの仕方を効率よくやりましょう、ということなんですね。何故かというと、先生方は練習問題をやらせっぱなしで丸付けを一切しないんです。ということは、ご参会の先生方はもうお分かりでしょうが、子どもは自分の計算の答えが合っているかどうかわからない、それでは子どもの力がつかないのです。ですので、「先生方，丸をつけましょう」と言い続けました。でも、一人ずつ子どもを呼んで丸を付けては、全員丸は付けられないし、何より先生方の負担増となってしまう。「じゃあ，丸付けの効果的な方法を探ろうね」、ということで，これがテーマになりました。そしてさらに、こちらからの情報発信として「研究通信」なんていう名前にして定期的に配布物を出しました。そして、こんなふうに掲示板に貼ったりしました。そして後は、校内研究授業を実施し、…ということが，この「校内研修システムの構築」なのです。

実際それはどうなったかという評価の話をしたいと思います。まず、全13学級のうちの５名の先生の指導に変化が見られたのではないかと思います。ちょっと具体的に見てみます。A先生の定期試験の点数分布図です。グラフは右に向かって点数が高くなるのですが，

これをみると結構はっきりしているんですね。つまり、できる子どもばかり先生は目にかけて、その他の生徒にはなかなかフォローがなかったと私は判断しました。それが研修を始めて、その半年後には，まだ左側のほうには大きな集団が残っているんですけども、だいぶ右の方に点数が移動してきたのではないかとみることができるようになりました。ただ、試験問題の構成は違いますのですぐには比較できませんが，傾向として判断していただきたいと思います。また、B 先生も大方中央に集まる傾向がありました。こういった先生も丸付けをしないので、なかなか成果が上がらないのです。しかし，こういった先生も、少しずつですが、高得点をとる子どもを増やすことができてきました。これらは，まだ半年の成果なんですけれども、可能性が少し見えたのではないかな、と思います。

また、校内での公開授業に関心をもつ先生も増えてきました。自主的に保護者を集めて学習参観をしたという先生もいました。しかし、結果として，全体での研究としての校内公開授業は実施できませんでした。これは、任期の残りの時間が短かったということと、あと、どうしても私が先生方に負担をかけるのではと思って、ずっと良い方法が浮かばず悩んで躊躇してことが原因です。このあたりの判断がちょっと難しかったんですけれども、結局校内研修の構築については持続可能な定着までには至らなかったというのが私の活動の結果です。

その他として、こんなことをしましたというのをちょっとお話させていただきたいと思います。「算数を生活の中に…プロジェクト」、これも勝手に名前をつけたんですけど、子どもは算数を学校以外では学習しないようです。つまり，学校での学習がとても大事なのです。それでですね、算数は教室の中だけのものでなく，生活に身近なものになったらいいなと思ったのです。この写真についてですが，学校の門から校舎までに 150m くらい道があるんですね。そこを子どもが通って登下校しますが，毎日２回ここを必ず通るわけですよね。これを使わない手はないと思って，１ｍごとの「100m ものさし」をペンキで書きました。このように、数字のところには九九をのせたりと、こそくな手段で算数に触れさせようと思いました。非常に暑い中、お昼休みにやったりして、よい体験となっています。また、掲示板を作成して、少しでも算数が目にとまればいいなと考えました。授業の成果なんかも載せています。これは、数の量を体感させたいということで作りました。一番右は 1,000 です。何でできているのかというとインゲン豆で、豆をボンドで貼りました。あとは石投げゲームなどの遊びも紹介しました。

また、保護者への教育情報の発信ということで、あまり刺激せず、穏やかに、今各学年ではこんな勉強をしていますよという学校算数だよりを作って子どもに持たせました。もちろん，保護者に渡さない子どももいるでしょうから、学校の門のところにこのように拡大掲示して貼ってみました。

また、日本の教員として行っていますので、日本の自分が在籍していた学校への情報発信として、異文化理解を図るＤＶＤを作って送りました。その結果、自分が教えていた子どもたちから感想の作文を送ってもらったりして、非常に嬉しい思いをしました。

これらの活動を通して感じたことを，これから派遣される方々へ期待を申し上げて，最後に述べさせていただきたいと思います。まず教育隊員として活動するのですから、やはり「公教育」という視点をもって取り組むことは大事であると思います。そして二つ目は、現場にはどんな課題があるのか、これから派遣される先生はそこをよく考えられると、次の活動が見えてくると思います。そして，教授神話です。現場では「よい教え方をしているのに，子どもが覚えない」と嘆く先生が実に多かったです。どうも私はずれを感じました。私は、教師の仕事というのは「教えること」ではなくて、「子どもに学習を定着させること」ではないかと思いました。極論を言えば，教え方など上手くなくても，子どもに定着すれば立派な教師であると思うのです。そして、ついつい日本の指導法に引き寄せてしまいがちなのですけれども、やはりそこにたどり着くためにはやはりステップが必要で、まず基本的な授業スタイルを身につけて、ゆっくりと段階を追って、先生方の最終的に目指す取組に挑戦するといいのではないかと感じました。また，子どもたちに十分な練習問題を与えることも非常に大切だと思います。また、先程も申し上げた丸付け。そして、校内研修をやってみる。校内研修は，やはり取り扱う分野が広いですので、テーマを絞るべきでしょう。質は求めてはいけないと思います。質よりも，まずは量の保障で頑張っていただければいいのではないかと思いました。

それでは、あと１分なので終わりにしたいと思いますが、こういった活動を私ができたのも、現地の先生方と子どもたちの支援があったからです。ドミニカ共和国というのはラテンの国で非常におおらかで、なんでも非常にいい返事をしてくれるという国でしたので、私の活動も右往左往しながらも前に進むことができました。本当に感謝しています。そして、美しい海とそして自分の趣味のテニスと、こういったものが私の１年９ヶ月間の活動を充実させてくれました。

そして現在ですけれども、私は今、小学校の方で勤務をしています。今年の夏に自分のやってきた経験を市内の小学六年生と中学一年生に向けて発表させていただく機会をいただきました。また、校内においても原稿を書かせていただいたりしました。そして，今現在自分の勤務する学校では，来年度から移行措置として始まります「外国語活動」という英語を中心として授業ですが，そちらの方の情報発信をさせていただく立場を与えられております。このような近況でして，自分の人生というのは，自分では意識しなかったり，自分では気付かなかったりするけれども，いろいろとつながっているんだな、思いもよらない展開をしていくんだなと感じています。

最後に、このような経験を与えていただきました文部科学省関係者の皆様、そして支援いただきました筑波大学、そして何よりもJICAの皆様にこの場をかりてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

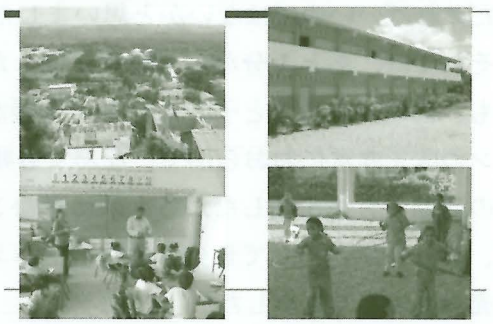
以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

＜ 発表の流れ ＞

1. 活動先小学校の紹介 と 要請内容
2. 現場の課題 と 活動方針
3. 活動内容 と 成果
   A.「算数指導のシステム化」について
   B.「校内研修の構築」について
   C. その他の取り組み
4. 活動を振り返って
5. 帰国後の現在・・・

1. 活動先小学校の紹介 と 要請内容

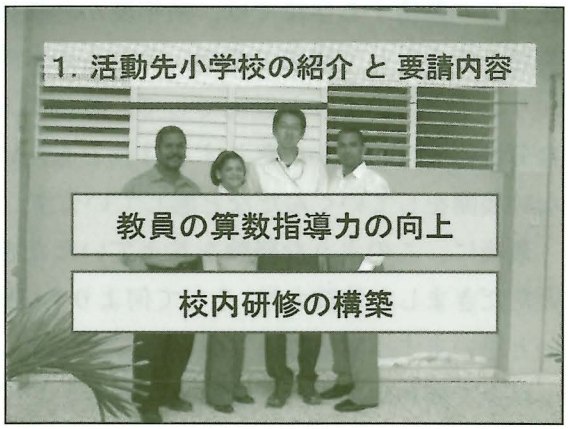
1. 活動先小学校の紹介 と 要請内容

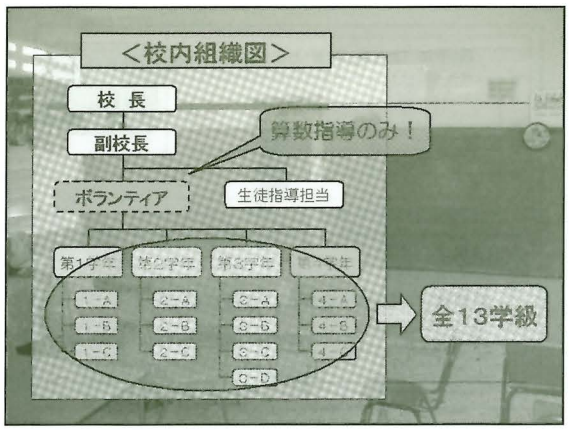


1. 活動先小学校の紹介 と 要請内容

◇ 担当校：PASTOR ABAJO 小学校
サンティアゴ市郊外にある中規模校
1～4年生 500名程度_

◇ 隊員派遣：2代目派遣（2006年8月～）
※ 2006年8～11月の3ヶ月間、
前任者と任期が重なる。





2．現場の課題と活動方針

A. 算数指導のシステム化

◇ 校内における算数指導体制の確立

◇ 教員の算数指導力の向上

B. 校内研修の構築

算数を指導したがらない

同一学年でも統一なし

活動の基本方針

1. すべての子どもたちに、「同質かつ最低限の教育」を与えること。 ＜公教育の理念＞
2. 先生方の負担を軽減し、「算数指導への意欲」を高めること。 ＜意欲の向上ー指導力の向上＞

3．活動内容と成果

A. 算数指導のシステム化

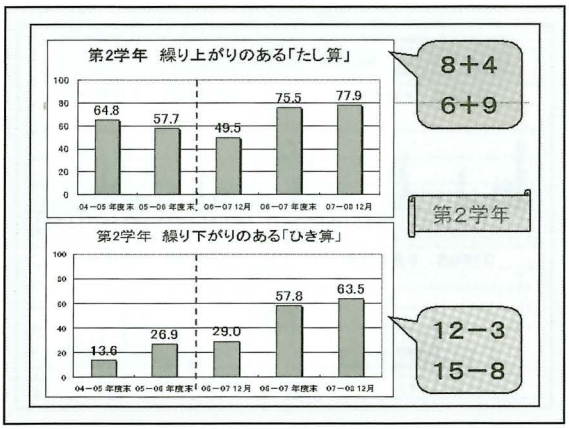
教員の「知識」や「経験」の差によらず、全ての教員が「一定の質の学習内容」を教えることができる指導システム

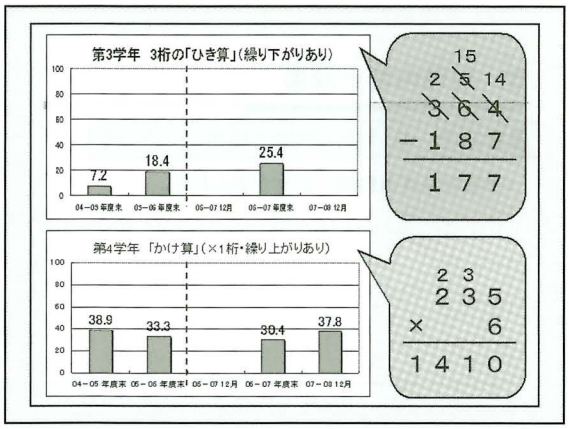
- 毎時間の学習プリント
- 教師用指導参考ガイド
- 学年会（講習会）の実施
- 学習進度の管理
- 教材・教具の作成と管理
- 状況把握のモニタリング

3．活動内容と成果

最終評価 ： A.「算数指導のシステム化」について

- 「指導システム」は、年間を通すことで定着した。
- 試験において正答率に向上がみられた。

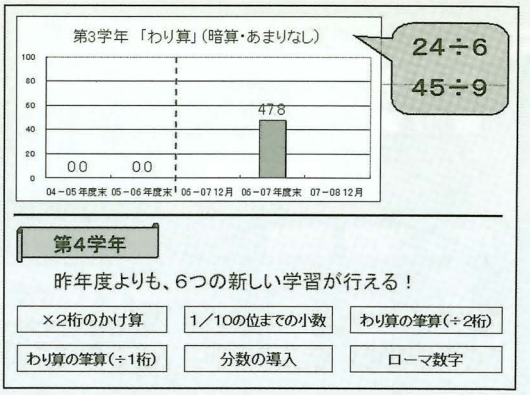




3．活動内容と成果

最終評価：A.「算数指導のシステム化」について

- 「指導システム」は、年間を通すことで定着した。
- 試験において正答率に向上がみられた。
- 一年間にこれまでにない新しい単元を指導することができた。



3．活動の取組と最終評価

最終評価：A.「算数指導のシステム化」について

- 「指導システム」は、年間を通すことで定着した。
- 試験において正答率に向上がみられた。
- 一年間にこれまでにない新しい単元を指導することができた。
- 「指導システム」の運営を現場教員に移行できた。
  → "各学年のリーダー"と"調整役"の働きのおかげ

3．活動内容と成果

B.「校内研修の構築」について

◇ 年間を通した「研究テーマ」の設定
→「子どもたちのプリントの効果的な丸付けの方法を探ろう！」

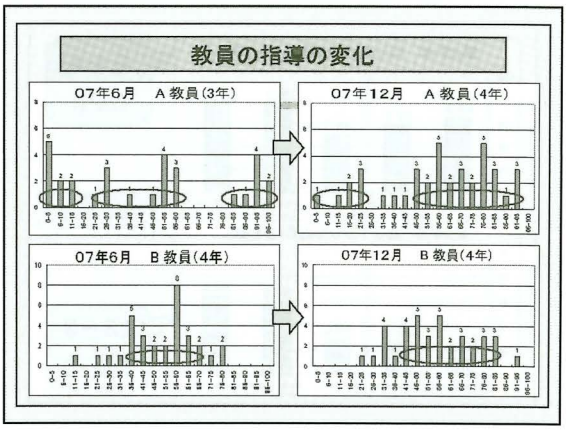
◇「研究通信」の発刊

◇「校内公開授業」・・・

3．活動内容と成果

最終評価：B.「校内研修の構築」について

- 5名の教員の指導に変化が見られた。



3. 活動の取組と最終評価

最終評価 : B.「校内研修の構築」について

- 5名の教員の指導に変化が見られた。
- 校内での公開授業に関心をもつ教員が出てきた。
- 校内公開授業は，実施できなかった。
  → 持続可能な定着までは，至らなかった。

3. 活動内容と成果

C. その他の取り組み

◇「算数を生活の中に･･･」プロジェクト
◇ 保護者への教育情報発信
◇ 日本の子どもたちへの[illegible]

4. 活動を振り返って

1. 公教育という視点をもち、基本的な指導体制を確立する！
   - 同一学年内での進度の管理、学年会での学習内容・指導法の確認など
2. 現場の課題は何か、明確に見極める！
   - 「正しく教えても、子どもたちが覚えてくれない･･･。」
3. 「教授法の神話」からの脱却を！
   - 教師の仕事とは，「教えること」ではなく、「子どもに学習を定着させること」
4. まずは「基本的な授業スタイル」を身につける！
   - 指導力の向上には段階がある。いきなり"日本のまね"は無理。

「教授する」→「習熟させる（練習問題）」→「評価する（丸付け）」

4. 活動を振り返って

「教授する」→「習熟させる（練習問題）」→「評価する（丸付け）」

5. 子どもたちに"十分な練習問題"を与える！
   - 「学校だけ」が教育の場。学校で習熟させなければならない。
6. 時間内に"丸付け"をする技術を身につけさせる！
   - 子どもに "よくできているよ" と自信をもたせなければならない。
7. 校内研究授業は、「テーマ」&「質より量」で！
   - 先生方の関心は高い。積極的に挑戦すべき。

5. 帰国後の現在

ご清聴，ありがとうございました。

バングラデシュにおける隊員活動と今

平本　洋康
（18－1，バングラデシュ，小学校教諭，札幌市立西白石小学校）

みなさん、はじめまして。札幌市立西白石小学校平本洋康と申します。活動報告なんですが、派遣国書いてませんね、バングラデシュ国です。平成18年度の一次隊の採用の中でも最高齢、39歳で受けて、40歳で行って帰ってきて今43歳です。

それでは、報告させていただきます。

要請と活動概要ですね。要請内容は最初こんなものでした。コックスバザール県は、私が行ってたところなんですが、県の名前であって、都市の名前でもあります。美術を教える教師が少なく、よって隊員がURCで、これは教育研究所の中の教員の養成機関であったり、教員の研修機関です。現職教員のトレーニングの実施、学校の巡回指導などを通して美術教師の質の向上を図る。また、これらの地域にはこれまでサイクロンによる大きな被害が度々あった。隊員は台風や地震に対する防災訓練や広報活動も積極的に行うというものでした。駒ヶ根研究所にいた頃ですね、一度JICAの衛星を通してテレビ会議ですか、バングラデシュオフィスとテレビ会議をしたときに、ブリーフィングで調査員の方から、（バングラデシュでは）私が現職（教員）隊員の第一号で小学校教諭という職種で行くのも初代だったんですけれども、そんなこともあって、図工にこだわらず、あらゆる教科を支援してもらいたいということで行きました。それで最初は、準備として図工とかの道具をもっていたんですけど、一回出国する前に（自宅へ）帰ったときに、慌てて車庫の中にしまった、他教科の指導案集とか教材集とか慌てて持っていった覚えがあります。

前半、最初の一年は、URCというのが教員・教育研究所、PTIというのは教育委員会だと思ってください、でのトレーニング、URCでは、一般教員とあと新卒教員のトレーニング、PTIの方では教員をトレーニングする教員、先生たちの指導主事のような方々のトレーニングです、をしていました。あと、シャヒッティカ小学校というのは、URCの、私のオフィスの附属小学校で、そこでの授業支援と、それから、あと日本の子どもの国際理解支援とかというようなことをしてきました。

後半は、前半の活動に引き続いたり、引き続いてやっていたものと、インターネットライブ授業というのは、JICA札幌オフィスと、それから私の勤務校であります西白石小学校から、出国前に出された宿題のようなもので、JICA札幌オフィスとしては、北海道で、私の18年度からすごくたくさんの教員を派遣するようになったんですよ、北海道は。それで、現職教員を派遣することで、このようなメリットが、日本の子にもありますよ、ということを紹介してもらいたい。そのために、ぜひこのインターネット回線を使った交換授業をしてもらいたいという宿題を出されて、でもそれで「はい」というわけにもいかなくて、

それを組み立てていくまでに先生も教育しないといけないし、子どもたちもやっぱり、バングラデシュ側もはじめてのことだったんで、いろいろ準備があったんですけど。

それと先ほどご説明されてた授業公開とかもしました。

では、それらについてちょっと詳しく説明しますね、URC、PTI では、教員向けトレーニングをしたんですけれども、ご存知のようにものすごい人口のある、北海道２つ分の場所に日本の人口よりも多い人たちが住んでいる。子どもたちの数に教員の数が足りない。１クラス 80 名から 120 名ですか。全校の先生は 3 名しかいないとかいう学校も中にありました。そんな中で、先生の質というがとてもやっぱり日本の質とはちょっと違う。この（左手指の）関節ありますよね、「1、2、3、4、5、6、7、8」でやって、全部やったら 20 ある。そしたら（右手指の）ここに 20 が 1 つとしてやって、400 までこうやって数え足しで数えるので、繰り上がり、繰り下がり、補数の概念がないです。まず算数は。そんな中でこれ、この写真は、いくつといくつといって、10 個のおはじきをもって、3 が出たらこちらいくつ？そういう補数の概念を教えるのもたいへんでした。繰り下がり、繰り上がりというのができるようになる、させるのが 1 つちょっと目当てかなと思ってそのあたりをやっていた頃です。

そのほかに PTI で指導主事室の方々に向けて「English Pronounciation traning」をやったんですけど、発音（の授業）なんですが、楽しい授業、面白い授業を子どもに、分かる授業をさせてほしいって、私もブリーフィングのときにいわれたんだけど、先生たち自体も暗記中心の授業で教わってきてるんです。ゲームをさせたこともないし、してもらったこともない先生たち自体が「楽しい授業」ってどんな授業か分からないですね。それで、先生たちに子どもの役になってもらって、私が先生になって、ゲームをしたりとかしました。

あと、新卒向けにトレーニング講座を作ったりしました。そんなところですが、やっぱり、メモライズ、暗記中心の授業というのをなんとか変えたくて関わってきました。あとこのトレーニングの講座なんですが、赴任後 3 日目に僕はすぐ、120 人を前に図工と体育をやってほしいといわれて、できませんと言うわけにはいかないので、やりましたけど、今になればいい思い出です。それで、それの様子です。先ほどの、後半の活動のときの、このお年寄りというか、いったらなんなんですけど、先生なんですが、繰り下がりの引き算のレディネステストのようなものをしているのですが、繰り下がりの引き算がちょっと出来なくて、カンニングされてるんですね。「カンニングしてても教えれるようになりませんよ。私、お教えしますから一緒にやりましょう。」と教えてるときに停電になって、これ 6 時過ぎなんですよね、ろうそくを持ってやってるんですけど。5 時で先生たちが帰るんですけども、帰国直前に 1 月だったと思うんですが、これは。だんだん先生たちの方から「ヒロの講習はなんか良さそうだ」というふうにいってもらえるようになって、6 時過ぎでも先生たちが残ってくれて、ぜひやってもらいたいといわれて続けていたところです。暗い中ろうそくを使ってやってました。

最終的には、ここのトレーニングが1月とか2月とか多かったんですが、最終的にはやっぱり「ティーチング　ウポコロン（ベンガル語で「指導教材」の意）」、まあ、「教材作り」ですか、先ほど、「ハンズオン素材」の話もありましたが、バングラデシュの先生たちは、本の挿絵を大きく写すことが教材作りだと思われているところがあって、よりよい教材、分かりやすい、楽しい授業を進めるための教材作りっていう、ちょっとそういう感覚がなかったんですね。それで、自分たちも教えやすくなるんだよ、というような教材作りとか、あと黒板に書いてあるのは、繰り下がりの引き算を効率的に教えるような、一年生を持たれた先生のためのものです。こんな教材を作っておいてきました。

附属小学校では、授業のマンパワーみたいになってたんですけど、上司の指導支援したり、あとインターネットライブ授業のちょっと事前指導をしたりとか、あとハンズオン素材についての授業に関わっやっていました。で、シャヒッティカ小学校での指導ですが、これなんか、先生が子どもたちを動かしてるように見えると思うんです。現地の先生が。ここまでするのに、やっぱり関わってて、先ほどの何人かの先生とか発表の中にもあったんですけど、「ぶって教える」。例えばこの一番奥の下の、歌の練習のときですか。これあのー、インターネットクラスのときに「小さな世界」ってあのディズニーの歌をベンガル語に訳した隊員がいて、その歌を発表させるのに、なかなか8ビートが取れないですね。日本の子どもだったら簡単に叩けると思うんですけど、やはり民謡で育っているのでこの歌いながらこういうクラップができないですね。あとこういう体を揺すりながら歌うのも難しくて分からない。バングラデシュの先生が「右！左！、右！左！」とかいって、（後ろから）こうやって子どもたちを動かしたりしたら余計に歌えなくなる。それから、先生の望むことをしないとぶたれるので、もう怯えながらだったんで。そして歌を教えるときも一人の先生はこんなことを言いました。「ヒロさん、私なら1時間で歌わせることができるんだよ、ちょっとぶってやればみんな歌うようになるんだ」というふうに言われた先生もいたし、それからある日にですね、テストのあとに子どもを並べて竹の鞭で叩いている先生がいたんですよ。「どうしたんですか？」ってお話したら、「この子達の算数の成績が40点以下だった」と「私があんなに教えたのに・・・」というようなことをおっしゃるんですね。で、私の授業では、これ全部私が中心になってやったんです。「わたしの授業で叩くことはやめてください。子どもたちはサーカスの動物じゃないですから。」って言って、叩かないで教える、それから子どもに委ねる。下の先生は私のやることを分かってくれて子どもを見て支援してくれるようになって、見て子どもを動かしてて、で先生たちも子どもたちもこうやって動く、子どもたちも考えて動くんだ、と分かるようになってからは、少しずつ私（の目の前で子供）に対する指導のあり方とか、私の前ではあまりぶたなくなったような気がします。

インターネット・ライブ授業だったんですが、こちらが（向かって右）日本の子ども、向こう側（向かって左）がバングラデシュの子ども、「私たちは、朝起きたらお祈りします。」などの一日の生活をバングラデシュの子供たちが紹介しているところです。下のようにテ

レビ 2 台を使って交流しました。これは（下の写真は）札幌事務所の様子です。バングラデシュの先生たちにも研修でした。これは私たちの研究会です、それから子どもたちにも日本の国の贈り物なんだよと伝えていました。バングラデシュの方々の多くはJICAをどっかのNGOだと勘違いしてる人が多くて、JICAは有名なんですけれど。これはJICAの広報でもあると思ったんで、そのあたりも心得てやりました。あと 4 年生の社会の教科書には、「たくさんのアジアの文化」の教材のなかに、一番最初に日本が出てきて、5 ページにもわたって紹介されています。「日本の歌は演歌といいます。音頭といいます。」ってなかにあって、「『演歌』歌って、『音頭』歌って」って言われて困ったんですけど。教科書の中に「茶」とか「剣道」とかの説明があったんで、ある日家から急須を送ってもらって煎茶を入れて、羊羹をご馳走したんです、先生たちに。そうしたら「『茶』はもう分かったよ、次は『能』をやって」っていわれて私も困ったんですけど、それは今となってはいい思い出です。

写真のように、バングラデシュの子どもたちには、「あなたたちが大使だから、日本の子ども達に会う最初のバングラデシュの子どもたちだから、行儀よくしていなさい」といって、連れていったんです。テレビが３社でしたか、新聞が２社くらいきて、私のインタービューもテレビに「BTV」っていうバングラデシュの NHK みたいなテレビに写ったら、今まで、私のことをなんか変な日本人だと思ってた人まで声をかけてくれて、なんか「すごい立派な仕事してるんだね」とか床屋さんに言われたりして、やっぱりテレビってすごいなと思いました。で、これは日本の様子なんですけれども、今僕、この子達の担任をしてるんですが、このときの子どもの様子が、あまり芳しくなかった。やっぱりインターネット・ライブ・クラスをするためには、受け入れ側の態勢も必要なんだな、大事なんだなと。ご覧になってた方がこの中にもいらっしゃるんですけれども、やっぱり日本の子どもの態度があまりよくなくて、それが私今ちょっと、今だったらもうちょっといい状態のところの子どもたちを見せることができると思うんですけれども。ご覧になった日本の方々が、日本の子どもたちについてちょっと、「バングラデシュの子どもたちの方が立派だね」、っていわれていたのが教員としての私はとても気になってたところでした。

で、それからハンズオン素材なんですけれども、これなんですが、先ほど説明があったので、まあだいたいバックグランドのようなものですけれども、ハンズオン素材については、本来、教材開発というのは、児童の実態があって、教員の願いがあってそれに向かうためにどのような教材を開発をしたらいいかというふうにして考えなければならないですよね。はじめに児童の実態があって、この子達にはこのようなことを教えていきたい、身につけさせたい。それで、こういうふうな目指す子ども像に沿って教材開発をする。なんですけど、今回はめざす子ども像も、児童の実態よりも、まず教材が、教材をバングラデシュの子どもたちにどういうふうに使うかというような課題のあり方で、ちょっとたいへん、困ったのが事実です。なんですが、JICAバングラデシュ事務所として受けた仕事ですし、ええと、そうですね、現職教員、私の次の年に、横浜の猪俣教諭が、バングラデシュ

に来たので、2人で、「2人も現職教員がいながら、このくらいの授業実践か」、と言われる訳にもいかないというやはり私たちの想いももちながら取り組みました。

で、この中で一番大変だったのが、他隊員への指導をお願いされたんですね、調整員の方から、あ、で、すみません、鳴ってしまいましたが、これが結構大変でした。で、ええと、ちょっと急ぎますね。で、私が授業した訳ではなくて、私はティーム・ティーチングで入ったんですけれども、手前の女の先生が授業をしています。

それから、ええと、サイクロンの防災カレンダーの製作、ええと、これなんですが、ええと、災害、あの大きな災害になってしまったんですが、なんの備えもないんですよ。それで、ええと、PC隊員とか家を失ってしまった友人の意見を聞きながら、チタゴン・ボリシャル・コックス・バザール常襲地域3点を結んで、で、日本には「備えあれば憂いなし」、これ日本語で書かれているんですけれども、これ帰国後、ええと、頼まれて訳したもので、で、現物はこれなんですが、全部ベンガル語と、で、ええと、字が読めない、これが元々、ええ、赤十字（赤新月）社から出来たものなんですが、こんな字も読めないパンフレットで人々は何をしたらいいのか分からないから、それで、このように絵を中心に、写真を中心にしたもので、ええ、字が読めなくても分かるように。それから、こうやってたたんで置いておけるように、後々困らないように、「備えあれば憂いなし」のようなこと、「コシュト　ナ　コルレ　コシュト　メレナ」（苦労しないと何かいい結果は得られないよ）というような、バングラデシュの諺なんかも入れました。

それから、これ日本の子ども達に向けて出し、月に一回発行してた、下まで映んなかったんですけれども、ええと、通信です。こういうのを月に一遍ずつ、ええと、最終的には二十何号までいったのでしょうか。

それから、私の、協力隊参加の動機の一つとして、「自分しか行けないところに行って、助けを求めてる、助けが欲しい子ども達の所に行って、文字や数を教えたい」という想いはずっとありました。それで、これは、ええと、なんですか、ボランティア中のボランティアなんですよ。ええと、勤労少年とか少女を集めてですね、文字と数をやりました。で、ベンガル人の手伝いとか、あと賛同する同隊員がこうやって来てくれてやったりしました。ええと、真ん中の端の真ん中の写真はベンガル人のボランティアだったんですけれども、結局彼には定着しなかったんですよね、僕がいなくなった後やってもらいたかったんですけれども、外国人と一緒に活動したかっただけだったみたいで・・・。

はい、ええ、で、ええもう鐘が鳴ってしまったので、これはこんなことをこれから考えていけばいいんじゃないかなっていう、もので、後から読んで頂けたらいいかなって思ってます。

サイクロン防災教育隊員としては、やっぱり家族を動かすために、一番強いのはお父さんで、お父さんを、こう教えていくっていうのが大変で、これをただ、ええと、資源に出されたら困るんで、一人一人お父さん達を集めて説明して手渡ししてました。

これもちょっと鐘が鳴ってしまったんで、すみません。日本の子ども達、バングラデシ

ュの子ども達を見て、日本の子ども達の、何が足りないのかっていったら、「生きる力」かなぁ。ええと、例えばバングラデシュの子ども達、バケツひっくり返したら道具なんてないんですよ、なんか紙か布かなんか持ってきて、一生懸命吸ってバケツかなんかに捨てて、始末出来ると思うんですよ。日本の子ども達はおそらく、じっと暫く見ている、先生の指示を待っている。その辺りで、やっぱりコミュニケーション能力とか表現の仕方も日本の子ども達、だんだん問題のなってきてるかなぁって、今考えて、バングラデシュのその辺りを見つけ、良い所をちょっと、日本でも、ええなんですか、見習おうかなって、実践しているところです。

はい。ええ、後は、ですね、そうですね、おわりになんですが、私派遣の間、二度交通事故に遭って、二度空き巣に遭って、コレラにもチフスにもなって、骨折もしてですね、えー4回入院してですか、とてもバングラデシュでは有名な人になってしまったんですけれども、前半の一年間は。でも、帰国もせずに、ええと、先程のどなたかもおしゃってくれましたけれども、人と繋がって支えられてきました。友達とか、ベンガル人の人達とか。で、ええと、「そんな苦労して大変だったね」と言われるんですけれども、それに代えられないものがこの隊員活動の中にはあったんじゃないのかなって思います。

ええと、とてもこれから行かれる方々、えー楽しみだと思うんですが、食べ物なんですが、バングラデシュのコックスバザールはミャンマーの方々が大勢いたので、麺の文化があったり、チマキがあったり、とても、あのー、バングラデシュ派遣の方がいらっしゃたら是非コックスバザールを訪ねてみてください。終わります。

活動報告

コックスバザール郡リソースセンター
18年度1次隊　小学校教諭
札幌市立西白石小学校　平本　洋康

要請と活動概要

要請内容

コックスバザール県は美術を指導できる教師が少なく、よって、隊員がURCで現職教員のトレーニングの実施、学校の巡回指導などを通して美術教師の質の向上を図る。また、これらの地域にはこれまでサイクロンによる大きな被害が度々あった。隊員は台風や地震に対する防災訓練や広報活動も積極的におこなう。

前半の活動

- URCでのトレーニング
- PTIでのトレーニング
- シャヒッティカ小学校での支援
- 日本の子供たちへの国際理解支援
- サイクロンに関わる防災教育の準備
- バザールの勤労児童のための教室

後半の活動

- URC・PTIでの教員向けトレーニング
- シャヒッティカ小学校での指導
- インターネットライブ授業
- 「文部科学省拠点システム事業に関する現地調査」に関わる、ハンズオン素材を使用した授業公開
- サイクロン防災カレンダーの製作
- 日本の子供たちや人々に、ニュースレター「ショナール・バングラ・テケ」の配信

具体的な活動

URC・PTIでの教員向けトレーニング

- URC・・・Subject base training
  算数・理科・ベンガル語・英語
- PTI

トレーナー講座・・・English Pronounciation training

トレーニー講座・・・体育・図工

URC・PTIでの教員向けトレーニング

シャヒッティカ小学校での指導

- 常時指導
- インターネットライブ授業の事前指導
- 「文部科学省拠点システム事業に関する現地調査」に関わる、ハンズオン素材授業公開の事前授業準備・公開研

シャヒッティカ小学校での指導

インターネットライブ授業

- コックスバザールの子供たち20名と指導者（教員・URCインストラクター）をダカへ招待して
- バングラデシュの教科指導にはない"総合的な"学習
- 指導者の研修をかねて
- 4年生の社会の教科書
  「いろいろなアジアの文化」 たしかめ
- 日本の子供たちへのバングラデシュ理解のきっかけに

インターネットライブ授業

「文部科学省拠点システム事業に関する現地調査」に関わる
ハンズオン素材を使用した授業公開研

- ハンズオン素材が、バングラデシュでは有効か
- JICAバングラデシュ事務所として受けた要請
- 教育系隊員が協力して
- 他の現職教員隊員と方向性を明確にしながら
- バングラデシュ事務所の研究会のつもりで

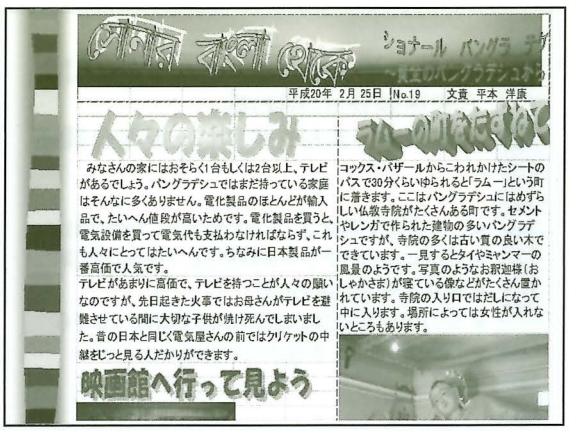
「文部科学省拠点システム事業に関する現地調査」に関わる
ハンズオン素材を使用した授業公開研

サイクロン防災カレンダーの製作

- 最後に残された要請内容
- 「サイクロン・シドル」を受けて
- サイクロン・レーダー・ステーション、災害広報に関わる人々の話を聞きながら
- PC隊員・家を失ってしまった友人とともに
- 災害弱者（貧しい人々・情報が届きづらい人など）を意識して
- 他の隊員と協力しながらチタゴン・ボリシャル・コックス・バザール常襲地域3点を結んで。

ニュースレター「ショナール・バングラ・テケ」の配信

- バングラデシュの暮らしや生活、情報発信
- インターネットライブ授業の準備
- 国際理解協力の素材として
- 毎月月末　1回発行
- 小学校2校・JICA札幌・国際理解協議会ホームページから・その他



ショナール バングラ デ
～東京のバングラデシュから

平成20年 2月 25日 No.19 文責 平本 洋康

人々の楽しみ

みなさんの家にはおそらく1台もしくは2台以上、テレビがあるでしょう。バングラデシュではまだ持っている家庭はそんなに多くありません。電化製品のほとんどが輸入品で、たいへん値段が高いためです。電化製品を買うと、電気設備を買って電気代も支払わなければならず、これも人々にとってはたいへんです。ちなみに日本製品が一番高価で人気です。

テレビがあまりに高価で、テレビを持つことが人々の願いなのですが、先日起きた火事ではお母さんがテレビを避難させている間に大切な子供が焼け死んでしまいました。昔の日本と同じく電気屋さんの前ではクリケットの中継をじっと見る人だかりができます。

映画館へ行って見よう

ラムーの山の上のすばらく

コックス・バザールからこわれかけたシートのバスで30分くらいゆられると「ラムー」という町に着きます。ここはバングラデシュにはめずらしい仏教寺院がたくさんある町です。セメントやレンガで作られた建物の多いバングラデシュですが、寺院の多くは古い質の良い木でできています。一見するとタイやミャンマーの風景のようです。写真のようなお釈迦様（おしゃかさま）が寝ている像などがたくさん置かれています。寺院の入り口ではだしになって中に入ります。場所によっては女性が入れないところもあります。

バザールの教室

- 尾崎隊員とともに3月から
- まったく登校経験のない子供からドロップアウトの子供、大人まで
- 毎日夕方5時から6時半くらいまで
- ベンガル人の助けをかりながら
- 他の隊員の助けをかりながら

今後の課題

小学校教員隊員として

- 一般教員(assistant teacher)のレベルの底上げ
- より具体的で、できれば直接的な働きかけ
- 教育環境・インフラの整備に関わる報告
- 現場の声を伝える役割（報告書、ミーティングを通して）
- 隊員自身の活動の広報
- 弱い立場の人への気配り

サイクロン 防災教育隊員として

- 「被災国」としての災害対策の早急な整備
- 災害弱者(情報の伝わりづらい人たち）への直接的な働きかけ
- 「家族」を動かすためのアプローチ
- 「身を守る」ための知識の啓発
- 「保健安全的指導」の学校現場(ハイスクール等も含めた）・公共施設での義務化
- 公共インフラの整備

JICA（JOCV）として

- JICAに関する広報活動
- JOCV(自分自身)に関する広報活動
  - ・一般庶民(広報誌が読めない・パンフレットが届かない大部分の人)への
  - ・広報セミナーを通して
  - ・JOCVの活動を通して

日本の子供たちにとって
～現任校を念頭に

- 子供のコミュニケーション能力
- 英語活動のあり方
- 子供の生きる力
- 子供の表現力
- 人との繋がり方

おわりに

ありがとうございました

セネガル　ネハナ（セネガルは、いいところだよ）

白銀　有紀
（18－1，セネガル共和国，小学校教諭，伊勢原市立比々多小学校）

マッサラ―ム・マライクム。ナンゲンデフ。マンギトゥドゥ　ユキ。皆さんこんにちは。セネガル共和国に派遣されました白銀有紀といいます。1年9ヶ月の隊員生活、特に、これといったことは出来なかったと思うのですが、それでも活動や自分の思いを20分に収めるのは難しいということを感じています。私がお話した言葉の中から皆さんなりに消化して、何かお土産として持って帰って頂けたら嬉しいなと思っています。宜しくお願いします。

まず、自分自身の隊員生活を一言で表すというならば「たたかい」という言葉につきます。配属当初、文化や慣習、考え方の違いにより色々なことにぶつかり、もがいてきました。そんなわけで、こんなタイトルを付けてみました。「たたかった1年9ヶ月～セネガルネハナ～」。セネガルに着いた頃、セネガル人やセネガルに対してたくさんのダメ出しがありました。

まず、駄目出しの一つに、泥棒事件がありました。現地語の訓練が終わり、配属されて自分の住む家にいざ行ってみると、玄関が見事に壊され、電化製品は丸ごとなくなっていました。私の家は前任者と同じ家で、色々なものをもらう予定でした。まず、私は学校ではなく警察署に通うことになりました。次に、ちょうだい攻撃です。セネガル人はとても挨拶を大切にしています。職場だけでなく、道を歩いていると見知らぬ人でも挨拶をしてきます。「こんにちは。」からはじまり、元気？家族は元気？、それから、日本の家族は元気？仕事はどうですか？…そんな挨拶をお互いにします。そして、その挨拶の後には「マイマ」っていうのは現地語なのですが、（被っている）帽子をちょうだい等と言われる事もしばしばありました。子どもたけでなく大人、時には上司もです。私にとって、この言葉は違和感がありました。ただ、少しして、セネガル人からこの言葉には本当に欲しいから言っているのではなくて、話すきっかけとして言っていることもあると教えてもらいました。でも、やっぱり私は「マイマ」は大嫌いで、セネガル人に、私はそれが嫌いなのだと話しました。それから、一番イライラしたのが「インシャーラ」という言葉ではないかなと思います。イスラム教の言葉でもあのですが、日本語で訳すと「神の思し召しがあれば」というのでしょうか。人と別れるときに明日会おうね、「インシャーラ」といったように使います。明日会えたらいいね…でも、怪我や病気で会えなくなることもあるかもね、といった感じです。配属されて、電気や水道の契約は隊員自身がやることになっていました。受付で、電気や水道の受付で長時間待つのは当たり前で、その待つという約束さえも、しばしばすっぽかされることになりました。最後に、また明日ね、「インシャーラ」といわれると、這ってでも約束を守るために来なさい、と無性に腹が立つことがありました。さら

に直接の職場である学校にいくと、「あなたが授業できるように時間をあげるよ。」と言われたり、先生が授業に平気で遅刻してきたり、途中で出て行ってしまったりしたことも私にはショックでした。そして、それを監督するはずの校長も何も言わないこともありました。今思えば、私が開発途上国の状況について勉強不足だったのですが、“セネガルへようこそ、君が来るのをずっと待っていた。…一緒にセネガルの教育をよくしていこう”そんな風に迎えられると思っていたので、愕然としてしまいました。このように、駄目出しの毎日でした。なぜここにいるのだろう、何のために来たのだろう、自分の存在意義が分からなくなり、赴任当初は濛々としていました。

さて、簡単に国事情について話したいと思います。セネガルはアフリカ大陸の西側にあります。首都はダカールです。こういうと、今は変わってしまいましたが、パリ・ダカールラリーを思い出す人もいるのではないでしょうか。民族は様々な民族があり、それぞれの民族の言葉があります。宗教はイスラム教が大半を占めます。フランスの植民地だったという歴史があり、表記や学校教育の場はフランス語が使われています。

次に、要請内容について話します。配属先はティエス州の教育委員会です。要請概要は、子どもに対してではなく、現地の教員に対して技術や知識を教えて欲しいということでした。セネガルはフランスの学校制度に基づき、教育が行われています。基本的に子どもたちは学校で初めてフランス語に触れ、初めて習ったフランス語で新たな学科を勉強していきます。そのため、実際はフランス語、算数に授業時間が割かれています。私が要請を受けていた音楽や体育といった情操教育は、日本でいう学習指導要領に位置づけられているのですが、やっていないことが珍しくありませんでした。学校のことになりますと、午前中の授業は 8 時から 13 時までです。8 時から 11 時まで休憩がなく、ノンストップで行われます。留年もあり、教室にいくと様々な年齢の子がいました。図にもありますように、初等教育、6 年間の初等教育が終了すると、修了試験があります。この修了試験に受からないと中等教育以上、中学校には行かれないことになってしまいます。日本と比べると、セネガルの子どもたちにとって学校はとても過酷な場所だという印象を受けました。それが、セネガルの初等教育の修了率、58%という数字に表れていると思います。

これ以外の教育事情で、先生のモチベーションの低さがありましたが、私が一番気になったのは他のことでした。うまく言葉では言えないのですが、子どもの存在がすごく無視されているなということが気になりました。間違ったり失敗すると、あなたが努力していないから、ちゃんと勉強していないからと教師に怒られたり、また、鞭の使用は法律では禁止されていますが、当たり前のようにあり、教室から子どもの泣き叫ぶ悲鳴が聞こえるということもしばしばありました。それから、教員のストライキが本当にすごく多くて、4 月 5 月 6 月は月の半分は授業が行えていませんでした。子どもの学習権はどこへやらという感じです。私は、人を作っていくためには、国を作っていくためには、教育はとても大切だと思います。しかし、セネガルでは、その教育が無視されていて、すごく悔しいと思いながらも何も出来ませんでした。

こういった教育の状況を踏まえて、要請とは隔たりがありますが、まず情操教育の確保ということを目標にしました。そして、私の帰国後もセネガル人がこ情操教育の指導をする、続けていくことが究極の目標だと思ったので、現地の先生と一緒に授業をおこなうことを最低条件としました。

では、具体的な活動の中身の説明を始めます。主に次の 6 つが挙げられます。順に話をしていきたいと思います。担任と共に情操教育の指導をする。セネガルの図工はほとんど模写のみ、音楽は先生がピアノを弾くことができないので、先生の歌った詩を、子どもたちが続けてまねて歌うというものでした。ということは、先生がとても音痴だと、子どもも自動的に音痴になり、先生がしっかりと歌を覚えていないと、子どもたちもそれ以下になるという状況でした。体育は暑いという気候のせいか、行われていないことが多かったです。たとえ行われていたとしても、先生は木陰で休んでいて、子どもたちは大好きなサッカーをしている、まさに休み時間のようでした。教師の指導がなければ、体育とは言えません。私の配属先は教育委員会ですが、実際は市内の小学校に回って、情操教育、音楽・体育に関心がある先生たちと一緒に指導をしていました。授業の前に指導書を使って授業の流れを説明し、先生に指導に積極的に関わってもらうようにしました。また、授業後には、先生の良かったことを必ず伝えるように授業をやっていくことを心がけました。セネガルでは、先生たちも情操教育をちゃんと受けて来なかったし、今では教員養成の期間が 6 ヶ月という短さで、なかなか先生たちが主体になって積極的に授業に関わっていくことが難しいということも分っていました。だからこそ、指導でいいところがあると、褒めるようにしました。

二つ目は、指導の成果を発表する、です。指導する上での目標、情操教育の普及にもなるし、さらに一つの学校での活動が他校へも広がっていくという可能を考え、行事や作品展示をしました。授業で子どもたちが作ったものを教室に掲示したり、左上の絵が教室なのですが、作品を掲示したり、教育委員会や校長室に掲示板をつくったりしました。私の任地ではできなかったのですが、運動会のお手伝いもしました。それから、音楽会を開催しました。

三つ目は、教員へ研修会を開催しました。情操教育に関する実技中心の講習会を行いました。

四つ目は、セネガルの先生たちのために指導書作りを 2 回行いました。1 回目の反省を踏まえて、2 回目はセネガルの先生の意見を聞いて回ったり、教えてもらった歌やセネガルで歌い継がれている歌を採用したりして、先生たちがより教えやすいように配慮や工夫をしました。また、先生たちが自身を持って歌えるようにと CD に師範演奏を録音しました。

それから、放課後は、子どもたちに楽器に触れる機会をと思い、音楽クラブを作って、リコーダーや鍵盤ハーモニカの指導をしました。

最後に、日本の小学校で働いている同期教員から、セネガルの子どもたちと交流しようというテーマで学習に取り組みたいという申し出がありました。それで、平塚市立神田小

学校 6 年生の子どもたちと交流しました。活動の中で、日本の子どもたちから私の元に、手紙が来ました。その中に、とても興味深い質問がありました。セネガル人はどうして黒いのですか？です。思わず笑ってしまいました。

さて、皆様にもっともっとイメージをふくらませてもらいたいということで、これらの活動をいくつかの映像で紹介していきたいと思います…

① 多いときは、80 人くらいの子どもたちが教室にいました。残念ながら、先生は横で座っているんですけど。

② これは、研修会のときの様子です。セネガルでは、先生の書いた絵をノートに写すことが図工の授業になります。例えば、先生が赤い花瓶を書くと、みんな赤い花瓶を描くのです。私たちは、図工で、それも大事ですけど、子どもたちの想像力や創造力を伸ばすことを大事にしたいと思い、こういう研修会の場では、こんな話を特にしました。

③ 私の任地で初めて音楽会を企画しました。先生たちも子どもたちも初めてなので、日本式のやり方でやってみました。先生も指揮で参加してくれているのですが、すごく調子がはずれているのが分かりますか。この歌は、「幸せなら手をたたこう」のフランス語ヴァージョンです。この部分は、「幸せなら全部やろう」です。

④ これは、日本の学校と交流しようという活動の一部で、日本の友達がセネガルにやってきてくれました。そして、日本の歌を教えました。

日本に帰ってきて、多くの人から、「たくさん学んできたでしょ。どうだった。」と聞かれることがたくさんありますが、実は、どのように返答していいのか詰まってしまいます。というのも、セネガルに何かを残してきた、何かをしてきたと胸を張って言えるものがないような気がするからです。でも敢えて言うとしたら、批判的なことや悪いことは沢山言ってきましたが、実はセネガルが好きなのです。セネガルを離れる時に、セネガルの大好きな家族や友人と離れること、同僚と働けなくなること、素直に寂しいなぁと思いました。そういった訳でサブタイトルは、たたかったと書いてありますが、「セネガル　ネハナ」、セネガルは良いところだよと記しました。

また、活動していく中で、あることに気付くようになりました。私がセネガルの子ども達に話していることは、日本で私が指導していたことと同じだということに気が付きました。例えば、親切な行為に対して「ありがとう」って言うこととか、友達が失敗したり間違ったりした時にはけなさないとか、それは国籍や文化や環境に関係なく、私はいつも子ども達に望むことです。教師としての子ども達への願いです。この気付きはとても驚きでしたが、嬉しい発見でもありました。そんなことを友人に、セネガル人の友人に話すと、「私達は地球人なんだよ。」って言いました。教師という私の仕事は、地球の子どもを育てること、そういうことなのだと思っています。

最後に私のお気に入りの写真を見せたいと思います。私がどこにいるのか、分かります

でしょうか？で、意外にも私が白く映っているのにびっくりしました。こんな風に思えたのは、私がセネガル人みたいになってきたのかな？…だからこそ自分の白さにびっくりしたのだと思います。見た目の肌の色ではなく、一人ひとりの個として、セネガル人と接してきた証なのではないのかなぁと思います。そんなことを気づかせてくれた意味でも、私はこの写真を物凄く気に入っています。まさに、私達は地球人。

最後になりましたが、1年9ケ月、私は大きな怪我もなく、病気もすることもなく、無事に過ごすことが出来ました。セネガル人の同僚・友人をはじめ、日本にいるみんなの支えがあったからであると思っております。大好きな言葉「ジュルジュフ」ありがとう。そして、以前は大嫌いだった「バベネニヨン」、「インシャーラ」で終わりたいと思います。

たたかった1年9ヶ月
～セネガルネハナ～

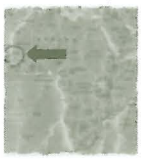
青年海外協力隊12年度1次隊
セネガル共和国　小学校教諭
神奈川県伊勢原市立比々多小学校
白銀　有紀

はじめに

- 配属されて行ったのは、学校ではなく警察署
- セネガル流の挨拶
- インシャーラの国
- 自分の存在意義について

「なぜ、ここにいるの？何のために来たの？」

1、セネガル共和国



- 面積：197.161km² （日本の面積の2分の1）
- 首都：ダカール（西アフリカの玄関口）
- 人口：1,220万人（2007年、日本の人口の10分の1）
- 民族：ウォロフ44%、プル23%、セレール15%他
- 言語：フランス語（公用語）、ウォロフ語等各民族語
- 宗教：イスラム教95%、キリスト教5%、伝統的宗教
- 歴史：1960年　フランスから独立

外務省ホームページより

2、要請内容

- 配属先：ティエス市教育委員会
  （第2の都市、首都ダカールより東方向70km）
- 要請概要：

教員の知識や技術不足から情操教育が十分に行われていないため、教員に対して技術指導をする。

3、教育事情

- フランスの学校制度　母語ではなくフランス語による教育

- 就学率：85%(2006)　＊女子就学率:48% (2005)
- 初等教育修了率：58% (2006)
- 教科書保有率：1人あたり1,9冊(2005)

4、任国での活動

1）活動目標：小学校における情操教育の普及を目指す。

2）ねがい：

教員へのねがい　情操教育のよさや楽しさを理解し、指導への興味・関心を持つ。積極的に指導に関わり、知識や技術の獲得に励み、指導に対する自信を持つ。

子どもへのねがい　自分の思いや考えを大切にすると共に、それを表現することの楽しさを味わえる。また、同じように、友達の思いや考えも大切にできる。

3）活動方針：セネガル人が情操教育（図工、音楽、体育）のよさや必要性を理解し、セネガルの教員が主体となって教育活動に参加できるように、技術や知識を伝授したり、チームティーチング形式で指導を支援したりする。

4、任国での活動

4）活動内容

- 市内の学校（4校）を回り、担任と共に指導
- 指導の成果を発表：音楽会、作品掲示、運動会
- 教員への研修会の開催：教員養成校で講習会
- 教材の開発：教員のための指導書作り
- 放課後の活動：選抜メンバーによる音楽クラブ
- 日本の小学校との国際交流：

神田小学校6年『セネガルの子どもたちと交流しよう』

担任と共に情操教育の指導をする

指導の成果を発表する

指導の成果を発表する

教員への研修会の開催

教材を開発する

放課後の活動

日本の小学校との国際交流

・・・セネガル人は、どうして黒いのですか？

5、活動の成果と課題

成果：

・セネガルを離れるのがさびしいと思えたことが一番の成果

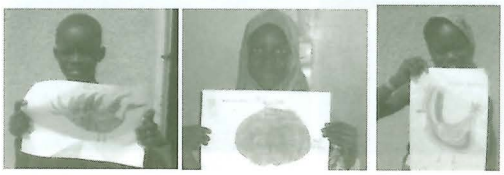
・大きな成果はないが、やる気のある教員に出会え、いろいろな活動をしたり、教育について話したりできたこと

課題：

・隊員経験をどのようにいかしていくのか？資料をどのように教材化するか？どんなふうに伝えていくのか？

おわりに

- 日本人として
- 教師として新たな思い
- 子どもへの願いは万国共通



Bula Fiji !

沢登　祐子
（18－1，フィジー，小学校教諭，練馬区立早宮小学校）

フィジーで、体育と音楽と図工を教えていました。今日は拙い発表ですが、最後まで聞いていただけたらと思います。最初に、「フィジーが好きになれそう」ということですが、私は協力隊に本当に行きたくて仕方がなくて、合格した時は嬉しくて、行くのを楽しみにしていたのですが、行く直前になって急に不安になってしまいました。ちょっとホームシックのような状態になってしまってどうしようかなと思ったのですが、フィジーに着いてみると、毎日海とヤシの木に囲まれた生活が待っていて、まずそれに癒されました。それから、交通機関ですが、ほとんどバスで移動していました。本当に子供たちが優しくて、立っていると必ず誰かが席を譲ってくれて、そういう優しさに触れて、だんだんフィジーが好きになっていきました。これはマーケットの様子ですが、タロイモとかバナナとか野菜とかいろいろと売っています。珍しいものがいろいろあって楽しかったり、おばちゃん達とフィジー語で話をすると、おまけをしてくれたり、気さくに話をしてくれて、いい国だなと少しずつ感じていきました。これはラグビーを公園でやっている様子です。本当にラグビー大国で、どこの公園にも、ラグビーのポールが立っていて、練習をしているのが印象的でした。

私は、教育省の、スバプライマリスクールというところで活動しました。もとは政府のものだったのですが、現在はPTAが運営をしている学校でした。その学校は、フィジーの首都にあるということもあり、また、とても予算があり、金銭的に恵まれていて、授業料も高く、はっきり言うとお金持ちの子供たちがたくさん通っているようなところでした。カリキュラムもこの学校だけはフィジーのカリキュラムを使わずに、オーストラリアのものを使って、どんどん進めていくような学校でした。教職員18名、1年生から8年生まで、各学年1学級ずつで、担任教員が8名という学校でした。1クラス40人ちょっといましたので、授業を教えるのが大変なこともありました。

要請理由は、子供たちに質の高い情操教育を提供する。そして、その教授方法を同僚の教師に伝えるというものでした。具体的業務内容は、1年生から8年生の児童に対し、体育・音楽の授業を担当し、可能であれば、日本文化のことを教えてほしいということでした。最初は、体育・音楽・図工を教えるという要請理由で来たのですが、駒ヶ根にいる時に、音楽はボランティアがほかに見つかったから、教えなくていいですということを聞きました。なので、音楽の教材は持っていかなくていいのだと理解し、体育と図工の準備だけをしてフィジーに行ったところ、やっぱり音楽の先生が来られなくなったから急に教えてくれということを言われ、大変困ったということがありました。

私がいたのは他のボランティアの中でも、授業数が非常に多い学校でした。フィジーの中

では、かなり進んでいる学校で、時間割もきちきちと決まっていて、1年生から8年生の、体育・図工・音楽を全部担当してほしいということで、週に２４コマ、この他にも、クラブを少し教えたりしていたので、朝、授業が始まると、さよならするまではほとんど授業が詰まっているという感じでした。

要請理由のところに、指導法を担任や、他の教員に伝えるということがありましたが、最初は自分の授業をやるのに精いっぱいで、気が付くと、専科のようになってしまっていて、私が授業をしに行くと、担任の先生たちは出て行ってしまうということがあり、そのあたりでかなり悩みましたが、少しずつ、一緒に授業をしてほしいという話をしていって、できるだけ担任の先生に参加してもらうよう努力しました。でも、やはり先生によって考え方が違っていたので、最初は、全員の先生に協力してほしいということでやっていたのですが、進めていく中で、本当に興味をもってくれる先生に的を絞って授業に参加してもらうということにしていきました。

これは体育の様子ですが、3 年生で組体操をしているところです。学校に着いてみると、金銭的には余裕がある学校でしたが、体育の道具が全くなく、あったのはべこべこのボール 2 つだけだったんですね。だから、何ができるかということを考えたのですが、このように芝生があるので、日本で言ったら、体つくり運動のように、道具を使わずにできる体育に取り組みました。組体操、馬跳び、かけっこ、リレー、それからストレッチなどはやったことがないので、2 人組みで押し合うということだけでも、本当に楽しそうにやっていました。ボールをお願いして少し買ってもらい、ボールを使った運動としてはドッジボール、バレーボール、ボール鬼とか、そういうものをしました。フィジーの子はラグビーが本当に得意で、運動神経もよくて、女の子はネットボールというものをよくやっていましたが、そういうスポーツは私がいなくてもできるものなので、この子たちがやったことのない運動で楽しめる運動というものを考えました。それから、もうひとつ買ってもらったものが紐ですが、これは便利で、綱引きに使ったり、大縄をしたり、高跳びに使ってみるとか、あと、日本だと石灰を使って線を引きますが、そういうものがないので、ドッジボールをする時に、その紐を線の代わりにして使いました。日本のように鉄棒や跳び箱やマットがなくて、できないこともたくさんありましたが、これはできないあれはできないというのではなく、ある物とある場所で、一つやったものをどんどん発展させていくという形で、なんとか２年間、体育の授業をやっていきました。例えば、馬跳びですが、最初は普通の馬跳びで、その後慣れてきたら２人で馬をくっつけて跳ぶとか、リレーにするとか、そういう風に形を変えて授業をすることができました。

こちらは音楽です。音楽は最初、教材が全くないところからのスタートだったので、JICA オフィスに行ったりだとか、日本大使館に行ったりして教材を集めました。一番役に立ったのが、日本から送ってもらった簡単な英語の歌がたくさん載っている本です。「メリーさんの羊」や、「幸せなら手を叩こう」とか、簡単な英語の歌をたくさん歌いました。でもやはり２年間あるので、そういうことばかりをやってはいられないので、これもまた一つの

教材を発展させていくような形で、輪唱にしたり、合唱にしたりしていきました。とても便利だったのが、インターネットで検索した英語の歌の歌詞が出ているサイトです。もともとは英語の歌で、日本語の童謡になっているものがたくさんあったので、たとえば「大きな古時計」とか、「線路は続くよどこまでも」などですが、英語の歌詞を調べて、歌ったりしました。子供たちは、「大きな古時計」と、「カントリーロード」が大好きでした。高学年、７・８年生になると、日本では中学生なので、「きらきら星」などを歌っているわけにはいかないので、ディズニー映画の曲だとか、アバやビートルズの曲だとか、そういう少し年上の人たちも興味を持つような曲を使ってやりました。

図工もやはり、材料がなかなか手に入らないということがありました。手に入った物が、このような色画用紙と絵具だったので、これらを駆使していろいろなことをやりました。これは、色画用紙をくしゃくしゃにすると和紙のように柔らかくなるので、クッションを作ったときの写真です。余った茶色の色画用紙を木の幹のようにして、絵具で葉を描くということもしました。いつも、あるものを使ってやっていました。また、新聞紙だけはたくさんあったので、新聞紙を使って動物を作って、その上に絵具を塗るとか、そういうこともやりました。日本の図工の専科の先生にアドバイスしてもらったことがとても役に立ちました。私は図工をほとんど教えたことがなかったので、どうすればいいかを相談したのですが、子供たちは作って遊べるものが大好きだよということを聞いたので、まずはそういうもので興味を持ってもらいたいと考え、フリスビーや独楽などを作りました。

最後、これは2008年、去年の1月から3月の写真ですが、どうしてもやりたかったことの1つである、巡回指導の様子です。スバプライマリスクールは本当に恵まれていて、この子たちに教えることも意味があることだと思いましたが、図工を一回もやったことのない子供たちがいる学校がたくさんあるので、そういう学校でぜひ教えたいと頼み、やらせてもらいました。最初はなかなかOKがでなくて、交渉が成立するのに半年くらいかかりましたが、教育省の上のほうの方に賛同していただいて、月曜日から木曜日まではスバプライマリーで授業、金曜日は他の学校を回るということになりました。4日間で24コマの授業をやり、その後に巡回指導の準備をして、金曜日は材料などを全部持って他の学校を回りました。大変でしたが、本当にいろいろな子供たちや先生達に会えて、とてもいい経験になりました。

他のJOCVと協力して行った活動もたくさんあります。自分ひとりでできることには限りがあって、やはり協力して活動ができると、こんなことができるのかということがたくさんありました。その一つがアート展です。これはスバに小学校教諭のJOCVが全員集まって、企画をして、現地の学校30校くらいに参加してもらったものです。この時に私たちがアートブックというもの配りました。いアートブックには、いろいろな図工作品の作り方が載っているんですね。私が赴任したちょっと前の隊員が作っていて、できていたんですね。これを持って、いろいろな学校を回って、図工展があるので作品を出してみませんかということを言って回りました。帰国するときには、２年間でいろんな作品を作ったの

で、それも形で残したいと考え、2冊目のアートブックを作り始めました。私たちが帰るまでには作り終わりませんでしたが、後は次の隊員に任せて、今は 2 冊目の製作が進行中というところです。

最後に、「ケレゲレ(お願い)」というお願いに悩まされた話しをします。フィジーは村文化なので、どうしてもみんなでやっていくっていうのがありました。これは私が住んでいた家の隣というか、一緒の敷地に住んでいた人なんですけれども、何かというと「ケレゲレ」とやって来て、「ケレケレ、貸して」とか「ケレケレ牛乳貸して」とか言うんです。私もいい関係を作っていきいので「いいよ」って言うのですが、それがどんどん、エスカレートしていって、「お金貸して」とか、そういう風になっていくのです。学校でも同じで、図工で使う色画用紙なんかも、大分自分のお金で買った部分もあるのですが、それを他の人達がどんどん借りに来るのですね。1回2回ならいいのですが、なくなってしまうので、私もどうしようかなって悩んでしまいました。それで、ある時自分も、ケレゲレしてみようと思って、他の先生に「ケレケレ、絵の具貸して」って言ってみたのです。そうしたらその先生がすごい笑顔で「いいわよ、いいわよ、どんどん使って」って感じで、私にボンって貸してくれて、それで、それまでケレゲレって言われることが大嫌いだったのですが、自分で言ってみると、あ、こうやって、みんな助け合って生活してるんだなっていうことがわかって、最初は一番嫌いだったケレゲレでしたが、その中から、あるものはみんなで使っていくというような、生き方を、学びました。

最後、日本に戻ってきてからですが、4年生の総合で、国際理解協力に少し取り組んでみました。その結果、国際理解教育の難しさというか、上手く進めていくためには、同僚の先生と、協力していく、理解してもらっていくということが大事だと思いました。今回、フィジー大使館の方に 2 名来てもらって、子ども達に話をしてもらったり、一緒に歌を歌ったりすることができましたが、その来てくださった方が、「時々踊りを教えにきてもいいよ」ということを言ってくださったので、「あ、やりたい」と思ったのですが、なかなか一緒に組んでいる先生の理解が得られなくて、結局は実現しなくて難しいと思いました。それから子ども達全員が興味を持つかというと、そうではなくて、なぜ援助が必要なのかという少し難しい話になってくると、4年生なので、分からなくなってしまったり、ちょっとつまらなさそうにしている風に見える子もいたりして、難しいなと感じました。それでも、広く子ども達を見ていると、何人かの子ども達は確実に目を輝かせて話を聞いていて、これでいいのかもしれない。この中で、一人の子でも真剣に受け止めて何かに気がついてくれればよしとして進めていこうと思っています。

最後に、2年間活動して、私は国際人という人はどういう人だろうとずっと考えていましたが、活動を通して、人間関係を築いていける人、簡単にいうと誰とでも友達を作れる人というのが国際人ではないかと思いました。本当に語学だとか、持っている知識というものではなくて、相手を思いやって、分かろうとする気持ちをもって人間関係を作っていける人が、本当の国際人だなっていう風に今は考えています。ですから、日本の教育活動の

中でも、そういう子ども達を育てていきたいし、その中で時々このような話をして、海外に目を向けさせていければと思っています。ありがとうございました。

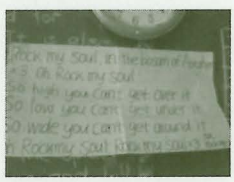
1. フィジーが好きになれそう。

2. 活動が始まって。

（1）配属先
・受入省庁名：Ministry of Education(教育省)
・配属先名：Suva Primary School
・所在地：首都スバ
・事業内容：もとは政府運営、現在はPTA運営
オーストラリアのカリキュラム※英語の少人数教育
予算　151068F＄（約1133万円）
児童数　約330名(1年生から8年生まで,各学年１学級)
教職員数　18名
教員8名、学校採用教員2名、事務員2名
管理人1名、ライブラリアン1名、キャンティーン3名、
JOCV1名

（2）要請理由
①子どもたちに質の高い情操教育を提供する。
②その教授法を同僚教師に伝える。
・具体的業務内容
1年生から8年生の児童に対し、
体育、音楽、図工の授業を担当する。
可能であれば、日本文化の紹介も。

・2006年・2007年
1週間に24コマ(1学年体育・図工・音楽×8)
担任を授業にまき込むことの難しさ



図工の作品・授業風景

2008年（1月～3月）

・月から木曜日までに24コマ
・金曜日はスバ近郊の小学校を巡回指導
・次にPEMACを担当する教員に技術移転

3. 他のJOCVと協力して

・ART展（2006年、2007年）

・ワークショップ
・ART Book

4.カルチャーショックいろいろ

5. 日本に戻ってきてから

・国際理解協力の難しさ。
・それでも進めていくことの大切さ。

Vinaka Vakalevu

壁新聞を通した日中学校交流

鳴海　麻衣子
（18－1，中華人民共和国，日本語教師，川崎市立はるひ野小中学校）

今日はお忙しい中ありがとうございます。鳴海と申します。今から旅新聞を通した日中交流と言うタイトルで発表させて頂きますが、主な内容としては赴任先の紹介と活動内容を簡単にまず最初に行います。それから要請以外に自分が行ってきた任地以外での活動についても簡単に紹介したいと思っております。また、自分が体験した二年間を基に今後のどのように教育活動をしていこうかということも最後に伝えさせていきたいと思っております。

（あ、すみません。少人数なんですが、さびしい感じもあるんですが、）今の気持ちでいいんですが中国という言葉を聞いて、皆さんがこう、ぱっとこうイメージするキーワードというか言葉って何でしょうか？山手線ゲームのような感じで、こう中国といえば何とか。あの、あんまりすごくいい人になろうとか、すごくきれいでいいことを言おうとか、難しいことを言おうとかではないんですけども。小学校・中学校でいうと例えば、ラーメンとかそういうのが出るんですが、ちょっとよろしいですか？この人数ですが。じゃ、例えば、

ｓ：（中国といえば？）パンダ
ｔ：パンダとか。じゃ、
ｓ：（中国といえば？）人口が多い
ｔ：人口が多い。人が多い。
ｓ：（中国といえば？）餃子事件
ｔ：ああ、餃子事件
ｓ：食に対する・・・
ｔ：食品問題に不安がある。
ｓ：（中国といえば？）環境問題
ｔ：環境問題。結構だんだん難しいエリアになってきましたね。
ｓ：（中国といえば？）ウーロン茶
ｔ：ウーロン茶。ありがとうございます。
ｓ：（中国といえば？）私も環境問題。
ｔ：環境問題。ありがとうございます。
ｓ：（中国といえば？）北京オリンピック
ｔ：ああ、北京オリンピック。
ｓ：（中国といえば？）私も北京オリンピックだったんですが、あとは日本語教育が盛んで

すよね。

ｔ：（中国といえば？）日本語教育。ありがとうございます。

ｓ：（中国といえば？）私もオリンピック。

ｔ：オリンピック。はい、ありがとうございます。

ちょうど昨日なんですが、あの私の見ていただくとわかりますように、小・中学校が一緒の学校で、現在勤務しております。川崎市立はるひ野小学校 5 年生の外国語の授業で、中国のこと話してくれと言われて、最初に同じようなゲームと書いてもらったんですね。殆ど一緒です。環境問題とかは出ないんですが、多くは中華料理、パンダ、チャーハン、ラーメン、あとマージャンです。中にはやっぱりありますね、毒入り餃子ですとかダンボール肉まんですとか、そういう言葉も出てきたりとか、怖いイメージがあるとか、多少やはりマイナスのイメージが最初はありました。いつもやるんですけども、話が終わって最後にどういう風に、どんなことを知りましたかというふうに書くと、結構みんな子どもたちは変化があるので、毎回その変わりようについて楽しみに授業をしています。すいません、座らせていただきます。

派遣前なんですけども、私は川崎市の西中原中学校という学校にいました。派遣後は今出たんですが、小学校中学校一貫の中学校で英語を教えています。まず、志望動機なんですけども、主に 3 つあります。高校時代から JICA の協力隊に行ってみたいなとぼんやり思っていたこと。あとイギリスに留学したときなんですが、その際に協力隊の OV、オールドボランティアの先輩方が、いろんな国の体験をしてくれまして、ぜひ行ってみたい、私もそんな体験をしてみたいなというふうに思いました。また、川崎市ですと在日のコリアンタウンとかもあるんですけど、最近は中国籍の子どもたちが本当に多くて、英語を教えていると何語でもできるという印象なのか、だいたい英語教員のクラスに外国籍の子どもたちが入ってきます。私は異文化理解教育を自分が勉強してきたということもありますので、担任の先生で中国語を話すことができたらどんなにいいかなと思いまして中国で希望を出させていただきました。これは二本松の様子です。

赴任先なんですが、地図で見ると 1 つ 1 つの省が小さく見えると思いますが、皆さんもご存知のとおり 13 億人の人口がいる中国は、日本の約 26 倍の大きさです。その東北部の吉林省にいました。小さく見える吉林省でも、本州とほぼ同じおおきさです。吉林省の端から端まで夜行列車で行けたりするくらいの、大変大きなところでした。冬はとても寒くて、この時期ですと「すごく寒いな」と思うとマイナス 30 くらいですね。冬は平均マイナス 20 くらい。もうマイナス 10 度はあったかい、私の感覚では今日あったかいねというような感じになりました。ただ夏はしっかりあがって、30 度くらいまでは上がります。皆さんもご存知のように農業が盛んなので、このあたりは一面稲や、とうもろこしの産地となっています。農業地域は、やはり収入が限られていますので、多くの方は出稼ぎに行きます。北京とか上海ですとか、他の国、特に日本ですとか韓国に行く人も多いです。低所得農民ということで書いてあるんですが、ニュースなどにはあがってこないかもしれないん

ですが、あまりにお金がなくて、血を献血というか売ったりとか、そういうこともあったりするので、本当に貧富の差というのが激しく大変なエリアだなと思いました。また、中国語を訓練所でやって行ったのですが、56 の民族が中国にはいますので私が行ったところは少数民族の民族学校で、実際中国語を校舎の中では半分半分ぐらいしか使いませんでした。後にあとで紹介したいと思います。

歴史的背景ということで、ここが派遣前に私が 1 番心配していたところなんですけども、旧満州地域ということで、日本人に対してどういう印象があるのだろうということがものすごく心配で、いろいろな歴史の本を読んだり、読みながらもいろんな偏りがあるなと思いながら現地に向かいました。これは中学校なんですけども、中国語で中学（チョンシュエ）というんですが、中学校というのは中高一貫校をあらわしています。逆に、高校だけですと高中（ガオジョン）という呼び方をしています。先ほど触れました民族学校ということなんですが、私の赴任先は朝鮮族第一中学校で、イベントがあるとこのようにチマチョゴリですとか、朝鮮半島の民族衣装を着たりだとか、音楽が奏でられるといった状況でした。ですので、学校の外、町に出ると基本的に、これはレストランのメニューなんですが、ちょっと見づらいと思うんですが、漢字と下にハングルがあるのが見えるでしょうか。皆さんの印象のように中華料理を食べているんじゃないか、中華料理もあるんですけども、冷麺を食べたりとかキムチをみんな朝鮮族のお母さんたちは漬けていて、今日キムチ漬けるから漬けにおいでといったようなやりとりがあります。

ここから簡単に日々の活動について説明していきたいと思うんですけど、写真を見ていただくと小さいんですけど、各クラスにプロジェクタ、このようにスクリーンがあります。すごくまわりは貧しいところなんですが、中国は教育に対してお金をすごく使っていますので、教育費がとても高いです。そのために出稼ぎに行かなければいけない環境です。しかし基本的に今こうやって私がやっているようなパワーポイントで授業をすることもできますので、比較的環境としては恵まれた状況だったと思います。授業プラス先生方への研修を行ってきました。生徒の様子なんですけども、これはちょうど私が列対抗のゲームみたいなことを日本語ゲームで、お正月の料理は？とか言うと分かった人が手を上げて、その列から座っていくとかやってたんですけども、そのときの様子です。高校生なんですけども、1 番前の子は分からないと言ってましたが、ほぼ全員あげるいうようなすごく積極的で、あと学校関係者の方がいらっしゃるかなと思うんですが、後ろに（　　）と書いてあるんですが、これは先生ありがとう、お疲れ様ですというメッセージが後ろに貼ってあったり、なんと 1 年に一度教師の日というのがあってその日はもう、先生いつもありがとうともうすごく感謝されます。学校側もプレゼントくれたりして、大変学校の先生に対する尊敬ということを大切に思ってくれている環境があります。

ここからですが、昨年の 2 月にクロスロードに記事を寄せたので、そのときに使った資料とかぶるんですけど、この子の特集をしました。キン君という子で、中学 2 年生です。1 日の流れということなんですが、彼は寮に住んでいるので 6 時起床とあるんですが、基本

的に 7 時に登校します。朝の 7 時から午前中授業、昼休みや夕食はあるんですが夜の自習というところを見てください。基本的に最終下校は夜の 8 時半を過ぎます。中学 2 年生くらいからそういう生活を始めまして、高校 3 年生まで授業数の多い学校生活を送ります。ですので時間割、これも時間があるとずっと見ていただけると結構驚きがあるとは思うんですが、これが中学校 2 年生の時間割。まずは曜日が、土曜もいっぱい、あと日曜も午前中まで、月に 1 回か 2 回は日曜日がない日があります。なので日曜日休みになると、みんな本当に嬉しそうにしていますが、授業数が本当に多いということと、よく見ていただくと体育が 1 時間だけ、美術音楽といった情操教育関係が全くない、これは全部試験向けのカリキュラムになっています。

日々の活動をやってきたという話をしたんですけども、滞在しながら要請ではないんですが、自分の近隣の学校を訪問しました。よく探すと日本人の方がいらっしゃったりですとか、退職された方がいらしてたりするので、わざと行って交流させていただいたりしました。また、前に勤めていた学校と壁新聞を交流しようということが決まりましたのでお互いに交換をしました。また、スピーチコンテストが中国ではたくさん開かれます。日本語が盛んな東北は特に多いんですけども、その指導を行ったりですとか、そのうち吉林省、吉林省といっても本当に本州レベルの大きさなんですけど、イベントを企画したりしました。1 人ではできないので、他地域の隊員の協力を得たりですとかして、日本語コンクールという文化祭を 5 校合同で行いました。いくつか送った壁新聞を紹介したいと思います。ただつくって送るだけですと面白くないので、プレゼンテーションといいますか、つくった班のメンバーでこういうことで作りましたと、日本語はたどたどしいんですけど、一生懸命日本語で書いて日本語で発表をしていました。基本的にはグループワークで班ごとの作成でして、テーマは自分たちや国の紹介、何でもいいのでやりましょうということをしますと、はじめて日本に自分たちの作品が届くということで、本当にあんなに厳しい時間割の中、休みを惜しんでやってくれました。校内掲示をしてから日本に送りました。いくつか少し大きい画面で紹介したいと思います。漢字が一緒というのもあるんですけど、いくつか。下に「組員」と書いてあるんですが、組員というのは変な意味ではなくて、クラスメイトという意味です。クラスメイトだよということで、結構面白い漢字が多いんですけど。これは、中日新聞とあるんですけど、日中ですね、中日新聞、日本人の人は日中と言い、そこがまた面白い切り口になるかとは思うんですが、見開きの立体、富士山を開くとまた自分たちの写真が飛び出てきたりします。これも、そうですね。プリクラが村に 1 台あってですね、いつも行列なんですけども、そこで撮ってきてきた写真を貼ってくれたりしていました。あとこれは綿を使ったんですね。綿を使って貼ったりして触り心地がいいのを作ったと言っていましたが、いろいろな工夫がありました。

また先ほど言ったイベントなんですが、日本語コンクールでは全部自分たちでやろうということで、高校生が自主的に司会進行したりしていました。その中では、いろいろな出し物があったんですけれども、これは私の学校ではなくて他校の生徒さんですが、日本語

紙芝居ですとか、短いんですけども寸劇を行ったり、またはこれはスピーチですね、5分間スピーチ。またはミュージカル、これは歌って踊ってで、ロミオとジュリエットをやっていました。

ちょっと急ぎ足で申し訳ないんですが、ここまでが任地の活動ですが、休みが意外と長く夏休みや秋休みがありましたので、できる限り任地以外も行こうということで、これは山東省というところがあるんですが、山東省に募金で建てられた学校というところがありましたので、留学生たちと一緒に行ってきました。縄跳びをしたりですとか、一緒に歌を歌ったりですとか、騎馬戦をしたり、一緒に花を植えたりしたんですけども、このエリアは本当に貧しくて男の人という男の人はほとんど出稼ぎに行って、いるのは子どもとお母さんとおばあちゃんだけです。お金のない地域ですので、学校自体がありませんでした。ですので学校ができて数年なんですが、嬉しいですということでとびきりの笑顔を見せてくれました。その他ちょっと欲張りなんですけども、協力隊の中国 OB が植林活動を積極的に行っていたために、年に数回企画がありまして、内モンゴルの方に植林活動にも行きました。行くんですけども、砂嵐が起きたりですとか、むこうにいるモンゴル系の子どもたちと一緒に遊んだりですとか、モンゴル式の宴会をしたりですとか、いろいろな楽しい思い出があります。砂漠の問題もあるんですけど、砂漠は結局日本に来るカシミアだったりして、根深いいろんな複雑な問題もあったことを感じました。

ここから少しまたすみません、また急ぎ足で。この子の顔を見て中国人、ニーハオというようなイメージはしないかと思うんですけど、本当に広くて、これはシルクロードを旅したときなんですが、タジキスタンとかの近くのタジク族系の子どもたちです。でも非常にお金の潤いがないので、学校の外です。この子たちは学校に行けない子たち。中にいる子たちは学校に行ける子たち。家にいてもすることがないので、授業をやっているときは外からこうやって眺めています。でも遊びだすととまらないので本当に元気で、この子たちは学校に行けてた方の子たちなんですけど、多少やっぱり着ている服とかが全然違うなというふうに思いました。

このような 2 年間、いろいろなここに載せられないようなたくさんいろんな思い出があったんですが、私が今やってきている、帰ってきて 1 年近く経つので、やってきていることを 4 つばかり載せました。中国写真展ですとか、他の隊員の協力を得たりしてコーナーを作ったり、また壁新聞を送ったりしています。いくつか簡単に、壁新聞の紹介をしたいと思いますが、これは去年できたばかりなので英語の部屋なんですが、チベットの旗を飾ったりですとか、あとこれは私がやっている写真展です。旅した先をいろいろ特集しているんですけども、これは中国の写真展のコーナーを作りました。また、これはちょうどマレーシア隊員の方がいらっしゃるんですが、マレーシア隊員のもう一人の方から CD-rom で写真データとやった内容を送っていただいたので、ちょっとマレーの衣装も家庭室の先生のマネキンを借りて、このように飾ってマレーコーナーを作ってみたり、これは数ヶ月たったらまた違う国に変えるというやり方をしています。ちょうど数ヶ月前にやったのが、

総合の時間に調べたことをまとめて中国に送ろうという企画をしました。やっているうちに、中国語を混ぜてみようですとか、なんか最初は先ほどの毒餃子の話とか言っていた子どもたちが、こんなにかわいい、ちょうど国旗と国旗の間に手をつないだハートみたいな、これ男の子たちですね。元気な子たちがハートとかやっていると、本当にかわいらしいなと思いましたが、活動しているうちに中国に対する親近感がどんどん沸いてきたようで、郵便局に行くと言ったら、もう積極的にじゃあ行くということで、国際郵便を出しに一緒に行ってくれました。これ出した直後の絵なんですけども、写真なんですが、早く返事こないかなということで今子どもたちは次の返事を待っています。ここ中国から壁新聞を送っているので、今度は質問について答えてもらおうということで待っています。すいません、時間になったので、私が今考えていることを３点簡単に載せたんですけれども、ただ私がいなくなってこういう交流が無くなってはいけないなというふうに考えています。ちょうど後任が来たので協力を得ながらやることはできるんですけれども、比較的取り組みやすい交流にしたいということがテーマです。私がいなくなってもその学校同士で続くような交流が必要じゃないかなと考えています。二点目なんですが異文化理解教育ということで、先ほどもシンポジウムの最初でもあったんですが、あったんですけども、国内、国の中での国際化が本当にますます、進んでいきますので、実際先ほどのように７万人の子供たちが外国のルーツがある子供たちが日本国内にいるということで、実際その子たちと目にするのは各クラスの担任です。自分自身が中国語しかしゃべれない担任した時の苦労を考えると、やはり、アジアにおけるいろんな言葉ですとか、西洋だけに偏らない感覚を持った教員が必要ではないかと思っています。その視点からも異文化体験、西洋だけに偏らない異文化体験のある人材がふえていくことや、協力隊経験のある方が教師になっていただけるということで、いろんなネットワークができたりですとか、様々な壁新聞といった交流が進みやすいのではないかなと思っています。

以上です。ありがとうございました。

壁新聞を通した日中交流

赴任地・・・中国　吉林省
１８年度１次隊　嶋垣麻衣子
派遣前：川崎市立西中原中学校
派遣後：川崎市立はるひ野小中学校

志望動機

高校時代から…
協力隊OB/OGの影響…
中国籍の子供たちへの対応…異文化理解教育

赴任先

中国

東北　吉林省
（本州とほぼ同じ大きさ）

気温差・年間６０度
（冬－２０～－３０度）

農業・産業
稲作、とうもろこし
長春の列車・自動車生産
農閑期
→大都市・海外への出稼ぎ

低所得農民・・・格差

言語
中国語・少数民族語
満族・朝鮮族・満族が多い

歴史的背景
旧満州→偽満州

活動先の「中学校」＝中高一貫

中国で高校だけのことを
「高中」と呼びます。

永吉県朝鮮族第一中学校へ

食べ物も朝鮮（韓国）料理！

もちろん夏は冷麺です！

メニューは漢字とハングル

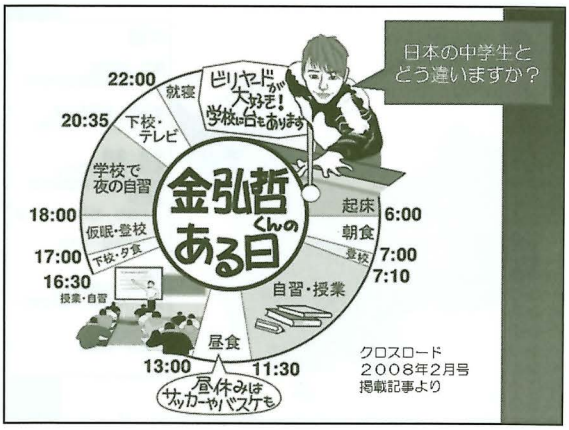
日々の活動

日本語や
日本文化の授業

７人の日本語教師に
対する定期的な研修

中国の生徒の様子は・・・？

熱心な学習態度



時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
7:10～ 7:45	朝自習						
7:55～ 8:40	朝鮮語	英語	日本語	中国語	朝鮮語	日本語	英語
8:50～ 9:35	数学	日本語	英語	英語	物理	政治	数学
9:35～ 9:50	グラウンドで体操（雨の日と冬は教室で目の体操）						
9:50～10:35	中国語	歴史	数学	数学	英語	物理	日本語
0:45～11:30	政治	朝鮮語	化学	物理	中国語	化学	歴史
1:30～13:00	昼休み						
3:10～13:55	日本語	中国語	体育	歴史	化学	中国語	
4:05～14:50	化学	数学	政治	日本語	日本語	英語	
5:00～15:45	英語	物理	朝鮮語	朝鮮語	数学	朝鮮語	
5:45～16:00	そうじ・クラス活動の時間						
6:00～16:30	自習						
6:30～17:55	夕食・休み時間						
8:00～20:35	晩自習（途中、2回休憩あり）						

様々なタイプの活動への展開

- 日々の活動（日本語の授業・教員研修の実施）
- 近隣の学校（中学・高校・大学・職業学校）訪問
- 日本の学校との交流（壁新聞の交換）
- 東北地方や全国規模のスピーチコンテスト参加生徒のためのサポート・指導
- 地域全体の日本語教育の活性化のためのイベント
  → 吉林省内の隊員の協力を得て
  「日本語コンクール」実施

海を越える壁新聞
グループワーク活動
班ごとに壁新聞を作成
テーマ
「私たちの紹介」
個人・学校・地域
中国文化紹介などもOK
作成後
→班ごとの発表
→校内掲示
→日本へ送付

壁新聞
作品の紹介
日本語学習歴２年間
中学２年生の作品

Hello!

中日新聞

友達新聞

しあわせ

日本語コンクール　司会者指導

日本語で紙芝居や
スキット（寸劇）

日本語でスピーチや
ミュージカル

現地での活動以外には？？？

募金活動で建てられた
小学校の運動会に参加

小学生と一緒に

学校で勉強できるのが嬉しい！！！

内モンゴルへ植林活動

突然の砂嵐はあたりまえ

笑顔がすてき

歓迎の宴会

広がる砂漠・・・まず防砂する

。

中国の広さ

文化民族の
多様性を
知りたい

学校をながめる子ども達・・・

どこでも
子供たちは元気いっぱい！

中国で見たり聞いたり感じたことを
日本に帰ってどう生かすのか？
↓
現場復帰後の教育的還元

中国写真展

他国の隊員
協力隊活動
紹介コーナー

出前講座

総合の時間
「中国へ壁新聞を送ろう」

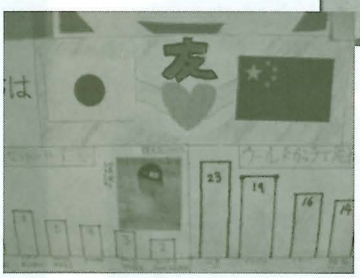
中国写真展

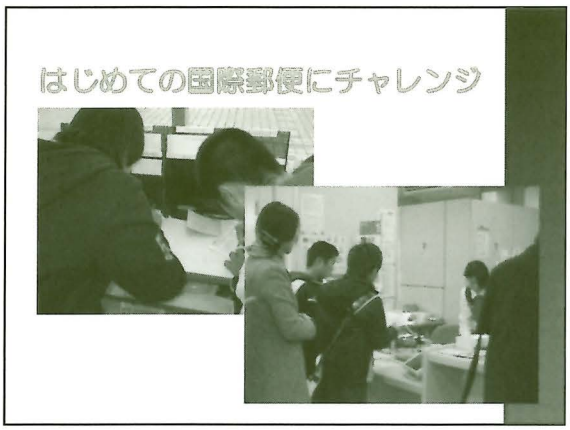
同期隊員の協力

国際理解コーナー

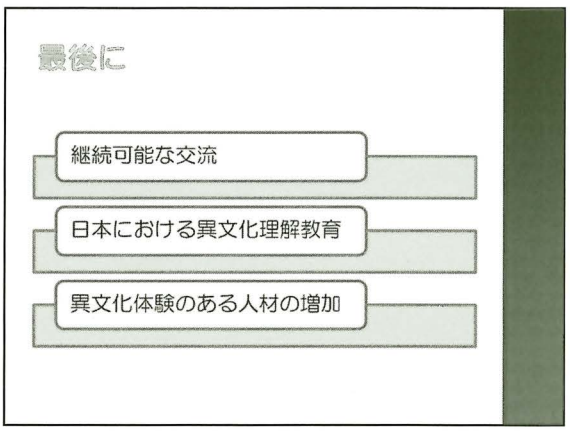
総合の時間　（９月～１１月）

中国語を混ぜたり
振り仮名をふったり




はじめての国際郵便にチャレンジ

はやく
中国から
返事が来ると
いいな


最後に
継続可能な交流
日本における異文化理解教育
異文化体験のある人材の増加

中米ホンジュラスで感じた日本

森山　美鈴
（18－1，ホンジュラス，小学校教諭，）

18 年度 1 次隊、中南米にあるホンジュラスという国で小学校教師として活動しました、森山美鈴と申します。今は大阪府の豊中市立北条小学校というところで今年は五年生の担任をしています。

ちょっとお聞きしたいのですが発表の前に、ここにいらっしゃる方はどういう方かなっていうのを聞きたいのですが、よろしいでしょうか。協力隊に参加予定または興味があって、「ここに行かれる」っていう方はどのくらいいらっしゃいますか？OB の方、その他学校関係、文部科学省、筑波大学、JICA関係の方、ありがとうございます。今日発表するのにどういう風に用意していいのか分からなくて、今聞いても内容は変えられなので予定通りいきますが…。

タイトルを「ホンジュラスで感じた日本」という風にしました。私は海外旅行が昔からすごく好きで。そこで、途上国と呼ばれる国も行ったりして、そこで会った子どもたちが、協力隊へ参加するきっかけとなったのですけど、海外に行くと日本ではあり得ないことにたくさん遭遇しますよね。それがたまらなく楽しくて。周りの人からは、「あなたはどこでも生きていけるわ」ってずっと言われていて、協力隊に参加したホンジュラスっていう国も日本と比較して、日本では絶対にないっていうことがたくさんありました。そういうことを入れながら、今日発表したいなと思ったので、こういうタイトルにしました。

まず、ホンジュラスっていう場所なのですけど、最初要請をいただいたときに、アフリカの地図を開きました。なかったので、後ろの索引でやっと中米のところにあるということがわかりました。国の概要なのですが、面積は日本の約三分の一。ホンジュラスに行ったとき、「日本の面積って何平方キロメートル？」って聞かれたんですね。知っている方、いらっしゃいますか？行かれる予定の方、たぶん聞かれると思います。人口とか、面積とか、宗教とか、すごく色んなことを聞かれるので、私、日本が 38 万平方キロメートルぐらいだってことを知らなくって、向こうに行って聞かれて急いで調べたので、日本のことを色々知っているっていうことは大事だなって思いました。

人口は、約 710 万人、民族はほとんどがメスチソと呼ばれる混血、言語はスペイン語、宗教は主にカトリック、キリスト教ですね。これがメスチソの子どもたちです。ちょっと色が黒いような、で、こちらが少数なのですが、北部の方にいるガリフナ族と呼ばれる子どもです。

ホンジュラスには何があるかというと、カリブ海があります。山があります。コパン遺跡と呼ばれる世界遺産になっている遺跡があります。で、ホンジュラス人がいます。ホン

ジェラス人は、南国やラテンの方にいる人はだいたいそうなんだと思いますけど、陽気で親切で、とにかく踊ります。時間にルーズでいい加減で、明日のことは明日考えればいいってみんなが言います。

ここから、仕事の話になるのですが、ホンジェラスが抱える問題として、一年生の就学率は90%と高いのですが、六年生で卒業するのはだいぶ下がって、60～70%。この原因は家庭環境、家庭の教育に対しての理解が少ない。それから、学校環境が悪い。国内の多くが複式学級で、山の奥のほうに行くと、一人の先生が全部の学年の子どもを教えるという学校も珍しくない。あとは、このホンジュラスという国がとっている留年制度も、かなり六年生の卒業率が低くなっている要因のひとつです。それから最後に、教員の知識、指導力不足。高卒でも先生になれる。国が決めた教えることは一応基本的にはあるんですけど、それがきちんと行き渡っていなく、先生たちは何を教えてもいいくらいに思っています。そこで、一番下の部分に視点を当てて活動したのが、私の仕事です。

ホンジュラスにはＪＩＣＡによる算数指導力向上プロジェクトっていうのがありまして、それが 1989 年よりスタートしてずっと続いていました。2005 年に児童用作業帳と教師用指導書が完成しています。今日持ってきているのですけど、今日持ってきたのは一年生と六年生用で、ちょっと廻しますね。これが教科書です。指導書も廻します。聞きながら見てもらえたらいいと思います。見ていただいたら分かると思うのですが、日本の算数の教科書とそっくりです。ほとんど同じで、中に出てくるキャラクターなんかもほとんど同じのが写っています。私の仕事はその教科書の普及、教科書はでき上がっているので、学校にある教科書を先生らがいかに使って子どもらに授業をするか、それを通じて教員の指導力向上を目指すというものでした。

私は 18 年度一次隊なのですけれど、全く同じ要請でホンジュラスに来た小学校教師の隊員が 10 人くらいいました。それから先輩隊員もいて、今、後輩で 19 の一、19 の二あたりも何人か行っています。グループ派遣といった形だったので、同じ時期に同じ壁にぶち当たって、同じような悩みを抱えたので、困ったときに同じように困っていたので、お互いに色々悩みを分かち合いながら活動できたのはラッキーでした。

私の活動先は、「米百俵学校」と呼ばれるところでした。それは何かというと、日本の新潟県幕末、長岡藩の米百俵の精神っていうのがありますよね。有名なのでご存知の方は多いと思うのですが、お米が不作だったときに、配られたお米をすぐに食べるのではなく、それをお金に還元するか何かをして、学校を建てる。それで、教育のお金にすることで子どもたちに勉強をさせ、その子どもたちが将来そこの地域を担ってくれるような活動ということで、ホンジュラスの前首相？大統領？が、日本のこの米百俵の精神に感銘を受けて、米百俵プロジェクトが日本政府と共同でスタートしました。今、ホンジュラス国内 100 校の公立小学校が日本政府の資金協力によって、学校を増改築しています。その中のひとつが私の活動した学校でした。

私の要請には、私が行く学校は、新築の学校と書いてあったので楽しみにしていったの

ですが、行ったらまだできていなかったんですよね。「あと二ヵ月後にできるよ」って言われて、二ヶ月待ったのですができなくて、結局四ヶ月後ぐらいに新しい学校に移れました。これが前の学校です。真ん中の写真を見てもらったら分かると思いますが、ひとつの机にぎゅうぎゅう詰め。椅子も入りきらない状態で、右側も見てもらったら分かると思うのですが、すごく暗い教室です。こういう教室がホンジュラスではほとんどです。私の学校はたまたま米百俵学校プロジェクトで建て直って、すごく綺麗になったのですが。そこで、どうなったかというと、椅子が全部日の丸で怖いんですけど、ホワイトボードもピカピカで、こんな感じになりました。「米百俵学校」と書いてあります。

愛すべきホンジェラスの学校ということで、こういう風に書いたのですけれど、先生はとにかくいかに手抜きをするか、いかに手抜きをして自分の勤務時間を過ごすかという風に見えます、私には。授業中でも携帯や食事はしますし、子どもに授業中でもお金を渡して、「ジュース買ってきて」って言います。子どもは何をしているかというと、得意技はカンニングです。先生はそれこそ、ご飯を食べたりどっか行ったりしている。一方、子どもはやっぱり与えられた課題を解きたいんですよね。書いて丸が欲しい。だから、根本的に分かってなくても、とにかく丸が欲しいから写します、友達のを。分かってなくても先生は絶対なので、「分かりました」って言います。

見えにくいのですけど、先生が携帯をいじってます。どんな授業をしているかというとやっぱり、黒板に問題を書いてコピーさせるだけとか、分かる子を前に出してやらすだけという感じの授業になりました。そういう中で私は、算数のことをするのに何をすればいいんだろう。やれと言われている事は、算数の教科書の普及と教員の指導力向上。でも、学校に教科書配られていなかったんですよ。普及しろって言われても、どうやってしたらいいか分からなかったです。それから、教科書にある指導法を先生たちは分かっていません。やる気もないし、知識もない。算数以前に授業の仕方全体の改善が必要だという風になりました。私自身の問題として言葉の壁があって、これは皆さん行かれた方はぶち当たられたと思いますし、これから行かれる方は今後だと思うのですが。その何をすればいいのか、何ができるのかっていうところで、すごく自分の力が試されたような気がします。

旅行では面白いなって思っていたあり得ないこと、先生が授業中に携帯をいじるとか、いつまで待っても授業が始まらないとか、今までだったら面白いと思っていたことが、こうして腰を据えて海外に住み、仕事をすることで、面白いではなくて腹が立って、戸惑いと怒りになって、今まで味わったことのない感覚だったんですよね。その時に、私って日本人の感覚を持っているんだなという風に感じました。

日本の学校に当然あるような給食とかチャイムはありません。お母さんたちが頑張って順番に作ってくれれば、材料は国連世界食糧計画から配布されていますが、お母さんたちが面倒臭いと言ったら、そういった学校はメリエンダと呼ばれる給食代わりのものはありません。チャイムも、代わりに鐘をカーンと鳴らしたり、チリーンと鈴を鳴らしたりする学校もあるのですけど、あんまり時間通りに鳴っている学校はないですね。

ということで、学校単位の活動としては、自分ができることをできる時期に少しずつ探して、学校で復習タイムを取り入れて少しずつやったりしました。それと別にもうひとつ、学校から一歩出て地区単位で、教員対象の算数研修会というのを開きました。それは私が行っていた学校以外の先生方も集めて、全部で 120 人くらいいる地区だったのですが、その先生方に教科書の内容を理解してもらうこと、それから日本では定着している教員の研修の場、学び合いの場や意見交換の場を持ってもらうということで、これは地区の教育事務所の人に声を掛けてやりました。

幸運なことに、すごくいい先生に恵まれまして、協力してくれる先生や出席してくれる先生がどんどん増えて、多いときは 70、80 人ぐらい集まりました。それがそのときの様子です。ホンジュラスの先生方は図形が苦手なのです。分度器を使う角度とか面積、体積、そういったところが、大学、高校であんまり勉強していないのだと思います。全然それが分かってないので、特に苦手としているテーマ、図形系のテーマに絞って、ゲームなんかを交えて先生たちと勉強しました。これは、教材を手作りして、先生たちが実際の授業なんかでも使えるようにしました。分度器も手作り、この立体図形もですね。とにかく時間があるので、教材作りには十分なくらい時間がたっぷりありました。

これは食べ物なのですが、今、私五年生を担任していて、あんまり大掛かりなホンジュラスの紹介ができていないのですが、こういうのをスライドを使ったりして、子どもたちが好きそうなテーマで食べ物を紹介したりしています。主食はトルティーヤ。とうもろこしの粉を練ったやつですね。基本的にホンジュラス料理は油がすごく多いです。のどが渇いたらコーラを飲みます。お菓子とともに、砂糖たっぷりのコーヒーが出ます。バナナとかあずきを塩茹でしたものがよく食べられます。これも全部、下の土台はトルティーヤですね。

生き物も子どもたちに見せたのですけれど、近くにたくさんの、あと、真ん中の下の鶏は誕生日のときさばいてくれました。全部、一部始終初めて見たのですけど…。

私が住んでいたところはまだだいぶ恵まれていて、電気も水もいつも大体あったので、洗濯は手洗いでしたが、日本に比べると便利とはいえないけれど、自然がたくさんあって、すごく仲のいい家族がいて、親日的なんです、とにかく。「日本、ありがとう。援助してくれて」って。すごく時間がゆったり流れる中で、算数っていうひとつのことだけができるってことで、心にゆとりができていました。日本で働くって結構大変ですよね、日本でずっとできていた口内炎が、ホンジュラスではできなくなりました。

日本紹介も、協力隊のお仕事と書いてあるのですけど、たくさん隊員が集まると文化紹介をやったりとか、原爆展をやったりとか、所属学校でも日本の紹介をしたりとかしました。

帰ってきてから特に思ったのですけれど、日本の学校ってやっぱすごいなって思ったんです。施設がとにかく整っている。教科書が毎年全員に配布される。私が行ったとき、ホンジュラスには教科書がなかったので、特に思いました。これは全国の子どもたちが常に

同じように学習できているっていう、当たり前のようですけれどこれはやっぱりすごいことなんですね。そして、先生が教科書の内容を理解している。これも当たり前のことですけれど、やっぱすごいと思います。予定が未定ではなく、ほぼ決定。で、みんなよく働く。当たり前のようなのですけれど、やっぱりすごいと感じました。

一方で、日本って変だなって思ったのは、急ぎすぎなところ。それから、英語で「ハーイ」っていうのは、スペイン語で「オラ」って言うのですが、日本語でなんと言うの？と聞かれ、辞書を引いたら「やぁ」って書いてあるんですよね。ですが、「やぁ」って言う人いますか？いませんよね、普段。「どうも」とかは言うのですが、私はなんて言うかなって思ったんですが、「お疲れ！」とか「お疲れ様」とかを使うんですよ。でもそれって、ドンだけ疲れているの？という感じがして、不思議な言葉だな、不思議な文化だなと。あとは最後に必ず「頑張ってね」と言うんですが、みんなもう十分頑張っているのになって思いました。それから、子どもが大人よりも偉いような風潮がある。学校現場で働いていても、立場が逆転しているようなところがあるなと思います。

「当たり前」ってことをずっと考えてきて、旅行へ行ってもホンジュラスに行っても、自分の思っていた「当たり前」が覆される。面白かったり、腹が立ったりしたのですけど、それでもやっぱり、世界全体で共通する「当たり前」っていうものはあるのではないかなって。他にもあると思うのですが、こういったことは普段学校で子どもたちに教えていること、これって間違いではないなって思いました。

最後、「日本人として」と書きましたが・・・・。最後の年帰る前にホンジュラス人のみんなに、「次、いつホンジュラスに来るの？」「あなたに次会うために、僕たちは日本にいけないのだから、あなたが来ないと」って言われたんです。それって私にはたくさんの人生の選択肢があるけれど、向こうの人には私ほどは、ない。私はずっと現地の人とともに同じ目線で活動できたつもりですが、やっぱり私は日本人で、先進国の人間として、今後どんな風に生きていくのかっていうのは大事だなって思って、今、日本の学校で今後自分が、どんな風に、どんなことができるかっていうのを考えています。

以上で終わります。

ホンジュラスって、どこ・・・？！

- ホンジュラス共和国

で、どこ・・・・？？

【外務省HPより】

どんな国？！

面積：日本の約3分の1
人口：約710万人
民族：ヨーロッパ系・先住民混血91%、
その他9%（先住民6%、アフリカ系2%、ヨーロッパ系1%）
言語：スペイン語
宗教：主にカトリック

【外務省HPより】

何がある？！

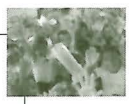
- 海
- 山
- 遺跡

- ホンジュラス人

おおらか、明るく陽気、親切、おどるおどる！

時間にルーズ、いいかげん、
明日は明日の風が吹く・・・・・

留年する小学生



【ホンジュラスが抱える問題】

1年生就学率は約90%！
でも・・・・・ 6年生修了率は60～70%。

→ 家庭環境
→ 学校環境（国内の多くは複式学級）
→ 留年制度
→ 教員の知識・指導力不足
（高卒でも先生になれる！教えることは何でもOK？！）

算数指導力向上プロジェクト

- 1989年より、青年海外協力隊の算数科協力がスタート。
- 2005年に、児童用作業帳・教師用指導書が完成。
国定教科書となり、全国配布開始。

「教科書の普及とともに、教員の指導力向上を目指す。」

活動その① 配属先：米百俵学校

幕末・長岡藩の故事

「米百俵」の精神

～目先の利益より遠くの利益。教育に力を注ぎ、子どもの未来に希望を～

ホンジュラス『米百俵プロジェクト』

日本政府の資金協力により
全国で百校の公立小学校：通称「米百俵学校」を増改築する。

愛すべき☆ホンジュラスの学校

【先生】
- 得意技：手抜き
- 授業中でも携帯・食事
- 子どもにおつかい当たり前

【子ども】
- 得意技：カンニング
- わかってなくても「わかりました！」
- 先生の言うことは絶対。

何をすれば良い？ 何ができる？

算数の教科書の普及

学校に教科書が配られていない

教科書にある指導法を教員が理解できない

教員の指導力向上

やる気がない

十分な算数知識がない

算数以前に、授業の仕方自体の改善が必要

言葉の壁！

日本の学校には当然あるけど？

給食代わりのメリエンダ

WFP（国連世界食糧計画）の「学校給食プログラム」の援助のもと。
先生とお母さんががんばる学校は、あります。

チャイム代わりの○○

あってもなくても、あんまり意味なし。

活動その② 教員対象：算数研修会

- **地区内の教員を対象に、テーマ別研修会**

☆ 教科書の内容を理解してもらう
☆ 学び合いの場、意見交換の場

活動報告と帰国後の取り組み

石井　洋
（18－1，ブータン，小学校教諭，留萌市立緑丘小学校）

北海道からまいりました石井洋と申します。どうぞよろしくお願いします。

私は協力隊に現職教員として行きまして、2回目の協力隊の募集でようやく派遣が決まりました。というのも、北海道では一昨年前の17年度まで2名の方しか現職で行けなかったというわけがありまして、枠が解禁されてから一番最初に20人ぐらい北海道の教職員がワーッと行ける時に私も行きまして、そういう第一号だったということで、ここで良い話ができればなと思ってまいりました。

この写真なんですけれども、私がブータンで住んでいた家です。私はこの2階に住んでいまして、見るとボロボロなんですけれども、ブータンの中でもいい家で、いろいろ広い部屋もいっぱいあって、結構恵まれてるとことに住まわせてもらったなと思ってます。

私の話ですけれども、活動の報告と、日本に戻ってきてどんな事をしたかということを中心に話せればなあと思います。では、よろしくお願いします。

まず、ブータンの概要について簡単に説明させていただきます。人口からズラーと書いたのですが、人口65．8万人って書いたんですけれども、これはほとんど嘘みたいな話で、いろんな資料によって200万人って書いてあったり、このように65万って書いてあったり、ブータンってちゃんと調査が行われておらず、山の中にいたりだとか、人口のとらえどころがなくて、この数字も参考程度にという感じです。

面積なんですが、面積もだいたい中国とインドに挟まれた小さい国で、九州と同じぐらいなんですが、中国に少し領土を取られたりだとか、この面積も確定ではなく大体このぐらいだろうというものです。

言語はゾンカと英語、「等」って書いてありますが、「等」というのは、ブータンはゾンカが国で話す言葉なんですが、それ以外にもシャショップ語だとか、ケンパだとかいっぱいあるので「等」というふうに書いてます。英語がみんな、若い子が特にペラペラで、英語でも通じます。

宗教は、日本は仏教なんですが、向こうはチベット宗教で、もっと日本よりも信仰深くて、朝はお祈りから始まって、帰りもお祈りをして帰る、みんな敬虔な仏教徒です。

最後に「GDP より GNH」と書いたんですが、先代の国王がこの GNH というのを大事にしてて、日本は GDP、「経済経済」なんですが、向こうは「経済なんて」という感じで、どちらかというと幸せ感、国民が幸せであることがこの国ではすごく重視されている。そんな国で私は活動してまいりました。

私が配属された小学校というのは、チマラカ小中学校というところで、首都から車で3

時間ぐらいのところにある、小さい町です。ただ、小さい町なんですが、周りにあまり学校がなくて田舎の大規模校でした。児童がだいたい 700 人で、クラスが幼稚園の年長から中学 2 年生までです。教員は 30 人ぐらいいまして、教員の中にはブータン人だけでなくてインド人やネパール人もいました。この学校ですね。この学校も、ここが一つの校舎なんですけれども、こんな建物がいっぱいありまして、一つの建物にだいたい 4 つの教室があるような造りの学校です。

どんな活動をしていたかというと、小学校教員として行ったんですが、体育の授業をしていました。体育教師として配属されました。それで、週に 24 コマぐらいの授業をやりました。「ウォーミングアップ、準備体操、着替え、クーリングダウン」と書いたんですが、どういうことかというと、体育が正規教科としてないところに行ったもんですから、みんなはサッカーとかバスケットとか大好きなんですけれども、準備体操の意味を知らなかったり、民族衣装なので、着替えとかの大切さを伝えるというところも自分たちの活動です。

これ、後ろにバックで走っている、こういう何気ないものも、むこうではサッカーとかバスケットとかで、授業ではこんなのやったことないということで、こういうのでもすごく子供たち楽しんでやってくれました。

日本の組み体操のピラミッドなんかも、子供たちにさせて、崩れそうなんですけれども、こんなのもあるんだと、子供たちがすごく楽しんでやってくれたという写真です。

スポーツデイという、運動会に当たるもので、ポンポンダンスを教えました。向こうでは全然ポンポンダンスなんかやったことなかったんですが、ポンポン持たせて、運動会とかで、日本でもやっとことを紹介することができました。曲なんですが、オレンジレンジの曲で、ノリノリで踊っている写真です。

自分の配属されたところは山の上だったので、年間でも 3 分の 1 ぐらい雨や霧がかかる町だったので、雨の日は教室でいろいろ急きょ体育以外のことをしないといけない。これから行かれる方はそうなんですが、途上国ではいきなり予定が変更するということがすごく多くて、体育がいきなり駄目になったら、教室で日本語教えたり、日本の折り紙教えたり、簡単な算数教えたり、急に予定外のことをパッとしないといけないことがたくさんあったので、そういうのをこれから行く人は用意していったらいいと思います。向こうの人は、日本のことを知りたがっているので、そのようなものをいろいろ持っていけばよいと思います。

この写真はバレーをやっているところです。バレーもやるんですが、なにせモノがない。ボールが不足していたりして、この学校にもボールが 3 つぐらいしかなかったです。派遣される予定の方は特にそうなんですが、なにか物を持っていきたいと思うかもしれないんですが、物を向こうに持っていってもなくなってしまいます。盗られてしまうんです。そのため、向こうにあるものを使うことをお勧めします。特に質問とかで、「なに持ってたらいいですか？」って質問したい方いると思うんですが、向こうにあるもので作るということも大事で、派遣中にもワークショップとかやったんですが、その中でも、ボールを作っ

たりだとか、遊び道具を作る、体育用具を作る、「作る」ということを大事にしないと、いくらボールとかを与えても向こうでは続いていかないのかなと思います。

体育の授業以外の活動でこんなことをやったというのを紹介します。これは実技ワークショップの様子の最後の集合写真です。真ん中にいる杉原大先生とみんなで集合写真を撮りました。向こうのブータン人を相手に体育授業に関するワークショップをしました。ワークショップといっても実技研修のようなワークショップでした。というのも、体育の先生はブータンにはあまりいないんですが、体育に興味があって来ているんですが何をやったらいいかわからない、教科書もないわけですから、こんなことやったら楽しいんだよ、こんなゲームがあるんだよというのを紹介するという、そのようなワークショップをやりました。

これは、カリキュラムワークショップといって、教員大学の先生方に誘われて、みんなでブータンの体育授業のシラバスづくりを行ったときの集合写真です。写真はかっこよく見えるのですがほとんど私は何もできませんでした。しかも、このとき私はおなかを壊しまして、全然話し合いについていけなかったんですが、向こうの人達は、日本人が来てくれるだけで、日本人と交流したり、日本人が関わってくれるということが目的だったようです。私の隣にルンテンさんという教授がいるんですが、向こうの教授の方たちと交流するのがメインだったのかなと思います。協力隊に求められていることはいろいろあると思うんですが、やっぱり第一番は交流することなのかなと感じました。ここではシラバスづくりが主だったんですけど、いろいろ交流できたってことが財産だったかなと思います。

交流でいうと、この写真は、日本祭なんですが、私の町内に日本人は私しかいなかったんですが、私しか日本人がいない所に日本人の方にたくさん来てもらって、子供たちを集めて日本祭というのをやりました。日本の文化を紹介して、クイズをやったり、よさこいをやったり、相撲をやったり、もちつきをやったり、日本のことを紹介することをやることで、私の後任がみんなにすごく良くしてもらって、それはこういうふうに町に日本人がたくさん来てくれたということを町の人が覚えていたり、一回の祭りだったんですが、地元の人にすごく感謝されていて喜ばれたというのが、今考えるとやってよかった、あとに続いているんだなと思っています。

これから行かれる方も何か日本の文化を紹介できたら、後ろに座っておられる西浦さんもそうなんですが書道できたり、日本の相撲のデモンストレーションできたり、何か日本の文化を紹介できる引き出しを持っていけば役に立つのではないかと思います。

これは、広域研修という活動の最後にやった写真です。広域研修とは何かというと、JICAのほうでいろんな国の方、カウンターパートを呼んで、そこで研修するというものです。日本でやっている研修とは全然違って、いろんな国の人を呼んで一緒にいろんな課題について考えようというものです。それは最後のまとめにできて、これは学校でやってきたんですが、こうやって子供たちもすごく楽しそうに参加してくれて、いろいろ大変なこともいっぱいあったんですが、ブータン人にとってもほかの国の参加者にとってもすごく楽し

いい、意味のある研修になったかなと思います。

これからは、日本に戻ってきたからこんなことをしましたよということについて簡単に説明します。これは、帰国直前の飛行機に乗る前の写真です。

日本に戻ってきてやったことですが、まず、参観日にブータンクイズというのを１時間、保護者の人の前でやりました。ただ、ブータンのことを説明したり写真を見せたりというのでは面白くないのでクイズ形式にして色々と考えてもらいました。クイズもそうなんだけどそれで伝えたいことも伝えられるということでこんな質問をしました。「ブータンの学校ではテストの点数が悪いとどうなるでしょう？A 先生にたたかれる B 次の学年に進級できないC 罰金を払わなければならない」皆さんどうですか？A だと思う方？B だと思う方？C だと思う方？正解は B が正解で次の学年に進級できないんです。子供たちもよく間違えるんですが、どういうことかというと、この写真を見ていただいて、この写真だけでも結構子供に伝えられることってあるんです。というのも、次の学年に進級できないから、実は同じ学年なんだけれども実際によくみたら年齢が全然違う。この写真１枚で年齢違う子、ドルジが年齢が２年上だとか、いちばん右にいる子はネパールの子なんです。ブータンの子供だけでなくネパールの子どもが一緒に勉強してたり、日本では同じ子供しかいないけど、ネパールの子や年上の子が一緒の学年にいるんだよ。これでもいじめとかないんだよ。この写真１枚だけでもいろんなことを子供に伝えられると考えて、こんなクイズをやりました。

子供に伝えられることってたくさん本当は持っているんですが、話したいことってやっぱり違って、楽しかったことを話したいんですね。隊員生活で送った１年９か月が本当にそのときの楽しかった思い出を話したくてこの２週間でヒマラヤにトレッキングのこととか、中田選手とツーショット撮ったこととか、こういったことのほうが子供が楽しめる。こういった楽しい話から子供たちに伝えられることがあると思っています。本当にやらなきゃいけないことは、これは国際協力で日本が建てた学校です。６年生の社会でこのようなところがあるので、国際協力について話す機会があったら、このようなことを話そうと思っています。

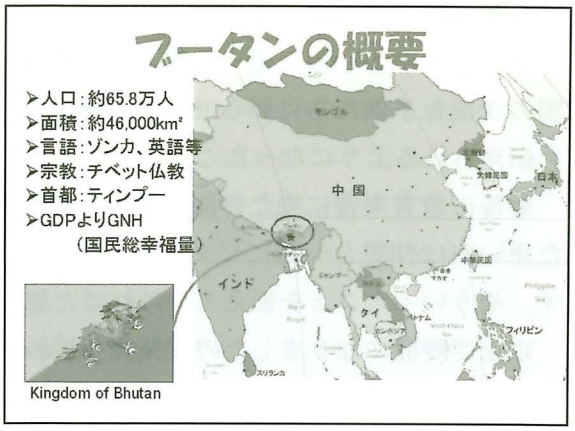
国際理解教育について４年生の授業で、暮らしのことを勉強していたので、マーケットの様子だとかこの食事の様子だとか、ほかの先生ができないような話をしました。自分がやった国際理解教育なんですが、まずしさから幸せについて伝えたいと思いまして、２学期に、自分の経験からこういう話を考えてやりました。これはインドの労働者たちなんですけれども、１日１ドルぐらいの報酬しかないところで暮らしている方の写真を見せて、子供たちにこういうところの人たちの生活について考えさせたりしました。私も行く前は、途上国のほうは貧しいんだから募金したり大変なんだよという話しかできなかったんですが、行って帰ってきて日本以上に幸せに、友達を大事にしたり家族を大事にしたり、それが幸せだと感じている子がたくさんいるということを伝えられるようになりました。行く

前までは国際理解協力といえば募金とか貧しい国の人は大変だから何かしてあげようといった考えだったんですが、そうではなくて、ブータンに行ったことで貧しいけれどもすごく幸せな人々がいる。違った視点で国際理解教育を考えられるようになった。文化、その国の状況を子供たちに知らせて、お金がなくったって幸せな子たちがいる、そういうことを伝えられるようになったことがよかった。

最後に教育実習に来た仲間と撮った写真なんですけれども、人とのつながり、楽しかった思い出は仲間と一緒にピクニックに行ったりだとか、そういった思い出だと思っています。そういったことを伝えていければと思います。

以上で時間になりましたので発表を終わります。ありがとうございました。

活動報告
派遣国：ブータン
職種：小学校教諭
北海道留萌市立緑丘小学校
石井　洋


ブータンの概要
➢人口：約65.8万人
➢面積：約46,000km²
➢言語：ゾンカ、英語等
➢宗教：チベット仏教
➢首都：ティンプー
➢GDPよりGNH
（国民総幸福量）
中国
インド
Kingdom of Bhutan

派遣先：Tsimalakha Lower Secandary School
チマラカ小中学校
➢児童数：約700人
➢クラス：PP～Class8
幼稚園年長～中学2年生
➢規模：田舎の大規模校
➢教員数：約30人

体育の授業
１週間に２５コマの授業
ウォーミングアップ（準備体操）、着替え
クーリングダウンを定着してきた

組体操「ピラミッド」の指導

運動会ではボンボンタンスの指導

雨の日は教室で
算数や日本語を教えることも

バレーをやるも
ボールが不足している

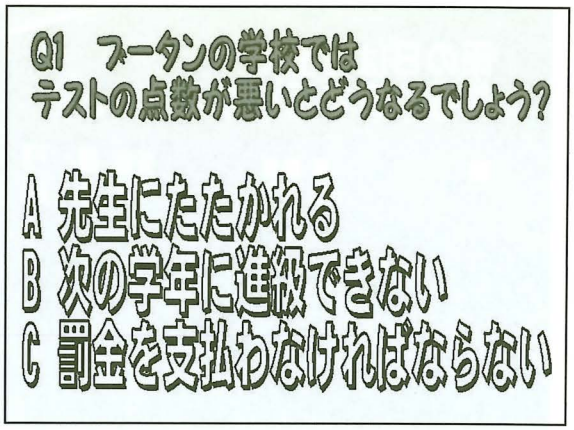
実技ワークショップ 06. 12. 20~
２０名の教員を対象に
体育授業に関するワークショップを行った

カリキュラムワークショップ 07. 5. 7~
体育科の教授や学生、教員を含めて
体育授業のシラバス作りを手伝った

日本祭 07. 11. 3~
自分の任地にたくさんの日本人を呼んで
日本の文化を紹介

広域研修 08. 1. 15~
インドネシア、ネパール、モルディブ、
ラオスからの参加者を集め、研究授業

日本の学校に戻って


Q1 ブータンの学校では
テストの点数が悪いとどうなるでしょう?
A 先生にたたかれる
B 次の学年に進級できない
C 罰金を支払わなければならない

B 次の学年に進級できない

2週間のヒマラヤ トレック

元日本代表 中田英寿と

CHUKHA HIGHER SECONDARY SCHOOL
THE PROJECT FOR CONSTRUCTION
OF EDUCATIONAL FACILITIES
IN THE KINGDOM OF BHUTAN
GRANT AID FROM THE PEOPLE OF JAPAN
AS A TOKEN OF FRIENDSHIP
AND COOPERATION BETWEEN
JAPAN AND THE KINGDOM OF BHUTAN

日本の援助でできた学校

マーケットの様子

1日1ドル程度で暮らす人々

日本以上に幸せ感のある子どもたち

完

ボランティア活動を通して学んだこと

加賀　裕子
（18－1，カンボジア，理数科教師，横浜市立寺尾中学校）

私がお話したいのは、ボランティア活動を通して学んだ事ということでして、この中には、経過が沢山入っていますが、読んでいただいたら分かると思いますので、要点についてはあまり触れないでおこうと思います。

私が赴任したのは中学校の先生を養成するための2年間の養成学校です。カンボジアに6校ありますが、そのうちで一番大きな学校で、生徒数、約700名で、最高30歳までの人が学んでいる学校です。要請内容です。左側が町に入るところになります。右側が学校の正面に入り口になります。

どんなお話をして来なきゃいけなかったかというのが、ここに書いてある内容です。これをもとに活動内容を設定しました。活動目標。自分がやりたかったのは、実際に実験をそこでするということではなくて、そこにいる先生方と一緒に学んでいくということをしていきたかったので、このように目標を設定しました。ただ、大きな目標はここにあったのですが、細かなところでこれをまっすぐ進めていくのか、また、いろいろな寄り道をしていくのか、いろんな先生たちと相談しながら、例えばJICAの方々と相談しながら、こまごましたところはかなり大きな変更をしていくことになりました。

何が変わっていったかというと、ここに書かれていることです。最初に予定していたことで、実際行ったことで、大きく変わったのは、下の方の4点だと思います。最初は自分で実験書も作り、自分としての成果を残してこようというのが、目標の中にありました。中にいるうちに、いろんな人と話をしたりしているうちに変わっていったのは、自分がそこで何を残したかったのか、自分の結果を残したかったのか、それとも、そこにいる人たちに何かを経験してほしい、何かを学び取ってほしいというのを残したかったのかというところで、方向性がだいぶ変わってきました。

ここにいるのが、一緒に働いた4人のメンバーです。左上から、上二人が化学の先生、左側の先生が今、ウェブ中には出てくる教員Aという方です。右側が教員B、左下が地学の先生、教員C、右側が、右下が教員E、生物の先生です。

最初の1ヶ月で知り合ったのが、A、B、E、3人の先生です。Aの先生に最初に何を言われたかというと、「私は子どもも居るし、忙しいから、実験はできない。」と言われました。私の養成内容が実験だったので、非常にショックを受けたことです。右側の先生は知識力もあり、英語もしゃべれるので、意欲的なのですが「君は、カンボジア語もできないのに何がしたい。」というのを最初に言われて、やっぱり自分としては、非常にショックでした。で、3人目の左下のCという先生は、最初存在も知らずという方で。右下の教員E

という先生には、最初は「いろいろ教えてね。」と言われたんですが、では、「実験に参加させて。」と言うと、「いや、実験は来なくていいわ。」と言われ、何かうまくいくのかなこれから、という印象を最初に持ちました。

それから、いろいろな経過が入ってきました。やっぱり、コミュニケーションを取るのが難しかったので、言葉だけではなく、一緒の時間を過ごすという目的で始めました。学校現場にいた人間としては、人前で何かをしたり、話したりというのが日常的な事だったので、どうしても実験がしたいという気持ちを、向こうの先生たちが汲み取ってくれて、2ヶ月目に実験をさせてくれました。

これが結果なんですけど、全然実験室が使われていなかったので、10 年前に、後で知ったんですけど、ベトナムからボランティアが入ってきて、その人たちが一生懸命やった実験の痕跡だけが残っている実験室だったので、それを片付けて、このころ、さっきの地学の先生に知ってもらえました。この方は非常に意欲的で、何年か前に JICA がプロジェクト、理数科プロジェクトをやって、その講習会にも参加されていた方で、日本語も英語も堪能な方だったので、これから先、私にとって、かなり日常生活でも仕事の面でも、支えていただける方になりました。

この方が教員 A ですが、最初に「実験ができない。」と言った方で、いろいろと話をしたり接しているうちに分かってきたことは、結局、実験室の鍵を彼女は持っていなくて、自由に入れない、誰かの許可がある、もしくは、鍵を貰わないと入れないという事と、それから、自分一人でやる自信が無いということがおおまかな大元の理由です。彼女もその昔の JICA のプロジェクトの講習会に参加していたので、実験を習ったことがあるのですが、それを現場で生かしていく事が無かったんですね。で、彼女が最初に言ったのが、「実験をもう一度自分でやってみたい。授業でできるようにしたい。」ということなので、私が日本から持って行ったことを教えるよりも先に、既存のものをきちんとできるようになるようにしようということで、これをやるような実験が毎週繰り返されていきました。ただ、これがずっと継続してするかいうと、そうではなく、かなり波がありました。その波も今から思うと、1 年目だから分からなかったこと、学校の流れも知らず、急がせるパターンも分からず、そうゆう中で時を過ごしてきたので、なんとなくすっきりしないものがあるというのがどっかにありました。気持ちの中で、周りも同じように派遣されている理数科の教員が、どんどん毎週実験を繰り返して結果を残していくのを見て、やっぱり焦りが出てきたのが、この 1 学期くらいです。このときに、非常に知的な教員 B の先生に、「1 週間に 1 回実験をしたら実験室が活きるから、やってみようよ。」向こうのリズムに乗らなかったら、何言ってるんだという状態で終わったのは間違いないですね。

1 年間がちょうど過ぎそうになるころ、外国語団体「VVOB」はベルギーの団体なんですが、うちの学校には 4 つの外国の団体が入っています。日本、アメリカ、ベルギー、イギリス。ですので、その辺の人間関係をうまくまわしながら、話をしていったところ、ちょうどエイズの講習会をするということで、その講習会に携わって、実験をするということ

で、一緒に参加させていただきました。で、すごく自分の中で実験室を片付けるのが遅いことなのかなと思っていたんですが、よくよく考えれば、相手のペースの中に、たった 2 年間自分はいるわけなので、相手がどんなこと気にして、これからどんなことをしていきたいのかということを考えて、実験室の配置、器具の配置、それから片付けをしました。やりたいっていう話をしたら、その多くの先生たちが結構快く引き受けてくれて、時間を設けて、生徒たちを使って一斉に教室の中を片付けてくれて、非常に協力的になっていったんです。

話は変わりますけど、それは彼女が、家で実験のノートを作成していて、これはこんな風にうまくいったとか、自分なりの実験書を作るようになっていったので、方針を変えました。このころから、自分がこうしようというのではなく、こんなことをしたいという風に向こうからいってくれるように経過がかわりました。ただ、その経過のなかでは、私の言葉の変わっていった部分があり、例えば、私が最初の頃は、「こんな実験をしてみた。完成したから、やってみようよ。」という話しの仕方だったのですが、この頃からは、「こんな実験したいと思うんだけど、どうかなあ。一緒にやる？」「やらない」といえばそのまま話は無かったことに。また、同じようなきっかけを幾つか作っておいて、一緒に組み立てていくような形を採りました。

で、ここからは比較的軌道に乗って、活動がいく状態です。最後に、さっきの何度も出てきているこの女性の教員 A の先生がかなり力もついてきていたので、その先生に「中学校の先生、地域の中学校の先生に向けに講習会をしたいと思うんだけど、どうかなあ。」と話したところ、非常に快く引き受けてくれて、その先生たちだけでなく JICA の職員、それから校長先生も非常によく相談に乗ってくれて、実質的に、私は「こうこんなことしたらどうかな。」というだけで、動いてくれたのは先生たちでした。で、そんな中で、任期が終了しました。この活動の中ですごく重点を置いたことは、ここに示されています、一番上の人間関係を作るという点は、主には同僚（直接の仕事相手になる人たち）に対して構築することです。この学校には、私を含めて 3 人の、私が 3 代目の JOCV ということで、先生たちに話を聞いていると、「1 人目はカンボジア語をよくしゃべれると、2 人目はカンボジア語をよく聞けたと、きみはコミュニケーションが上手だね。」と言われたことがすごく私にとっては意外なことでした。私の中では、コミュニケーションは日本語を、ネックになっていたところだったので、それが非常に嬉しかったです。そのことから、自分が去った後、自分がどのように言われたいかというのを探すようになりました。1 番思ったのは、3 人目は「ありがとう」という言葉を沢山言っていた。というのをモットーに今までやってきました。同じ学校にも、さっきも言いましたように、いろんな人たちがいて、それから、元 JICA の専門家の方だとか、JOCV だとか、そういう人たちがいましたので、いろんな意見を聞いて、いろんな意見を収集した上で、自分の方向性を探っていくというのがこの 2 年間の流れのようだったと感じます。

そうですね、長期的には、一番下の長期的な視野の中で「今」を思うことが一番難しか

った気がします。なぜかというと、今しか見えないことが非常多いでの、長い期間の一転としてそのときを見ることで比較的焦ることなく進めていくことができたかなという気がします。

左側が、入学説明会、保護者説明会の様子です。右側が、たまにまたフランスから、フランスの学校の休みを利用して高校の先生が、自主的にボランティアに来て生物を教えてくれています。彼らは 2 週間くらいしかいないので、結局、その実験とかやったことを、一緒やっていくのは私なので、積極的に参加していくと、その後、生物の先生たちから、こないだ一緒にやったことをもう一回やりたいんだけど、という風に声をかけてくれるので、活動がしやすくなりました。

で、この真ん中の写真は、先生と生徒たちが集まってしたパーティーをしたときの様子です。学校の中だけではなく外の活動を一生懸命やろう、一生懸命こなしていこう、積極的に関わっていこうと思ったので開きました。左側はうちの学校で働く団体の人たちです。彼らがパーティーを開いてくれました。右側は、また左側をもとに人間関係が広がっていった、4 つの国からのメンバーです。というより、比較的日本人の中に居るというより、いろんな国の人の中の、一人の日本人として活動していった感じがあります。この 2 年間を通じて、自分の中で何が変わっていったのかな、というのがそこに示されています。それは、今でも教員として思っていて、一番、こう、うまく今でも働いているかなというのが、上の大きな枠からいうと、上から 3 つまでです。特にこう、学校の中で、今の話になるんですけど、学校の中に居ると、流れの中に流されていくような感じがあるのですが、そうではなく、こうきちんと自分の考え方を持ってやっていくようにしました。向こうで、私が最初に厳しかったのは、ぼーっとしたり、のんびりとおしゃべりをする時間が持てなかったことです。忙しい日本の生活の中に居たので、その時間の価値というものが分からなかった。その中で同僚がどう変わっていったか、上 3 つは同僚全員に、ほぼ全員に関係してくる部分です。例えば、教科に関係なく、クメール語、カンボジア語の文章を作っていくと、裕子お前なにしてるんだ？ちょっと見てやる。文章作ってくれたり、何かを作っても、その手伝いをしてくれたり、運んでくれたり、非常に協力的な感じでした。下の 4 つは直接こちら、教員に関係してくる部分です。この 2 番目が自分の中でも一番印象に残っていて、最初、教員 A と教員 B の人間関係が非常に悪くて、いつも教員 A の人と話をするとき B の先生の悪口を言われ、逆に B の先生と話をすると A の先生の悪口を言われ、結局、真ん中で、いや、そういうことじゃないんじゃないのとか、いろんな話をしていました。で、そのことを繰り返していくことと、実験の能力を身に着けていく、その差が生まれてくると、最初は全然できなかった A 先生が、2 年後には自分で実験書も書き、予備実験を自主的にし、という風に、すごく見えるようになったんですね。

B の先生がどうかというと、知識力はある、実験も自分でできると思っている部分があるので、A 先生に比べたらすごいできると思っている。それが自分の中で優位に立っている部分だったのかなという気がします。それが 2 年後逆転してきたので、コミュニケーション

の形が非常に変わりました。上から話すのではなく、双方向の人間関係に変わり、お互いを認め合う部分ができてきたように感じます。一番下の部分は最初は全然知らなかったのですが、校長先生にいってお話をして、自分の好きな時にやれるようになって、良かったかなと思います。

この 2 年間で学んだことはここに書かれている、今一番思うのは、人の心の温かさだとか、お互いが自分が協力してもらうだけではなくて、協力していくということの大事さだったかなと思います。いろんな人と触れ合う中で、建設的な考え方を持っている人と出会うことが多かったので、その人たちから学ぶことが多かったです。こんなことがあるんだけど、こんなことがあったんだけど、こんな話をすると、じゃああなたはどうしたいの、という方向にすごく話を持ってきてくれるので、悩むこともほとんどなく、お話できました。一番、いろんな人たち、いろんな国の人たちと出会うことができて、国民性というより、国ではなくその人自身がどんな性質、性質というか性格を持っていて、どういう風に接していったらいいのかなということも学びました。そういう意味では、日本人というの枠で自分を見られるのが嫌だと思いました。

そういうことも踏まえて、今何をしてるかというのを説明います。すごく帰ってきてから思ったことは、この 2 年間というものは、非常にまったく違う環境に置かれるので、いろんなことが目に飛び込んでき易いですけども、同じようなことは日常、日本にいる日常にもあることなのかも。なので、日々目的意識をしっかり持っておいて、今こうしているのは、このため自分はこうしたいから、こうなりたいから、という目的に向かってやっていく、というのを持っておこうと感じました。帰ってきて、すぐ中学校 3 年生の担任をやらせてもらって、中学校の中でも一番ナーバスな時期で厳しいですね。そこに入れさせていただいたので、非常に勉強になっている部分もあります。ただ、帰ってきて直後で良かったのかなと思う部分は、自分の中にどこかのんびりとしたものがあるので、受験期真っ只中なんですけど、子どもたちのなかにはどこか穏やかな気持ちにうかがえている気がします。

3 つ目は、AETの英語の先生がイギリスから 12 月まで来ていました。この方は非常に協力的な方で、普通英語の授業だけでなく、理科の実験の時だとか、お昼ご飯だとか、部活とか、それ以外のところで、子どもたちが比較的自由に会話ができる状態の中でいてもらっていました。その彼も英語の授業とは全然違うコミュニケーションがきちんと取れるのは、授業以外だと気付いてくれたようで、そのあと部活動に参加もしてくれていました。

学校以外のところでは、やっぱり今というものを大事にいていこう、どんな状況に置かれていても、気持ちの持ち方で変われるものは変わっていくのかなと思うようになりました。それから、いろいろあるかと思いますが、一人の日本人として、過ごしていきたいとおもいます。ありがとうございました。

ボランティア活動を通して学んだこと

加賀　裕子
横浜市立寺尾中学校
職　種：理数科教師
派遣国：カンボジア
派遣先：バッタンバン中等教員養成学校

中等教員養成学校（RTTC）バッタンバン校

- 中学校教員養成のための学校
- 2年制
- 創立 1984年

2008年2月現在の状況
- 教官数　53名（男性33名、女性20名）
  （理数科教官 11　数学2（校長含む）、物理2、化学2、生物4、地球科学1）
- クラス数 1年生 14クラス
  2年生 14クラス
- 生徒
  地域（州）周辺の6つの州から募集、入試選抜後入学
  生徒数　1年生367名（男性189名、女性178名）
  2年生371名（男性173名、女性198名）
  年齢層　17歳～30歳位

要請内容

- 中等教員養成学校で物理、化学、生物、地学の実験を担当する。
- 教官向けの学習会を開催する。
- 地元で手に入るものを使ってできるように実験方法を改善する。

活動目標

中等教員養成学校（RTTC）の教官や生徒とともに実験を行い、その考え方をともに学ぶ

目標の設定の過程

・校長や職場の同僚と相談しながら設定していく。
・配属先のニーズや教官たちの特徴をよくとらえて行う。
・目標の設定は短期間で結果を残そうとするのではなく、長い目で見て行う。

目標達成のための活動

活動予定（2007年2月）	活動結果（2008年3月）
学校見学	小学校から大学までの見学
化学実験室他 整理	廃液処理、薬品整理、実験室内整理
学生実験のサポート	化学、生物、地球科学
教官との実験	化学、生物、地球科学
自分で実験書を作成	基本的には教官自身が作成
他JOCVのいるRTTCでのワークショップ	3箇所のRTTCで他の理数科隊員とともに行った
	VVOB（ベルギーの団体）の定期講習会への参加
	地元の中学校教員向けに実験講習会の企画、運営

主な同僚（カウンターパート？）

任期（1年8ヶ月間）の経過

赴任当初（2006年8月）
クメール語（カンボジア語）でのコミュニケーションに苦戦。英語ができる人との会話が中心。授業に参加したり、家庭教師をつけ、活動開始。

2ヶ月目（2006年9月）
小学校教員（小学校の教員が中学校の教員の免許を取るための特別講習会が開かれており、そのときの生徒）に向けて、初めて実験の授業をする。

3ヶ月目（2006年10月）
化学実験室の使用済み溶液の処理開始
地球科学科教官Cと出会う

4ヶ月目（2006年11月）
化学実験が定期的に授業に入り、化学科教官Aと毎週のように予備実験と生徒実験を繰り返す

5ヶ月目（2006年12月）
他の地域のRTTCでのワークショップ（化学）の手伝い

6ヶ月目（2007年1月）
化学実験が定期的に入らなくなる

7ヶ月目（2007年2月）
教育実習（2年生）開始。教官たちと一緒に見学に回る

8ヶ月目（2007年3月）
化学科教官Bに週1回の実験を提案するが、実現せず

10ヶ月目（2007年5月）
2年生教育実習を終え、通常の授業に戻る
1年生教育実習へ
JOCV 理数科隊員で4つのRTTCを巡回。
3校で化学の実験を教官とともに行う

11ヶ月目（2007年6月）
化学実験が再び定期的に入るようになる

2年生　卒業制作開始

VVOBの定期講習会に実験助手として参加

12ヶ月目（2007年7月）
化学科実験室の整理開始
方針変更（実験書の作成について）

13ヶ月目（2007年8月）
小学校教員が中学校教員の資格を得るための講習会、再び始まる（9月まで）

14ヶ月目（2007年9月）
方針変更（短時間でできる実験もやる）
自分の中の重点項目に気づく

15ヶ月目（2007年10月）
VVOBの生徒向け講習会　補助

16ヶ月目（2007年11月）
定期的に化学実験が入る。生物実験の補助回数増える。

17ヶ月目（2007年12月）
2名の教官（数学科1名と地球科学科教官C）日本での2週間の研修へ。カンボジアへ帰国後、地球科学科の実験増える。
化学科教官に中学校教員向け実験講習会の提案

18ヶ月目（2008年1月）
中学校教員向け化学実験講習会　開始
地球科学科C教官との作業の時間が増える

20ヶ月目（2008年3月）
中学校教員向け化学実験講習会（3回目）終了

任期終了

活動に際し、重点を置いたこと

- 人間関係を築くこと
  - 授業に参加すること
  - 笑顔でいること
  - 良いと思ったら言葉にすること
  - 一緒にやって一緒に考えること
  - 相手のペースを大事にすること
  - 一度にひとつのことを話すこと
- 何でもやってみる、話してみる、聞いてみること
- 同じ学校に所属する4つの国の団体をはじめ、いろいろな人たちとよくコミュニケーションをとること
- いろいろな人に意見を求めること
- 長期的な視野の中での「今」をみること

自分の中の変化

・いろいろな価値観を持った人たちから意見を聞くようになった
・解決策をいくつも考え、その中から状況に応じて方法を選ぶようになった

・相手のペースで活動できるようになった
・人に物事を頼めるようになった

・クメール人（カンボジア人）をはじめとする自分を取り囲む人たちのありがたさやすばらしさを実感し、いつも言葉で表現するようになった

・「まあいっか」と細かいことを気にしなくなった
・ぼーっとしたり、のんびりとおしゃべりする時間を楽しめるようになった

同僚（職場の仲間）の変化

忙しいときでも時間をくれるようになった
特に何もなくてもとりあえず顔を見せてくれるようになった
その人には全く関係のないことでも手伝ってくれるようになった

教官が自主的に教材開発をするようになった
教官間のコミュニケーションが増えた
実験後の片付けを最後までやるようになった
実験室の鍵を教官ほぼ全員がもつようになった
（自分の好きな時間に実験室を使えるようになった）

2年間で学んだこと

- 人の心の温かさ、豊かさ
- 感謝と協力
- 計画を実行していくことの楽しさ
- 建設的な考え方、多角的なものの見方
- 柔軟性とバランス
- 国民性より個人の特性
- 本当に大事なことは何か

今、そしてこれから

- 目的意識を持つこと

- 授業方法
- クラス経営
- AET（Assistant English Teacher）との協力

- 「今」から学べること
- 幅広い視野で学び続けること

- 一人の日本人として

ありがとうございました

知られざるナミビア

今泉　浩和
（18－1，ナミビア，理数科教師，新城市立作手中学校）

「それでは皆さん宜しくお願いします。」(拍手)
「ナミビアという言葉もね、ちょっと聞き慣れない言葉ではありますが、日本ではもちろん、私自身もあまり知らなかったのが事実なのですから。日本に帰ってみると、ナミビアの番組がTVによく出てて、ナミビアに行ってきたから、意識しているのかどうか分からないのですけども、年末に見ていた番組でも、お笑い芸人のイモトがチーターと走っているシーン。あれは、すごかったですね。色々なところでちょっとずつ知られていくようになってきたのかな、と思います。今日の私の発表の中で、ナミビアという国がなぜ知られていないのか。そして、どんな国なのか、といった紹介を交えながら、私の活動を発表させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(ナミビアの国家が流れる)

今、流しているのはナミビアの国家です。非常にゴスペル風な、三部合唱となっております。向こうの学校にいきまして、朝礼で三部の合唱をするのを聞いてすごく驚きました。とても、奇麗な合唱でした。

それでは、ナミビアへの初めての隊員ということで、もちろん先輩もいませんし、今日ここでナミビアの話を、日本初に聞けるということで(会場笑う)、皆さんは、今、その会場に居合わせているということで、幸せかなと。なお、内容の方はあまり堅くないようにしますので、それが私のカラーですので、よろしくお願いします。

その前に、なぜ私が協力隊に参加したのかといいますと、その背景は大学時代にさかのぼります。卒業後ケニアに派遣された一つ上の先輩の影響を受けています。私もそういうところにいってみたいなと思い、それは大学の３年の時でした。私の場合、卒業後、急ぐように結婚、そして、教員としてのスタートをきってしまいましたので、いつしか夢も忘れかけていました。今、全然関係ないのですが、ナミビアクイズですので、お楽しみください(会場笑う)。そんなとき、現職教員特別参加制度というのがございまして、「お、これは！」と思いまして、私の心に火がつきました。「やめなくてもいける」と。私の子供もですね、手が離れる年になってきまして、半分シニアに足を突っ込んだ年になってきましたので、若き日の夢に向かって突き進みました。応募したのは理数系教師です。ナミビアは選んだわけではありませんが、新しい国なので派遣前からとてもわくわくしていました。でも、先輩隊員がいるわけでもありませんでしたし、前情報が入らなかったので、正直不安もいっぱいありました。ナミビアってどんな国なんだろうって思って、自分で色々調べてみました。JICAのホームページにも、外務省のホームページにも基礎情報しかのってな

くて、ほとんど生活情報はのっておりませんでした。

ナミビアってどこにあるの？って、派遣が決まった時に地図上で探しまして、(関係なく流れているナミビアクイズのスライドを見て)話がそれちゃうんですが、これが、伝統料理のマハングというものでして、とうもろこしが主食になっています。伝統料理です。

ナミビアがどこにあるのかという話ですが、アフリカ大陸がかなり大きいのですが、そのアフリカ大陸のかなり南のほうでして、赤道からこんなに離れたところにあります。それから日本と比較する意味で、日本の地図を出してみます。そうすると、このぐらいの大きさの違いがあります。ナミビアの国の大きさは、日本の大きさの約２倍もあります。こんな広い国土なのに、人口はたったの２１０万人。日本でいう、一つの県にも満たないくらいです。出生率は、日本の三倍もあるのに、人口が増えていきません。原因は、国土の半分以上が砂漠。人が、物理的に住めないのと、それからエイズの問題が拍車をかけているようです。就学率は、78%だそうです。私が、向こうで生活していた実感ではですね、いわゆる裸で生活している裸族を抜かせば、ほぼ100%に近いと思います。高校３年生までが義務教育になっていまして、お金があまりかからないように、国の政策がしっかりしています。

ナミビアの特徴といえばですね、数百万年間その姿を変えていないというナミブ砂漠です。世界で最も古いとされています。鉄分の酸化が進んでいるので、赤い砂漠としても有名です。その美しさは他に類を見ません。サバンナに忽然と姿を現す砂丘群はですね、その高さは約 300 メートルです。もう圧巻です。それから、太平洋側は、ベンガル海流が乾いた冷たい空気をもってくるので、海の上の空気も湿らないので、砂漠が海岸までせまっています。世界でたった一か所だそうです、砂漠と海が隣接する不思議な光景です。でも、少ないながら降水量はありますので、そういったところは、サバンナ気候になるので、壮大な、そして、広大な草原が広がっているのです。それから、国全体としても年間の平均降水量が 300 ミリ以下で、高い植物は育たずに、サボテンやアロエ、ヤシなどが主に育ちます。河川域以外に森林はほとんどありません。ナミビアは、そういうジャングルはないんですけども、サバンナで生きる野生種は豊富です。ゾウなどの、たくさんの草食動物がいます。肉食動物はほとんど捕獲されてですね、広大な保護区で管理されています。(スライドのライオンを見て)ちょっと、撮るのが怖かったですけれども。ナミビア南部の海岸ではですね、南極の方のイルカとか、それからアザラシ、ペンギンもみられまして、最初はアフリカなのにペンギン？とびっくりしました。それだけ、実は寒いんですね。アフリカなのにすごく寒かったです。冬の時期は、氷点下までいきますので、生徒たちもコートを着て登校してました。夏は暑いんですよ。

南アフリカ依存型の資本経済をベースに1990年に独立という新生国家のナミビアはですね、数あるアフリカ諸国の中では先進的に発展してします。部族紛争もなく、平和で明るい国でした。ほとんど、国際ニュースに取り上げられたことがなかったので、日本からはあまり知られていないのだと思います。古くはドイツの支配下に置かれていたので、地

名にはたくさんのドイツ語が使われています。「なんとかフォンテン」とか、首都のヴィンドックとか、アルファベットだけ読んでも全然読めないんです。ドイツ語なのですね。植民地支配の目的というのは、ダイヤモンドやウラン、金。豊富な鉱物資源です。資源大国といえるナミビアは、アフリカ諸国の中ではGNPが第５位だそうです。統治されたときに乾燥に強いヨーロッパ牛が持ち込まれて、もともとここにいた牛ではない別のものの、ヨーロッパ牛が持ち込まれて牧畜がおこなわれました。それで、ソーセージだとか、ビール、それにワインなどの醸造技術が伝わって、今もなお健在です。それから、大西洋は非常に冷たくてですね、日本でもよくとれるタラとか、カニとか、エビとかがたくさんとれて、そういう水産資源が豊富な国です。ただ、生では食べませんので、日本とは違い、とったら全部冷凍されてしまいます。その後は、イギリスに支配が変わって、ナミビアには２本の大きな川が流れているんですけれども、１０００キロもの距離をパイプで結んでしまってですね、イギリスの技術でですね。大水道工事をしたために、上水技術はアフリカ一といわれています。(スライドを見て)こんな風に、砂漠の中に街を作ってしまったんですね。首都に関しては、下水を上水に変えるというリサイクル技術を導入している唯一の街なので、水不足という砂漠の国として悩んできたからこそ、水に関しては最先端の技術が投じられているのだなと思いました。日本が地震に対する高度な技術を持っているように、ナミビアは水に関して高度な技術を持っているのです。ナミビアには、およそ20以上の部族が存在するといわれています。主な民族としては、ブッシュマンが有名なのですが、あのニカウさんは、ナミビア出身です。ちょっと古いですけどね。農耕民族としては、ヘレロ族とか、ヒンバ族とかが、河川流域に点在していて、その一つ一つの部族同士が会話ができないほど異なった言語をもっていました。でも、イギリスの長い統治で、英語が公用語化して、混血のカラードも生まれ、たくさんの民族性をもった国家になっていきました。

知られざる国、ナミビアの紹介はこれぐらいにして、私の活動を紹介したいと思います。私の赴任先はですね、首都から北へ700キロくらい離れていて、非常に遠いですよね、オンダングァという小さな町です。アパルトヘイトの影響を大きくうけていて、黒人層への教育の遅れが目立つことをうけて、日本からの派遣が決まりました。約２万人が暮らすこの町にある唯一の高校で、物理化学の教師として勤めることになりました。アンディバ、トイボ、ヤ、トイボ高校というんですけれども、ちょっと長いので、アンディバ高校でいいですね。どんな暮らしをしていたのかというと、首都のようなビルとかまったくなくてですね、私のいた北部では、平屋だてのサバンナ地帯です。土もなく、全部が砂です。非常にさらさらとした、奇麗な砂です。月明かりの照らす夜は、雪と間違えるほど白いです。学校の校庭ももちろん砂です。仕事にはネクタイ姿ですね。イギリスのボランティアの方もいました。着るものには苦労しませんでした。そして、洗濯物の乾くスピードには驚きました。１時間あれば完全に乾きます。タオルなどは、日差しのせいで、すぐにごわごわになり、それには苦労しました。あかぎれにも、苦労しました。それだけ、空気が乾燥しているのです。最初は、クーラーも扇風機もなしでがんばっていたら、全身あせもになっ

てしまいました。しかたなく、扇風機だけ買って、クリームを塗って治しました。その土地の風土を知る必要性に気付きました。

食事に関しては、ソーセージとか、ハム、パンとか、パスタが中心でした。ナミビアがドイツに占領されてよかったなと思う瞬間でした(会場笑う)。ソーセージがとてもおいしかったのを思い出します。日本みたいに惣菜のパンはないのですが、パン自体がおいしいのです。私自身、自炊の経験がなかったものですから、栄養面にはとても気をつかい、必ず数品いれるようにしていました。食後には、必ずフルーツを食べていました。乾燥した地域なので、農作物がとれないので、大半が輸入品でした。乳製品や、肉、卵以外はほとんどが輸入品だった気がします。私から見て、そこに暮らす人たちは、農作物が高いと思わないのかなと思ったのですが、豊かな国なので、大丈夫みたいです。スーパーまでいけば何でも手に入るので、時々日本食が食べたいときは、現地でも調達できる食材で日本食に挑戦しました。ちらし寿司とかね、赤飯とか、天ぷらとかですね。料理の腕は格段に上がりました。味噌汁とかにも、色々挑戦しました。本当にいろんな食材が売っていました。気をつけていたのは、念のために一度水は沸かしてから使うことでした。一緒に赴任した他の隊員たちは、水をガバガバ飲んでいたらしいのですが、それでもどうってことはないらしいです。日本よりも、水は安全だったと思います。私は念のために煮沸をしました。レストランのない町だったので、バランスのとれたメニューを考えていました。向こうには、日本に勝るほどのビールもありました。

私の家ついてですが、女子寮の管理棟に住んでいました。部屋はわりときれいでした。キッチンは4つ口コンロが支給されて、料理がしやすかったです。見た目はきれいにみえますが、主にゴキブリとの共同生活でした。ペットボトルに水をいれて、断水対策をしていました。この生活に欠かせないのが、充電式の蛍光灯です。水道と電気はたまに止まるので、週末の夜は大変でした。つらかったのは、断水とか停電でした。停電は一日あれば回復するのですが、断水は三週間くらい続きました。幸い水場が近かったので、幸いでしたが、それでも水の貴重さを痛感しました。5、6月は、気温が一桁台まで下がるのですが、お湯は出ないので、冷たいシャワーを浴びてました。雨は、あまり降りませんが、降った時は基本的に雨漏りでした。家の構造が、そういう風になっていないのです。

あえて買わなかったものとして、家事家電。不便な生活を体験してみたかったのですが、やっぱり不便でした。現地の人はほとんどが持っているテレビも買いませんでした。日本人だからといって、金持ちにみられたくなかったんですね。見たい番組は、近くの家に行ってみせてもらうことで、自然と親睦も深まりました。インターネットも引きませんでした。今では、ナミビアも無線でできるようになったらしいのですが、当時は電話回線しかありませんでしたので、学校の回線も利用させてもらってました。

さて、一番肝心の職(仕事)です。私が勤務してましたアンディバ高校は北部最大の高校で、生徒数は1000人を超えてました。数十キロという遠くから来ている人もいることもあって、生徒の7割が、700人以上が寮生活をしていました。寮費はとても安くて、三学期制なので

すが、一学期で、約1200円です。一日三食ついています。この学校には、伝統的にサイエンスクラブというのがありまして、毎年地区予選を勝ち抜くのですけれども…。全国大会まであるので、私も全力で支援しまして、その結果、最も倍率の高い化学部門で、全国3位を勝ち取ることができました。ほとんどの賞を総なめにしていたのは、都市部の私立高校でした。特に、白人層なのですけれども、北部の黒人層からの入賞は大きな夢を与えたようです。

もうひとつ、私が意欲的に取り組んだのは、成績処理の電算化です。パソコンが生徒用に30台あったので、授業のサポートに回りました。教師用には4台ありましたので、生徒名簿だとか、成績管理、処理のアドバイスをしました。現地の教員だけで進めていけるように、マニュアル化をしたり、若い先生を集めて、成績処理委員会というのを組織しました。これまでテスト後一週間かかっていた成績処理が、たった 2 日で終わって、通知表を配るまでできるようになって、現地の人達だけで運営できるようになってきて、大変感謝されました。

イギリスの教育制度をそのまま持ち込んだナミビアは、既に学校評価とか、日本も行われている教員評価制度とか、あるいは、授業研究のためのワークショップだとかセミナーが組織的にもう行われていました。これには最初びっくりしました。他の国ではこういったことを隊員が働きかけたり、立ち上げたりするといった事例を聞いていたからです。質を問わなければ、システムは出来上がっている国なんですよね。初代隊員としては驚くばかりでした。このセミナーに関しては、何の手立ても加えることができませんでした。

苦労したのは、やっぱり、専門用語との戦いですね。高校 3 年生の授業を中心にみたんですけれども、小学校や中学校で習う化学・物理の知識、そういう専門的な英単語をすべてを知っておく必要があります。最初の一年は本当に戦いでした。生徒に配りたいプリントが自由に印刷できないというのは非常に苦労しました。印刷のおばちゃんという人がいましてね、それは彼女の仕事なんですけれどもね、頼まないといけないんです。頼んだのにプリントが必要なときにできあがってないというのが、そんなことがしゅっちゅうです。機嫌を損ねると、アウトです。最終手段は合鍵を使いました。それから、会議と名の付くものはとにかくいつ始まるか分かりません。3時からだよ、っていっても、始まるのは5時過ぎで、しかも 3 時間ぐらい続きます。効率のいい日本の会議と比べちゃうと、非常にストレスが溜まりました。

それでは、百聞は一見にしかずです。学校のようすをちょっとだけビデオで紹介します。
(学校の一日ようすのビデオを流す：１分半)

(スライドで)
私の担当クラスは１２C。
２００８年１２月に卒業試験が終わりました。

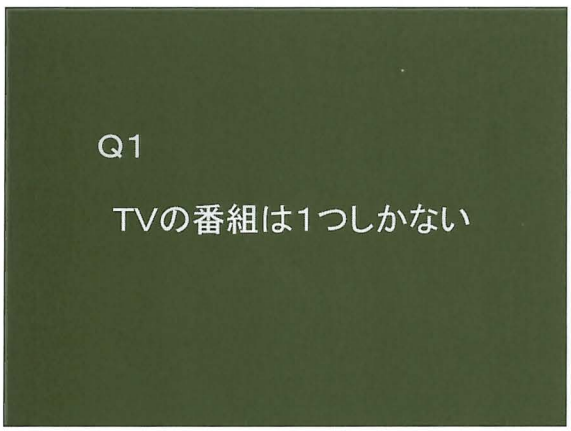
毎年の合格率はおよそ６０％。結果はどうだったのかな？まもなく新聞発表されます。
２００８年１１月応援メッセージを送りました。交流は今も続いています。

(ビデオメッセージ：１分半)
まず最初に、まもなく高校卒業おめでとうございます。
卒業試験でいい結果が残せることを祈っています。
私は前の学校に戻り、４月から復帰しています。
一方、タカノリ先生は教員採用試験に合格しました。とてもうれしいです。
私が残したメッセージを覚えていますか？もう一度、贈りますね。
「あきらめなければ　夢はいつか叶う」
ではまた。

ご静聴ありがとうございました。

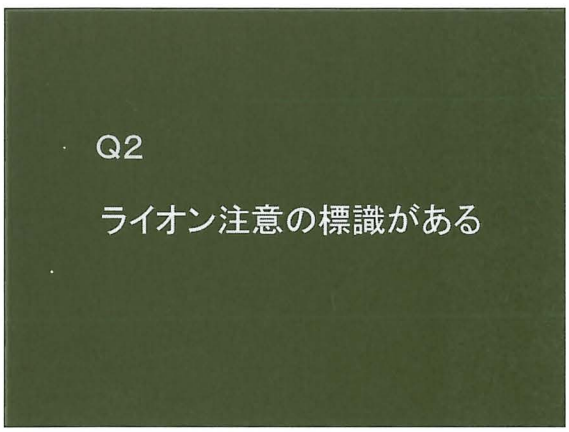
知られざる国「ナミビア」
１８年度１次隊　ナミビアJOCV
愛知県新城市立作手中学校　今泉浩和
JICA

突然ですが…
ナミビアクイズ


Q1
TVの番組は1つしかない

正解

国営放送１局だけです


Q2
ライオン注意の標識がある

正解

×

Q3

首都からの電車は1日1本

正解

×

Q4

ほとんどの人がキリスト教徒

正解

○

Q5

走っている車はほとんどドイツ車

正解

×

Q6

伝統料理はタロイモ

正解

×

トウモロコシの粉をゆでます

ナミビアってどこ？
ナミビア →
Google

近づいてみましょう
Google

日本と比較すると…
面積 1 2.2
人口 1億2000万 210万
出生率 1.3 3.8
就学率 100 78
公用語 日本語 英語
Google

ナミビアの特徴

世界最古の
ナミブ砂漠

サバンナにそびえ立つ砂山

海岸まで迫る砂漠

広大なサバンナ

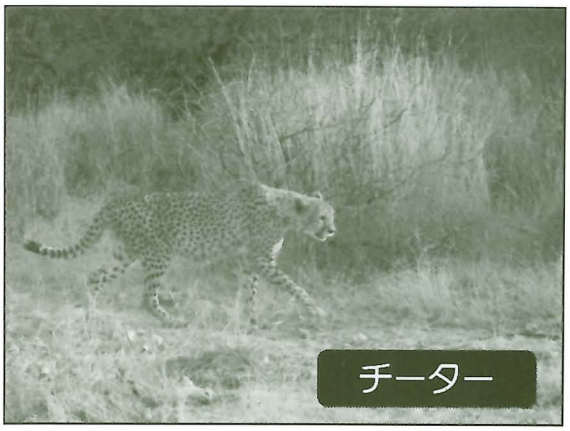
主な木はアロエとヤシ

野生の王国

キリン

シマウマ

ライオン


チーター

オリックス

アザラシ

ペンギン

新生独立国家
（１９９０）

首都ヴィンドック

鉱業
（ダイヤモンド・ウラン・金）
酪農（ウシ）
漁業
（エビ・カニ・タラ）

砂漠の中の街、スワコプムンド

リサイクル水

伝統を守る部族

私の活動編

赴任先は？

アンディバ高校

衣

おどろいたこと…

・乾くスピード
・あかぎれ
・全身あせも

食

気をつけていたこと…

・水の煮沸
・バランスのとれた食事
・必ず晩酌

住

つらかったこと…

・停電・断水
・冷たいシャワー
・雨もり

なかったもの…

・掃除機、洗濯機
・テレビ
・インターネット

職

アンディバ高校

北部最大規模の高校

サイエンスクラブ

コンピュータの活用

ワークショップ・セミナー

苦労したこと…

・専門用語で授業
・印刷のおばちゃん
・職員会議は何時から

生徒たちのようす

私の担当クラスは１２Ｃ
（高校３年Ｃ組）

２００８年１２月

卒業試験が終わりました

毎年の合格率はおよそ６０％…

結果はどうだったのかな？

まもなく、新聞発表されます

２００８年１１月
応援メッセージを送りました

交流は今も続いています

タンザニアの教育の現状と協力隊活動

鈴木　祐二
（18－1，タンザニア，理数科教師，）

私は、現在釧路東高等学校で化学・生物を担当しています。これからタンザニアのことを説明したいと思います。

タンザニアですが、首都はドドマというところになります。実際には経済の中心はダル・エス・サラームという港町になります。公用語はスワヒリ語です。英語も若干通じます。それから産業ですが、観光やサイザルの輸出、それから鉱物としてはタンザナイト、宝石で有名なタンザナイトの産地がタンザニアになっています。宗教ですが、沿岸地方およびザンジバル島では、ほとんどイスラム教で内陸のほうにいくとキリスト教、それから周辺部の方、よく分からない方へいくと不思議な宗教がいっぱいあるという国です。通貨はタンザニアのシリング、1ドルは、僕がいた頃で1200シリングでした。今はだいぶ変わっているようです。このタンザニアという国は、非常に平和な国で、おととしケニアで大統領選挙があったのですが、そのときに民族対立で事件がありました。しかし、タンザニアでは独立してから民族対立は一度もありません。初代の大統領がニエレレという大統領で教育者であるというところがすごく大きく影響していまして、民族対立のない平和な国だということで、タンザニアにいる人たちは、のんびりとした性格の人たちが多いです。ちなみに、タンザニアの物価ですが、大体ビールが1本90円で飲める、水はペットボトル1本30円くらいと考えていただければいいと思います。

では、タンザニアの学校制度を紹介します。タンザニアの学校制度は、プライマリースクール、セカンダリースクールOレベル、セカンダリースクールAレベル、ボケーショナルスクール、そしてユニバーシティで、日本とは若干違います。システムとしてはイギリスのシステムに近いものがあると思います。プライマリースクールの前には保育園と幼稚園と両方あります。小学校ですが、7年間あります。小学校の確か2年生のときに、National Examination という試験があります。それが終わると次は 7 年生のときに National Examination があります。この試験の成績でセカンダリースクールの行ける学校が決まってきます。小学校は、現在無償ということで誰でもいけるような環境に整ってきています。なので、進学率、就学率というのはすごく高い数字が出ています。タンザニアの政府が発表している数字もかなり高い数字、ただしプライマリースクールのグレード 7 まで終えられる生徒は、ぐっと減ります。60%～40%くらいの生徒しか残ることができません。その背景にはアフリカ特有の問題があります。たとえば家の仕事が忙しくて子どもを小学校に行かせられない、小学校まで通うのに距離がありすぎるという理由です。また、中退する生徒の理由としては、女子の妊娠の問題などもあります。就学率はいいのですが、卒業で

きる生徒は少ないのです。セカンダリースクールに進学する生徒は、ここ近年は増えてきているようですが、今度はセカンダリースクールに行く生徒が増えることによって学校、校舎が足りない、教師が足りない、という現状が出てきています。特に、山間部や人の少ないようなところだと、周辺の生徒を集めて生徒数400～500人という生徒が集まるのですが、そこに配属される教師が4～5名しかいない。その先生方ですべての教科をカバーしなければいけない。その先生方もタンザニア人の気質なので、時々休んだり時々出てきたりたまに農作業に行って来なかったりということで、非常に惨憺たる状況にあります。セカンダリースクールOレベルの4年間が終わると、またNational Examinationがあります。ここで優秀な成績をとるとセカンダリースクールAレベルに進学できます。

ボケーショナルスクールというのは日本でいうと職業専門学校のようなところになります。自動車のことを勉強したり、技術的なことを勉強するところになります。セカンダリースクールAレベルの方は2年間ですけど、これは大学やその後の専門学校に進むための予備的な学校になります。2年間終わるとほとんどの生徒は大学を目指してNational Examinationに挑みます。私が勤務していたのはTanga Technical Secondary School、通称TTSといわれているところのAレベルに配属されていました。この学校は全寮制の政府校としてはタンザニアで最も古い歴史を持つ学校です。特に、この学校は進学率が高いということで、全国各地から生徒が集まる大変優秀な子どもたちの集まっている学校です。ちなみにこの学校は全寮制で、学費は、年額7万シリング、日本円で7千円程度で1年間の寮費、それから学費の全てがまかなわれることになります。このセカンダリースクールですが、Aレベル以外にもOレベルをちゃんと持っています。Oレベルでは、テクニカルというぐらいなので、一応テクニカルの授業も行っています。土木や電気、自動車の授業も行われていました。この学校、タンザニアの学校はそうなんですけど、自分がこの学校に行きたくて来たかというと意外とそうでもない。Oレベルには、自動車を勉強する女子もいます。土木でコンクリートをこねている女子もいました。これはNational Examinationの成績がいいのであなたはこの学校に行きなさいということで、推薦されてというか選ばれてきていますので、女子でも土木の勉強をしている子もいました。ちなみにこっそりOレベルの女の子にコンクリートをこねているときに、「コンクリートこねるの楽しいかい」と言ったら、「本当はこれしたくなかったんだよね、でもここ行けって言われたんでいま来てるんだけど。でも、この学校は優秀な学校だから私はすごい幸せです」というふうに前向きに捉えてコンクリートを練っていたので、ちょっと良かったなと思います。

僕はAレベルに所属していました。Aレベルはちょっと変わったクラス編成をしていまして、理科系3科目のクラス編成です。PCM物理化学数学、そしてPGMは、地学が含まれる分類です。そして生物が含まれる分類でPCB、CBG、このPCBとCBGの生物学を担当していました。この学校は、Aレベルに限ってですが各クラス40名から50名、ときどき60名になったり増減があります。これは私もクラスで出席簿を作って生徒管理していたのですが、生徒管理し切れませんでした。名前を呼んでいて10回くらい返事がない生徒が

いまして、どうしたのかと思ったらいつの間にか学費が払えなくてやめていったとか、他の生徒も知らないけど、あいついなくなったという子もいました。それから学期がはじまってから生徒はそこにいるんですけども、一度も僕の出席をとるときに返事をしない生徒もいました。おかしいな、でもこの子見たような、いや見たことないような、黒人なので僕から見てもなかなか顔の区別が難しいんですね。同じように見えるので、おかしいなおかしいなと思って、勇気を出して「君は最初からいたかい」って聞くと、「いいえ」と。学期の途中から突然入ってくるんですね。ですので各クラス増減がすごくあります。全校生徒数は大体 600 名程度、不確実です。校長先生に「今何人いるの」と聞いたら「うん、だいたい 600 名くらいかな」と言ってましたので、これくらいだと思います。

先生の数も大体 40 名くらいで増減しているみたいです。ただ、これも不確実で、突然新しい先生が来たり今まで一生懸命やっていた先生がいなくなったりと。職員会議で、あの先生どうなったのかなと聞くと、ただいま行方不明と、そういう状況でした。この学校はタンザニアの先生が行きたがる学校で、優秀な学校なので先生方は来たがります。街にあるので先生方は来ます。転勤してきた先生に「なんでこの学校に来たんですか」と聞くと、「前の学校は水も電気も全くなくて川に洗濯に行ったり、井戸に水汲みに行ったり、すごく大変だった。しかも川からワニが出てくるからそれに比べたらここは天国のようなところだよ」ということで、他の学校の先生方もここに転勤したがります。

そんな学校の生徒の様子ですけども、いくつか写真を持ってきました。まずは寮ですけど、これが寮の部屋です。このベッド 1 つが 1 人分の生徒の居場所です。これは 2 階建てですけど、1 階に 40 名くらい入り、すべて吹き抜けでドアとか何もありません。窓はガラスもありません。ここも扉があるんですけど、隙間風は入るし、それから蚊が入ってくるのでマラリアにかかって、今日はちょっとマラリア気味なので休みますという生徒が多くいました。欠席の理由はマラリア、ちょっとマラリアと言ってる生徒が多くいました。これが洗濯物をほったらかしているのではなく、干している状況なんですね。最初、僕はショックを受けて、何してるのかな、これ汚れるじゃないかと思ったんですけど、タンザニアの人たちに聞くと、葉っぱの先がツンツンしてるので、そのツンツンしたものの上に乗っければ土がつかない、ノープロブレムということで、この洗濯物をこうやって干していました。これは生徒たちが、お金がないので自分たちで散髪をしているところですね。非常によく勉強をする生徒たちなので、土曜日、日曜日はこうやって木陰に机とかいすを持ってきて一生懸命勉強しています。ほとんど毎日勉強しています。

私が担当したのは、生物です。当初の要請は、まったく違います。当初は物理科の担当として現地の生徒に授業を行い、学校行事や校務運営の効率化に努める、というのが要請書の内容でした。訓練所でも、物理を想定して訓練をしてきました。実際、向こうに行ってですね、校長先生とミーティングした後に、おまえの専門は何だと聞かれて、僕は、生物と化学だということを言ったらですね、じゃあ、好きなところに行けということで、生物科の方に配属させてもらいました。結果としては、僕の好きな生物ができたので、大変

良かったと思います。それから、クラブ活動を行いました。これは後で報告します。ワークショップを行って、情報発信ということで、僕が今勤めている釧路東高校にタンザニア通信ということで、毎月 5 ページくらいの通信を、この写真入りの通信、これを生徒に配ってもらったり、あと教職員の皆さんで、情報共有してもらったりしていました。

授業の風景ですが、一応、机・椅子、あります。これ僕の授業中なのですが、暑いのでネクタイとかは勘弁してもらいました。ポロシャツで汗だくになりながらしていました。雑談は、ほぼスワヒリ語。授業は国の方針で英語でやれということなので、英語でやっていました。でも、意外と生徒たちの英語の理解力が低くてですね、一年くらいたってから授業にもスワヒリ語を入れて、生徒たちの気を引きながら授業をするようにしていました。授業での問題点ですが、これについて僕は 4 点ほど考えてみました。まず、教材の問題点ですが、教科書がありません。テキストですが、イギリス製で一冊 6000 円。とてもじゃないけれど、寮費が 7000 円の生徒が 6000 円のテキストを買うわけがない。なのでほとんどコピー、もしくは学校から借りたものを生徒たちが使いまわしでノートに写していました。それから教室環境ですが、先ほど見ていただいたように窓ガラスもなく、雨季で雨が降るとですね、大変な状況になります。机や椅子が、足りません。それから掃除ができない。これは多分タンザニアの、まあ男子しかいなかったのが問題だと思います。

それから生徒のほうですけれども、生徒は先ほど言いましたように出席がはっきりしない。それから突然いなくなったりいつのまにかいる。授業中もそうなんですが、突然いなくなったりします。どうしたの？と聞くと、「ちょっとマラリアなので今日は帰ります」と。もうマラリアが理由なんですね。教具の問題としては、チョークが非常にもろい、黒板消しがもろい、実験器具が･･･、ということでした。チョーク黒板消し、これはほとんど中国からの輸入です。タンザニア製のチョークもありましたが、指でこうぎゅっと押すと砕けるほど軟らかいです。なので、一回の授業だいたい 2 時間授業ですが、5，6 本チョークを使い切りました。

そんなタンザニアの授業の工夫ということで、今日はこれから行かれる先生もいるということで、ちょっと話をしたいと思います。まずは模造紙やカラーチョークを使ってみました。生物なので図表がすごく多いので、模造紙に全て書いて、これをばっと貼ってですね、生徒にしっかり写させる。使った後はタンザニアの先生に使ってもらえるようにということで、補強して生物科のほうに渡してきました。それから、色を使うということでカラーチョークを使いましたが、生徒は青ボールペンしかもっていないので、あまりカラフルにしてもらうと書ききれないよと言っていました。それから教材の工夫ということで、単純なもので十分なのかなと思いました。顕微鏡なんかも水滴で作ったり、ガラスビーズで作ったり。こういうものは、そのあと生物科の先生方の研修に使いました。それからコンピューターの活用ということで、年齢的には 20 歳前後の生徒でしたので、コンピューターを十分活用して、動画・スライドを見せる。それからウィキペディアなんかからデータベースを使ってですね、色んな情報を生徒に見せてきました。ものすごく夢中になります。

実験室ですが、理数科教師なので実験をしなくてはいけない。実験をとりまく4無いがあります。器具がない、知識がない、試薬がない、時間がない。もうどうしようもないんですが、自分でできることがないかなと思ってやってみたのがこの二つで、顕微鏡の修理と、それから掃除。20台あったうちの半分、10台はなんとか使えるように修復できました。それから試薬、薬品の管理なんですが、劇毒物がそこらへんに散らばっていたので、なんとかしなくちゃいけないなということで、管理方法を提案しました。

実験室はこんな感じです。水道はあります。水は出ますがこのパイプが漏れるので、下にバケツを置かないと実験できません。それからガスは出ません。ガスボンベとかはありませんので、先ほどカンボジアの写真見て、ガスボンベ使った実験をしていてちょっとショック受けたのですが、灯油のコンロもしくは炭のコンロで実験していました。これが僕のいた準備室なんですが、マラリアの恐怖におびえながら、実験の準備をしていました。実験室では標本作り、ここに惨憺たる標本があったので、これちょっと作り直してきました。それから、先ほど言った劇毒物の管理。それからカラーチョーク、僕の自費で購入してここに置いておきました。タンザニア人、シャイなので、頂戴って言わないんですね。なので、ここに置いておくといつの間にか持っていく、というかたちをとって、タンザニアの先生にもカラーチョークを広めてみました。

生物クラブなんですが、色々問題がありまして、この 4 つだけしかできませんでした。なぜかというと、タンザニアの生物クラブは、National Examinationに向けた勉強をさせなさいという方針だったので、だったらタンザニア人でやれと、僕は日本人なので生物を楽しめるクラブ活動をすると、ここでぶつかりまして、折衷案としてNational Examinationにも出るけど生物も楽しめる、ということでこの4つの実習をしました。

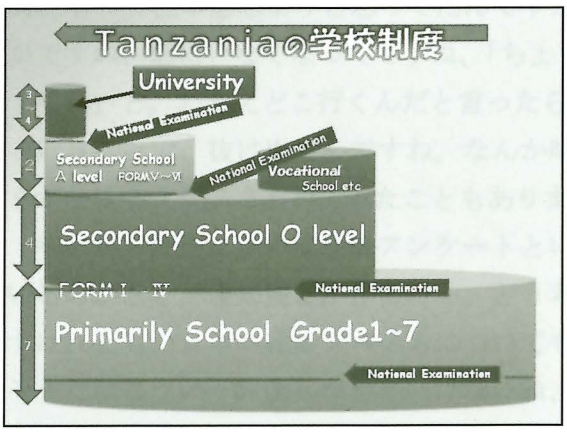
それからワークショップなんですが、生物科の教員との情報共有ということで、常日頃、生物科の先生方と色々話して、ああこれ同じだね、とかこれ違うね、ということで生物の話をしていました。それから生物科教員への指導、というかまあ一緒にやったんですけど、ツルグレン装置、土壌生物を調べるための装置を手作りしたり、あとは、細胞分裂の観察方法なんかを、知らなかったので、これを一緒にやってみたりしました。

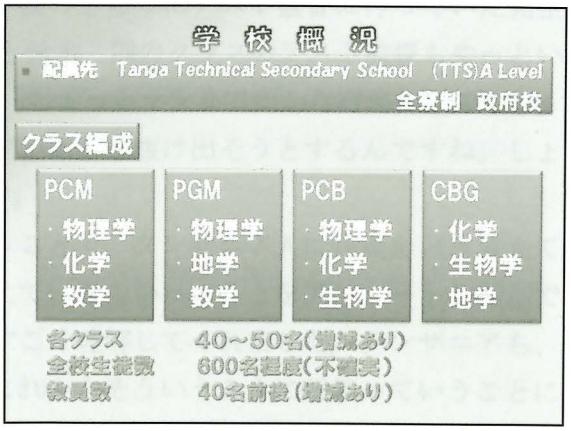
向こうの植物を使わなきゃいけないので、それもいろいろ一緒に採りに行って実験してみました。ツルグレン装置は、本当は24時間電気をつけなきゃいけないんですけども、24時間電気つきっぱなしということがないということに気付きまして、これはちょっと良くないなと、ということで現地の状況を考えないといけないという反省のひとつです。それから、教務科担当の先生方へ指導ということで、時間割や成績処理、エクセル使うと便利だよ、という話をしてですね、電気のある 3 時間くらいにやったんですけども、結局電気がないので、コンピューター使えないので、やっぱり手書きが一番いいかな、というふうに思いました。

タンザニアの学校と日本の学校との比較ということで、違うところを比較したいと思うのですが、まずは、体罰で鞭打ち・草刈、これあの、本当に鞭打ちしてました。鞭といっ

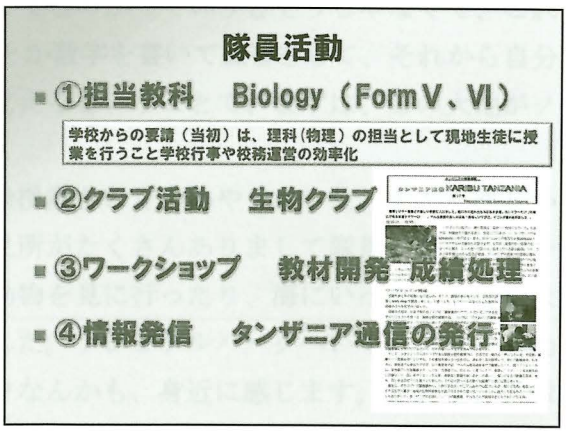
タンザニアの教育の
現状と協力隊活動
18年度1次隊　タンサニア
理数科教師
鈴木　祐二
（北海道釧路東高等学校）

Tanzaniaについて
TANZANIA
首都
DODOMA
公用語
Swahili 語
産業
観光
サイザル
鉱物　など
宗教
イスラム教
キリスト教
通貨
Tanzania シリング(TSH)　$1 = 1,200TSH
土着の宗教

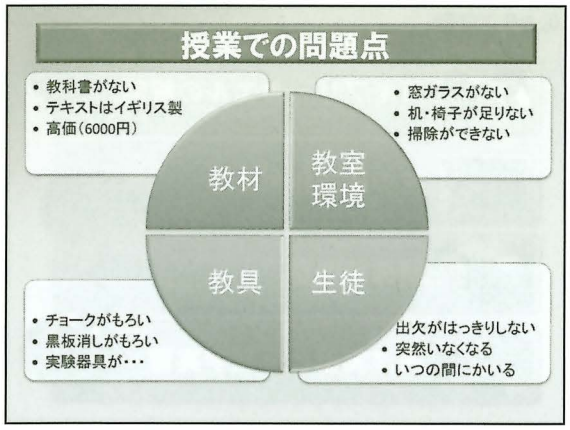

Tanzaniaの学校制度
University
National Examination
Secondary School
A level FORM V~VI
National Examination
Vocational
School etc
Secondary School O level
FORM I ~ IV
National Examination
Primarily School Grade1~7
National Examination

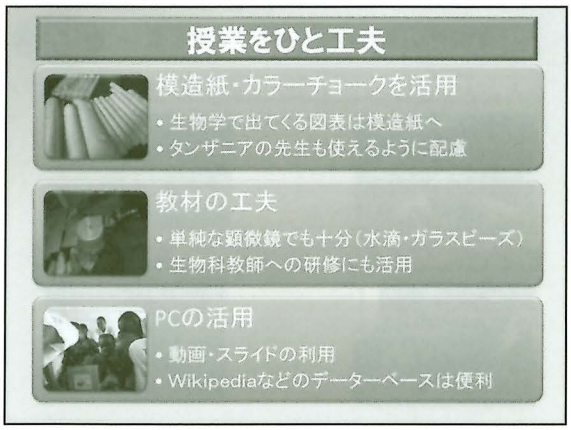

学校概況
配属先　Tanga Technical Secondary School　(TTS)A Level
全寮制　政府校
クラス編成
PCM
・物理学
・化学
・数学
PGM
・物理学
・地学
・数学
PCB
・物理学
・化学
・生物学
CBG
・化学
・生物学
・地学
各クラス　40~50名(増減あり)
全校生徒数　600名程度(不確実)
教員数　40名前後(増減あり)

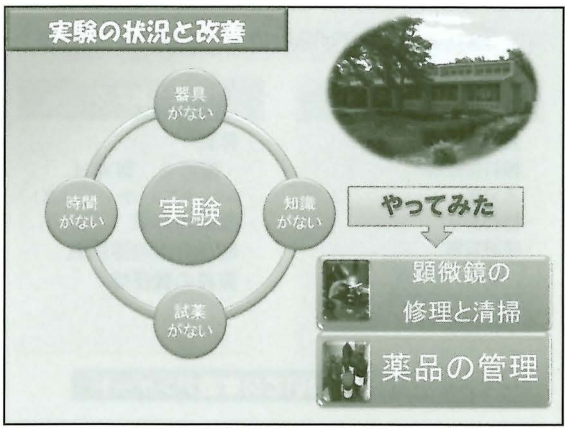
生徒の生活
窓ガラス等はないためマラリアに感かる生徒が多い
洗濯物を干す光景
生徒同士で談笑
日陰を探して自習


隊員活動
①担当教科　Biology（Form V、VI）
学校からの要請（当初）は、理科(物理）の担当として現地生徒に授業を行うこと学校行事や校務運営の効率化
②クラブ活動　生物クラブ
③ワークショップ　教材開発　成績処理
④情報発信　タンザニア通信の発行
KARIBU TANZANIA

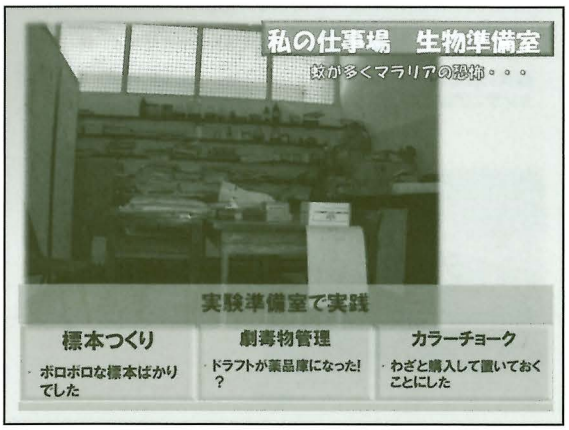
①講義教材
授業の風景
机・椅子はあります。
雑談はスワヒリ語
授業は英語


授業での問題点
• 教科書がない
• テキストはイギリス製
• 高価（6000円）
• 窓ガラスがない
• 机・椅子が足りない
• 掃除ができない
教材
教室環境
教具
生徒
• チョークがもろい
• 黒板消しがもろい
• 実験器具が・・・
出欠がはっきりしない
• 突然いなくなる
• いつの間にかいる


授業をひと工夫
模造紙・カラーチョークを活用
• 生物学で出てくる図表は模造紙へ
• タンザニアの先生も使えるように配慮
教材の工夫
• 単純な顕微鏡でも十分（水滴・ガラスビーズ）
• 生物科教師への研修にも活用
PCの活用
• 動画・スライドの利用
• Wikipediaなどのデーターベースは便利


実験の状況と改善
器具がない
時間がない
実験
知識がない
試薬がない
やってみた
顕微鏡の修理と清掃
薬品の管理

実験室内　ガス水道の設備はありますが、機能していません。椅子も足りません。


私の仕事場　生物準備室
蚊が多くマラリアの恐怖・・・
実験準備室で実践
標本つくり
• ボロボロな標本ばかりでした
劇毒物管理
• ドラフトが薬品庫になった!?
カラーチョーク
• わざと購入して置いておくことにした

②クラブ活動

生物クラブの活動内容

ゴキブリ・カエルの解剖

花の構造観察

顕微鏡観察

海洋実習と分類学実習

③ワークショップ

生物科教員との情報共有

・日本とタンザニアでの実験方法の比較検討。

生物科教員への指導

・ツルグレン装置の作成
・細胞分裂・気孔観察のための植物採集
・インターネットの活用方法
・顕微鏡のメンティナンス方法

教務担当教員へのＥｘｃｅｌ指導

・時間割作成への応用
・成績処理への応用

Tanzaniaの学校と日本の学校　比較

同じところ	違うところ
・制服	・体罰
・教科担任制	・鞭打ち　草刈り
・通知簿	・スクールデューティー（週番）
・校務分掌	・校長の存在
・特別指導	・職員会議の雰囲気
・停学・退学等	・教員の責任感
・頭髪・服装指導	
・学校行事	

やってみた ⇒ 評価についての意識アンケート

任務以外のボランティア活動

小学校での理科実験授業の開催（LUSHOTO LONGO小学校）

ストローの笛で音の勉強

大地が練習帳

音の実験　顕微鏡の扱いと細胞観察　など

熱心に顕微鏡で観察

100名以上の教室

Safari（旅）へ　出発

隊員の楽しみの一つは旅
タンザニアは見所がたくさん！

任地のTangaは海が美しい

サファリカーで動物を探しに出発

チーターの親子

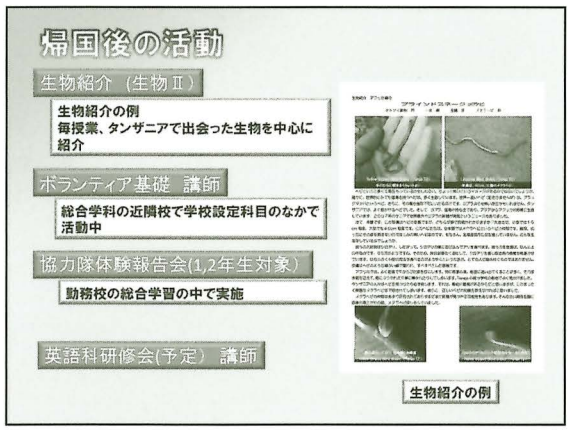
National Park

ライオンの親子

National
Park
Ngorongoro　クレーターの動物たち
タンザニアの国のシンボルは、キリンです

National
Park
威嚇するアフリカゾウ
のんびり草を食むシマウマの群れ

Kilimanjaro
National
Park
Ｋｉｌｉｍａｎｊａｒｏに登頂


帰国後の活動
生物紹介（生物Ⅱ）
生物紹介の例
毎授業、タンザニアで出会った生物を中心に紹介
ボランティア基礎　講師
総合学科の近隣校で学校設定科目のなかで活動中
協力隊体験報告会(1,2年生対象)
勤務校の総合学習の中で実施
英語科研修会(予定)　講師
生物紹介の例

彼らはいつも元気でした
Asante sana Tanzania

エチオピアの教育と現職隊員としてできたこと

冨永　栄治
（18－1，エチオピア，理数科教師，延岡市立東海中学校）

まず任国に関していくつか紹介します。国の宗教はキリスト教です。実際はイスラム教徒と人数は半々なのですが，エチオピアは古い歴史を持っており，その経緯からキリスト教を国教としました。そのため，歴史的な遺産も沢山あり，世界遺産が 8 つ登録されています。アフリカではナンバー１の登録数を誇る素晴らしい国です。しかし多くの人はこのことを知りませんし，アフリカで有名な世界遺産はタンザニアのセレンゲティ国立公園やエジプトのピラミッドなので，もっと多くの人々にこの素晴らしさを発信していきたいと思っています。次に，特産物として有名なのはコーヒーです。『エチオピア』＝『コーヒー』と言っても過言ではないくらいで，これは物凄くおいしいです。是非，現地でコーヒーを飲んで頂きたいと思います。もう一つ有名なものを挙げるとすれば陸上競技（長距離）です。先日もマラソン大会や，国対抗の駅伝大会でエチオピアの選手が活躍していました。続いて，人種・民族について。テレビ番組でよく紹介されるユニークな民族が南部に住んでいます。唇に穴を開け，その中に皿を装飾品としてはめている民族なのですが，すべてのエチオピア人がこういう訳ではありません。ただ，田舎の子ども達は裸足だったりします。エチオピアといえば，裸足のランナー『アベベ』が有名ですが，未だに裸足の子もいるという現状です。次に街の状況に関して。首都アジスアベバが私の勤務していた街ですが，やはり首都は都会です。ただ，都会ですが，まだロバや馬が交通手段として使われていたり，家畜の羊や山羊がよくうろうろしていたりします。アジスアベバは“大きな田舎”と形容されることもあります。また，驚くことに道端には路上生活の人々が多くいて，中には生死の判別できないような人も沢山いました。悲しい事実です。アフリカといったらどこの国もこのように同じ現状かと思っていたのですが，旅行でタンザニアとマラウイに行って驚きました。全然違うのです，街の状態が。エチオピアというのは途上国の中でも，厳しい状態であるのだと他のアフリカ諸国を見ることで分かりました。（他の発表者の任国であるナビミア，タンザニアなどは豊かな発展している国なのだと，私から見たら思える国です。）

それでは配属先の概要を紹介します。エチオピアの協力隊派遣の歴史は古いのですが，教育分野に派遣される歴史は浅く，過去に理数科教師派遣は数えるほどしかありませんでした。私の派遣先はアジスアベバの高校でしたが，私が最初の隊員派遣であり，学校に外国人は私だけでした。生徒数は非常に多く約 4200 人。この内訳は，学校が足りないので午前と午後の 2 部制になっているためです。私の専門は数学でしたので，数学教師として赴任しました。意外だったのは学校には制服があったことや，毎朝全校集会を行い，国歌斉

唱と国旗掲揚をすることです。教室では長椅子・長机に生徒がギュウギュウ詰めで，1クラス90人から100人位います。この人数相手に授業するのは最初大きな不安があったことはお察しいただけるかと思います。

活動として，一つめにやったことは，もちろん通常授業です。教師として来ていますので，授業に全力投球させて頂きました。そこで感じたことは，生徒は日本もエチオピアも変わらない，ということです。黒人だろうが黄色人種だろうが，途上国だろうが先進国だろうが関係ない。例えば面白いことに，高校生ぐらいになると勉強するのが嫌いなのです。日本の子ども達も授業中に「面倒くさいなぁ，面白くないなぁ」というような表情をすることが多いですが，エチオピアの子ども達も結構そんな感じでした。「学校に何しに来ているのかわからない」「とりあえず来ている」という状態です。もちろん，そこを面白くして，学ぶことに意味を見いだすような授業をするのが私たちの仕事なのですけれども。私達は学校や教師が少ない途上国に派遣されているのだから，「子ども達は学びたい意欲で溢れているのだろう」と勝手に思いこんでいましたので，この現状はある意味ショックでした。ただし，エチオピアでも地方の学校がない所は別です。JICAのプロジェクトで，地方に小学校を建てるという案件があったのですが，そこでは「うちの村にやっと学校ができた！勉強ができる！」といって子ども達が目を輝かせて授業を受けています。学校ができたことに地域住民みんなが喜び，誇りを持っています。ところが，もう学校があって高等教育も普及してくる都市圏では，子ども達が学校に来ることがある程度当たり前になってきて，先述のような感じで授業を受ける子ども達が多くいる。なんだか，日本と一緒だなぁって思ったのはそういうところです。ただ，エチオピアの高校での授業は，受験のための知識偏重型の講義ばかりで，面白みが無かったのは事実です。受験の結果でその後の人生が全て決まってしまう教育制度だったために，点数に固執した受験教育になっているのはやむを得なかったのだと思います。こういう面で，本当の勉強するおもしろさを知らない・伝えられていない子ども達は非常にかわいそうだと思いました。

それから，驚いたことにプラズマテレビが教室にありました。エチオピアは，教師数が足りない・教室が足りないということを補う手段として，テレビを配置したのです。日本でいったら教育テレビ番組を想像して頂いたらいいのですが，テレビを使って授業をしようという政策をとっていたのです。評価制度とか免許更新制とか，教師の研鑽が求められる日本とは正反対です。このテレビは，ボロボロの教室に立派な日本製の大型のものが備え付けられていて，非常に不自然な光景でした。（設置には，諸外国からの援助がかなり入っていたと思います）エチオピア人は日本製のテレビを見て，「日本も同じようにテレビを使って授業をしているのだろう。」と勘違いしておりまして，「いや違う」と，誤解を解くことが，私が日本の教育現状を彼らに伝える最初だったような気がします。ただ，このようなテレビがあったとしても，電力供給が不十分だったり機械の不具合があったりすることもあり，使えないことも多くありました。その時はテレビなしで授業を行います。しかし，途中からちょっとテレビが不具合になると，生徒が「先生，テレビを消して先生が授

業をしてくれ！」と言うようになってくれたのが嬉しかったです。最初，戸惑いながらの授業でしたが彼らが私の授業を認めてくれ，分かりやすいと感じてくれた結果でした。

ただ，正直なところ私は英語が大の苦手で，非常に苦労もしました。それに，教科内容ですが，エチオピアで教えていたのは高校数学になります。私は中学校教員ですので，教員経験はあったとしても高校数学の内容を教えるのは初めてでした。このように当初，授業を行うにあたって不安要素は多くありましたが，先述のように生徒が認めてくれるまでの授業を行うことができたのは，今まで現職としてやってきた経験が大きく役立ったと思っています。実際，授業を行う力（授業展開力）は英語力とは別の力だと自分では信じていました。質問や板書の仕方・教材の工夫・生徒とのコミュニケーション・生徒指導力など，現職教師として経験を積んできて本当に良かったと思います。もちろん，最終的には「どげんかせんといかん！」という熱意が必要不可欠だったのは言うまでもありません。

このテレビ以外にも，途上国ですので学校現場には多くの問題がありました。小さい問題でいくと，例えばテストの問題。教師間でテスト問題を事前にチェックしあうことが無かったため，テスト問題自体に多くの誤りがあって，テストの最中によく生徒からクレームが来ました。私がテストを作ったわけではないのに，数学のテストだったら当然数学教師である私にも文句がきます。そこで，日本では当たり前ですが事前にテスト問題を確認しあうようにしました。もちろん，これは簡単にそうなるわけではありませんでした。自分から働きかけて，ようやくテスト前にそういうチェックを教師同士お互いにできるようになりました。次に教師の問題。実はエチオピアでは教師という職業が非常に人気のない職業で，賃金が安いということが一番の問題でした。そのため，40 歳以下の若手の教師はみんな転職を考えています。すごく授業が上手かったり，生徒から慕われたりしている先生程，力があるため転職をすぐ行うのです。そういう同僚に対して，「子ども達のために頑張って教師を続けたほうがいいのでは？」と私が言うのは勝手ですが，その人の人生を考えたら転職して高い給料を貰った方がいいと思えるため，この問題はすごく難しい事だと感じました。

二つめに行った活動として，セミナーがあります。理数科教師として，理数科のおもしろさを実験や操作活動，興味深い問題を通して感じて欲しい，という思いで通常授業とは別に，週末や休暇を使って他の理数科教師隊員と共に国内各地を回りました。いろいろなワークショップ形式にしたり，数学では，はさみで折り紙を切らせる操作活動をしたりグループワークをしたりしました。対象は高校生に限定せず，小学生向けにも行いました。このように対象を幅広く，「依頼されたらどこにでも行って授業しますよ！」というスタンスで行っていましたので，私自身も楽しくやっていました。場合によってはセミナーに同僚のエチオピア人教師にも参加してもらうこともあったのですが，彼らも楽しんでいたように思えます。また，学校があまりない地方に回って授業をする方が，生徒達の関心も高く，感動していたように思いました。それから，同時に核や原爆に関するセミナーも行いました。ちょうど私が赴任した当時は，北朝鮮が核実験を行った時で，このニュースが世

界中に報道されていました。同僚から，「おいエイジ，日本は今大変じゃないか。北朝鮮にミサイルで狙われているぞ。お前は日本人として核に対してどう思っているんだ？」というような質問をされたりしました。日本は唯一の被爆国ですし，私は以前広島に住んでいたこともあったので，きちんと核に関する思いは伝えなければならない，と考えました。もちろん，理数科教師としては，セミナーで科学技術の素晴らしさも伝えるのですが，同時に使い方次第で恐ろしいものなのだということも一歩踏み込んで伝えたいと思って行いました。科学の功罪の両方を伝えること，そしてそれをどう使うのかは私達人間次第なのだ，という非常に大切な事で，道徳的な扱いにもなりました。もちろん，原爆に関するセミナーは科学的にも歴史的にも正確に伝えたかったので，広島の平和祈念資料館に協力をしていただき，送って頂いた資料を使用するなど工夫しました。

結果的にこれらのセミナー開催により，多くの子ども達に理数科の面白さを伝えることができたと思います。しかし，私達日本人がエチオピアの子ども達に対して授業をすることで終わるのではなく，エチオピア人教師がこういう素晴らしさを分かってくれないと意味がない，日本人がいくらやっても現地のエチオピア人に根付かないとだめじゃないか，どうにかしてこれらの教育理念や教育技法を伝えることはできないか，ということが私達理数科教師の最終的な目標でした。もちろん，セミナーは私一人がやってきたことではなく，全部の理数科教師隊員で頑張ってきたことなのですが，この努力が実り，エチオピアの各地にある教育事務所の所長と話をしたり，最終的にエチオピア教育省の副大臣と話をしたりすることが出来ました。（日本で言うと文部科学省の副大臣という立場のすごい方です）私の任期の最後には，エチオピア人教師向けに同様なセミナーも開催することができました。これは大きな成果だったと思います。ただ，現実的な問題として，先述のように教育課程は学校ごとの枠ではなく，国の政策です。エチオピアの高校教育の方向性が受験一辺倒であるという事と，テレビを使わないといけないという縛りがある以上，私達が理想とする教育は普及・継続が難しいというのも分かっていました。今後の協力隊の理数科教師をエチオピアに派遣していく方向性の問題にも関わります。そこで，最終的にそのようなテレビが配置されていない小学校高学年の段階で私達が理想とする理数科教育をやっていったらいいのではないか，という方向性までJICAエチオピア事務所の方と探ることができました。私達の活動は微力ではありましたが無力ではなかったと思っています。これは先輩隊員から続く努力の賜であり，今後の理数科隊員の活動につながることだと信じています。

また，メインの活動ではありませんが三つ目の活動として，地域で補習授業を行いました。学校での通常授業は教育課程の制限がありすぎて，自由に授業ができなかったのです。結局は受験のための授業で，生徒の点数をどう上げるかということが問われた部分でしたので，派遣前にイメージしていたものとギャップがありました。むしろ「教室がなくて，青空の下で授業するのが協力隊ではないか！」というのがイメージだったのですが，行ってみたら全然違ったので，自分が自由に授業できる地域に出かけていきました。もちろん

本当は，私は自分の学校で放課後に授業がわからない子ども達を集めて，補習をしたかったのですが，放課後は同僚のエチオピア人教師が副職として塾みたいな事をして月謝を生徒から受け取っていました。そこを日本人が補習を無料で行ったら，金をもらってやっている同僚の立場が悪くなるのです。そのため，自分の学校ではできなかったわけです。ただ，彼らが悪いのではなく，貧しいが故に，少しでもお金を稼がなければならない実態があるため，その現状も仕方がないと思いました。彼らもお金を稼ぐために必死なのです。そこで，最終的にどこに行ったかというと，他の協力隊の保健師隊員が訪問看護で回っていたエリアのコミュニティーに自分が出て行って授業をしました。そこのコミュニティーはエイズ患者が多く，親がいなかったり貧困層が多かったりしたため，子ども達が無料で補習授業が受けられることは，彼らにとっても，そして私にとっても，ラッキーでした。授業は自分のペースで，彼らの分からないところをじっくり取り組むことができました。また，教員経験のない同期の理数科隊員と一緒に，その補習授業を使って授業研究会をしました。同期の隊員がうまく授業ができないと悩んでいた時期もあり，お互い授業を見せ合い（日本でいったら研究授業），授業の帰りには喫茶店に行ってコーヒーを飲みながら，現職参加の私がアドバイスしたり，授業方法の議論をしたりしました。

他にも，四つ目の活動として開発教育ワークショップというのを行いました。協力隊経験者は，帰国後の社会還元が求められています。特に現職参加の私の場合は，これが大前提で行きますので，「帰ったらどういう事をしよう」と思いながら活動をしたのですが，他の隊員がすべてそういうことを考えて活動しているかというと，決してそうではありません。この社会還元活動の具体的方法論は，私が派遣された平成18年当時，そこまでクローズアップされていませんでした。しかし，帰国後「出前講座」と題して協力隊経験者は学校で講演活動を行うことが多くあります。その為，任国にいる時に，どのようにすれば講演をうまく行えるかみんなで学びましょう，と提言してワークショップを開きました。言わば開発教育をみんなで学びあったのです。対象はエチオピア派遣の全隊員にＪＩＣＡ事務所を使って行いました。もちろん教育分野の隊員だけではありません。ただ，私のような教師経験者は学級活動や道徳や総合的な学習の時間で使う手法が講義をするときに有効だということを知っています。発問の仕方，現地の物や写真・映像の見せ方，現地語をしゃべる，…など，どういうふうにやればうまく伝わるかという事をみんなで一緒に考えました。このワークショップをすることで，今の自分達の活動や任国であるエチオピアを見直すこともできましたし，他の隊員の活動も理解することができました。また，派遣中に画像として記録しておいた方がいい物や珍しい現地の物などを集めた方がいい，といった視点も持つことができたと思います。

それ以外に，五つ目の活動として，エチオピア体操作成というのを行いました。これは日本のラジオ体操にあたる体操を，エチオピアで広めようとしたものです。エチオピアはダンスが盛んで，みんな各民族独自のダンスを踊れます。ところが，体育の授業で体操しようとすると体操が全くできない。その現実を体育教師として派遣されている隊員がすご

3. 苦労したこと/嬉しかったこと

- コミュニケーション(語学力不足)
  子どもたちの深い部分に入れなかった・・・
- 日本人コミュニティーの位置づけ

ポジティブシンキング

- 「隊員活動は別に誰かと比べるものじゃないんじゃない・・・?」
- 世の中には幸も不幸もない、
  ただ考え方でどうにでもなるのだ
  (ウィリアム・シェークスピア)
- アジス隊員だからできること

3. 苦労したこと/嬉しかったこと

- コミュニケーション(語学力不足)
- 日本人コミュニティーの位置づけ
- 様々なものの見方・考え方に触れる
- 子どもは同じ、そして慕ってくれたこと
- 「授業が分かりやすい」の一言
- ムカつくけど、貧しいけど、でも優しさもある
- 教師向けセミナーの開催

4. 協力隊としてこれから行く人へ

- そんな、アドバイスなんておこがましいものではありませんが・・・
- 1年9ヶ月で、自分なりに考えたことを

自分の『原点』は何か?

- 行きたくても行けなかった協力隊
- 来られた事にまず感謝、そして感謝
- 自分が協力隊に来た思い、『原点』は?

"せっかく"来たのだから!

- やれることはやったほうがいい
(それも一人ではなく複数で。結局はチームワーク)
- **No pain, No gain.**
  痛みなくして得るものなし
- 僕の前に道はない
  僕の後ろに道はできる
  (高村光太郎)

私が学んだこと・・・（内的）

- 自分の弱さ、未熟さ、勉強不足、無知（逆に周りの人はなんてすごいんだ！という事）
- “生かされている”ということ
- 日本の発見・日本人としての意識

エチオピアを通して常に日本を見ていた

私が学んだこと・・・（外的）

- 日本では知らなかった、開発途上国の状況・援助の実態を見て聞いて感じることができた。
- それに対し、一層の関心を持てたこと。
- 様々な人々が様々な環境・文化の中で生きている。それはさらに幅広いものの見方や考え方を必要とし、思いやりや人間愛の精神が根底にいると思う。
- 世界の中での日本の立場・・・

日本はどうなのか・・・？

- 学力低下

OECDの学習到達度調査(PISA)

・科学的応用力　1位（'00）→2位（'03）→6位（'06）
・数学的応用力　2位→6位→10位
・読解力　8位→14位→15位

- 不登校、いじめ、自殺・・・
- 教師の心の病　10年前の3倍

病気休職者のうちの6割超が精神性疾患

これから・・・

- 自分が学んだこと・感じたことを少しでも日本の子どもたちに伝えていきたい。
- 日本の素晴らしさ・・・、それと同時に日本にだって問題は山積している。
- 子どもは宝、日本の・・・いや、世界の明日を担う国際人を育てる一助となりたい。

とは、言いつつも・・・

- 現在中学2年生の担任です。
- 全く時間の流れが違う日本で、まずは教師としての通常業務がきちんとできること！（周りの同僚に認められること。それは任国でもエチオピアでも一緒だと思う。）
- 学級活動、道徳、出前講座、・・・、少しずつ少しずつ自分が社会還元できるフィールドを広げていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました

皆様との出会いに感謝。今日この場で発表させて頂けたことに感謝です。

冨永栄治

「風の音が聞こえる」

川村　ひとみ
（18－1　養護　パラグアイ共和国　横浜市立東小学校）

おはようございます。南米パラグアイで、養護隊員として活動し、昨年の３月に帰国しました。今回、お話させて頂く時間をいただきまして、1年前の活動を振り返ってみました。これから行かれる先生方の参考になればと思います。

それでは早速始めたいと思います。声、聞こえますでしょうか。大丈夫でしょうか。まず、題名ですが、なぜこんな詩的な題名を付けたのかといいますと、それはパラグアイで出会ったある難聴のお子さん、聴覚障害のあるお子さんの言葉、印象に残った言葉からこの題名に使わせていただきました。こちらの写真のほうはちょっと違うのですけれども、特別支援学級の担任をしておりましたので、そのときの写真で、私の一番気に入っている写真を使っています。今日はせっかくですので、パラグアイのことについても少々紹介させていただきたいと思います。それに続いて、私の活動の中心でした難聴のお子さんとの交流についてお話させていただきます。

まず、パラグアイですが、皆様はご存知だとは思うのですけれど、帰国してからも行く前も、パラグアイと聞いて「そこってどこにあるの？」いう質問がありました。サッカーのお好きな方でしたら、「あっ、南米の国かな。」というふうにはご存知なのですが、では一体どんな国だろうかというと「うーん、知らない。」という人が多かったと思います。意外に、日本との繋がりは長く、入植73年を迎えます。第二次世界大戦後、日本は、ラ・コルメナという一番最初の入植地の日系人から支援物資を受けています。サッカーが強いのはとても有名です。ここに南米一・世界一の親日国とありますけれども、本当に、日本人に対する信頼が厚くて、そのお陰で、私もだいぶ活動しやすかったと思います。本当にパラグアイ人の人柄に助けられました。

年間を通してとても暑い国なのですけれども、一応四季はありまして、ちょうど日本の夏にあたる頃は気温5℃という日もあります。今日の、今の日本よりも寒い日もあります。

パラグアイ人は日本にとても関心があるので、色々なことを知っています。広島・長崎の原爆のことも知っていましたし、日本の電化製品がとても良いとか、日本車に対する憧れですとか、ワールドカップを日韓共同開催したこととか、また、ちょっと誤解ですけれど、みんな空手ができるのと言っていたり、ジャッキー・チェーンは日本人だと思っていたりしました。日本で働きたいというパラグアイ人も多く、第二外国語に日本語を取り入れようという文科省の決定も、私がパラグアイにいる間になされたと思います。

（パラグアイの人々は日本に対して）治安が良い国というイメージがこれまでありましたが、無差別殺人ですとか、食品の問題ですとか、そういうニュースがどんどんパラグア

イに入ってくるので、ちょっと今の日本は危険かなということを、パラグアイの人から言われることも最近は残念ながらあります。

このように、パラグアイ人が日本のことを知っているほどに、日本人はパラグアイを知らないのではないかと思っているので、今後は、パラグアイの紹介をしていきたいなと思っております。

パラグアイは南米の真ん中にあって、小さいように見えますが、日本とほぼ同じくらいの面積があります。私がいたのが北部のコンセプシオンという県で、ちょうど南回帰線上に位置しているので、日本の冬至のときに太陽が真上になって影がなくなるそうです。

こんなふう（写真）に、動物たちと共存しておりますので、毎日のように牛、馬、色々な動物たちとすれ違っていました。こんな（写真）綺麗な夕日も見ることができました。

さて、本題に入りますが、私が活動していたところは、フォルトゥナタ・グレスネル学校といってミッション系の学校です。私立なのですが、決して経済的には裕福でないお子さんが来ていました。約 330 名のお子さんがいらしたのですけれども、下は幼稚部というか大体 3 歳児くらいから、障害をお持ちの 3 歳児くらいから、上は日本の中学 3 年にあたる 9 年生までいましたが、そのうちの約 3 分の 1 は、軽度発達障害を含めて、何らかの障害を持っているお子さんたちでした。授業が二部制だったので、午前・午後合わせて４０名の教員、そのうち 5 人はシスター、というか修道女ですね、も含まれていました。私はその午前･午後両方活動しておりまして、午前中は主に特別支援学級の担任として、午後は聴覚障害のお子さんの個別指導をしておりました。うちの学校の、フォルトゥナタ・グレスネルの特色としては、難聴学級というのがあったというのが大きな特色だったと思います。特に聴覚障害のお子さんは全校の約一割いました。積極的に、難聴児を受け入れておりました。統合教育というのを目指して設立された学校なのですが、いろいろな問題がありました。ボランティア派遣にあたっては、要請内容というのがあるのですけれども、特に現職教員には、「現地の先生方に対する指導」というのが含まれていたと思います。そして子どもたちへの指導。パラグアイは、私が派遣されたときはちょうど障害児教育の歴史が 50 周年だったのですが、実際には大学に養成する課程がない、知識がないままにクラスを持たせられる、という言い方は良くないのですけれども、そういう先生方もいらっしゃいました。また、日本のように年齢や経験年数によって賃金が上がっていくわけでもないので、やる気のある先生でも、労働意欲がなかなか持続しにくくなって・・・。実際教材を作ろうとしても教材費がないので、先生の少ない給料から出さざるを得ないような状況でした。

そこで、主に次の３つの目標を立てました。「特別支援教育の質的向上を図る」という、とても偉そうな内容ですが、一応これは要請内容を踏まえて決めましたが、出来る範囲でそれを目指していきたいと思いました。

また二つ目、これは私の活動の中心になるのですけれども、私は、元々横浜市の通級指導教室で難聴のあるお子さんに対する指導を主にやっていたので、自分の慣れているとこ

ろというか、自分のこれまでやってきた活動を生かせるということで、これを目標の一つにいたしました。

また最後は、パラグアイという国の文化交流を間接的にでもできればと思い、３つめの目標としました。

まず、一つ目なのですが、午前中は特別支援学級の担任として、パラグアイの先生と組んで担任として指導をしました。というのは、一応語学訓練を受けてはいますが、とても拙いスペイン語で、いくら経験があるとはいえ、それなりにプライドのある現地の先生方に対して、指導する立場となるのは非常に難しいと思います。また、要請があるからといって、先生方がそれを望んでいるかというとそれもまた別です。校長先生は勿論それを希望されて要請してくださっているのですけれども、じゃあその現地の先生方も積極的にボランティアを受け入れるかというと必ずしもそうではないので、一緒にやりながら教材を作ったり、子どもたちに伝えながら、いいと思ったところを取り入れていただいたり、ということを通して、最初の目標の達成としました。で、これ（写真）はダンボールで作ったのですが、なるべくお金をかけず廃材を使ってできるものを考えて、子どもたちの指導に使っていきました。

次に、二つ目の目標、聴覚に障害のある子どもに対して聴覚保障、つまり聞こえの保障を図ると共に、聴覚活用を進めたい、というものがありました。

というのは、フォルトゥナタでは、聴覚に障害のあるお子さんを積極的に受け入れていました。ですから遠方からも来てくれました。寮がありまして、そこで寝泊りできるようになっていました。また、シスターたちはイタリアで聾教育を学んでいるので、それなりの知識はありました。でも実際は、補聴器がないにもかかわらず聴覚口話法、つまり音声言語を身につけさせて、口を読み取って普通に対話ができるような指導を目指していたのです。日本での昔の聾教育もそうだったのですけれど、少なくとも日本は補聴器をした上での聴覚口話法でした。ところが補聴器がないのに、音声言語で話せ、手話はだめだ、という悲しい現実がありました。

そして、聴力にはレベルがあって、少し聞こえるお子さんから殆ど聞こえないお子さんまでいるはずなのに、「喋れないのはあんたの頭が悪いからよ。」とか、「なまけものだからよ。」と、シスターたちが言っているのを聞いて本当に切なくなりました。

そこで、私が何かできることはないかと考えました。

で、まず、聴覚の障害のあるお子さんたちの気持ち、こんな思いでいるのだよ、ということを知ってもらいたいと思いました。また、午後は聴覚に障害のあるお子さんの個別指導を行っていたので、その場面だけでも少しでも聞こえるようにしたい、音を入れてあげたいと思いました。

そして、（フォルトゥナタには）音楽という授業はなかったのですけれども、音を楽しむ気持ちを、音に気づく気持ちを育てたいなと思いました。

そこで、まず始めに、まだ（パラグアイに）着いて間もなかったので言葉は拙かったの

ですが、パラグアイ人の協力を得て、研修会を開きました。先生方を対象に、聴覚障害にはこんな色々なタイプがいるんだよとか、聞こえないことでこんなことが困るんだよという話をしました。で、次いで三月には、お母さん方を対象に研修会を開きました。（写真）ここにいらっしゃるのは、耳鼻科の先生です。先生と一緒にお話をさせていただきました。

「聴覚活用までの道のり」ですが、何とか、せめて言葉の指導をしているときだけでも、音を増幅して聞かせたいということで校長に相談したところ、「姉妹校には訓練器があるけどうちでは高くて買えない。」ということで、姉妹校というのはパラグアイに四校同じような学校があったのですけれども、その中の一校に訓練器があり、それを見に行ってきました。ですが、実際には使われていない状態でした。

次に、これは今回お世話になった筑波大学の先生方ですが、現職教員をサポートしてくださるので、そこを通して何かいい方法はないかということで、相談させていただくことができました。本当にお忙しい中、何度も何度もメールを通してアドバイスしてくださいました。

また、シニアの電気隊員に相談して、音声増幅器は作れないか、コストを下げて作れないか、そういったことを相談しました。で、最終的には補聴器ということになるのですけれども、実は最初の段階では、補聴器については全く考えていませんでした。というのは、補聴器は、使うにあたってはフィッティングという作業が必要です。色々高額な機械が必要なので、パラグアイでそれを実践するにのまず無理だろうと思って、補聴器のことは、最初は考えていませんでした。

庄司先生が早速調べてくださいまして、全国の聾学校に呼びかけて、聴能訓練器というものが使われないで眠っているということが分かりました。それを送ることができるかもしれない、ということだったのですけれども、一つ一つがとても重く、また送料をどこからも調達することができなかったのです。パラグアイの方でも、外務省の「草の根無償資金」ですとか、JICA の活動費ですとか、問い合わせたのですが、送料を出すのは不可能だと言われ、これは諦めざるを得ませんでした。庄司先生は実は、ポケットマネーを出してでも送ろうかとも言ってくださったのですが、さすがにそこまでお願いすることはできませんでした。また、これはメールでのやりとりだったのですが、過去の隊員から、やはり同じように補聴器を送ってもらったけれど、結局は使わなかったと、使えなかったと、だから補聴器は諦めて、聴覚に頼らないコミュニケーション法を指導した方がいいという意見もありました。また、聾教育を専門とされてきた先生には、補聴器があってこその聴覚活用であるのに、補聴器がないのにやろうなってそんなの無理、という厳しいご意見も頂戴しました。そこで、シニアボランティアに頼んで、とにかく簡易なものでも作ろうと思って、出来上がったのがこれ（写真）です。これは全部パラグアイにある材料でできています。で、この子（写真）がこれを使って、発音の練習をしているところ（写真）です。初めて使った時は、音が増幅されたので子どもたちはとても喜びました。ところが、暫くしてから嫌がるようになってしまったんですね、使うのが。というのは、あ、これすいま

せん、資料の方は漢字間違えております。すいません。こちらの方ですね。確かにパラグアイにある材料で作れます。で、低価格でできるのですが、問題点としては、ラジオの音まで、周波数の関係でしょうか、拾ってしまう。騒音も一緒に増幅されてしまうので、子どもたちにとってはただうるさいだけで、もうそれだったら使わない方がいいということで、静かな場所で、軽度なお子さんに対しては効果があるのだけれども、常時使っていくのは難しいなって正直思いました。そんな時に、日本の、これまで一緒に、あの、派遣前に一緒に仕事をしていた先生から、多分庄司先生を通してだと思うのですが、私がそういうことで悩んでいるっていうことをお知りになって、その先生からメールを頂戴しました。通級教室で現在使用していない箱型補聴器を使ったらどうかと。箱型補聴器は、調整しやすいし、イヤホールドという耳型を作らなくてもなんとかできるし、普通、補聴器っていうのはボタン電池ですけれども、単三や単四の電池でも使えると。ということは充電池で対応出来るので、子ども達が電池を買わなくてもいいということで、これだったらいけるかもしれないと思いました。ただ先程申し上げたように、送料というものの出所がないので、横浜市の、難聴・言語通級指導教室の先生方の寄付によって、送ってもらいました。そして、フィッティングエイドの簡易なものも送ってもらいました。ここにお名前を書かせていただいたのですが、実は偶然にも、私は帰国してからこの学校に転任になったので、なにか不思議な縁を感じています。

これが二つ目の目標なのですが、3月に補聴器が届きました。ただ子どもたち全員分はなかったので、装用をする子どもについては、校長先生と相談して決めていきました。これ（写真）が箱型補聴器です。これ（写真）が簡易のフィッティングエイドですね。で、補聴器をフィッティングするのにはとても時間がかかりまして、子ども達の聴力をみて合わせて、教室で実際使っていって・・・という、積み重ねが必要なんです。これ（写真）は難聴学級で使っている様子です。まず最初は一時間、次の日には二時間、というふうに、時間をかけて使ってきました。これ（写真）は、パラグアイ人にはこういう発想はなかったのですが、一応（補聴器を）使うにあたっては、保護者に承諾書というのを書いて頂きました。これ（表）は補聴効果をみるテストですが、子どもたちがよく知っている20単語を、補聴器がある状態・無い状態で、それぞれ口を見せたときと見せないときとで、どのくらい聞き取りに差があるか、ということを調べました。口を見せた場合は、補聴器があるときと無いときとでは、20%の違いなのですが、口を隠してしまうと、補聴器がないと10%の聞き取り率でした。ところが補聴器があると70%の聞き取り率でした。下（表の下の数値）は母音が正しく聞き取れた割合です。これ（動画）がその様子です。ご覧ください。どちらも口元は隠しています。まずは補聴器がない状態です。はい。補聴器があるとちゃんと聞き取れて、何といっているのか、どういう言葉かがわかるということで、このお子さんは私が補聴器を渡したときに、補聴器にチュッとキスをしていました。

後期、活動には前期後期と分けて考えていたのですけれど、後期も引き続き補聴器装用指導をしていきたいと考えました。幸いなことに、神奈川県の先生方の、パラグアイ視察

の旅というのがありまして、それに同行したＪＩＣＡ横浜のスタッフを通し、さらに第二弾として補聴器を受け取ることができました。難聴一人ひとり、個別指導を通して補聴器装用の練習したのですが、そのとき（初めて補聴器をつけた時）に、気付いた音を言ってと言ったときに、あるお子さんが、「風の音が聞こえる。」、「水の音が聞こえる。」、「カサカサする、枯れ葉の音が、それを踏んだときの音が聞こえる。」と言ったこと、それがとても印象に残っていて今回の題名にさせて頂きました。

補聴器を送ってくれた通級指導教室へ、クリスマスに向けて礼状を作成しました。このお子さん（写真、少女）は補聴器をとても喜んで使っていたお子さんだったのですが、ある日、突然いなくなってしまったんです。どうしてかな、補聴器も置いていったんですね。そうしたらどうも家の事情で、お母さんの具合が悪くなって、家に帰らなければならないということで帰ってしまったんです。そこで担任の先生にお願いして、どうしても彼女に会いたい、補聴器を渡したいということで（彼女の家に）連れていってもらいました。彼女はこれ（ポリタンク）を二つですね、ポリタンクですか、なんという名称かわからないのですけれど、これを二つ持って水汲みしていました。洗濯もして、兄弟の世話もしていました。本当に貧しい子なのに、貧しい家の子なのですけれど、すてきな笑顔でした。

そのほかの活動としては、パラグアイと日本との文化交流を図りたいといった大それた目標をたてていたのですが、パラグアイの人たちは、広島・長崎、原爆を知っていて関心があったので、「平和への祈り」展（原爆展）を開催しました。この２人の子ども（写真）も聴覚障害児で、音声言語はほとんどなく、あまり話せなかったのですが、とても器用でしたので、来場者に対して鶴の折り方を指導するという活動をしてもらいました。コンセプシオン市内の学校に声をかけて、五日間で1500人以上の児童・生徒に来てもらいました。もちろん私一人ではできなかったので、同僚の先生方、そして生徒たちに手伝ってもらいました。また、子どもたちが作った作品ですとか、教材を展示する機会があったんですよ。そのとき、特に店番のようなものは頼んでなかったのですが、子どもたち、特別支援学級の子どもたち、難聴の子どもたちがすすんで来て、手伝ってくれました。これ（写真）、先程のお子さん、さっき水汲みをしていたお子さんなんです。普段はこういう綺麗な制服を着ています。

そしてそれ以外に、同じ養護の隊員で、粘土を、美術教育を専門にしていた隊員を呼びまして、障害がある子どもたちに指導してもらいました。で、それを（行事の時、保護者や先生方に）子どもたちが売りました。

そして、難聴のお子さんには打楽器というのがとても効果的ですので、それを通して音楽の楽しさを伝えたいと思いました。というのは、打楽器というのは、低い周波数の音なので、比較的音の存在を感じやすいということで、効果的です。ところが、届いたのが予定していた10月ではなく１月になってしまって、子どもに直接指導する時間がなくなったので、先生方に知ってもらうということで説明会（楽器の演奏法）を開きました。

どうもすみません、駆け足になってしまったのですが、最後にこれだけ。

活動を振り返ってみて、ほとんど言葉がわからないという状態で、ちょっとだけ難聴児の気持ちが理解できたように思います。子どもたちは聞こえなくても、音楽を楽しんだり、ダンスを楽しんだりしています。

帰国後は広島を訪れて、「平和への祈り」展の来場者の皆さんに作っていただいた千羽鶴を納めてきました。

すみませんでした。なんか駆け足で。ご静聴ありがとうございました。

活動報告「風の音がきこえる」

～パラグアイの難聴児との出会い～

横浜市立東小学校
川村ひとみ

報告概要

- パラグアイってどんな国？
- パラグアイでの活動
- 聴覚までの道のり
- 私が出会った子どもたち
  - 補聴器にキス　Aくん
  - 補聴器は宝物　Bさん
- その他の活動
- 活動をふり返って
  ～パラグアイの想い出～
- 帰国後の活動

パラグアイってどんな国？

パラグアイってどんな国？

- 日本とのつながり･･･入植73年
  終戦直後、ラ･コルメナが
  日本に支援物資を送る。
- 何語を話すの？････スペイン語、グァラニー語を
  話すバイリンガル
- 何が有名？･･･････サッカーが強い。
  ･･･南米一、世界一の親日国
- 気　候･･･････････亜熱帯　四季の区別はあるが、
  年間通して暑い国。最高気温が
  45度を超えることもある。
  冬は5度。

パラグアイ人の知っている日本

広島、長崎に原爆を落とされた世界唯一の被爆国。
戦争であれだけの被害を受けながら、見事復興した日本を尊敬。

日本製の電化製品は壊れない。憧れの日本車。

日韓でワールドカップを開催
みんな空手ができる。(ジャッキーチェーンは日本人？)

子どもに大人気。カメハメハー、キティちゃん、ドラえもん、
ポケモン
勤勉、お金持ち。日本語を学んで、日本で働きたい。

ミスユニバースは日本人。

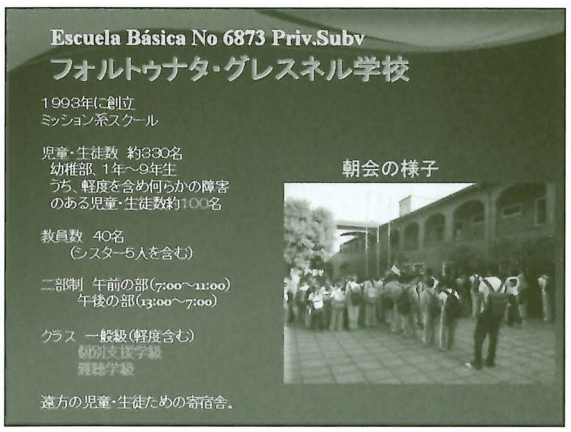
地震が多い。
治安のよい国、でも最近は･･･？

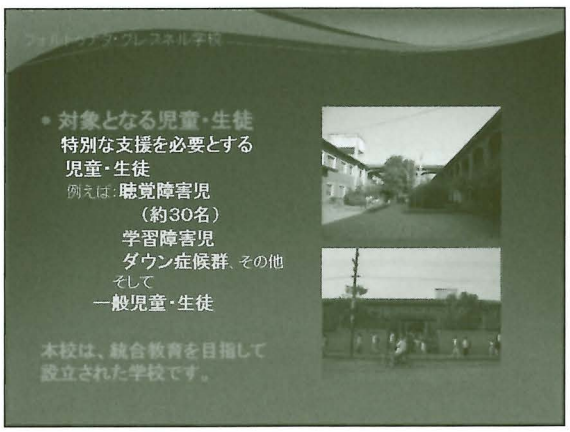
パラグアイ人が日本のことを知ってるほどに、日本はパラグアイを知らない。

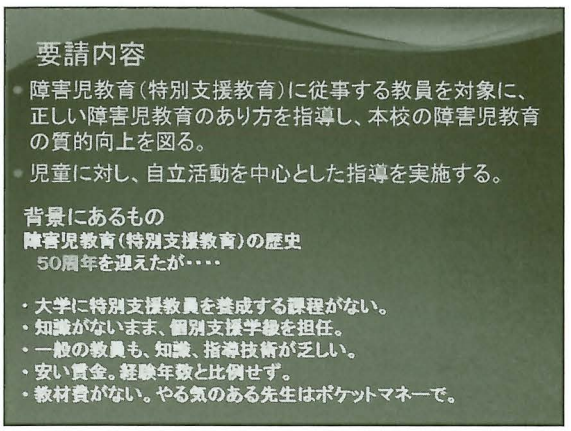
パラグアイってどこにあるの？
BOLIVIA
BRASIL
Rio Paraguay
パラグアイ川
ARGENTINA
Filadelfia
フィラデルフィア
Concepción
コンセプシオン
Asunción
アスンシオン
Pilar
ピラール
Ciudad del Este
シウダー・デル・エステ
Encarnación
エンカルナシオン
Colombia
コロンビア
Venezuela
ベネズエラ
Ecuador
エクアドル
Perú
ペルー
Bolivia
ボリビア
Chile
チリ
南回帰線上位地する大
め、日本の冬至の時太
陽が真上に来る。
面積：日本の約1．1倍
人口：日本の23分の1
北海道の人口よりやや少ない。
パラグアイ日本人会連合会HPより

コンセプシオンの魅力1 動物との共に生きる。
羊の行進
雨の日の馬の散歩
アヒルの親子の水浴び
牛の食事

コンセプシオンの魅力2
アンティークな街並み
自慢の夕日
魅力的な女性


Escuela Básica No 6873 Priv.Subv
フォルトゥナタ・グレスネル学校
1993年に創立
ミッション系スクール
児童・生徒数 約330名
幼稚部、1年～9年生
うち、軽度を含め何らかの障害
のある児童・生徒数約10C名
教員数 40名
（シスター5人を含む）
二部制 午前の部(7:00～11:00)
午後の部(13:00～7:00)
クラス 一般級(軽度含む)
難聴学級
遠方の児童・生徒ための寄宿舎。
朝会の様子


フォルトゥナタ・グレスネル学校
• 対象となる児童・生徒
特別な支援を必要とする
児童・生徒
例えば：聴覚障害児
（約30名）
学習障害児
ダウン症候群、その他
そして
一般児童・生徒
本校は、統合教育を目指して
設立された学校です。

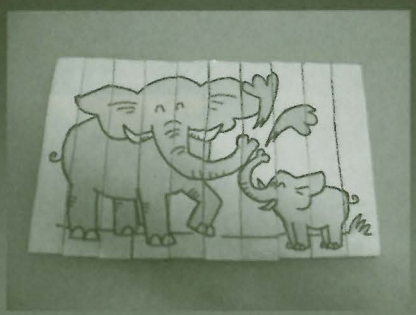

要請内容
• 障害児教育（特別支援教育）に従事する教員を対象に、正しい障害児教育のあり方を指導し、本校の障害児教育の質的向上を図る。
• 児童に対し、自立活動を中心とした指導を実施する。
背景にあるもの
障害児教育（特別支援教育）の歴史
50周年を迎えたが・・・・
・大学に特別支援教員を養成する課程がない。
・知識がないまま、個別支援学級を担任。
・一般の教員も、知識、指導技術が乏しい。
・安い賃金。経験年数と比例せず。
・教材費がない。やる気のある先生はポケットマネーで。

活動目標

- 特別支援教育の質的向上を図る。
- 聴覚に障害がある児童に対し、聴覚補償を図るとともに、聴覚活用をすすめる。
- パラグアイと日本との、文化交流を図る。

活動目標 1　特別支援教育の質的向上を図る。

数の学習



活動 1

目と手の共応運動

活動目標2　聴覚に障害がある児童に対し、聴覚補償を図るとともに、聴覚活用をすすめる.

- 聴覚に障害がある児童を積極的に受け入れている。
- シスターたちは、イタリアで聾教育を学んでいる。

しかし、悲しい現実・・・
補聴器がないのに、聴覚口話法。手話否定。
「この子は頭が悪いからしゃべれない。」
「なまけものだから、言葉を覚えられない。」

子どもたちのために私ができることはないか？

- 聴覚に障害がある子どもたちのことを知ってもらいたい。
- せめて言語指導場面では、聞こえを補償をしたい。
- 音を楽しむ気持ちを育てたい。

聴覚活用までの道のり

- 1学校長に相談「ことばの指導のときくらい、音を増幅して聞かせたい。」
  「姉妹校には、聴能訓練器がある。高くて買えない。」
- 2現役教師サポート(ejow)にメールを通して相談
  庄司先生(筑波大学特別支援教育研究センター)からのアドバイス。
  日本教育オーディオロジー研究会に呼びかけ。
- 3電気専門のシニアボランティアの協力
  音声増幅器(聴能訓練器)
- 4補聴器1
  舞薗先生を通して、横浜市の難聴・言語障害通級指導教室の中古補聴器を送ってもらう。送料は、先生方からの寄付。
- 5補聴器2
  神奈川県の先生方による、パラグアイ視察の旅に同行した、JICA横浜スタッフによって届けられる。

現役教師サポートに相談

- 庄司先生からのアイディア(補聴器以外で)
  ①全国のろう学校に聴能訓練器が眠っている。
  →重量がある。送料が調達できない。
  ②マイク、アンプ、ヘッドホンを用いて作る。
  →電気専門のシニアボランティアに依頼。
- 他の方々からの意見
  ①過去隊員
  海外から調整ずみの補聴器寄附を受けたが、子どもたちは利用しなかった。
  聴覚に頼らないコミュニケーション手段を。
  ②聾教育を専門としてきた先生
  聴覚活用は、補聴器の適合が前提。補聴器がないと聴覚活用はできない。

シニアボランティアが製作

「音声増幅器」

音声増幅器(聴脳訓練器)

その良さ

- **パラグアイにある材料で制作。**
- **低価格でできる。**

問題点

- **ラジオの音を拾ってしまう。**
- **騒音も増幅される。**

↓

静かな場所で、軽度、中等度の難聴(特に伝音)の場合、効果あり。

箱形補聴器

一人の日本の先生からのメール（2007年1月11日）
通級教室で、現在使用されていない箱形補聴器を活用してみてはどうか？

箱形補聴器のよさ
・調整しやすい。
・イヤチップで代用可。
・単三や単四電池を使用（充電池で対応）。

送料は、横浜市難聴・言語通級指導教室の先生方からの寄附！
東小学校小路先生の協力により、フッティングエイドも！

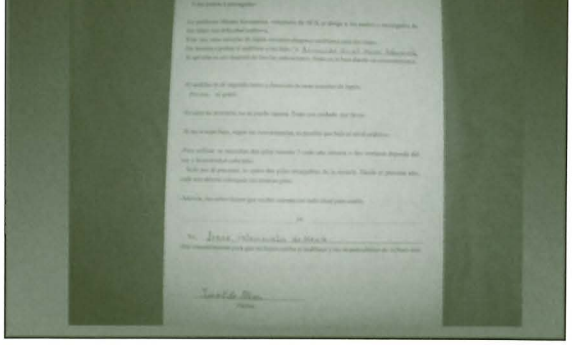
活動目標　聴覚に障害がある児童に対し、聴覚補償を図るとともに、聴覚活用をすすめる。

2007年3月
箱形補聴器、騒音計、フィティングエイドが届く！！

装用する児童は、校長と相談の上決める。

在籍学級での装用の様子

保護者の承諾書



Dictado 1　Palabras que todas sílabas terminan sílaba abierta(libre)

Lunes 18 de junio de 2007

ききとりテスト
補聴器の効果を確かめる。

Nombre			Nivel audiitivo		Modelo de audífono
			Derecho	Izquierdo	HA－28
niño			－dB	90dB	vol.5 azul F

Dictado： 20 palabras（Se necesita que los niños ya sepan.）

auto	avión	banana	bebé	cama
coco	conejo	mamá	maté	mesa
ojo	oso	papá	[illegible]	pelota
pomelo	sapo	tomate	[illegible]	uva

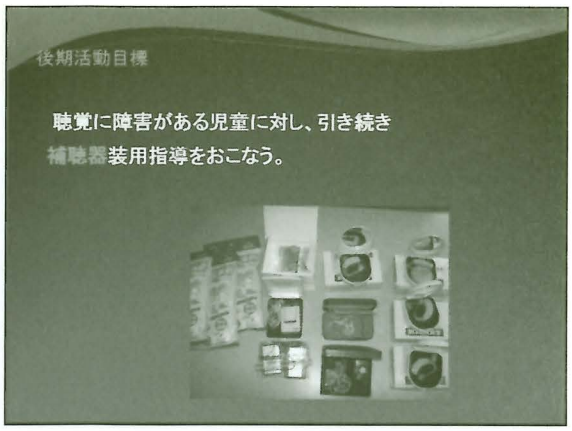
口を見せて　口の隠して

※ Cada vez, voy a cambiar el orden de las palabras.

Con el labio	補聴器なし	補聴器あり	Sin el labio	補聴器なし	補聴器あり
	sin audífono	con audífono		sin audífono	con audífono
1 cama	mesa	1	1 cama	－	papa
2 uva	3	1	2 uva	－	1
3 pelota	1	1	3 pelota	auto	1
4 pomelo	1	2	4 pomelo	mesa	2
5 mesa	1	1	5 mesa	sapo	3

8	banana	1	1	8	banana	－	1
9	sapo	cama	1	9	sapo	pato	2
10	pato	1	2	10	pato	mamá	2
11	mate	1	1	11	mate	coco	1
12	conejo	tomate	tomate	12	conejo	avión	pato
13	auto	1	1	13	auto	ojo	1
14	ojo	oso	oso	14	ojo	oso	oso
15	uno	1	1	15	uno	banana	conejo
16	oso	1	1	16	oso	conejo	1
17	tomate	mate	1	17	tomate	uva	1
18	papá	1	1	18	papá	3	1
19	mamá	1	1	19	mamá	avión	1
20	coco	1	1	20	coco	tomate	oso
	silaba	70 %(14)	90 %(18)		silaba	10 %(2)	70 %(14)
	vocal	80 %(16)	95 %(19)		vocal	15 %(3)	85 %(17)
	口を見せて	なし	あり		口を隠して	なし	あり

補聴効果 補聴器にキスAくん


後期活動目標
聴覚に障害がある児童に対し、引き続き
補聴器装用指導をおこなう。

補聴器装用指導と聴覚活用学習
うまくつけられるかな・・・
できた！

同じアルファベットで
始まる言葉の学習。
音とそれを言い表わす
言葉の一対一対応。

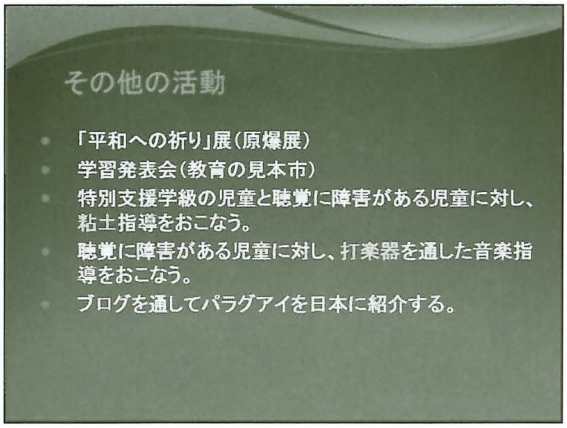
補聴器を通して、
自分の声を聞きながら
発音練習をする。
絵本の拡大、
自主学習

礼状作製
担任
校長

補聴器は宝物　Bさん

水くみは彼女の仕事

洗濯も彼女の仕事


その他の活動
「平和への祈り」展（原爆展）
学習発表会（教育の見本市）
特別支援学級の児童と聴覚に障害がある児童に対し、粘土指導をおこなう。
聴覚に障害がある児童に対し、打楽器を通した音楽指導をおこなう。
ブログを通してパラグアイを日本に紹介する。

活動：「平和への祈り」展（原爆展）8月6日～11日

コンセプシオン市の学校を招待

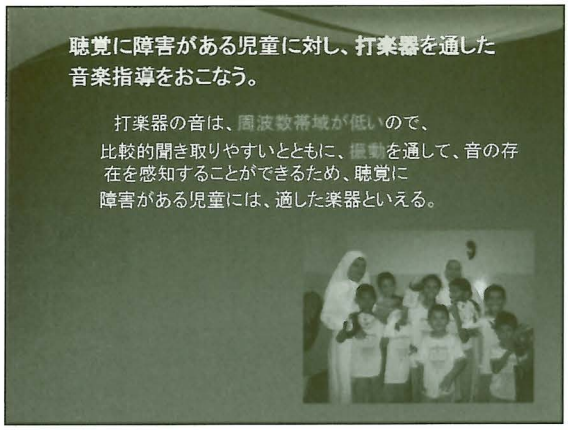
とても器用な生徒たち
手伝ってくれた、同僚と生徒たち。
会場を訪れた校長に、鶴の折り方を教える聴覚の生徒。

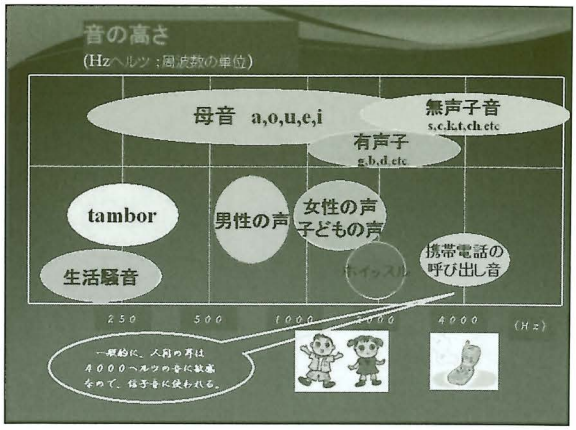
学習発表会
10月26日実施

水くみをしていた少女。学校行事の時は、正装（制服）になります。

特別支援学級の児童と聴覚に障害がある児童に対し、粘土指導をおこなう。

11月20日実施


聴覚に障害がある児童に対し、打楽器を通した
音楽指導をおこなう。
打楽器の音は、周波数帯域が低いので、
比較的聞き取りやすいとともに、振動を通して、音の存
在を感知することができるため、聴覚に
障害がある児童には、適した楽器といえる。


音の高さ
(Hzヘルツ；周波数の単位)
母音 a,o,u,e,i
無声子音
s,c,k,t,ch,etc
有声子
g,b,d,etc
tambor
男性の声
女性の声
子どもの声
携帯電話の
呼び出し音
生活騒音
250
500
1000
2000
4000
(Hz)

「世界の笑顔のために」楽器到着！！
1月21日
到着！！

説明会「楽器の演奏法」2月21日実施
真剣！

「きらきらぼし」演奏

活動目標3 パラグアイと日本との、文化交流を図る。
ブログ パラグアイの空
heep://blog. yahoo. co.jp/nayramidori2006/MYBLOG/yblog.html?=361939&m=lc

活動をふり返って
～パラグアイの想い出～

- ちょっとだけ擬似体験
  周りが何を話しているのか、
  どうして笑っているのか分からない。
  何度も聞いたら悪いかな・・・。
  分かった振り。

- 多くの人たち（パラグアイ人、日本人）の
  支えがなければ活動できなかった。

聞こえにくくても、音楽に関心がある。

聞こえにくくても、ダンス大好き1

聞こえにくくても、ダンス大好き2

7，8，9年生

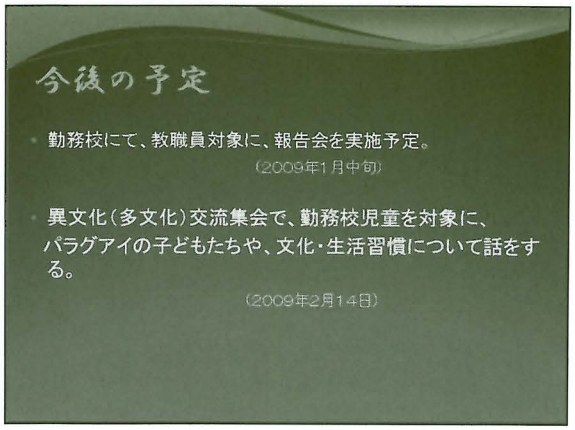
帰国後の活動

- 補聴と聴覚活用を語る　サマーフォーラム2008にて
  パラグアイの難聴児との出会い」と題し、実践報告。
  （2008年7月20日）

- 17年度3次隊隊員とともに、広島を訪れ、JICA広島
  スタッフの協力を得て、「平和への祈り」展で来場者に
  作ってもらった千羽鶴、メッセージカード、寄付金を届ける。
  （2008年8月3日）

帰国隊員報告会　（2009年1月10日）

広島訪問 2008年8月3日
2008/08/03


今後の予定
勤務校にて、教職員対象に、報告会を実施予定。
(2009年1月中旬)
異文化(多文化)交流集会で、勤務校児童を対象に、
パラグアイの子どもたちや、文化・生活習慣について話をする。
(2009年2月14日)

ご静聴ありがとうございました。

ソロモン諸島での協力隊活動を通じて広がった世界

大内　比呂子
（18－1，ソロモン諸島，家政教育，滋賀県立彦根西高等学校）

始めさせて頂きます、ソロモン諸島で活動してました大内と申します。私は滋賀県の公立高校で家政科のある学校なのですが、そちらの方で 6 年間教員として働いて、二年間青年海外協力隊として、そのあとまたもとの学校に戻っていま勤めているという状況です。ちょっとここから座らせて発表させてもらいます、失礼します。私は 18 年度一次隊で参加させていただきました。その時約 68 カ国 400 名の隊員が派遣され、いろんなところで活動したということになります。私自身なぜ参加したのかというと、大学の時から夢であった昔お世話になった外国人にお世話になった恩返ししたかった、教科書の中だけでない本物のいろんな世界を見てみたかった、厳しい生活の中に身を置いて強くなりたかったということがあります。

ソロモン諸島って派遣が決まった時にいったいどんな国なんだろうという情報がなかったのですが、どんな国なのかと世界地図でみると、南西太平洋上オーストラリアの北東千八百メートルにある小さな島国になります。六つの大きな島と 1000 近くの小さな島からなる国と言われております。首都はマダルカナル島のホニュオラというところになります。国旗はこのような国旗で緑は国土を青色は海の色を黄色は太陽の色をこの五つの星は南 12 星をその後ろのソロモン諸島の五つの島を表しているといわれております。面積も非常に小さく四国の 1.6 倍の大きさしかありません。民族は南シナ系という言われる民族がほとんどだったのですが、このメラというのはメラネシアのメラっていうのは黒いって言う意味があって肌の黒い人種がほとんどでした。このメラネシア族って言うのはバヌアツにも多いといわれております。気候は熱帯モンスーン気候で一年を通じて高温多湿でずっと暑い状況でした。言語は英語にオランダ語とドイツ語が入り混じってできたといわれるピジン語と言われる言語を使っていました。学校の授業でもこの言葉しか通じなかったので、首都に行くと英語も一部通じるのですが、みんなほとんどこの言葉を使っていました。この言葉をしっかり話せるようになるのにやく 3 か月かかりました。どんな感じかちょっとやってみますと、その下ピジン語会話とありますが、英語と近いのですが、少しなまったような感じです。お金はソロモンドルというのがありました。1 ドル 15 円なんですが、ソロモンドルを日常的につかっていたんですが、貝殻というのも使われていて、これは昔本当にお金として使われていたんですが、今では花婿が結婚の際に花嫁に渡す結納のようなものという時にだけ使われているということです。それがそのお金として価値のある貝殻ということになります。時差は日本より 2 時間早く、経済はほとんどが自給自足、魚、木材の一部が輸出されています。歴史的な背景としましては、第二次世界大戦の激戦地だった

ということで有名です。とくに首都のあるガダルカナル島では別名餓島といわれ、飢餓とかですが、ここで第二次世界大戦中多くの兵士が飢えと怪我でなくなったといわれております。約二万数千人と聞いております。その戦争のあとが今も当時のままのこっているのですが、日本の輸送船きどうなか丸といいますが、そのままの形で放置されていたり大砲や爆弾、刀などいまでもときどき出てくると聞きました。私も実際こういったものを目にしました。

では私がソロモンで何をしてきたのかという活動の内容を話させていただきます。まず現地の学校で家庭科教員として働く、村の女性と一緒に住んでそこから通っていましたので、その女性に裁縫と料理を指導する、あと地震被害支援清掃活動、あとで話をさせていただきますが、あと原始的な生活ということでしてきました。学校はこの後ろにあるこの小屋みたいなのが学校なんですが、この場所に来た時は非常に驚きました、これが学校だということで。築 30 年だそうです。私は高校に勤たんですが、小学校が併設されていて。これは集会のときの様子なのですが、小学生も隣に並んでやっていました。みんな非常に元気一杯でごらんのとおり制服はありました。制服をきている状態ですが、結構川で手で洗濯するのですぐぼろぼろになって、しかも高温多湿のなかで洗濯して乾かしても、なかなか湿気が多くて、カビだらけになって何回かこのカビを取ってあげようと試みたこともあるのですが、洗たくしたあとすぐ生えてしまうので、まあこれはどうにもならないということで、自分の持っていった衣服もほとんどカビだらけになってしまったんですけども、まあそのまま現地の自然に逆らわない生活になりました。

ソロモンの教育制度としては初等教育小学校が 6 年間中高教育が 5 年間義務教育制度はなく小学校に通える生徒はいるのですが、経済的に厳しい家庭の子は通えないということで、成人の識字率は 62 パーセントです。学校に来れてもなかなか文房具も持ってこないで友達のを借りて使いまわすようなことを見たのですが、見たときはクラスの子も嫌がることなくでもそういうところは自然と協力できる姿がいいなと思ったんですけど、よく協力していました。教科書は政府から支給されたものを学校だけが所有していて、生徒に貸し出すという形でした。ノートだけは生徒からの学費から支給されていました。私は家庭科ですので、調理実習をしたりとか、あと実習だけでなく環境教育・性教育に関してもあって、環境教育をしているときに自分の身の回りをきれいにするということでココナッツの葉っぱをとってきてその芯だけをけずって箒にして教室用の箒にしたということもしました。あと実習で使う食材を何とか作れないかなと荒地になってるところをきれいに掃除して種を植えてきゅうりとかトウモトコシトマト豆などをつくるということもやってみました。あとこれはシャツをつくったりプロミスリングを作ったりしているところです。右下は授業の後に村の女性とか学校の先生、手芸を学びたいという人を招いての、手芸講習会ということになるのですが、以前の話にあったようにこれがもともといた現地の家庭科の先生なのですが、この先生がいらっしゃったことと、校長先生が要請された時と変わっていて、ボランティアに全く関心がなかったということで自分が 3 か月使い物にならなかっ

たということもあって、大丈夫かなって自分の必要性を感じたり。特にこの家庭科の先生はなかなか心を開いてくれることがなくって私はヒロアとよばれていたんですが、お金を持ってるし余裕があるからいろいろできるのよっていわれて、ほんとに遠ざけられていたんですけども、最初は必要性に疑問を感じていたところを自分の気持ちを切り替えて自分から必要とされる場所とか見つけて行こうと切り替えてもうしばらくあせらずに一緒に郊外の授業だけじゃなくミーティングであったり清掃活動であったりとか一緒にやってる内にだんだん心が打ち解けてきてこの講習会彼女が手伝ってくれて達成できたものになります。この心を打ち解けてくれた同僚の先生が村の女性とか他の家庭科の先生に講習会やってくれるし、いろいろ教えてくれるからって声をかけてくれて、それでできるようになったということで、ほんとに技術協力しようとこちら意気込んでいくんですけど、実際いってみると向こうがどれだけそれを受け入れるだとか、必要としてくれているかとかそういった相手の姿勢とか態度とか協力がなければできないこともたくさんあって、ほんとにそういった相手の協力の姿勢とかの大切さを実感していました。

これは学校の放課後の様子になるんですけど放課後になると生徒はスポーツが大好きでサッカーがはやっていましたが、いつもやっていました。遠足というものが私がいくまでなかったのですけど、家庭科で作った作品をバザーなんかで売ってお金に換えて、その資金でいってみたらどうか、思い出づくりをしてみてはどうかと提案してみたところ、受け入れられて遠足を実行しました。これは海までいった遠足の写真になります。学校外の活動として学校以外にも自分で何かできることはないかと、あいた日をさがしながらやっていたのですけど、市場で服づくりをしたり、村でお菓子づくり講習会をしたりとか。詩集の教室をした時には日本食を伝えようとうどんを作ってみたりといった事をしていました。あとこれ私が活動中に大きな地震がおこったんですが、2007年4月マグニチュード8.1の地震がおこりました。死者52名をだしたソロモン諸島で非常に大きな地震で私自身はその震源地から少し離れた所にいましたので、何もなかったんですけど。家とか倒壊して村ごと住む所をなくなってしまったところもありましたので、なにかできることはないかと、私と隊員がソロモンの中に20名ほどいましたので、日本から来た医療で現地に届けるよりはこちらでお金に変えた方が有効なものを販売してそのお金を現地に売るということをしました。あと環境教育イベントということを他の隊員と協力して行いました。

ちょっと飛ばします。食事の話、普段はココナッツとかじゃがいも、キャッサバという芋をたべていました。川でエビや魚も取れますのでこう言ったものも食べることができます。しかしこう言ったものはとりすぎるとすぐいなくなるので、ほんとに月一回とか多ければ二回とか、私自身も食生活がすごい偏って、炭水化物、長持ちできて冷蔵庫がないので、比較的安くて、はこぶのに簡単なものとなるとどうしてもインスタントラーメンであったりビスケット、米小麦というものになるので非常にかたよってたんですが、右下は米にインスタントラーメンをかけているもの。それはよく食べていました、あとパン。家庭科の教員ですので栄養指導もしたくって、栄養の知識は生徒には伝えますし、生徒は小学

校のときから聞いていますので、知ってるところもあるのですが、実際野菜は雨が降ったら実らないとか果物も食べてしまったら終わりだし粉ミルクでも入れたらカルシウムが増えるのですけども、高いということでなかなか現地の生活に見合ったもので栄養バランスのいいものを定着させるのは難しいなということを非常に実感しました。飲み水は雨水か川の水を使用していました川は上流まで行ってきれいな水をとってきました。お祝い事のときなどはブタを解体して食べたりしていました。普段は入浴とかも川にざぶんと入るだけ、食器洗いはこうやって川で葉っぱでみがいたりするんですけど、もう全部一か所でやるので衛生的には悪くて現地の人は昔からこうしてきたということでやめたほうがいいんじゃないかとおもったんですけども、もうこういう生活スタイルでしたので私も一緒にしてました。ガスはありませんので電気はランプを使用していました。キリスト教国ですのでわたしが活動していた時はこういうのに参加していました。伝統的なダンス、カスタムダンスというのがあるんですが、男性のもの女性のものとありました。ソロモンの重要にされる文化にワントクという文化があります。ワントクというのは同じ言葉ワントーク同じ言葉を話す仲間というのがあって助け合い分かち合うというのが当然という意味が含まれワントクなら無償で協力しなければならないという非常に家族親戚などは絶対見放しませんしもしお金に困っていたら、自分たちあんまり余裕がないんだけどすぐあげたりとか、食べるものなくなったから少し住ませてくれていったらいやな顔ひとつもせずにいいよってうけいれたりそういったところは本当にすばらしいなと思いました。けど大変そうだなとみてても思ったんですけど、こういった文化私もここで生活する以上同じことはできないんですけれども、やっぱりいろいろ頂戴いろいろよくしてあげるからほんとによくしてくれるのはしてくれるんですけどもそういった文化どこまで受け入れるのかはすごく悩んだ時期もありました。

ソロモンで困ったこと。先ほどいった食中毒はきっと水かなにかが悪かったんだろうと思うんですがキャッサバという、物を食べたのですが毒の部分もあるということでしっかり洗う水もなくてそういったものをそのまま食べたのかなって今になって思います。皮膚病になって全身の皮がはがれる、きっと汚い水でやられたのかなと思います。でもこういったものも現地で生活してたらなおっていって対応していくことができました。

ソロモンに行ってよかったこと、いろいろたいへんなことはあったのですが今自分が日本で生活していることを考えても本当によかったことの方が多かったようにおもいます。あとソロモンで他の隊員も活動していたのですが他の人達にも非常に支えられ刺激になっていました。

帰国後の活動として帰国した後に新しい家庭科教員が私が勤めていた同じ所に入って活動していることもあって今やっているプロジェクトでもあるのですがその学校と私の勤めている学校で交流を行っております。計画として４回を決めてやっております。あちらから文通で手紙が来たりこちらから手紙を送ったり向こうから隊員が撮った画像が送られてきたりとかこうやって生徒が見て行ったりとかの交流をしました。こういう新聞も廊下に

掲示して学校交流を行いました。やってみてまだ継続中ではあるのですが生徒の感じ方と言うのは人それぞれで生徒によっては興味がわいたといってみたり汚いし絶対いやという悲しいこともあるんですが伝え方が難しいなにかしら生徒たちは映像とかをみて、あと交流をしたりして感じるところもある。またそうやって最初汚いから嫌っていう人も学校交流をして現地の楽器をみて楽器で演奏しているところをみてここだけは興味があるっていってもらったりとかまた長く続けていくと変わっていく部分もあるのでそれは今期強く楽しみながらやっていくということが大切なんじゃないかなっていうことを感じています。

お手元に配布させていただいた資料の裏の部分なんですがそれは学年集会でソロモンで活動したあとの生徒が書いた感想文になります。学年の他の先生が学年新聞としてまとめてくれたんですが非常にそうやって協力を受けられたってありがたくってそこからも生徒がいろいろ感じてくれたんだなって思います。これからなんですけど私は退職してからもボランティアなんかで人の役に立てたらいいなとおもうんですがこれから参加を考えている先生方がいらっしゃるかもしれませんが、もしまよっていらっしゃるんであれば思い切っていってみるのもいいと思います。ご清聴ありがとうございました。以上で発表を終わらせていただきます。

1. 青年海外協力隊って？

☆開発途上国で２年間、自分のもつ技術を生かしてボランティア（仕事）をする

☆見返りを求めることなく、自ら進んで途上国の国作りに自分のもつ力を注ぐ

☆２年間は現地の住民となり、現地の人と同様に生活することが求められる

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所　平成18年度第1次隊　平成18年4月7日 撮影

2. なぜ参加したのか？

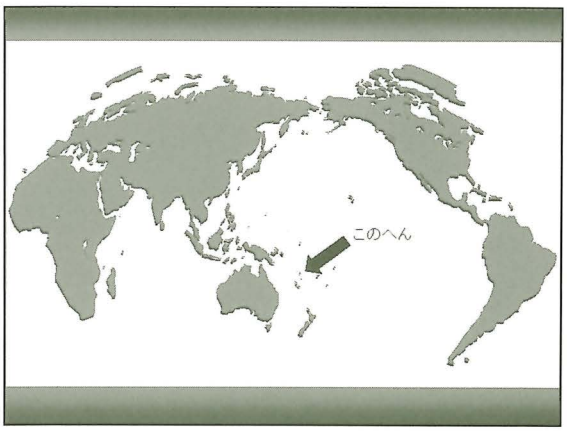
大学生の時から夢だった

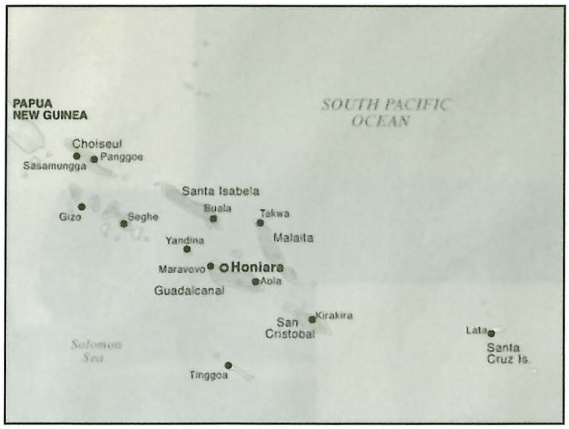
昔、外国人にお世話になった恩返しをしたかった

教科書の中だけでない本物のいろんな世界を実際に見てみたかった

厳しい生活の中に身を置いて強くなりたかった

3. ソロモンってどんな国？





（正式名称）
ソロモン諸島国

（面積）
29785平方km（四国の約1．6倍）

（人口）
53万8千人 （05年7月のデータ）

民族　メラネシア系（94%）
ポリネシア系（4%）
ミクロネシア系
ヨーロッパ系
アジア系

気候　熱帯モンスーン気候

言語　ピジン語

（ピジン語会話）
A:「先生、こんにちは」
B:「こんにちは」
A:「調子はどうですか？」
B:「順調 順調、元気にやってる。先生は？」
A:「おかげさまで元気にやってます。
ありがとうございます^ー^」

（通貨）
ソロモンドル（1ドル＝約15円）
貝殻

（時差）
日本より2時間早い

（経済）
国民の75%は自給自足
第1産業（コプラ、魚、木材）が中心の経済

（歴史）
第2次世界大戦の激戦地だった

ガダルカナル島＝餓島

日本軍が建設した飛行場のとりあいで
激戦を続けながら日本が次第に島の西へと
撤退する間、多くの将兵がマラリアや餓死に
より倒れた

4．ソロモンで何をしてきたのか？

学校で家庭科教師として働く

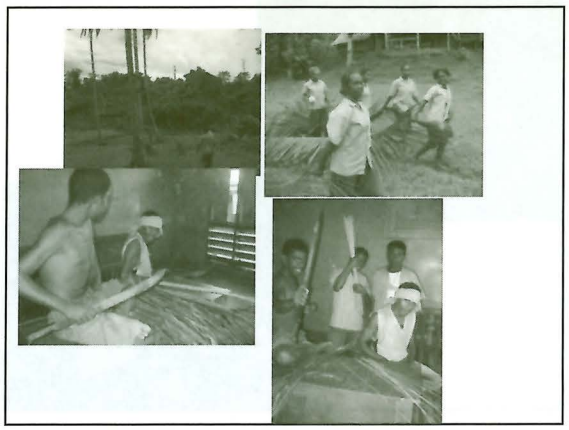
村の女性に裁縫と料理を指導

地震被害支援や清掃活動

原始的な生活

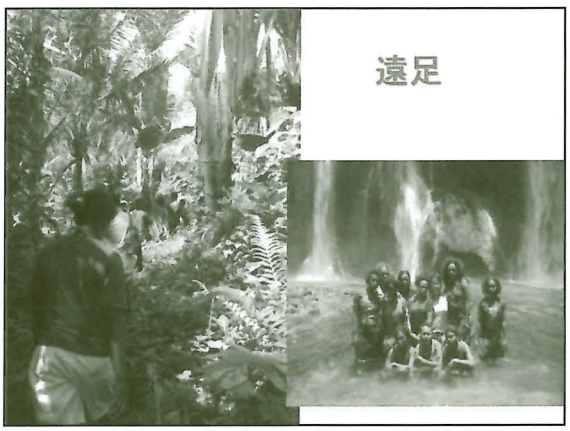
学校の様子

授業の様子（調理実習）

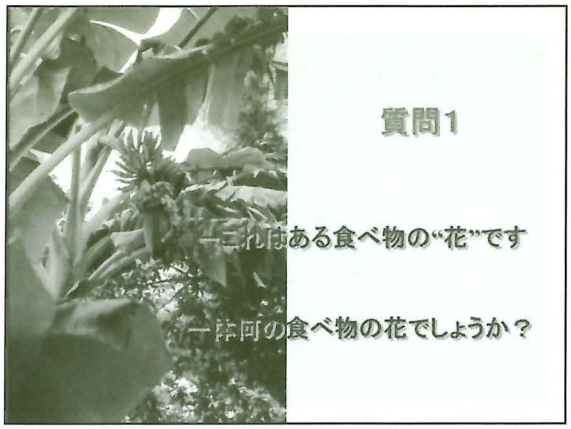


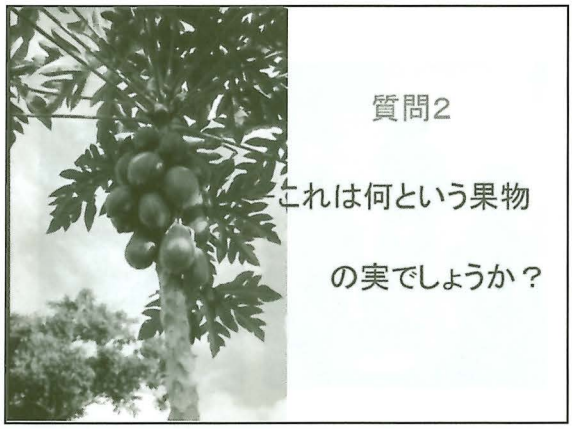
授業の様子(農業)

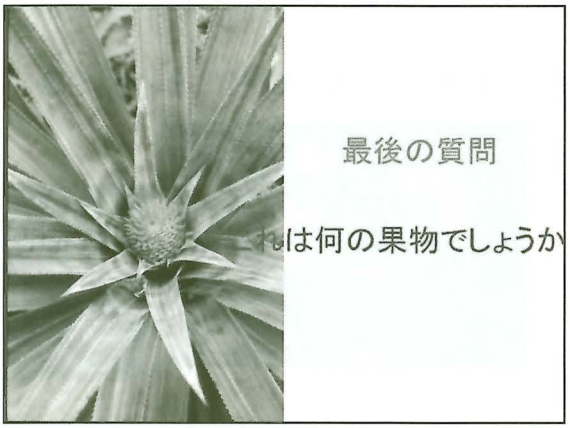
放課後


遠足

普段の食事


質問1
ーこれはある食べ物の“花”です
ー一体何の食べ物の花でしょうか？


質問2
ーこれは何という果物
の実でしょうか？


最後の質問
れは何の果物でしょうか

お祝いごとなど特別な時の食べ物

“ガスのない生活”

ランプかろうそく
を使用

暗くなったら寝る

カスタムダンス

ソロモンで重視される文化

ワントク（wan-toku）
「同じ言葉を話す仲間」の意

助け合い、分かち合うのが当然という意味が含まれ、ワントクなら無償で協力しなければならない

ソロモンで過ごした日々を振り返って・・・

ソロモンで困ったこと

何度も食中毒になった

皮膚病になり、全身の皮がめくれ脱皮した

虫さされがかゆくて眠れない日がよくあった

痛いくらい日焼けをした

泥のぬかるんだ道は裸足でないと歩けず、しかもよくこけた

トラックを買ってくれとたのまれた

若い男にだまされ、おそわれそうになった

ソロモンに行って世界がかわったか

→かわった

ソロモンに行ってよかったこと

のんびり暮らすのもいいもんだと思えた

ソロモンという国を生まれて初めて知れた

自分のしたことで喜んでくれた人々がいた

一生の心の友ができた

不便なかでも精一杯明るく生きる人々の姿をまのあたりにし、日本人である自分はもっと頑張らないといけないと思えた

今を精一杯生きることのすばらしさと大切さを知った

人のあたたかさを知った

家族を大切にする思いが芽生え、強くなった

日本のよい面や問題点が見えるようになり、日本を大切にしたいと思うようになった

ソロモンで活動中の
他の日本人ボランティアたち

5. 帰国後の活動

学校交流プロジェクト

（目的）

日頃机上で学んでいる外国の生活について、実際に文化や環境の異なる同世代の交流の中で学び、考え、
自分たちの生活を振り返るきっかけとする。

計画

第1回
　自己紹介
第2回
　国紹介
第3回
　環境問題についての意見交流
第4回
　1～3回の交流で学んだことと感想

- 交流手段は文通、言語は英語を使用
- 期間は学校運営の都合で4ヶ月サイクルとする

←ソロモンに送る日本紹介
パネルを作成中

6. これから・・・

退職したらまたボランティアに行って、

「人の役にたてたらいいなあ」と夢みている

おまけ

地球温暖化で沈むといわれている国、
"キリバス"で見たもの・・・

あなたの行く先に広がる世界は

どんな世界でしょう？

ご静聴ありがとうございました

END

大洋州に浮かぶ“世界一幸せな国バヌアツ”での活動報告

因幡　智寿子
（18－1，バヌアツ共和国，体育，名古屋市立御幸山中学校）

失礼します。皆さん、こんにちは。私は2006年ちょうど赴任したときに、世界で一番幸せな国ということで、一躍日本でも脚光を浴びたバヌアツ共和国で活動をしていきました。座らせて発表させていただきます。

自己紹介ですが、2006年3月まで名古屋市立の中学校で保健体育の教員として勤務した後、2年間協力隊の体育隊員として、バヌアツ共和国に派遣されました。去年の4月からまた同じ学校に戻って、現場復帰ということで、中学校の教員をしております。今回はバヌアツの紹介と自分の活動を中心にお話すると共に、キーワードであるバランスについてもときどき触れてお話させていただきたいと思います。

それでは、まずバヌアツってどんな国ということですが、バヌアツってどこにあるのということですね。ここに日本ですね。ここにオーストラリアがあって、ニュージーランドがあって、ここにニューカレドニアがあって、フィージーがあって、その間の国ですね、ここにある小さな点々がバヌアツです。バヌアツですが、83の島があって、だいたい寄せ集めても新潟県と同じくらいの面積にしかなりません。人口はだいたい23万人くらいで、時差は日本より2時間早いです。宗教はキリスト教が多いです。そしてたくさんの宗派があります。歴史としては、1980年まではイギリスとフランスの統治国家だったのですが、1980年に独立したという国です。それに伴いまして、言葉ですが、英語とフランス語、それからビスラマ語、これは、現地人と開拓民がある程度コミュニケーションがとれるようにということで、英語をベースにした形の話し言葉です。この3つが一応、公用語になっていて、その他は、それぞれの各島、各村に100以上の独自の言語があります。これは、ちょっと複雑で私も分かりませんでした。ビスラマ語は、さっきも言いましたように英語に非常に似ています。こんにちはについてもハロー、そして、とっても日本人はビシュラマ語が上手だと褒められました。今日も私の同期のバヌアツの隊員と、一昨日バヌアツから帰ってきたばかりの隊員が2人いますので、ビスラマ語に興味があるならばそちらに聞いていただければありがたいのです。このスライドを見ると分かりますが、そのまま読めばいいんですね。ハローとか、さようなら、ルッキムユー、非常にわかりやすい、日本人にしゃべりやすい言葉だったので、英語を母国語とする人達より私たちの方が発音は良かったかなという風に思っています。バヌアツ人についてですが顔は怖いです。メラネシアン系の人は顔が怖いですね。

ただ、必ず挨拶をする習慣があって、こちらが挨拶をして、ニコッとすれば、ニコッとしてくれて、いい笑顔になるのですが、いつもニコニコしている人はいません。普段の顔は怖いです。後は日本人に似ていてとてもシャイです。恥ずかしがり屋なんですけども、ただ突然大胆になったりしてびっくりすることが多々あったのですが、基本的にはとてもシャイですね。日本人に似ていて、思ったことをあまり表面だって言いません。ということは、どういうことかというと、裏でなんか言ってるんだろうなということですが、これはやっぱりありましたね。後は、ファミリーをとっても大切にして、大家族が多いです。ここの家族は 4 人家族だったのに、なぜこの人が？という知らない人がいきなりその家に住み込んでいたりというのはよくありました。まず、最初のバランス感覚、自分のすごく困ったところなんですけど、距離感の取り方ですね。彼らはとても優しくて、困っていると必ずみんなが助けてくれるんですね。でも、最初のうちはあまりにも親切すぎて、何か後から要求されるんじゃないかという、毎回毎回疑心暗鬼の連続で、という風だったのですが、これは、取り越し苦労でした。ほんとに親切でした。後は、どこの国にもあると思うのですが、あんまり特定の人ばっかりと仲良くしていると、周りの目が気になるということもありました。後半は、自分、色も黒くなったり、言葉も不自由しなくなってきたのでバヌアツ人に近づいたと自分は思っていて、さらに友達が遊びに来てくれたときにも黒くなりすぎて、私だということが最初分かってもらえなかったですね。それくらい黒くなっているからいいかなと思ったんですけど、でもやっぱりバヌアツの人からみれば、私はやっぱり日本人だということで、どれくらい日本人として、バヌアツの人と距離をとるのかということはすごく考えました。

バヌアツの特徴ですが、先程も言いましたが、たくさんの村があって、村単位でいろいろなことが行われていて、ファミリーや村、そういうのをとても大切にします。言葉がいろいろあるのも、たぶんコミュニティを大切にしてきた証拠だと思うのですが、もう一つ特徴的なのは、首長制度、チーフ制が残っています。この人がある島のチーフなんですが、こういうチーフがいて、かなりの力を持っています。田舎に行けば行くほどこういうのはまだまだ顕著にあります。チーフが村をまとめていて、警察が介入しないときもありますね。私がいたときですが、バヌアツの刑務所は土日は帰宅 OK、平日は外出 OK、その辺に買い物にいける、さらに時々、脱出、脱走する事件があったんですけど、結局みんなまとめて帰ってくる、そういうこともありました。

次、バヌアツの伝統と文化ですが、私は女性ですので、女の人の、これアイランドドレス、たぶん周り大洋州の国にはどこにでもあると思うのですが、こういったドレスが主で、こうやってお母さんたちこんな風に着て生活をしてい

きました。ただ、私は体育隊員でしたので、スポーツをするのにはあまり適さないということと、私のキャラクターとしてあんまりスカートを履くということがなかったので、ほとんど着ませんでしたが。現地の人達はこういう入り込む生活を喜んでくれるということで、隊員でアイランドドレスを着て授業をしている人もたくさんいました。ただ、現地の人たちはスポーツするときにアイランドドレス着てたりとか、海に入るときもアイランドドレスもまま入ってたりとか、ということがあって、服で着替えてスポーツするということが無く、そういう習慣がなかったので、どこまでそれを着替えたほうがいいよということを強要して、どこまで私たちの一般論を伝えていったらいいのかというところは指導の場面ですごく考えるところでしたね。こういった、普段はTシャツに半パンとかいう感じなんですけれども、お祭りや儀式になると、こうやって島によって、これは私の教え子ですが、こういった服装をします。島によって、全く服装が違いますね。全くといってもあまり変わらないですけど。こんな感じで、これ全部草で作ってますので、エコですね、非常に。時によっては、お母さんたちは上半身なにも付けていないとか、これは今のバンジージャンプの元になったというランドダイビングのときの島の人の格好ですが、こういう格好をしたり、彼らは誇りを持ってやってますね。普段、Tシャツと半パンでも、こういうときになると、自分たちの村の踊りが踊れたり、歌が歌えたりということができるんですよね。親から子、子から孫へという風で、日本で失われつつあるそういう伝統が今もきちんと残っているのだなと感じました。

バヌアツの食べ物ですが、基本はイモとバナナ、ご飯にインスタントラーメン、炭水化物ばかりですね。こういったものもあるのですが、基本的には、内容物が同じ、形が変わっただけ、イモをすってココナッツで煮るとか、イモをすって蒸して食べるとか、これは、今日来ている同期の石澤くんが作ったやつの写真をもらったものです。本当に中南米の人の話を聞くと、料理の手間が一手間も二手間も違って、こっちの国の人は何て食に対してあまり意欲がないということを感じましたね。同じ味のものを食べていることが多かったですね。マーケットに行ってもやっぱりイモばっかりですよね。たぶん、大洋州の方々は同じではないかと思うのですが、バナナだったり、イモの種類がいくつもあったりという風にですね。バヌアツナンバーワンのマーケット、イモばかりではなくて、時期的に野菜が出てきます。だから、食べるものには困らなかったかなあという感じですね。時々こんなものも食べますということで、これは何かというと、コウモリですね。フルーツコウモリです。

次、バヌアツの自然ですが、これは首都のポートビラです。町が小さいですので、首都でもこんなに綺麗な感じですね。後は美しい山や海があったり、ブルーホール、これは時々テレビに出てきたりしますが。後は、世界で一番近く

まで行ける火山があったりだとか、とにかく自然しかないそういう国ですね。

ちょっと本題に入り、バヌアツの教育事情なのですが、学校は月曜日から金曜日で、毎朝7時半から始まります。1教科大体90分なので、小学生は、持つわけないですね。途中で勝手にトイレに出かけていきます。巡回で授業しているときに、他の学年の子が突然入って来ていたりだとか、1回は、小学校1年生の授業に幼稚園児が入り込んでいたりとかいうこともありました。90分はとても持たないですが、これは一般的な授業の形態になっています。バヌアツ、私が赴任したところ2006年から、6年間の義務教育が8年になりました。だから、小学校に6年生までだったのが8年生まで、実は、バヌアツにはセカンダリースクールとかカレッジという上の学校があって、ここにも7年生が存在していて、小学校にも7年生がある、こういうセカンダリースクールやカレッジにも7年生があるという風にいろいろごちゃごちゃ混じったことがありました。どうなるのかなと思ったら、将来的には、小学校は8年生まで、セカンダリースクールやカレッジは9年生からにするという風になるというところまでは聞いて帰ってきました。義務教育とはいうものの、学校それぞれちょっと値段は違っても、授業料を払わなければならなかったので、続けられないという子もいて、さらに踏み倒して来ている子もいるという状況でした。

私の活動報告ということで、私は教員養成大学で教師の卵を教えるというのが要請内容でしたので、まずは体育の教え方を教える、保健分野の知識を教える、大学の体育の指導シラバスの作成、体育の隊員として巡回で小学生に体育の授業をする、JOCVの保健体育部会の隊員としてワークショップをする、日本文化の紹介、原爆展の開催、それから、大学のプロジェクトに参加ということで、5つ大きな柱として仕事をしてきました。まず、先生の卵に体育の教え方を教える、単元の選び方、授業の進め方、それから、彼らもやっぱりスポーツ大会なんかを開いていかなければならないので、ナショナルルールがどんなルールなのか教えるという形で、審判の仕方を教えたりというのをやっていました。保健分野ですが、彼らは卒業後どんなへき地に行かされるか分からない、薬や病院不足、そういうのが問題になるので、ひどくなる前に応急措置なんかをきっちりおこなっておけば、死に至るところまで行かずに済むということもあるのではないかと考えて、日本赤十字社や現地のNGOにお願いをして、資料の提供をしてもらいながら、授業をしました。

ここで、保健分野どこまで教えればということなんです。応急処置を中心に保健分野を教えたんですが、いつも日本で私も中学校で教えていますので、教えるときに「ここからは病院に行きなさいよ」、「ここまでやったら病院に行きましょう」と教えているところが、ここでは病院が無いのでどこまで教えていけばよいのかというのがすごく迷いました。日本では常識だけどバヌアツでは

非常識、病院がないからっていうところでこれはちょっとやっぱり迷いましたね。私、初代の隊員でしたので、子どもに教えるシラバスはあるけれども、教員をつくるシラバス、体育のシラバスは大学にありませんでした。どうしようかってことで自分なりに考えて保健体育について考えるときに安全や健康面を考えた体育を教える教員としての知識、それからあとは体育の知識、子どもの成長に見あった運動に関する知識、健康に関する知識、ただ、他の教科とかぶらない、ということで考えて、外枠だけ作って任期が終了しました。あとは小学生に教えに行ったりもしました。10年以上、体育隊員が派遣されて体育の普及を進めているのになかなか定着しない、その１つの原因としては先生自体が体育を習っていない世代なので体育の楽しさや必要性があまりわかっていないということが考えられます。だったら必要性を教えるために、生活と健康を密着させて体育の大切さを伝えては、スポーツの大切さを伝えてはどうかということで、保健関係の隊員と協力をして保健体育部会を設立しました。その公衆衛生と体育、健康と運動の関係について話をするために、保健関係の隊員と協力をしてコラボレーションワークショップをしました。例えば、午前中は私たちが生徒を対象に体育の公開授業をして、午後からは教員を対象にこの公衆衛生の指導をする。そういうようなワークショップをやったりもしました。ここでまたバランス感覚の話なんですが、どのくらいの割合で力を入れればというところです。赴任して最初は体育隊員は私一人だったのですが、そのあと体育隊員たちが増えてきて、保健体育部会を立ち上げたりとかというふうになってきたときに、今まで100%任地の仕事をしていればよかったものが、これが少しずつ変わっていくんですね。両方とも一生懸命頑張りたいのだけども自分の体は一つであり、なかなか時間も足りないということで、どっちにどれくらい比率をかけていいのかなっていうことをやっぱり自分の中でちょっと迷ったところでした。

あとは日本の文化を伝えるということで、ジャパンウィークも開催しました。これについては自己満足ではいけないなと思って事前に実行委員を募集して、このスライドを見て頂けるとわかるんですが、バヌアツ人がバヌアツ人に着物の着付けをしています。事前に一緒に勉強をして、バヌアツの人にも日本の紹介をしてもらえるようにというような形でジャパンウィークを開催しました。またバランス感覚ですが、原爆展やジャパンウィークなんかの催し物を行なった時に、いろんな質問を、日本の質問をされても答えられなかったんですね自分は。というか自分の国のこと、日本のこと何にもわかってないなっていうのをすごく痛感して、世界に出て行く前に自分の国のことを知らなさ過ぎる、自分はどうなんだろうとか、ちょっと日本人として恥ずかしくないかなっていうことをすごく思いました。

最後にですが、大学のプロジェクトに参加もさせてもらいました。先日バヌアツで初めて世界遺産に登録された伝説のチーフのお墓がある島に、ここは普段入れないんですが、そこにある自然のものを生かして弓矢を作り、それで魚を取ってコンテストするというプロジェクト、自分たちの伝統を残していこうっていうプロジェクトに参加をさせて頂きました。私のリラックス法です。バヌアツは海しかないですのでダイビングの免許とって潜ったり、これはですねシュノーケルのレベルですね、ダイビングで潜らなくてもこれくらいの海が見えました。あとはジュゴンがいたり亀がいたり、時々亀につかまって泳いでみたり、そんなことをして。で、先輩たちが残していったボディーボードとかサーフボードとかできました。本当に限られたところなんですけど、そこで時々海に入ってリラックス、気分転換をしていました。それからカヴァ、これはですね大洋州独特の飲み物だと思うんですが、コショウ科の根っこをミンチする機械に入れて水でしぼって飲む、非常に不味い飲み物なんですが、これを飲むとリラックスできるんです、絶対でもないですけどね。で、カヴァを飲むところをナカマルと言って、社交場にもなっています。これ大統領なんですが、大統領にカヴァを奢ってもらったということもありました。いってみれば居酒屋に麻生首相が来て、一杯奢ってもらうみたいなそういうような感じですが、そんなことも経験してきました。

帰ってきてからですが、中学校の総合学習でこの活動についての話をさせてもらったり、公衆衛生、保健関係のこともちょっと携わったので、広島の赤十字大学や自分の出身の大学のほうで講義をさせてもらったり、会報誌なんかに記事を載せさせてもらったり、卒業生、国際関係の学部に通っている生徒の論文に協力したりと、自分が出来る限りのことで少し協力をさせてもらっています。今後の予定では、他の学年でまた総合学習だとかそういうのがやれたらいいなと思いますし、ほか、また自分の経験を伝えられる機会があればいいなというふうに考えています。

活動全体を通して、大変だったことはやっぱり生活環境が違う、コミュニケーション、言葉の壁、あとはずっと通して言いましたがバランスですね。心と体、日本人として、他人との距離、色々な場面で自分のバランス感覚が試されたというふうに思っています。良かったことですが、短気だった自分が色んなことを気長に待てるようになりました。それから幸せのバローメーターが自分の中でできたということです。幸せは物ではないということはよく頭の中ではわかっていたんですが、この二年間で自分の腑に落ちたかなって思います。あとはこんな私でも二年間海外で活動が出来たということで、自信が持てるようになったかなというふうに考えています。自分がやった活動は今すぐ結果が出るものではなくて、10年、20年先に繋がっていったところで答えが出たらいい

んじゃないかなっていうふうに考えています。ご清聴ありがとうございました。

世界で一番幸せな国

バヌアツ共和国

活動報告

自己紹介

氏 名　　因幡　智寿子(いなばちずこ)

プロフィール

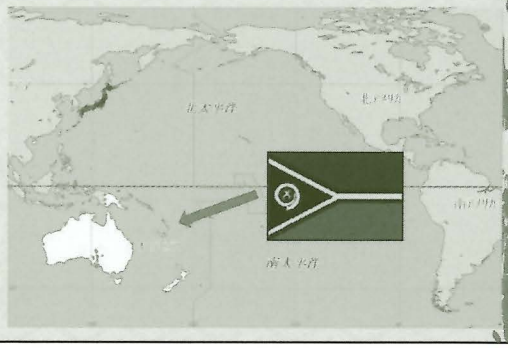
～2006.3　名古屋市立の中学校で
保健体育の教員として勤務

2006.4～2008.3　青年海外協力隊員として
バヌアツ共和国に派遣

2008.4～　　職場復帰

バヌアツ共和国ってどんな国？

バヌアツってどこにあるの？



ヴァヌアツ(VANUATU)の概要

面積　12,200K㎡（ 新潟県とほぼ同じ ）
83の島から構成される。

人口　約 23 万人

時差　日本より2 時間早い

宗教　キリスト教

歴史　1980年に独立
それまでは英国と仏国の共同統治

バヌアツの言語

公用語　英語・フランス語・ビスラマ語
各島・村に100以上の独自の言語

ビスラマ語の例:

こんにちは　Halo　　(ハロー)

さようなら　Lukim yu　　(ルッキム ユー)

ありがとう　tanku tumas(タンキュ トゥマス)

バヌアツ人について

＊**顔は怖い。**いつもニコニコしている人は少ない。が、お互い**必ず挨拶**をするなどとてもフレンドリー。こちらがニコッとすると**相手も笑う。**

＊日本人に似ていて**とてもシャイ。**恥ずかしがり屋だが、突然大胆になったりしてびっくりすることも。

＊思ったことはあまり表面だって**言わない。**

＊**ファミリー**をとても大切にする。大家族が多い。

バランス感覚①
バヌアツ人との距離感の取り方

＊下心なく、本当に優しく、困っていると必ずみんなが助けてくれる。

→ 最初は、あまりにも**親切すぎて**、後から何かを要求されるのではと**疑心暗鬼**の連続。

→ あまり特定の人ばかりと仲良くしていると、**周りの目**が気になることも。

→ 後半は色も黒くなり言葉にも不自由しなくなって、バヌアツ人に近づいたと自分は思っていても、**やはり私は日本人。**

バヌアツの特徴

＊**チーフ制（酋長制度）**

・必ず村にはチーフがおり、かなりの力を持つ。田舎に行くほど顕著。

・チーフが村をまとめ、警察が介入しない場合もある。

@ バヌアツの刑務所は、
土日は帰宅OK
平日外出OK

バヌアツの伝統と文化

島によってさまざまな違いが

アイランドドレス（女性の普段着）

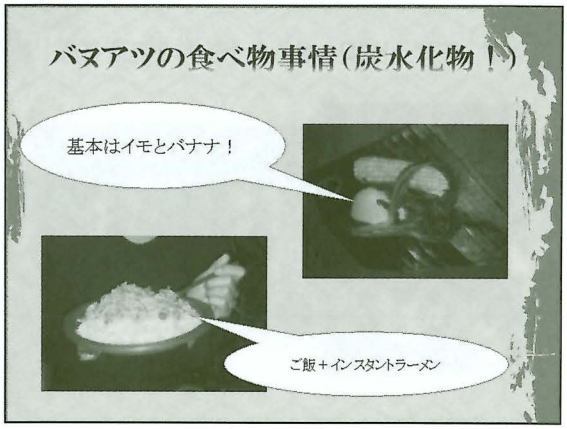
バランス感覚②
どこまで強要しても・・・？

現地の人たちは、現地の中に入り込む生活を非常に喜んでくれますが・・・

＊スポーツをする時にアイランドドレスを着ていることに抵抗が・・・

＊アイランドドレスでスポーツをする彼らにどこまで強要してよいのか・・・

<u>その国のやり方をどこまで許容して、どこまで一般論を強要するのか・・・。</u>


バヌアツの食べ物事情（炭水化物！）
基本はイモとバナナ！
ご飯＋インスタントラーメン

バヌアツのNO.1　マーケット

時々こんなものも食べます・・・
～フライングフォックス～

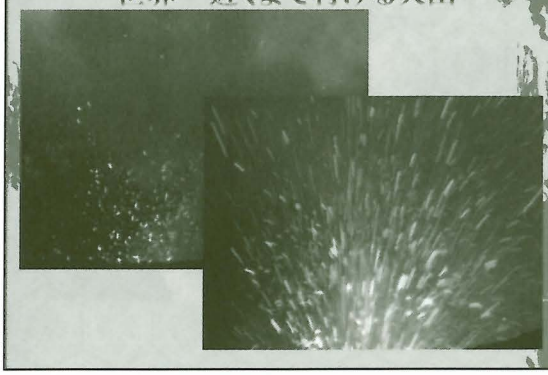
バヌアツの自然

首都　ポートビラ

美しい海と山

ブルーホール

世界一近くまで行ける火山



バヌアツの教育事情

バヌアツのこども

バヌアツの義務教育

＊ 2006年度より**6年間の義務教育が8年間**に。現場は混乱?
小学校6年間(Year 1～6)
→ 小学校8年間(Year 1～8)

＊ セカンダリースクールやカレッジ(Year 7～)が存在。
小学校にも中学校にも同じ学年が存在している状況。
→ 将来的には、Year 7･8は小学校にのみ設定
セカンダリーやカッレジはYear 9からに。

＊ Year 8終了時にナショナルイグザムを行い、
進級(進学)できるかどうかの判定を行う。

● 義務教育とはいうものの授業料を払わなくてはならず、
続けられない子供も多数。

私の活動報告

JOCVとしての活動

① 教員養成大学で教師の卵を教える
　a: 体育の教え方を教える
　b:保健分野の知識を教える
　c:大学の体育指導シラバスの作成
② 体育教員として小学生に体育の授業を行う
③ JOCV保健体育部会の部員として
　ワークショップを行う
④ 日本文化の紹介、原爆展の開催
⑤ 大学のプロジェクトに参加

a:先生の卵に体育の教え方を教える

b:保健分野の授業

彼らは卒業後、どんな僻地に赴任するか分かりません。
薬品や病院不足の一助になればと思いました。

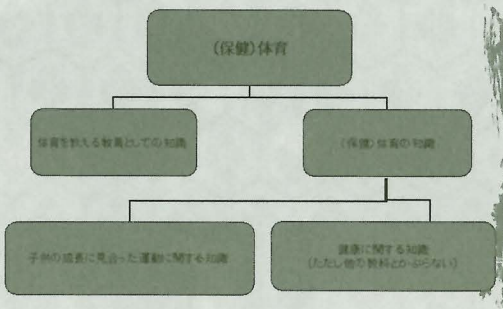
日本赤十字社や現地のNGOにも資料提供などの協力をお願いしました。

バランス感覚③
保健分野どこまで教えれば・・・

＊将来的に僻地で教員をする彼らにどこまで教えればよいのか・・・。
→ 他教科と話し合いをしてリンクしないところ、すぐにでもできる応急処置を教材に。

日本では常識とされることが
バヌアツでは非常識ということも。
日本の常識をどこまで通用させるのか？

C:大学の体育指導シラバスの作成



②小学生に教える

③保健体育部会

＊10年以上、隊員が派遣され体育の普及を
図っているのになかなか定着しない
↓
＊原因の1つとして・・・
先生自体が体育を習っていない世代
↓
＊生活と密着させて体育の大切さを伝えてはどうか
↓
＊保健関係の隊員と協力して保健体育部会を設立
↓（初の試み）
＊公衆衛生と体育（運動）の
コラボレーションワークショップ

③ワークショップ

バランス感覚④
どのくらいの割合で力を入れれば・・・

＊赴任して半年間は、体育隊員は自分一人。
最初は、赴任地の仕事を100％で行っていたが、後半は体育隊員も増え、保健体育部会を立ち上げてそちらでの活動にも力を注いだ。

→ 赴任地での活動とJOCVメンバーとして
部会の活動の比率
どちらも頑張りたい！というジレンマ

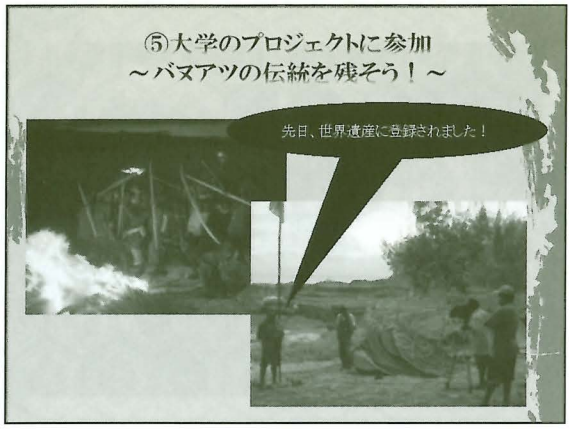
④日本の文化を伝える（JAPAN WEEKの開催）

バランス感覚⑤
日本人として・・・の自覚？

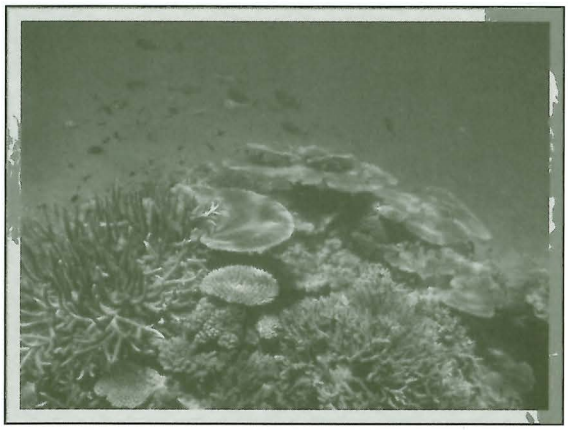
原爆展やJAPAN WEEKなどの催し物を行ったが、

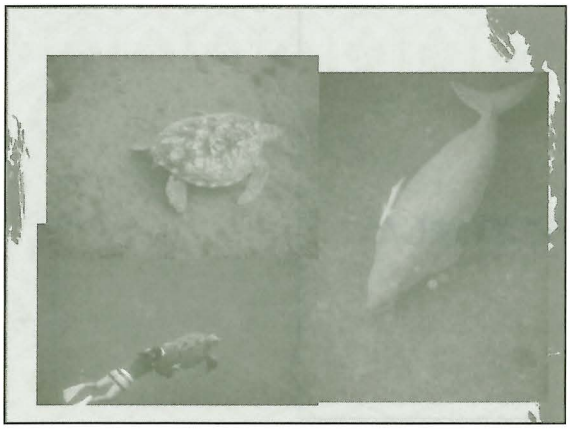
＊いろいろな質問にまともに答えられない自分
＊日本のことを何もわかっていない自分

＊世界に出る前に、自国のことを知らなさすぎる
自分は日本人としてどうなの？
＊「恥ずかしい日本人の輸出」になっていない？


⑤大学のプロジェクトに参加
～バヌアツの伝統を残そう！～
先日、世界遺産に登録されました！

私のリラックス法
海・海・海 & カヴァ





KAVA（リラックス効果◎）

帰国後の活動について

1. 学校の**総合学習**での活用（中3：進路学習など）
2. **大学での講義**
   （バヌアツの公衆衛生事情・教育事情）
   於：赤十字広島看護大学、広島大学体育会
3. 会報誌（大学）・研究会誌などへの**寄稿**
4. 卒業生：国際関係の**論文に協力**
5. 学校**作品展への出品**
6. ワールドフェスタ（文部科学省ブース）への参加
7. JICA関係（任国事情講座、募集説明会など）

＜今後の予定＞

8. 他学年での総合学習への活用
9. 何か自分の経験を伝えられる機会があれば

活動全体を通して

＜大変だったこと＞

＊生活環境（やはり日本とは大きく違う）
＊コミュニケーション（言葉の壁）
＊**バランス**
（心と体、日本人として、他人との距離・・・）

＜良かったこと＞

＊気長に待てるようになった （短気だった自分が）
＊幸せのバロメーターが自分の中でできた
（価値観の変化）
＊自信が持てるようになった （こんな私でも！）

ご静聴、ありがとうございました。

ミクロネシアでのホームステイと幼児初等教育における算数の授業

上田　裕之
（18－1，ミクロネシア，幼稚園教諭，芦屋市立西山幼稚園）

よろしくお願いします。幼児教育の現職参加ということであまり事例がなくって参考になるかわかりませんけどもよろしくお願いします。今日も長いのを作ってきたのでとばしとばしやっていきます。よろしくお願いします。

ミクロネシアはここから南の方に赤道の少し上の方にある国なんですけれども、大きな4つの島がありまして東から西に点在してる島が独立するにも一つでは独立できないと。だから言語と文化が全部違うところがとりあえず独立するために集まった島なので、「国」としては不思議な状態です。スペイン・ドイツ・日本統治時代、アメリカ統治時代を経て現在に至っておりますけれども、アメリカの援助によって支えられている国なので、アフリカとかの開発途上国とはかなり違った状況にあると思います。

本当に 4 つの島がメインなんですけれども、文化も言語も民族、習慣もすべて違うような人達の集合ですので自分たちがミクロネシア人という意識は全然なくて、僕はポンペイという島にいたんですけれども、そこの人は「ポンペイ人」と思っていますので、本当に全然違う国で、言葉が通じ合わないので英語を主にしゃべってるというだけのことで、ミクロネシアという国とは理解していないですね。ミクロネシアの“地域”と同じだと思ってますね。近隣の国もミクロネシアと思ってませんので。私はポンペイに派遣されましたけども別のところに派遣された人達とは全然会うことがないですし、習慣もインフラも全部違うという状況でしたので、これから派遣される方も、行く「国」という単位で考えるのではなくて、行く「地域」によって全然異なることがありますのでそういうことをご理解いただけたらなと思います。

今ざっと説明しましたが、南の島は比較的全て治安とか病気とか良いですので、特にポンペイに関しては親日的で日本人に対しても反日的な感情はほとんどありませんし、隊員としてはすごく過ごしやすかったなと思います。（スクリーンの写真を指して）日本の血縁者とか兄弟とか残っています。これは無名戦死の碑ということでこれは日本の方向をむいているということです。ほんというとたくさんの人が犠牲になられて今の日本があるとこういうことを、外国にきて改めて考えさせられました。日本が統治してる時は、軍隊ばっかりいるように思うかもしれないんですけども、ほとんどの方は住民の方、“日本人”の方です。だから集会所があって漁船があって昔の日本そのものです。向こうの人はその時代が一番良かったと。日本人は働き方を教えてくれてどうすればお金が儲かったり幸せになるのかを教えてくれたけども、アメリカ人は物をあたえてくれるだけで、何も僕たちに大切なものを伝えてくれない、ということを話してくれました。後で話をさせて頂きますけ

れども、私はホームステイをさせていただきました。（写真を指して）右の人がホームステイ先のおじいさんで86歳、87歳ですね。このおじいさんはお正月になったら一歳、歳取ったっていうんですよ、昔の戦前の考え方で。もうそのまま喋られて普通にこういうふうに、この間も12月15日に携帯で非通知とったら、「もしもし、上田さん元気か」と電話がかかってきておじいさんから携帯電話にかかってきたんですけども、それほど本当に普通に日本語を喋られます。ただ、日本から言うと「内地」と、60年前の言葉ですけども、本当に普通にこんな風に日本語を喋って。

（写真を指して）こちらが昔の兵隊の方です。日本から訪ねて来られました、ミクロネシアに。慰霊とかをしに。その方が、色々昔のことを振り返って、このおじいさんは軍隊で働いてたんですよ。現地人として、監視台でね。だからこの人は「アメリカ軍が攻めてくる」って言うんですね。あくまで日本側で物事を考えらっしゃるから、「日本は太平洋戦争で真珠湾攻撃の後にアメリカ本土まで攻めてったら勝ててたのに」と今でも言っておられるような方で、それぐらい日本人としてそういう風に生きてこられました。その方が訪ねてこられて、訪ねてこられた日本の方がおっしゃったのが、協力隊というのはすごく、ひどい、日本の国でありましたよね。軍隊で現地の人にひどい目にあわしたりとか。そういうとこに対して謝罪ですぐ協力隊が行ってる場面とか、NGOで色んなことしてることもあるけども、そうばっかりじゃなくてすごく日本人のことを助けてくれた人もたくさんいると、ミクロネシアの人は本当に、自分たちのことを助けてくれたと、最後のほう戦争に負けそうになって、ごはんがなくなったときに、現地の人がものをくれたりとか、すごくお世話になった人たちに、こんな風に協力隊の人たちが参加して感謝の気持ちを表すことも、大事な国際協力じゃないか、という風におっしゃったことがすごく心に残っています。先ほど説明の中で、サカオと同じような文化があります。で、あとはカマテップとかを殺して食べて、というのが向こうの中心文化ですね。

僕の活動について紹介します。（写真を指して）ここがホームステイ先のおうちで、こういう普通の民家の感じです。今右に写ってたのが雨水ですね。雨水を二年間ずっと飲んでましたけども、お腹も壊さずに元気に過ごせましたので、意外と大丈夫でしたね。こんな伝統的なおうちが必ずどの家にもあって。よくツバルが今言われてますけど、首都部もツバル状態で、結構満月の日のときになると、川が増水して家の横までこんな風に水が流れてくる状態ですので。だからツバルばっかりが騒がれてますけど、南の島全体が環境問題でやっぱりかなり困ってるけど現地の人たちはそんなことに気づいてない、っていうような状態ですね。こんな風にローカルの、昨日まで飼ってたものを殺して食べたりとか。あと私の家は本当に、今こういう南の島はどんどんファーストフードが盛んになってるんですけども、やっぱり私の島は、家は、おじいさんがすごくしっかりされてるので、ローカルフードをしっかり作ってくださって。川にバーっと鳥の羽が流れてたら「今日はチキンかな」みたいな感じで生活をさせてもらってました。ホームステイは、私は村単位でしたので、やっぱり学校が全部村で包まれてたので、ただ担任は一人暮らししていいんですね、

都市で。多くの方がみなさんそうされるんですけども、隊員としてやっぱり学校の先生として働く中では同じ村の出身者として過ごしていかないと認められない部分がありますし、一人で暮らすことができますけども、ローカルの人との意味とか心にあるものとか、そういう文化を学ぶ上でもやっぱりローカルの人と暮らすことが大事かな、と思って二年間ホームステイをさせてもらいました。

それで今言ったように、携帯がかかってくるように、今でも関係は続いていますし、この夏も実はまたもう一度ミクロネシアに行って来る位、今でも交流は続いています。もちろん強制したりと色々問題点はあるでしょうけども、おじいさんが日本の教育をそのまま受け付けられているので、きちっと伝えたことがきちっと人の心に残ってそれが受け継がれていて教育というものはやっぱり何物にも変えがたいものだし、形としては残らないけどもずっと財産として受け継ぐものなので、やっぱり協力隊の中で教育的な活動を現地で色んなくくりでされることは非常に大事なことだなと、いう風に思いました。

最初に行ったのが、（写真を指して）仕事がこれです。これは実は、ある図書館、幼稚園なんですけども、小学校と併設なんですね。小学校の図書館を、前のピースコー、アメリカのボランティアが全部ナンバリングしてきれいに本を並べたんですね。この状態じゃないです。でも校長が全部捨てる、こんな本いらん、ということになって、ピースコーもピースコーとして決して悪いとは言いませんけども、やっぱり形だけ綺麗にととのえるのではなく、向こうの人達が望んでいることをしなければいけないなと最初の日に思いました。何が必要か、何が大事なのかというのをやはりこちらでしっかり受け止めてから活動していくことが大事かなということを改めて思いました。私の場合も、実は小学校に行ったら小学校の校長先生が幼稚園もついているから小学校に隊員が前からも派遣されてたんですね。幼稚園も隊員が来たらやっぱいいから呼んだらいいんじゃない、ということで気軽に呼んでもらったので、着いて校長先生が挨拶して、宜しくお願いしますって言ったら次の日に校長先生が代わってしまって、「お前のことなんか知らん」って言われまして。同僚も君の事なんか知らないし、小学校のシステムと幼稚園は違うんですよラインが。小学校の教育委員会と幼稚園の教育委員会は上は一緒なんですけど途中から違うんで、全然誰も僕のことを知らない状態が何ヶ月か続きまして、三ヶ月ぐらい経ったときには僕がなんで来ているかっていう説明会が教育委員会で開いて、こんなふうな経歴があって、こんなことが私はできますよっていうようなことができるような状態でした。

3 万 5 千人の島ですけど、24 の幼稚園があってやっぱりアメリカの援助の関係で給食とかもあって、朝と昼、給食。9 時、8 時から 12 時までの 2 回の給食があって、すごく恵まれてる状態ですね。日本と違ってカリキュラムがあって、健康・保健・体育・算数・国語・理科・社会って感じですごいカリキュラムの量で、それをこなすのはとてもできないような状態で、なんかすごい色んなものが入ってきていてそれを現地の人達が消化できない、というような状態。私の場合それをどういうふうに子どもにとって良い方向を見出していくか、というのがミクロネシアの最初の幼児教育の成り行きでしたからね。そういうとこ

ろから始めたらいいのかなというふうに思いました。

本当に、私ももう一遍気持ちを切り替えて勉強を教えることにしました。（写真を指して）ここが海に面しているこのアワックの小学校ですね。この一室に幼稚園がありまして、こんなふうにきれいに保育室もありますし。これ僕が作ったやつも入りますけども。この最初に字だけ書いてくるということにして、でも字だけじゃなくて子どもわからないからこうして、茶色の車はケワリーンちゃんのやつだよとか、こういうふうにしたらわかるよ、みたいなところからスタートして色んなデコレートをまず作りました。なんでかというと、彼女だったらデコレートが大好きなんですけど、貼ってあるのは英語の、アメリカからもらったポスターとかで、全然子どもたちが読めないものばっかりだったので、それを必要なものに変えて、現地の人が喜ぶもの、すごく興味をもってくれることをまず第一に活動していくことにしました。

本当に一時間、朝来てから、歯ブラシですごいガシガシってするんですけれども。そういう色んな文化が入ってきていてという状態ですね。あとはほとんどがお勉強ですね。（写真を指して）こんなふうに先生が真ん中に座って、こうして学校のルールを説明するんですね。ごみを捨てたらごみをごみ箱に捨てなあかんとか、言うことは聞かなあかんとか。その勉強を先生と個別で分かれてしたりとか、給食をすごく豪華に。朝、昼とすごく豪華な給食でした。歯ブラシもみんな一斉にね、みんなに歯ブラシ与えてするっていう状態で。子どもたちがね、先生が鞭を持っているので、それで言うこと聞くんですけど、僕は鞭を持っていないので、言うことを聞かないんですよ。そしたら、ある子どもがあるとき、僕に鞭を持ってきて、これを持ってて、これを持ったらみんな友達は言うことを聞いてくれるからって言ったんですけど、ありがとうって言いながらその場に置きましたけれども。もうそのような状態ですね。僕も言葉があまりそんなに現地語が上手でなかったんですが、逆にそれを利用しようと。あまり流暢にしゃべるとカウンターパートがいなくなるので、カウンターパートでいてもらうには、ある程度しゃべれるようにだけなっておいてあんまり流暢にしゃべったら多分いなくなるので、「通訳の方は常にいてね」ということで、現地語を上手くしゃべれないことを利用しながら活動しました。

南の島は一年間同じ気候なので、クリスマスが盛んでしたり、オリンピックみたいなことをしたり。普段子どもたちは、普通の服をきているんですが、（写真を指して）こういうときはこういう格好をして。（魚の写真を指して）「どこで買ってきたの」てきいたら、「スーパーで買ってきた」って言ってましたね。そんなふうにアンバランスな状態ですね。

字を教えているんですが「字だけかいて、スクーターを描きなさい」といきなり授業がはじまるんですよ。それでは分からないんでとりあえずスクーターの絵をかいて教えたり、ほんとに単純なことですけど絵を描いてこうして並べてみて子どもが分かりやすいように教えてみたり。またさっきのルールのことですけど、ルールだけ暗唱しただけでは分からないから、絵を描くと何を言っているかよくわかるから具体的にしていこう、ということからスタートしていきました。先生たちは、遊びは学びではない、教えることが学びだと

思っていますので、ここを変えていくことはなかなか難しい。あと先生たち自身が、興味や関心を育てるのではないと思っているので、そこは難しいところですね。カリキュラムにのっとり教えることが大事と思っているので、その部分はしっかり、どこの国に行かれても、現状というものは理解して。私たちにとっては一年間・二年間の感想ですけど、彼女たちにとっては一生の生活の場ですし、モチベーションが違うのは当たり前ですし。彼女たちは分かりやすい教育を受けたことが無いので。僕たちは日本で分かりやすい教育を受けていますので、そんなふうにしたらいいというのが分かりますけど。イメージの中に経験の無い人にそれを伝えるのは難しいことですけど、日本のことを思わずに、むこうにあった教育をしていくのも大事だと思いました。

またターゲットを絞って、「算数」、特に「数量感覚」。幼稚園の子が1、2、3が言えませんし、小学生は3が何かが分からない。例えば1mや10kmなどの数量感覚が身についてない。1から10までの数的感覚が身についていない。ですので、結局計算ができない。それが小学校につながってきますので分かりやすく楽しく数量感覚を身につけることを大事にしましょう、ということでこういうふうにカードを作って。6という数字だけ覚えるんじゃなくって、1、2、3、4、5、6というのが6なんだよ、ということで裏表でカードを作って遊んだり。最初は3マスから。123マス。それができたら5マス。1から5まで教える。5ができたら10マス。1から10まで教える。なぜかというと、アメリカの教科書がここには入ってきているんですね。アメリカというのは1から12まで、ワンセット。13で始まって、1ダース。ここの現地語は日本と全く同じなんです。1から10まできちっと教えましょう、1から10までの構成を身につけましょうということで取り入れました。それでカードゲームで遊んだりしました。やっぱりカウンターパート、村の人はモチベーションが低かったのでこのままではなかなか難しいということで、太洋州の全体の教育会議がハワイで開かれるということで、本当は僕みたいな外のものは入れてくれないんですが、無理やり入れてくれ！ということで。その代わりパワーポイントを一日で2時間くらい作ってこいということで。カウンターパートに「一緒にハワイに行って勉強しよう」ということで、カウンターパートにプレゼンを通して伝えたいことをいってもらえばいいかな、と思って彼女にそういう経験をしてもらいました。

村だけでは難しいので、違う幼稚園に行って、公開授業をしようということで、僕のやっている授業を90分9コマ。子どもたちを集めて、3人集まって3人で座ろうとか。僕が3人といったら3人集まるというふうにしました。そのときにプレゼンで説明していったんですね。これは、そのときの資料です。数量感覚養ってくださいということです。結局必ず実践とビジョンを一緒にしていく。どっちかじゃなくって。実際に僕たちが示して、それをどういう意味があるのかを伝えるのが大事だとおもいました。英語が苦手ですので、この時もカウンターパートに手伝ってもらいながらしました。何個かのアクティビティ覚えたら、1週間であんまり考えずに楽にできるよと伝えながらしていきました。

300キロ離れているとこにいってプレゼンをしましたし、小学校の教員とも協力してワー

クッショップをしました。向こうの先生は授業を見たことが無いので、いい授業をみてもらおうと、日本の会員が実際にドリルをしたり。また大事なことは僕たちだけじゃなくって、必ず現地の人を巻き込んで一緒にする。（写真の人物を指して）彼は鳴門教育大学に 2 ヶ月いってたんですけれども、日本のこと少し分かっているので、メインの人をひっぱって来て、彼と一緒に、そして彼がそのうちできるようにしていこうということで。

参観授業のやり方も、教科書は学校にあって家に持ち帰ることはできないので、ノートを教科書がわりにしましょう、ということを教えたりですとか。グラフで X 軸と Y 軸を教室の床にたとえてやってみましょう、とか。向こうの人はすぐに「教材がないから」、「お金がないからできない」というので、お金を一切かけずに授業をしましょうという試みを隊員と協力しながらしました。大事なことは、日本人がいつまでもやるのではなくて、ローカルの人にやってもらう。ローカルの先生に授業の仕方などをいろいろつたえながら教えました。

やっぱりアメリカのスパイラル方式は、1 年生のときに足し算・引き算・割り算全部するんですよ。2 年生になるとちょっと難しいのを繰り返しするので、それもいい考えなんだけれども、ちょっとまた難しさがあるということで一個一個丁寧に教えていこうということで。100 年かかりといわれたのですが、諦めずに地道に自分のやっていることを信じて、相手のためになることをやっているんだと考えてやっていくことが大切だなと思いました。あとは学校単位でできなくても家族と鳴門教育大学を結んでやったりだとか、あと小学校単位とカウンターパート集めて、広域研修をやらせてもらったり。形に残さずといわれたんですが、こうして最後に形に残してしまったんですが、問題集みたいのを作らせてもらって学校に配布させてもらったりしました。

あと町で歌ってたら教育委員会の人に「CD 出さないか？」といわれて日本語のクリスマスの歌作って CD 配ったりとか。本当にいろんなことをさせてもらいました。協力隊というのは日本と違って自由な時間がありますし、活動の幅も、好き勝手はできませんが相手の国のためになることで、自分が大丈夫だと思ったことはどんどん積極的にアプローチすることがすごく大事なことではないかなと思いました。

あと、やはり現地のことを好きになるということが一番大事だと思いました。もちろん日本とは違うのでいろいろいやなこともあると思いますが、相手の国のよさがいっぱいあると思いますし、ローカルのことを好きじゃない人は、やはり正直活動もあまり上手く言っていないというところがあると思います。スキルではなくていかに自分が相手を受け入れられるかということも大事だと思いました。

あとインターネットライブ等をしたり、情報誌とかできるだけ機会があったらできるだけ自分から情報発信してせっかく税金をつかわせていただいていましたので、ちょっとでも機会があれば逃さずに自分の方からアプローチしていくことが大事かなと思ったりしました。幼稚園の場合は興奮するのが難しいですね、幼児教育の中で、幼稚園の子どもたちにビデオを見せましたが、45 分間見事に聞いてくれました。家帰ってからもすごい話して

くださって、そういうこともできますし、また現地語を使ってゲームして遊んだりしました。校外に向けては夏休み、芦屋市の先生を 30 人から 40 人を集めて講座みたいなのを開いて 2 時間話をさせてもらいました。JICA の出前講座ですね、土曜日にもできますので、土曜日は私立の学校にいかせてもらったり説明会に参加させてもらったりもしました。兵庫県には JICA の教員 OB 会がありますのでそこで報告させていただいたりしています。できるだけ貴重な経験をさせていただいた JICA の方初め文部科学省の方とくに現場の方ですね。

現職さんは一番自分が「今は行きたくない」ってくらい日本で頑張ってるときにいくのがいいと思うんです。何でいくの？って引き止められるなかで行かれたほうがいいと思いましたし、僕はその時期を選びました。だから僕の後には普通なら講師が来るんですけれど、特別に正規の人が代わりに来るくらい待遇もよくしてもらいましたし帰ってきてからもいろいろしサポートしてくださってます。だから僕は 3 月 25 日に帰ってきたんですけれども 26 日には働きました。2 年間いろんな経験をさせてもらったので、やはりそれを恩返しすることが非常に大事だと思いました。その分やはり帰ってきてからも過酷です。正直言って。でもやはり 2 年間こんなに良い経験をさせてもらった恩返しですし、それを忘れず頑張って頂けたらなと思います。

「ミクロネシアでのホームステイと幼児・初等教育における算数の授業」

海外青年協力隊18年度1次隊
芦屋市立西山幼稚園　上田裕之
ミクロネシア連邦派遣　ポンペイ州アワック幼稚園配属

ミクロネシア連邦国

- 4つの異なる大きな島（州）から成り立っている
  全部で607の島が4つの州に属し、島は3000kmに渡って太平洋の　海に点在している。
- ミクロネシアの歴史
  スペイン統治～ドイツ統治～日本統治～アメリカ統治～独立
- 現在の国家経済状態
  国家予算の7割をアメリカなどの援助、主にコンパクト2によって支えられている経済状態の国。
  国防と安全保障をアメリカに委託した自由連合盟約国として、事実上独立した。（国連に加盟、しかし軍隊は持たず、アメリカの影響下にある）

開発途上国には、様々な異なった状態の国々が存在すること

全く異なった4州の集合体

- 外国が4つ集まり国を形成
  （4州以外にも多くの離島が存在し、文化言葉も異なる）
  （治安・ローカルの気質・物資の豊富さ・インフラなど全く異なる）
- 全く異なる言語・文化（公用語　英語）
- ミクロネシア人ではなく、ポンペイ人
- みんな自分がナンバー1
- ミクロネシア地域とミクロネシア連邦の違いがはっきりしていない人もいる

ミクロネシア連邦協力隊の任国としての特徴

- 生命にかかわる病気が少ない
  （黄熱病・狂犬病・マラリアなど）
- 治安がいい
  （泥棒・殺人事件は殆どないが少しずつ増加）
  ＝　経済社会・消費社会が進んでいる
- 食べ物に困るほどの貧困や紛争がない（テロ・暴動）
  ホームレス的な人・物乞いをする人を見かけるようになってきた。
- 親日家（頭をさげる挨拶・日本語であいさつ）
- 水や電気、ガス・灯油、電話も携帯もあり、インフラが整っている（停電・電話がつながらないことはある）
- 日本食なども含めて、食料品が容易に手に入る。
- 島からの出ることができない。
- 健康的な食生活な難しさ

日本の統治時代のポンペイ

- 日本統治時代のポンペイ人口8万人。
  （うち日本人が4－6万人居住。一般の日本人も多く暮らし、日本そのものの生活をおくっていた。
  （巡査・集会所・小学校・こうがっこう・漁師・屋台のそばなど）
- ポンペイが最も栄えていた時代
  （日本人はどうすれば、働いて良い生活をするか
  アメリカ人は物を与えてくれた）
  ＝親日的（アメリカの教科書との違い）
- 日本時代の教育を受けたおじいさんの生き方

ポンペイの文化

- 5つの村の象徴的な酋長制度
- 州旗に表されているサカオ
- 南の島全体の文化　カマテップ

ホームステイ

- 村の学校幼稚園の先生はすべて地元に住んでいる。(村に住んでこそ一員)
- 多くの隊員が都会で一人暮らしをするが、ホームステイでしか得られないもの
  ローカルの人との関わり、理解できる
  文化や生活習慣など様々なものが学べる
  ローカルの人の家にすむことでの信頼を得られる。(村社会・人とのつながり)
- ローカルを理解できる。任期終了後関係が続く。

尊敬すべきおじいさん

- 日本統治時代の教育を今も大切にして生きている。
  (懸命に働く・物は同じところに置く・人に自分が行動して伝える)
- 信念を持って生きる
  村社会や伝統に縛られず、自分の信じる道を生きる。(ナンマルキへの批判・葬式など無駄なことへの批判・良い文化は残していく)

誓ったこと

- 前にいたピースコがナンバーリングした図書
- 現地の必要なことをしよう
- 形に残ることにこだわらない
- まず、このアワックで何が必要か、何なら残るかをしっかりと受け止めてから、仕事をしよう

ポンペイの幼稚園

- 3万5千人の人口の島に24の幼稚園
- 1クラス複数担任制、基本30名を超えない
  (日本の幼稚園事情を話すとびっくり)
- 朝8時15分くらいに始まる昼12時くらいに終わる
- 朝昼給食がある(アメリカからの特別な援助)(小学校との落差)
- 細かいカリキュラムの存在、週単位のテーマ
  (健康・言葉・理科・社会・算数など)
- 日本の情操を育てる幼児教育ではなく、小学校の授業の前段階としての就学前教育

様々な製作物を作る

- 現地の先生が、部屋をデコレートすることが好きであるということがわかった。
- しかし、単に英語のポスターなど幼児に意味が分からないものも、多く見られた。
- 現在使用しているものを幼児が分かりやすくするために

現地の先生が何を求めているかを探り、ローカルの人が必要な活動を具体的にしていく。

幼稚園の一日

- 8時すぎに到着
- 小学生と一緒に州旗掲揚・校長先生のお話
- 8時30分～9時30分　歌・曜日・文字指導
- 9時30分～10時　朝食（給食）・歯ブラシ
- 10時～10時30分くらい　遊ぶ（教師も休憩）
- 10時30分～11時30分　算数などの授業
- 11時30分～　昼食（給食）歯ブラシ・バスにて帰宅

ポンペイの幼稚園の先生の考え方

- 遊びは学びではない
- 興味や関心を育てるという考えはない
- たくさんの知識を教えることが大切
- カリキュラムにのっとり、教えることが何より大切（子どもの理解や興味は関係ない）

ターゲットを絞る

- 幼児の実態から算数、特に数量に関する能力が身につける必要性
- 数量感覚が身につくことの大切さを教師が感じ、子どもにとってわかりやすく、楽しいを行うことの大切さを感じてもらう

新たな試み1

- カウンターパートと一緒にハワイにプレゼンテーションに参加する
- 年に一度、北太平洋の島々の教育者が集まって教育会議が開かれる。
- 他国の教育事情を知る
- 自分のプレゼン・授業をポンペイの人たちに知ってもらい、協力隊の存在や自分をPRする機会に
- カウンターパートと信頼関係を深め、自分の日常に行っている活動内容の意味を理解してもらう

⬇

ローカル教員同様に試験に合格し、
海外出張をする機会を得る

新たな試み2
新たなカウンターパート・公開授業を実現するために

- 一つの場所で、ポンペイの教育現場の問題を理解してしまうことは難しい。
- 村での活動を大切にしながら、ポンペイ全体の先生に自分の授業を見てもらい、伝えて活用してほしい。
  現地の人が経験していないことは、実際に授業を見て、体験しないと、理解してもらうことは難しい。
- ポンペイ初の幼稚園の公開授業を行なうには、人の集まりやすい町で行なう必要がある。
- ポンペイ人は物はシェアーするが、大切な知識はシェアーしないという考え方を打破するには、外からの力が必要。

Purpose of this Workshop

- All teachers should have good teaching skills and plans for students.
- ECE & Lower grade students should understand how to solve problems in all areas of learning.
- All teachers should share their skills of teaching.

Making lesson plan

- Clear to the target point.
  What kind of math you want students to learn?
  How students understand math skills?
- Understand students levels.
  Teach a number for one week in ECE.
  If students can hardly understand a number in a week, teachers should repeat the same number.
  (No need hurry up)

How we teach math in ECE & 1st grade level?

- ECE & 1st grade level is basic math.
- Students learn math at first in ECE & 1st grade school.
- Teachers should have simple teaching for lower ages 5 or 6 yrs.

What we need most important teaching in ECE & 1st grade math?

Pohnpei schools Math problem

- Pohnpei schools have declining academic standards in math. Many elementary students can not understand math. They have not basic learning for math.
  Because they can not understand number value.
- We should encourage number value. It is very hard.
  Because teachers lack of teaching basic math.
  (need to repeat)
- Always review basic math number with value.

What is basic math?

- Basic math is numbers 0 to 9 or 1 to 10 in ECE.
  Because Numbers 0 to 9 or 1 to 10 cover basic math.
  If children can have perfect understanding numbers 0 to 9 or 1 to 10 in ECE math level, children can learn math in upper grade level.
  All number component numbers 0 to 9 or 1 to 10,
  no need to teach over 11.

Number Value

What is number value? 3 = ○ ○ ○

- Children can count numbers 1-10.But it is not enough . Children should have number value in ECE & 1st grade math lesson.
  If Teacher teach number value for student. We need hard-working for teaching. And we should apply many activities and many materials so as to learn number value.

Make a ten

- 5 is one group.
  (Children can not count many numbers, because 5number is 1grop plus some numbers.)
  I always use make a ten.(for example)
- One hand have five fingers.
- Pohnpeian counting is eisek. No need twelve.
- We can choose pohnpei style.

6.Using flash card.

- **Purpose of today's teaching (step by step ·Selecting cards for objective)**
- **Using flash card for all students**

1.Positioning

2.How to teach (individual & all)

- **Everyday practices**

7.Using shell on the value board.

- Leaning number value
- Using concrete material
- How to teach

1.Teach how to use (Board & concrete material)

2.Step by step

★Mark

① Same material ② Concrete material

③ Semi concrete material ④ Listing & looking numbers

⑤ Listing numbers ⑥Reading numbers

★3 Circles 5 Circles 10 Circles

8.Using number / Value card.

- Students always can use card.

(Good memorize·Good understanding)

- Students can learn number and value.
- Students match number and value.
- Development

① Same material

② Concrete material

③ Semi concrete material

④ Listing & looking numbers

⑤ Listing numbers

⑥ Reading numbers

Today we have 9 activities for students

1.Playing finger game. 2. Sing simple songs.

3.Playing group game. 4. Playing ama dong-dong

5.Counting familiar materials. 6. Using flash cards.

7.Using shells on the value board. 8. Using number / value cards.

Category Activities

Introduction & relax activities	Playing number activities	Learning activities with familiar materials
1.Playing finger game.	3.Playing group game.	5.Counting familiar material.
2. Sing a simple song.	4. Playing ama dong-dong	6.Using flash card.
		7.Using shell on the value board.
		8.Using number / value card.

Introduction & relax activities	Playing number activities	Learning activity with familiar material	
1.Playing finger game. 2. Sing a Simple song.	3.Playing group game. 4. Playing ama tong-tong.	5.Using familiar material. 7.Using shell on the value board.	6.Using flash cards 9.Using number / value card.

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri

Order Lesson program

Introduction & relax activities

↓

Playing number activities

↓

Learning activity with familiar material

My moment

- Local teacher can take a good skill
- Local teacher can make a good local material.
- I want to teach good skill for teachers and student.
- JICA & JOCV do not have a money.
  Japan Oversea cooperation volunteers
  But we prove many good skill.
- We can prove how to good skill for teacher.

幼稚園教員の枠を超えた活動

1. 算数向上プロジェクト
   - ポンペイでのオープンクラス型ワークショップ
   - 2000キロ離れたヤップの隊員と協力したワークショップ
2. ミクロネシア、パラオ、マーシャルの隊員及びカウンターパートを集めたJICA広域研修主催
3. 鳴戸教育大学とのインターネットライブ

学校隊員＆ローカルJICA研修員が連携した算数向上プロジェクト

・教育局派遣の隊員のカウンターパート(教育局算数スペシャリスト)が8週間JICA研修員として、鳴門教育大学で学び、帰国後そのフォローアップとして、隊員と協力し、現地の小学校教員の算数教授法向上のためのプロジェクトを立ち上げた。

↓

カウンタパートの意思を尊重しつつ、協力隊員が現場での経験を踏まえて議論して、目的・手段などを決めた。

↓

身近にある具体物(Familiar Material)を使って、生徒が数的感覚を養なう授業をオープンクラスとして行う。

ポンペイの教育問題

- アメリカ式教育をそのまま受け入れている。(スパイラル方式)
- 数的感覚の欠如(教科書・黒板だけのイメージのない詰め込み型授業の展開)
- 母国でない言葉で学ぶむつかしさ(英語の教科書)
- 色々な単位(ヤード・インチ・センチ)を使うため、イメージが掴めない
- 時間や距離の感覚が生活になく掴めない

何故教育か？

- 経験していないことを教えること、伝えることの難しさ
- 教育の技術移転は100年かかるつもりで
- 魚を与えるのではなく、魚の釣り方を伝えたい。
- 物質社会に浸った限りは、この世界の中で生きていく必要がある。教育がなくては、世界の中で生き残れない。
- おじいさんをみて、教育こそ財産だ。

その他の活動

- ミクロネシア・パラオ・マーシャルの小学校隊員とカウンターパートを集めての広域研修
- ポンペイ州幼稚園と小学校低学年及びスペシャルチルドレン対象の算数ワークブック集の作成・配布
- 小学校での体育授業・野球指導
- 学校教材として、日本語のクリスマスソングのCD作成

活動を行う上で

- 任国の現地の人が求め、興味を示し、任国の問題解決に繋がる課題とアプローチの仕方を考え活動する。
- 活動当初に、ローカルと共に何が問題か？どのよな方法でアプローチすればいいか？を学びながら掴んでいく。
- 主役はローカル、支える協力隊。
  （ローカルの気持ちや立場などをしっかり掴む）
- 初任・後任、配属先の要望など、自分がどのような活動をすればいいかを見極めて活動する
- ターゲットを絞り、具体的なアプローチ
- 自分が任国のためにしたほうがいいと思ったことは、積極的にする。
- 協力隊員同士・事務所との連携で広がる活動。配属先を大切にしながら、任国全体のことなど視野を広げた活動

協力隊参加に当たって・任国に壁にぶつかった時

- 日本の現場が自分を求めている充実した時期に行く。
  （前向きな協力隊参加）
- 日本で大切なものを残してきたからこそ、現地で掴もうとする努力
- 自分が日本とは違う価値観を受け入れる、違いを分かり合うという原点に常に立ち返ること。
- 自分がどのような存在として、JICAまた現地に求められているか？
- 違って当たり前、日本の常識が伝わらなくて当たり前。その経験を求めて来たことを忘れない。
- 失敗を恐れずにどんどんと挑んでいく。

現職教員として

- 日本へ自分から、インターネットライブなど結びつきを求めていく
- あらゆる媒体をつかって、広報活動・情報発信をする。
  （クロスロード「生徒への手紙」・協力隊活動紹介の「ホットアングル」・朝日小学生新聞など）

帰国後の活動

- 協力隊で得た貴重な経験を自分から積極的に伝えていく。

○ 職場に向けて
- 園児を対象に写真などで生活文化風習を紹介
- クラスで現地語を使った遊び
- 保護者に活動・現地のことを紹介

○ 校外にむけて
- 教員夏季研修で講座をもうけて、市の幼・小・中教員対象に協力隊・活動・生活文化・教育事情
- JICAの出前講座、JICAの説明会、帰国教員の会

プログラム３

派遣現職教員サポート活動報告

鎌田亮一（筑波大学）

浜野　隆（お茶の水女子大学）

佐々井啓（日本女子大学）

松嵜昭雄（鳴門教育大学）

村松　隆（宮城教育大学）

藤原義博（筑波大学）

CRICEDの行う派遣現職員のサポート活動の紹介

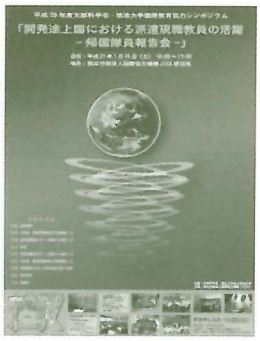
鎌田　亮一
（筑波大学教育開発国際協力研究センター・研究員）

CRICEDが行う派遣現職教員のサポートについて

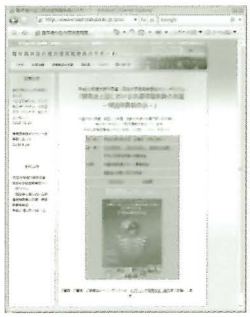
鎌田亮一
（CRICED研究員）

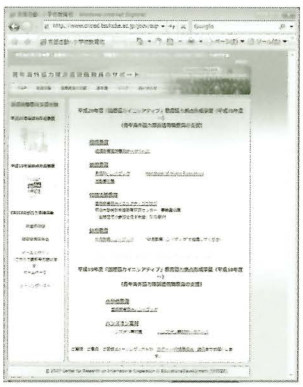
派遣前研修

帰国隊員報告会



ウェブサイト





サポート活動紹介
- サポート事業
- 派遣前研修
- 帰国隊員報告会
- メールマガジン
- ウェブサイト
- メーリングリスト

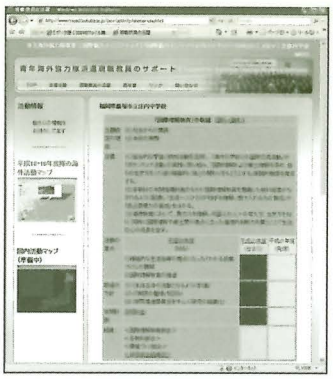
活動紹介
- 海外活動マップ
- 国内活動マップ
- 活動事例紹介

活動事例紹介

コスタリカの環境美術展

活動事例紹介

ウガンダのJICA広域研修



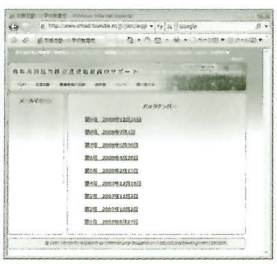
国内活動事例紹介

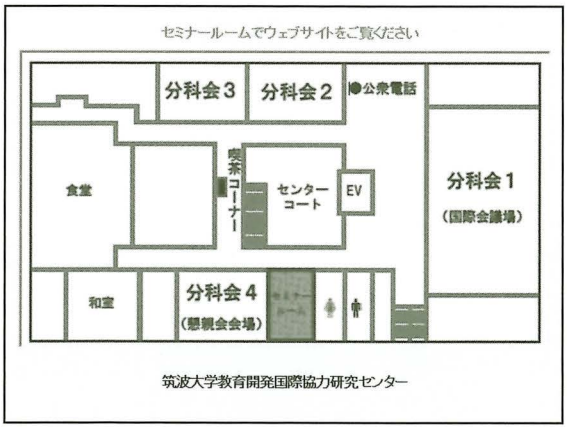
海外活動マップ

国内活動マップ

リンク集

メールマガジン





筑波大学教育開発国際協力研究センター

幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上

浜野　隆
（お茶の水女子大学文教育学部・助教授）

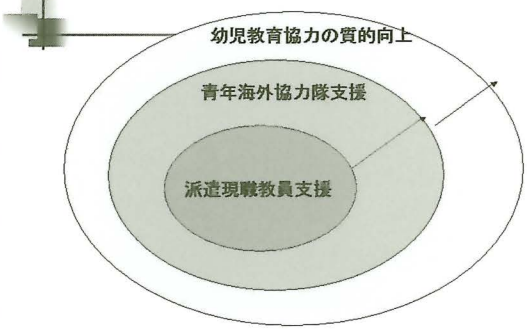
【幼児教育】
幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上

浜野　隆
（お茶の水女子大学）

1. 事業の目的・方法

- 目的：幼児教育分野の青年海外協力隊の支援を通じた幼児教育協力の質的向上
- 1. 協力隊活動広報・調査
- 2. お悩み相談：派遣前、派遣中、帰国後
- （メールでの相談受付、Q&A集の作成）
- 3. 教材・資料の作成・配布
- （ハンドブックの多言語翻訳、ビデオ、国際動向パンフ）

活動テーマ：「幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上」



2. 今年度の活動・成果

- （1）広報・調査活動
- 幼児教育分野は募集重点職種であるため、広報に力を入れた（昨年度の評価コメントにもとづく）。
- 国内の幼児教育諸機関と連携し、幼児教育分野の青年海外協力隊事業の広報を実施。
- 昨年度に続き、公立幼稚園・私立幼稚園調査に対する広報活動は継続。
- 昨年度実施したアンケート調査を集計し、結果を幼児教育関連施設に報告。
- 保育者養成機関、保育所のスタッフに対する調査・広報を実施。

（2）幼児教育協力の国際動向に関する情報集約・提供

- 隊員を取り巻く国際機関の援助の理解
- （UNICEFや世銀等の影響をかなり受けている）
- ①ECD国際動向パンフレット作成
- 国際社会の開発課題とECD支援との接点、途上国の乳幼児を取り巻く状況をマクロな視点から理解する重要性に言及し、そのための基本的知識や情報源を提供する。
- ②「EFAグローバルモニタリングレポート2007年版」フルレポートの翻訳：出版済。

（3）派遣候補生および派遣中隊員からの質問受付と助言

- 「幼児教育ハンドブック」配布（日本語・英語）。
- 各訓練所からのリクエストに応じて送付し。個別の問い合わせにも対応。
- 現在は「幼児教育ハンドブック〔2〕：幼児教育協力Q&A（一問一答集）」の作成が進行中。
- 派遣隊員からの質問を集約し、回答できるものについては回答を送付している。
- 隊員の広域研修への助言、本学が実施している地域別研修（中西部アフリカ等）への候補生の参加促進を通じて、派遣前情報の入手、派遣先スタッフとのネットワーク作りを支援。
- 「幼児教育ハンドブック」の多言語化を進め、昨年完成したフランス語版は各訓練所ですでに活用されている。
- 帰国隊員の活動に関する助言も行なった。

3. 派遣中隊員がかかえる悩み（実際に寄せられた質問から）

- 1. 任国の教育事情
- 2. 文化の違い
- 3. 要請に関する問題
- 4. JOCVに対する理解が乏しい
- 5. CP（カウンターパート）との関係
- 6. 活動の内容・方向性について
- 7. 語学・コミュニケーションの問題

- 1. 私には、特定のカウンターパートがいないのですが、活動に際してどのような点に留意したらいいでしょうか。
- 2. 任国の教育に対してどこまで日本的な考えが良いのか、必要なのかわりません。子ども中心主義の伝達をすべきかどうか、判断する方法を教えてください。
- 3. 任国には任国の保育の型があり、その国式の保育にどこまで手を入れていいかわかりません。活動の方向性を決めるいい方法はあるでしょうか。
- 4. 現在の活動は、個に対してアプローチしている状況なので、広がりに欠けると感じています。「点」に対する活動を「面」に広げていくにはどのようにしたらいいでしょうか。
- 5. 配属先のJOCVに対する理解が乏しくて困っています。すでに赴任して10ヶ月になりますが、いまだに自分の配属先で私の位置づけをきちんと決められていません。相談できる現地の相手もいません。どうしたらいいでしょうか。

- 6. カウンターパートや指導主事が忙しく、時間が合わないため十分なコミュニケーションの時間が取れません。そのため、講習会の準備などにも支障をきたすことがあります。何かいい方法はないでしょうか。
- 7. 国民性の相違かもしれませんが、私の任国では、部下や上司の許可なしに仕事ができず、自主的な仕事が考えられません。指導主事が絶対的な権威をもっており、間違っていても間違っているといえない雰囲気があります。私はときどき自分の思ったとおりのことを言ってしまうのですが、耳を傾けてもらえません。
- 8. 要請内容と現場のニーズが結びつきません。現場での需要がわかりません。そのため、活動の方向性が見えなくて困っています。どのように活動の方向性を見つけていったらいいでしょうか。
- 9. 語学力の問題もありますが、相手とのコミュニケーションが難しいといつも感じます。そのため、信頼関係を築くことがうまくできていません。信頼関係を築くための何かいい方法はあるでしょうか。

- 10. 自分が担当しているエリアの規模が大きすぎるので広く浅い活動になってしまうのではないかと不安を感じます。どのような点に注意して活動したらいいでしょうか。
- 11. 巡回先が多く各園との深いかかわりがなかなか難しいと感じます。どのような点に注意して活動したらいいでしょうか。
- 12. 任国の人が受身（時には怠け者）で困っています。なかなか指導主事自身で物事を企画したり提案しても、私にやらせようというフシがみられます。現地の人々のやる気を引き出すいい方法はあるでしょうか。
- 13. 露骨に物質的要求をされます。うまくかわす方法を教えてください。
- 14. 講習会を定期的にやっているのですが、その内容が浸透（定着）しにくいというのが悩みです。講習会を成功させるコツは何かありますでしょうか。
- 15. 赴任先がお休みのバカンス中、どんな活動をしていいかわかりません。完全に休んでいる隊員の方もいますが、それでいいのかどうか疑問に思うときもあります。何かいいアドバイスがあればお願いします。

- 16. ニーズがわからない
- 17. 自分のやったことの効果が見えない（これまで何代も入って、何が変わったのか。実感が持てない）。
- 18. 協力の効果をどう確認したらいいのか。
- 19. 相手国の教育にどこまで介入していいのかわからない。
- 20. 体罰やスパルタ式教育に疑問を感じるが、どうすべきか
- 21. 任国の3歳児と日本の3歳児の発達の度合いは同じようなものと考えていいか？違うとしたらどれくらい違うのか？
- 22. 現地では、衛生についての感覚が日本と大きく違います。幼稚園はごみだらけですが、先生も子どもも全然気にしていません。どこまで衛生環境について手を入れていいのかわかりません。
- 23. 任地で、比較的若い職員の人は柔軟性があり、私の言うことをよく理解してくれますが、権力のある年配の先生方は柔軟性がなく、聞く耳を持ちません。その結果、私のやっていることは全く現地に浸透しません。何かいい方法はありますでしょうか。

幼児教育以外の隊員も活用できるような工夫

- 寄せられた多くの悩みは、幼児教育分野のみならず、他分野の隊員もかかえている（であろう）問題
- 幼児教育のみならず、他分野の隊員にとっても参考になるような「Q&A集」を。
- 質問によっては、JOCV事務局（あるいは調整員）が答えたほうがいいものもある。

「幼児教育ハンドブック〔2〕幼児教育協力Q&A（一問一答集）」

- **「基礎知識」と「実践」からなる。**
- **基礎知識：国際教育協力の歴史、ECDの取り組みと実際、途上国の教育環境の実情、日本の経験を活かす、協力隊幼児教育の派遣の歴史、日本の幼児教育と任国の幼児教育の違い、など。**
- **「実践」：「活動の障壁（語学力の壁との戦い・活動が空回りする）」「マンパワーへのいらだち」「自己活動に対する過小評価」「活動後期のあせり）」「異文化のなかで暮らす　A. イスラム教の社会、B. 社会主義の社会」「現地の人との信頼関係を築く」「活動の幅の広げ方」「識字のための教材から子どもが楽しむ教材へ」などからなる。**
- **幼児教育隊員のみならず、他分野の隊員にとっても有益な内容を盛りこむようにしている。**

派遣隊員ニーズ（まとめと対応）

- ①活動の方向性に関して第三者の立場、専門的な立場からのコメントがほしい
- →拠点での対応：（Q&A集や隊員の集会に参加してのコメント）
- ②派遣先のニーズを把握したり、活動の効果を確認したりするための調査手法
- →拠点での対応：（Q&A集で対応）
- ③資料や教材が現地語になっていると良い
- →幼児教育ハンドブックの多言語翻訳

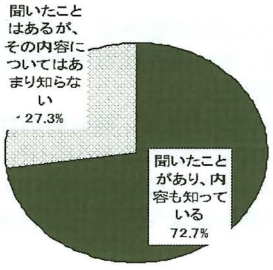
4. 最終成果物に向けた進捗状況

- 「Q&A集」は、本日配布資料が現状。来年度、さらなる海外調査を通じ、QもAもより深い内容のものにすることが課題。
- 回答については専門家の意見も交え作成していく。
- 「EFAグローバルモニタリングレポート2007年版」「国際動向パンフレット」は、ドラフトが完成
- 幼児教育ハンドブックの多言語化は、フランス語、ベトナム語、ラオス語が完成。
- 国内の幼児教育関係者調査（広報）はすべて終了

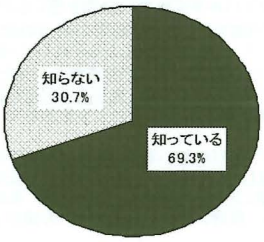
（参考）保育者養成機関教員への調査

- 「大学のときの先生がJOCVについて授業で話してくれて、初めて（JOCVの存在を）知った」：ある隊員より
- 保育の専門家（研究者）からみたJOCV
- 保育者（幼稚園教諭・保育士）養成機関（大学・短大等）の教員への調査
- 全国の保育研究者から無作為抽出・郵送調査
- 有効回答数：150
- 回答者属性：教授53.7%、准教授30.0%、その他16.3%

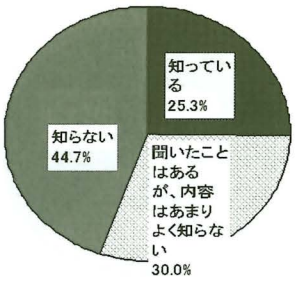
■【Q3】青年海外協力隊の認知度



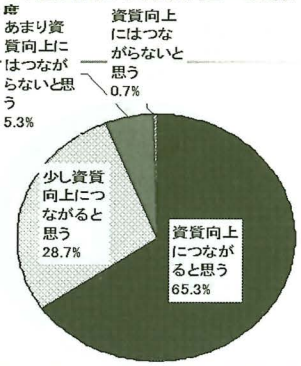
■【Q4】青年海外協力隊の「保育・幼児教育に関する職種」の認知度



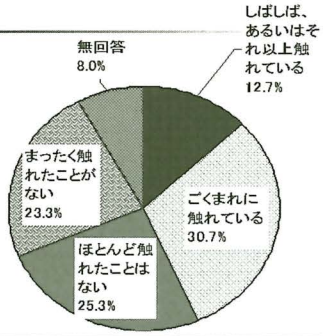
■【Q8】「現職教員特別参加制度」の認知度



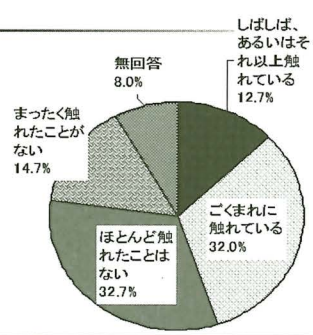
■【Q10】青年海外協力隊に参加することで保育者としての資質向上への期待度



■【Q11】保育者養成授業などでの開発途上国の保育事情について触れた経験



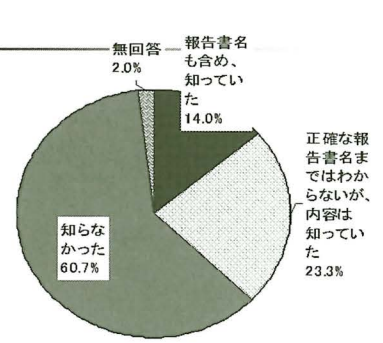
■【Q12】保育者養成授業などで、幼児教育における国際交流・協力について触れた経験



文部科学省「幼稚園教員の資質向上について」(平成14年)

- 「研究活動などは、教員の資質向上面で研修と同様の効果が得られる場合もあり、積極的に取り組むことも有効である。また、**留学や青年海外協力隊への参加などの国際経験は、外国語を操り、外国文化を理解するだけでなく、言語・文化の違いを踏まえた意思疎通を行う能力や日本と異なる環境での経験により、自己や自らの社会的背景について客観的な理解が深まり、コミュニケーション能力や国際化時代に対応した幼児教育を進める能力の向上につながる。**」

■【Q13-1】文部科学省からの答申の認知度



海外派遣隊員の家政分野に関連する活動支援教材などの開発

2009年1月10日

日本女子大学　佐々井　啓

1. 事業の目的・方法

- 家政分野の活動が生活の質の向上につながる指導を目指していくことが重要であると考え、多くの隊員が活用できる内容を盛り込む教材を作成する。
- 主として女性の経済的自立を支援するための活動の可能性を考えて、生活や教育レベルに合わせて指導できる教材事例をさらに取り上げていく。
- これまでの隊員の活動報告を調べるとともに、海外調査を行って現地の状況を把握する。

2. 今年度の活動

- 小学校、青少年活動、村落開発などの隊員に広げて隊員報告書を調査し、現地の状況を把握
- これらの隊員の活動の支援に活用される家政分野の教材作成のために、現地の生活状況を調査
- アジア、アフリカ地域に加えて、中米の生活状況を調査して教材に盛り込む
- 家政分野に関わる活動の実態を把握し、汎用性の高い参加型の活動事例集の作成

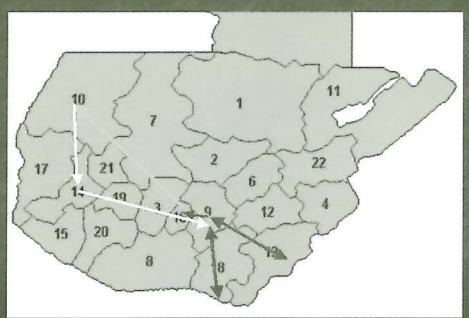
3. 現地調査

グアテマラ共和国

2008年11月3日～10日

グアテマラシティ

調査行程



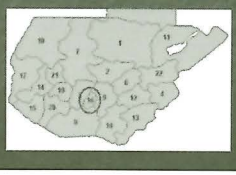
青少年活動隊員訪問　11月5日

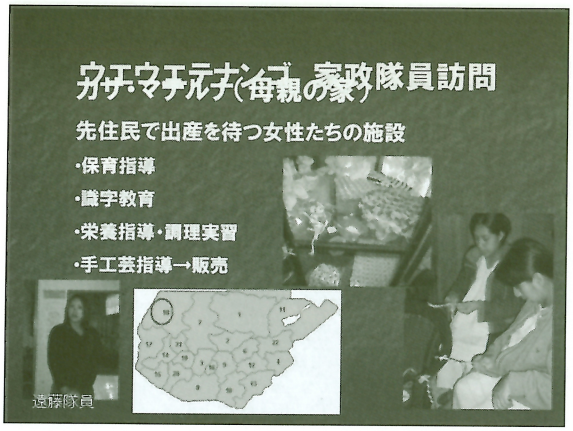
アンティグア　CASA　ALIANZA　青少年施設

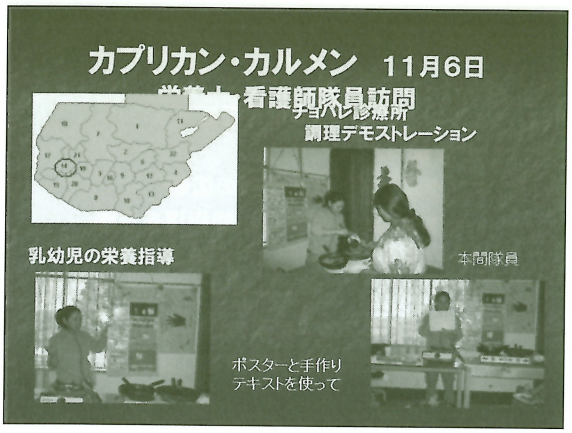
12歳～18歳の少年　50名

- ストリート・チルドレンや虐待、ドラッグなどによる少年の更生施設
- 電気工事、溶接、製パン、農業などの指導で、社会に出る準備

奥田隊員

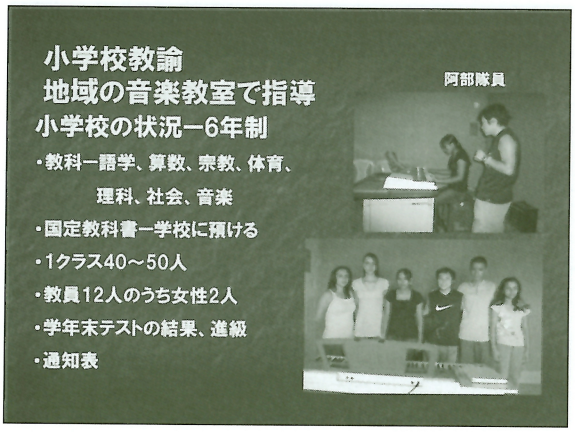



ウエウエテナンゴ 家政隊員訪問
カサ・マテルナ(母親の家)
先住民で出産を待つ女性たちの施設
・保育指導
・識字教育
・栄養指導・調理実習
・手工芸指導→販売
遠藤隊員


カプリカン・カルメン 11月6日
看護師隊員訪問
チョハレ診療所
調理デモストレーション
乳幼児の栄養指導
本間隊員
ポスターと手作り
テキストを使って

カルメン診療所
・乳幼児の死亡率の減少のために活動
標高
看護師 野口隊員

エル プログレソ 手工芸隊員・小学校教員
訪問
地域の女性に手工芸の指導
前任者ー染物指導
現在ー編物、機織、組紐など
加藤隊員


小学校教諭
地域の音楽教室で指導
小学校の状況ー6年制
・教科ー語学、算数、宗教、体育、
理科、社会、音楽
・国定教科書ー学校に預ける
・1クラス40～50人
・教員12人のうち女性2人
・学年末テストの結果、進級
・通知表
阿部隊員

ハワイ地区 11月8日
村落開発普及員を訪問

環境指導

- 海がめの卵の保護
- マングローブなどの環境を守る
- 村の改善
  - 女性グループ－健康問題の広報
    - 本間・野口隊員の訪問指導を企画
  - 青年グループ－石けん作り（廃油・ココナッツ）
    - 民芸品製作（ココナッツの皮）
- 観光客のためのゴミ問題の解決策
- 収入を得るための生活すべての支援

地元青少年とミーティン

自然活動への教材づくりの提案

提供した教材

- 家庭科ハンドブック（日本語・英語）
- 携帯用ハンドブック
- 活動事例集CD版
- エプロンシアター

- 協力隊栄養隊員の活動記録集
  「海を渡った栄養士たち―青年海外協力隊栄養士40年の活動記録」
- 食育カレンダー2009年版
- にっぽん食育推進事業作成「あさごはん」テキスト

4. グアテマラの生活

衣生活

民族衣裳

一般の服装

洋品店

仕立て屋

洗濯

現状と課題

- 先住民は、それぞれ固有の民族服を着用
- 織物や手芸が収入源となる
- それらをどのように活用し、生活の向上につなげるのか
- カサ・マテルナでの手芸品の販売は、支援団体の収入となり、母親たちのものにはならない
- 今後の女性支援のあり方を探る必要がある

食生活

トルティーヤ　郷土料理

井戸　かまど

食材・料理より見える問題点

- 野菜の利用が少ない
- 油脂の利用が多い
- 炭水化物が多い（トルティーヤ・フリフォーレス・パン・ライス）
- 砂糖の摂取量が多い（炭酸飲料の摂取・インスタントコーヒーの砂糖）
- スナック菓子が多い

新たな教材へ

- 現地の食材をいかに活用するか
  （トルティーヤへ野菜・シチューに野菜）
- 家族の健康を支えているという自覚が、女性の自立・地位向上の芽生えにつながるのでは
- 栄養失調やジャンクフード摂取の子どもたちへの指導（生活習慣病の予防）
- インゲン豆から大豆利用へ
- 炭酸飲料から伝統的な飲み物へ

衛生・環境

ためた水

ポンプ

ミネラルウォーター

貯水タンク

民家のトイレ

右のタンクから水を汲んで流す

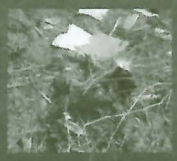
有料公衆トイレ

- 飲料水はミネラルウォーター
- トイレや手洗いのための水は、高地では十分とはいえない

ゴミ

町のゴミ箱

浜辺のゴミ



- ゴミは分別されていない
- 放置されている場所も多い
- すべて焼却してしまう場合も見られる

5. 今年度の成果
活動支援と教材開発

1) 妊婦の支援ー生活の自立へ

2) 生活課題に向き合う実践

学習者の参加による実践とテキスト教材

隊員によるテキスト教材の作成

自分はどこから来たのか・トヨのなど現地で使用されている製品を紹介しながら

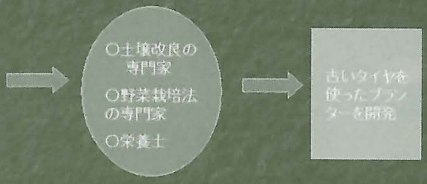
テキスト教材の目的が絵で分かる

3) 現地の生活課題をとらえた教材

- 生活改善への具体的な提案
- 現地の人と共に作るワークショップ
  現地の人をエンパワー
- テキスト教材の提示
- ポスターなどで図示

4) 多様な支援に役立つ教材を開発

- 畑はあるがトウモロコシだけを作れば良いと思っている実態、野菜の種をまいても放りっぱなし



学習者の生活文脈を理解し、多様な視点で教材を開発する方法の提案→家政分野の役割

５）活動事例集の提案

Ⅰ生活の質を高める

■衛生　・手洗い　・石けんをつくろう

■住生活　・住まいの開口部　・かまど　・掃除

■食生活　・栄養と健康　・年齢と栄養　・調理の方法
・食品の保存と選択　・さまざまな調理

■衣生活　・衣服のはたらき　・素材　・縫ってみよう
・衣服をつくろう　・身のまわりを飾ろう

■環境　・リサイクル

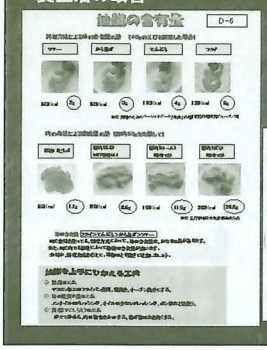
Ⅱよりよい生活のために

■食生活　・各国の料理

■衣生活　・編んでつくろう　・ビーズを使って

事例集より

食生活の改善



バランスの取れた食事

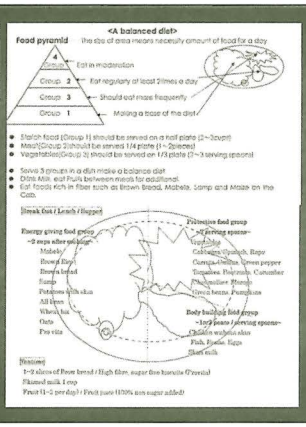
・3種類の食品を組み合わせて食べよう

参考

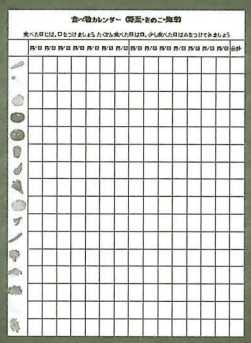
ボツワナの食生活

ボツワナの4つの食品グループを利用して

ボツワナ食のスタイルをプレート盛りで表現した摂取目安量とバランスのとり方

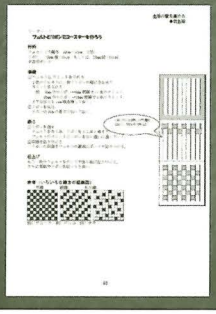


食べ物カレンダーの作成



衣服の素材（織物）

フェルトとリボンのコースター



編んでつくろう

指編みのアクリルたわし

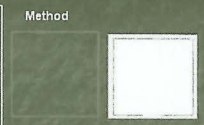
Let's sew (1) Box for accessories

Students will:
Earn an income by making and selling daily goods which they can easily make.

Students will:
Produce goods which can be made of local cloth and sold.
Learn daily goods which can be made both by hand sewing and by machine sewing.

Cloth Buttons Cords
Threads for hand sewing or for machine sewing

Method



1)Cut one pattern out from the outside fabric and one from the inside fabric. Sew four loop tapes at the cloth edges.

2)Place the right sides of both cloths together and stitch them together starting at the end of one strip, around the edges until you reach the other end of the strip.

3)Turn the right side out.

JICA Ghana Office

4)Slip stitch to close the open edge.

5)Attach a button on each edge, allowing the same distance from the corner as the loop that was attached. Pay attention to make the distance of the loop and the button from the corner the same.

Estimated time: from two to three hours
They can be made only by using a needle and thread.

4. 今後の活動に向けて

派遣隊員が活用できる事例集の完成

- 図を多くした参加型教材事例の充実
- 英語版の完成
- 地域別活動事例の提案
- 学校およびコミュニティにおける活動事例の提案

日本国内での実践知を反映したハンズオン素材の集約

松嵜　昭雄
（鳴門教育大学大学院学校教育研究科）

平成20年度帰国隊員報告会(於:国際協力機構研究所)

鳴門教育大学　教員教育国際協力センター
講師　松嵜　昭雄

日本国内での実践知を反映したハンズオン素材の集約

課題実施機関:鳴門教育大学　教員教育国際協力センター
課題代表者名:服部　勝憲

経緯

平成19年度「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業

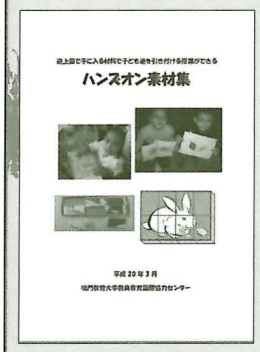
派遣現職教員の活動の幅を広げるハンズオン素材とその活動展開モデルの開発

目的

- 現職派遣教員を始めとする協力隊員により開発・活用されたハンズオン素材の収集及び評価・改良
- 他地域の隊員が即時的に利用可能とするためのハンズオン素材の活動展開モデルの開発
- 成果の「国際協力イニシアティブ」ライブラリへの登録による派遣隊員への支援体制の充実

※ハンズオン・・・直接手に触れる，実践的な，体験的な

成果



目的　方法

- 国際教育協力に携わる大学教員をはじめとする活動実施者によりハンズオン素材に対する評価・改善をおこない，その質的向上を図る

各大学等で実施されている教育協力事業において開発されているハンズオン素材を集約する。

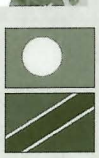
- 隊員からのニーズに応えるべく，ハンズオン素材の充実を図る

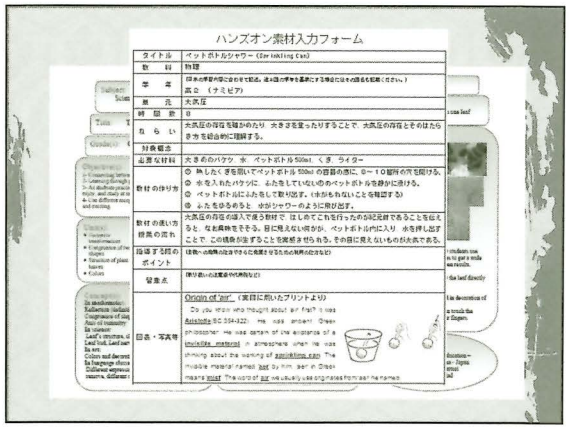
隊員が現地教員(カウンターパート)と情報を共有する視点から，集約したハンズオン素材を可能な範囲で多言語に翻訳する。

今年度の活動

- ハンズオン素材に対する評価の視点を策定

- 新たに開発したハンズオン素材を活用した授業実践(図工，美術)
- 現地で進行中の実践事例の調査(算数，理科)





[URL] http://incet.naruto-u.ac.jp/

最終成果物に向けた進捗状況

- 海外渡航調査
  - ● 小・中一貫校において授業を実施
  - ● JICA事務所と隊員を交えての協議
  - ●大学を中心に実践されている活動の紹介
  - ●活動展開モデルの確認とハンズオン素材に対する改善について意見交換
- 新たに収集したハンズオン素材を「国際協力イニシアティブ」ライブラリへ追加登録
- 既に登録済みのハンズオン素材および活動展開モデルの見直し

海外教育協力者に対する環境教育実践指導と教育マテリアルの支援

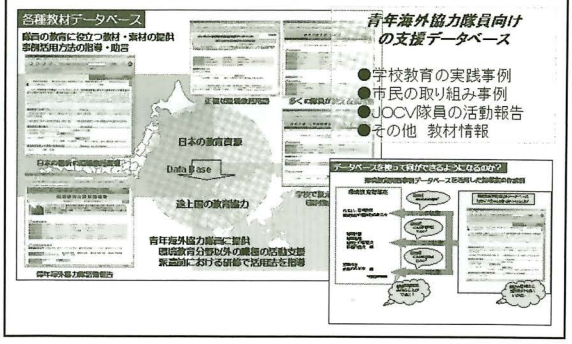
松村　隆
（宮城教育大学附属環境教育実践研究センター・教授）

海外教育協力者に対する
環境教育実践指導と教育マテリアルの支援

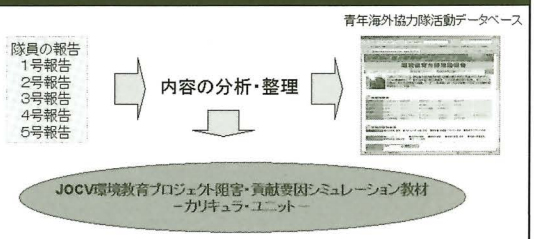
宮城教育大学

1. 環境教育事例の提供
   実践事例データベース・活動報告データベース等
2. 環境教育分野の派遣前研修支援
   協力隊活動報告の分析とその活用（駒ヶ根、二本松）
3. 環境に関連する教材（紙芝居等）の作成と提供
4. 帰国教員サポート （国際協力イニシアティブセミナー）
   海外教育経験を活用した学校教育-課題と展望-

1．環境教育事例の提供
実践事例データベース・活動報告データベース等



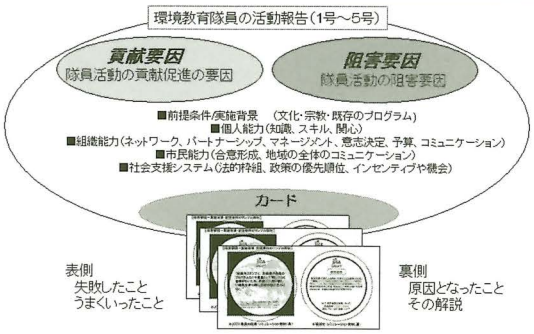
2．環境教育分野の派遣前研修支援
協力隊活動報告の分析とその活用（駒ヶ根、二本松）



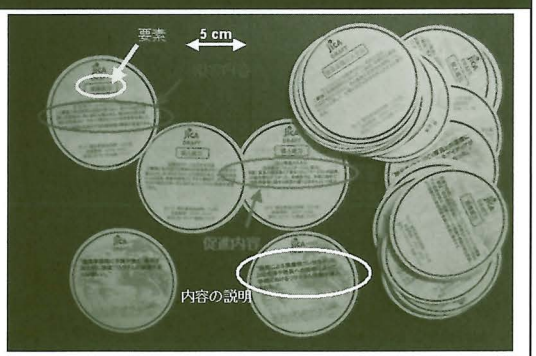
■教材の分類：参加型教材（カードゲーム）
■目的：JOCV隊員の活動において想定される阻害・貢献要因を分類・整理し、
　課題解決に向けたシミュレーションを通して、赴任国における活動の準備
■対象：派遣前・派遣中のJOCV隊員

JOCV環境教育プロジェクト阻害・貢献要因シミュレーション教材
－カリキュラ・ユニット－

製作担当：武蔵工業大学環境情報学部 佐藤真久研究室（佐藤先生と院生・学部生）



JOCV環境教育プロジェクト阻害・貢献要因シミュレーション教材
－カリキュラ・ユニット－



JOCV環境教育プロジェクト
阻害・貢献要因シミュレーション教材の活用

■阻害要因・貢献要因分類ゲーム
任地において、貢献度を高めるための実施条件・前提条件を把握。
障害となる事項の原因等の傾向を把握。

■サクセスストーリーゲーム
貢献要因のカードを取り出して、各参加者へ均等配る。参加者は配られた全てのカードをつかって、サクセスストーリーをつくりあげる。

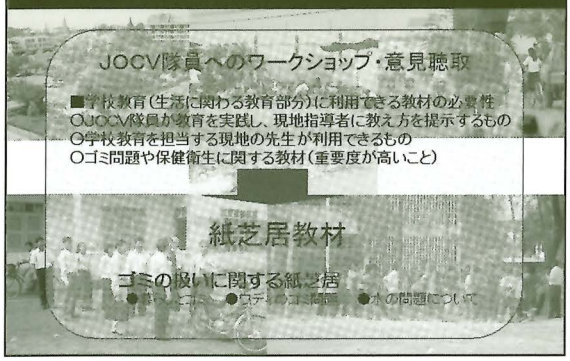
■阻害要因・貢献要因カップリングゲーム
カードを阻害要因と貢献要因に分類する。その後、阻害要因のカード1枚を選ぶ。その後、善策として参考になる貢献要因のカードとカップリングし、カップリングした理由を説明する。

■阻害要因の改善に向けたシミュレーションゲーム
カードから阻害要因を選び、参考となる改善要因のカードをつかって、自分なりの対処策を考え、発表する。

2008年 派遣前研修（駒ヶ根と二本松）で試行実施

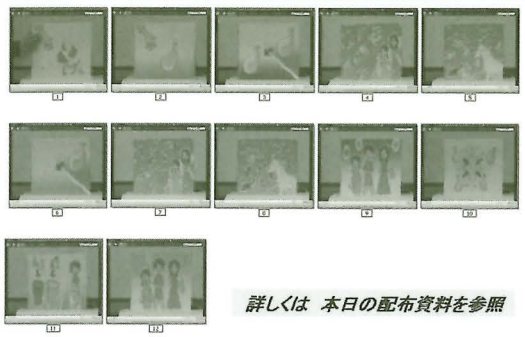
3．環境に関連する教材（紙芝居等）の作成と提供

海外調査・ワークショップでの隊員との意見交換



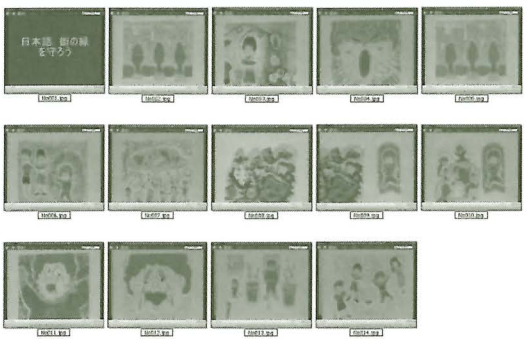
■紙芝居教材（現地実践の基礎教材）　暮らしとゴミ

製作担当：宮城教育大学環境教育実践研究センター　鳥野智之准教授
宮城教育大学美術科・幼児教育　学生・大学院生

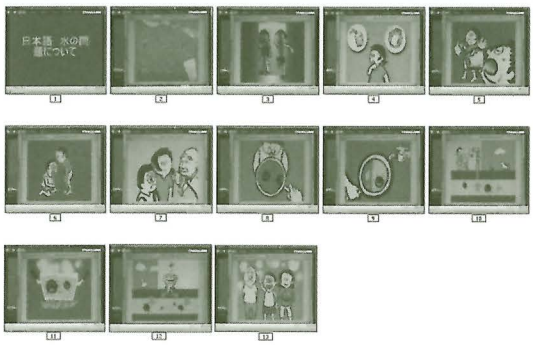


詳しくは　本日の配布資料を参照

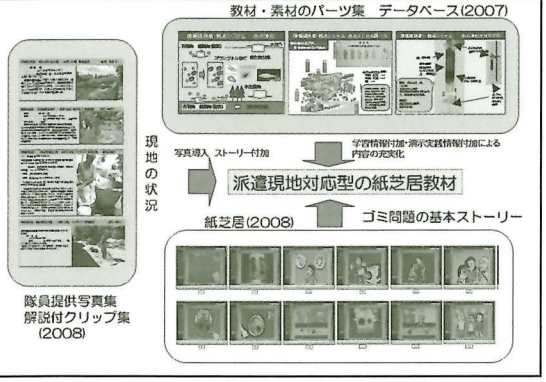
■紙芝居教材　　街の緑を守ろう



■紙芝居教材　　水の問題について



紙芝居教材の活用　　JOCV隊員によるストーリーづくり



4．帰国教員サポート　（国際協力イニシアティブセミナー）
海外教育経験を活用した学校教育−課題と展望−

帰国隊員の学校における教育支援

JOCVの教育経験の活用
- ■学校の国際理解教育
- ■学校の教科教育支援
  - 国際比較
  - 文化・暮らし・社会・自然など

帰国教員の経験を活かす環境整備
- ■教育委員会（学校関係者）、大学
  - 支援の整備体制の改善
- ■学校教員相互の共通理解・認識

第1回国際協力イニシアティブセミナー

第2回国際協力イニシアティブセミナー

2009年1月28日（水）　仙台国際センター

午前（1部）：JOCV隊員によるモデル授業
　仙台市内小学生（2クラス）
午後（2部）：特別講演、ポスターセッション
午後（3部）：専門家会議（事業関係者）
http://www.miyakyo-u.ac.jp

障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職員教員サポート体制の構築

藤原　義博
（筑波大学特別支援教育研究センター）

障害児教育分野における海外青年協力隊派遣現職教員サポート体制の構築

筑波大学特別支援教育研究センター
藤原　義博

事業の目的

- 現状：
  - 障害児教育分野では、現職教員以外の多くの職種が同一の領域で活動している場合が多い。
  - 派遣国の教育及び福祉の事情によって、ニーズや活動が多様なものとなっている。
- 事業目的：
  - 現職教員支援を中心にして、任国におけるチームアプローチや具体的活動手順の紹介、帰国隊員の知見の活用、任国の自立的人材養成に向けた隊員活動の支援を展開することを目的とする。

事業の方法

- 派遣前、派遣中、帰国後を視野に入れた支援リソース（人材・教材・研修素材）等を整理構築し、
- ネットワークの活用、
- 巡回サポートの実施、
- 素材の収集
- を通した支援活動を展開する。

今年度の活動・成果

派遣前研修の充実

I. 派遣隊員へのニーズ調査より明らかとなった障害理解及び指導法について、情報提供を行う筑波大学附属特別支援学校5校の人材のマッチアップ体制整備を行う。

II. 派遣前に任国における活動展開を時系列で理解することを促進するために、帰国隊員の知見を活用したハンドブックの作成にあたる。

派遣中の活動支援

I. 派遣国のネットワーク環境の現状を考慮し、即応性が高く人材バンクの体制を活用できるブログによる指導法・教材等の提供や紹介を行う。

II. マレーシアを発展モデルとした専門家ティームによる巡回サポートを実施し、隊員が任国で直面する課題に関するカンファレンス及び現地における専門的人材養成を促進するための研修会の展開を支援する。

III. 隊員が任国で活用できる指導法や研修で活用する素材集を作成し提供する。

帰国後情報ネットワークの構築

- 現任者等との事業引継及び情報共有のニーズを把握するとともに、ブログ、全国特別支援学校に向けた広報及びシンポジウム開催による帰国隊員の情報共有ネットワークの検討を行う。

最終成果物に向けた進捗状況

① 附属特別支援学校との連携強化を図り、タイムリーに人材をマッチアップさせる体制の整備が整った。

② 各障害種別に対応したスタッフによる巡回サポートをマレーシアで展開し、同国教育相と共同した研修会及び隊員カンファレンスを行った。

③ 帰国隊員を中心としたハンドブック編集委員会を編成し、1月中に完成させ、全国特別支援学校への発送を行う。

④ 応募予定者及び帰国隊員を対象としたシンポジウムを開催し、意見集約及び事業の総括について協議する。

プログラム４

派遣経験を生かした教育活動に関する報告

藤原一絵（京都市立明徳小学校）

林　賢三（京都市教育委員会総合支援育成課）

村　良弘（愛知県教育委員会教職員課）

個人の力を生かすネットワーク

藤原一絵
（9－1，ボリビア，音楽教師，）

こんにちは、はじめまして。京都市の方から参りました、藤原一絵と申します。9年度1次隊で現職参加させて頂いて、南米のボリビアに2年間行ってまいりました。現地では音楽教師として、また指導主事として子どもたちに音楽を教えたり、現場の先生たちに音楽教育をしたりして過ごしていました。今回は京都市のほうで今年度発足しました研究会についてのお話をメインにさせていただきたいと思います。

私のテーマですが、「現職参加した教員の還元方法について」ということについてです。還元方法といいましても、帰ってきてから還元するという方法と、任国にいる間に還元する方法とがあると思います。あちらにいる間にも、現地にいる子どもたちと日本にいる子どもたちとをつなぐ交流というのを出来るかと思います。私がしていましたのは、例えば勤務校にいる子どもたちが総合的な学習の時間に書いたお手紙や、図工の時間に描いた絵画などを現地の方に送ってもらって、また、こちらの方から送り返したりして、交流をしていたり、音楽教師をしていたもので、やはり途上国ということで楽器の数が足りなかったので、日本で余っているもの、お古のものなんかを学校で募集して送って頂いて、使わせてもらっていました。

還元といえるかどうか分からないのですが、日本との繋がりということで、日系人が多い町でありましたので、他のボランティアや現地の日系人と協力して、日系人会館、日本人会館で歌を教えたり、お茶を教えたり、日本料理を教えたりしていました。ちょうど紀宮さまがおいでになった100周年がありましたので、町で日本祭りなんかもしました。それから、帰国後日本の子どもたちに返してあげられるものとしまして、現地の文化などを自分が身につけて帰りたいなという思いがありまして、現地の音楽家の先生にボリビア音楽をギターで習ったり料理を習ったりしていました。それから、たぶん先生をやられている方みなさんも外国から日本に帰った後、子供たちにどんなふうに教材にして返せるかなってことで、写真を撮りながらつい考えたりしていると思うんでけども、作物とか文化とか子供たちが踊っている写真とか環境問題に使えそうなこと、それから日本にはない問題なんかもありますので、そういうものを写真に撮ったり資料を集めたりしていました。それから、日本に向けての発信ということで、日本との違いとか向こうの学校の様子、生活の様子なんかをお便りにして日本の知人や日本の先生たちに送付していました。それから、任国ボリビアで他の隊員が勤務していました養護学校、日本でいう総合支援学校の方で、子供たちが描いた絵や手作りのクリスマスカードを作ってくれていましたので、それを私の教え子、日本の子供たちに年賀状代わりに送るということもしていました。

これがボリビアで日本とのつながりということでやってきたことです。次は帰国後どのように子供たちに返せるかということですが、自分のやったことだけなんですけど、例えば資料作成、私の場合はボリビアから来た少年という文章を書きまして友達に絵を描いてもらって、紙芝居みたいなものにして道徳資料を作ったり、フォトランゲージはよくありますけども、先ほどのページでお話したように、撮ってきた写真をまとめて、お野菜を育てるとき世界のお野菜はどんなものなのかなって話をしたり、環境について考えさせられるような一枚を提示してどんな問題があるのかなっていうことを考えさせたり、日本との違いを考えさせたり、ある一人の少年をずっと追いかけて撮った写真がありましたので、ボリビアの子供たちの一日と日本の子供たちの一日のどこが違うんだろうということを考えさせたりしていました。それから、文化の伝達ということでは、一・二年生だったら生活科、三年生から上だったら学活や総合的な学習の時間の中でやられていると思うんですけども、持って帰ってきたおもちゃで遊んでみたり、持って帰ってきた楽器で演奏してみたり、それから、ボリビアの文化についてこちらの方で話をしたりということもできますし、高学年では特に総合的な学習の時間で話をすることもありますし、社会科の教科書に青年海外協力隊の話が出てきますので、担任の先生からちょっと話を聞かせてくれと言われると話をしに行ったりインタビューを受けたりもしていました。それから、今ここには載ってないんですけども、帰ってきてから知り合いの画家の方がやっておられる児童画交流展みたいなものもやっていまして、日本の絵を外国の方に送ったりもしました。

ここまでは内容なんですけども、じゃ、どういった場で還元していくのかっていうことを今年研究会を立ち上げたということもあって色々考える機会がありましたので、お話します。普通は在籍校に帰ってきて、その学級の中で学活の時間、道徳の時間、社会科、総合的学習の時間などにカリキュラムを自分で考えて、一時間単位で行うということがあります。それから、私はやっぱり向こうに行ってから日本の文化を知りたいなって思ったので、帰国後和文化クラブを担当してみたりとか、今年は地球っ子クラブっていうものを発足させて、そちらの方で開発教育、体験学習型の学習をしたり、子供たちが調べ学習をして発表したり外国の遊びをしてみたりという活動をしています。それから、これは大人の方に向けてなんですけども、家庭教育学級なんかでお話させていただく機会なんかもありまして、そうすると地域の方とか保護者の方にもお話を聞いていただくことができました。それから、他の学校の方からもちょっと、来て話をしてくれないかと声を掛けていただけたら、出かけて話をしたりもしました。

ここからが、本題というか、京都市の取り組みです。ここまでのお話は一個人の話で、帰国後普通は帰ってきて子供たちに返してあげたいと思っても、例えば道徳資料を作っても自分が作ったものは前の勤務校にそのまま埋もれてしまうというか残ってしまったり、道徳、音楽科などで文化伝達をしても自分のクラスの中で、子供たちはすごく喜ぶけれども、その場で終わってしまったりというのはやはり多かったです。で、京都市には、帰ってきた教員 OV 同士のネットワークというものが今まであまりなかったので、知りあう機

会がありませんでした。私も昨年度、林先生に声を掛けていただいて、色んな教員と知り合うことができて、その差を本当に実感してるんですけども、ネットワークがないと、やっても自分のクラスだけ、学校全体に広めることもなかなか難しいという現状があると思います。昨年度準備期間として林先生中心に教員 OV を集めていただきまして、現職参加したものだけではなくて協力隊をして帰ってきた人が一次試験を免除されるという国際貢献枠で受験されて先生になられた方が今どんどん毎年入ってこられて京都市におられますので、その方たちが一番多いんですけども、多くの教員 OV が集まりました。まだ研究会をするってことは決まってなかったんですけども、何をするか、どうしたいか、またどういう方法で子供たちに伝えていったらいいか、どういう活動ができるのかを少しずつ話し合っていました。そんな中、自分たちだけではなくて、京都市の OV ではない他の先生たちも巻き込んでやっていったほうがいいだろうという話がありまして、今年度から発足しましたのがこのグローバルキッズ研究会です。以前からありました国際教育研究会の方と一緒になりまして、新しく名前が変わってグローバルキッズ研究会として発足しました。今のところ会員が京都市全体で 87 名、そのうち OV が 19 名となっています。で、職種も、普通研究会と言いますと小学校だけですることが多いんですけども、小学校の方が一番多くて 78 名、中学校が今現在 2 名、高校 2 名、この方たちは OV の方です。それから、総合支援学校の方が 3 名。その他というのは委員会の方とカウンセラーの、不登校のこどもたちの相談センターで働いておられる方が 1 名おります。

今年度の活動内容なんですけども、まず今年度 3 回 OV による開発教育実践講座というのをしました。これは京都市の研修センターがありますが、こちらのセンターの方でまずネパールの帰国隊員の方で、「世界がもし 100 人の村だったら」という本を題材に参加型の学習という形態を広めるためにやってくれました。最初にアイスブレーキングをしてそれから、みんなで考えてグループで話し合ってという参加型の学習をしてくれました。それから次にネパールの隊員、高校に勤めている方なんですけど、「マハラバの町では」という、これは自作の教材です。この先生は帰ってきてから自分でどうやったら子供たちに伝えられるだろうかということを考えて数多くの教材を開発しておられる方で、その中の国旗の意味を考えるという内容の授業をしていただきました。三回目はセネガルの「ファールさんの気持ち」ということで、これはご存知の方もおられるかもしれませんが、途上国に行ったら、障害のある方が道端でお金が欲しいと言うのですが、その場合あなたはどうしますかとみんなで考えるという内容のもので、フォトランゲージですね、一枚の写真から考えようという授業をしていただきました。それぞれ色々な形態をやっていただいたので、すごく参加者の方には好評でした。それから、先ほどのは OV による講座だったんですけども、ワールドフェスティバルというのは、もともとあった国際教育研究会の方たちが主導で行っていただいたもので何年も続いております。市内の子供たちが申し込んで自由参加するというもので、主に大学の方とかで留学に来ておられる外国の方が講師になって文化の紹介をしていただく、コーナーがたくさんあって子供たちが回っていくというもので

す。それから、二月の末なんですけども、研究授業を予定しております。これは今日授業していただく方がこの会場にも来ておられるんですけども、いろいろ勉強していただいて、またこの方は今年4月より現職参加で海外派遣されるということで、すごく楽しみにしています。もしよかったら2月25日に鳳徳小学校でありますので見にきてください。

それから、帰国報告会、これはJICA大阪の方が主催で毎年夏休みにしておられる、教諭をされている方が二週間ほどマレーシアに行って、現地の様子を見て見識を広めて帰ってくるという研修制度があるんですけども、帰ってこられた方に帰国報告会をしていただくということをJICAと協力でさせていただきました。帰国報告会は総合支援学校の先生にしていただきました。それから、これもJICAとの協力というかJICAが主催のエッセイコンテストの審査協力をしました、研究会というか、普通はOB会の方がされるそうなんですけども、京都市の方では研究会の方でさせていただきました。それから出前講座というのもありまして、京都市の方で、まだ今年度始まったばっかりなんですけれども、土曜日に小中学校で講座を行えるということで、補習を行って教えておられたりとか、地域の人が昔の遊びを教えておられたりとか、外に出て行って子供たちが体験学習を行ったりだとか、色々なことができる枠として土曜講座があてられるんですけど、その中でいつでも出前講座の授業をしますよという確認をとれたOVの方をリストアップして各学校に配って講師登録をしています。

そんな感じで一年過ごして来たんですけども、一年やってきて成果と課題ということで、やっぱり成果としては一人で自分のクラスの中でやっていた分をいろんな人と協力できて、自分だけじゃ思いつかなかったことを教えていただいたり、自分のもっているものを共有できたり、というつながりがあります。特に先ほどの研修会では講師をしてくれた方が小学校教員、中学校教員、高校教員、総合支援学校の教員ということで多岐にわたっていましたり、JICAと協力させていただいたり、縦のつながりというか、いろんな方と協力させていただいて本当に、人の輪が広がってきたというのが一番だと思います。それから、何かをしようと思ったときはやっぱり、学校名簿というか、全市の学校にぱっと連絡がいくシステムがありますので、研究会として立ち上げたときにそれが利用できて、全市レベルで連絡がいったり、研修センターがただで使用できたりという実質的な面ですけども、これも大きかったです。それから、みんなが寄り合って教材開発をすることでそれを各学校に持ち帰って、自分一人では思いつかなった授業ができたということがありました。

それから課題の方ですけども、色々ありますけどもやはり、忙しい先生がたくさんおられますので、なかなか交流したいと思ったときに出られる状況になかったり、興味のある講座に出席したくても、6時7時に出てくるということが厳しいということがあったりして、交流がもっともっとスムーズに行けばいいなと思うことがあります。それから、題名に挙げていましたが、やはり一番元にあるのは個人個人の力だと思います。一人一人の企画力とか、自主性とか、いつでも、どこでも、誰とでもとよく先輩方がおっしゃるんですけども、そういう協力性みたいなものを一人一人が持つこと。それから日本に帰ってきてから

不適応というか、外国はこうじゃなかった、日本はこうだ、のような不適応を起こす人が時々いますけども、日本の子どもたちは目が輝いていないとか、そういうことではなくて、やっぱり世界を知るということは逆に日本を知るということですし、日本という国を外から見れたということを活かして、目の前の子どもたちに活かせていける仕事だと思いますので、他職の方と比べてはいけないのですが、先生はいいなと言ってもらえることもあって、何か返したいと思ったときに目の前に対象がいて、子どもがいて、子どもというものは日本の未来や将来ですし、そういう立場にいるということはすごくありがたいと思います。日本に帰ってきたときに先生辞めようかなと思ったことがちょっとあって、海外に行きたいな、海外で働きたいなという思いが膨らんでいたんですけども、自身の事情もありますし、税金で行かせていただいたという思いもすごくありましたので、三年間は絶対勤めようと思って、辞めないでよかったなと、続けててよかったなと今すごく思います。なので、是非今から行かれる先生方や帰って来られた先生方も、きっと親とかお子さんとかから、この先生がいてよかったなと思っていただけるような先生方がたくさんいらっしゃると思いますので、続けていただいて子どもたちに還元していただきたいと思います。これで以上です。ありがとうございます。

個人の力を生かすネットワーク

京都市国際教育・グローバルキッズ研究会

現職参加した教員の還元方法について

●任国で・・・

- 手紙交流
- 絵画交流
- 楽器の寄付

日本の学校との交流

- 歌、遊び
- 日本人会館で文化講座
- 日本祭

日本文化の紹介

- 音楽
- 料理
- 遊び

現地文化の紹介

- 作物、文化
- 環境
- 人種、貧困

教材になり得るものの収集

- ボリビア便り
- クリスマスカード

日本に向けての発信

●帰国後・・・

- 道徳資料
- フォトランゲージ

開発教育の教材作り

- 衣食住
- 音楽
- 考え方

文化の伝達

- ボリビア体験談
- 青年海外協力隊

ボランティアについて

どういう場で還元するのか？

●在籍校にて・・・

＊学級で...学活、道徳、社会科、総合的な学習の時間など

＊学校で...クラブ活動、課外活動

＊地域、保護者に...家庭教育学級

●他校にて・・・

●教員ネットワークを利用して・・・

京都市国際教育･グローバルキッズ研究会

●組織

＊平成１９年度　準備

＊平成２０年度　発足

＊京都市教育研究会　加盟

●会員

＊８７名（内ＯＶ　１９名）

＊小７８名、中２名、高２名、総合支援３名、その他２名

●本年度の活動内容

- 年３回
- 「新世界が１００人の村だったら」
- 「マハラーバの町では」
- 「セネガルのファールさんの気持ち」

ＯＶによる開発教育実践講座

- 市内約１００名の児童、保護者が参加
- ペルー、インドネシア、韓国、中国の留学生の協力
- 遊びと文化の紹介

ワールドフェスティバル

- ２月実施予定
- 鳳徳小学校にて

研究授業

- ＪＩＣＡ大阪
- 教師海外研修
- 平成20年度参加者による帰国報告会
- 「マレーシアで恋る～物思うタバイナイト」

帰国報告会

- ＪＩＣＡ主催
- 中高校生エッセイコンテスト
- 平成20年度審査協力

中高校生エッセイコンテスト

- 京都市立小学校で今年度より行われる「土曜講座」にて
- 現在18名の講師登録

出前講座

これまでの成果と課題

成果

- 校種を超えた縦のつながり
- 様々な経験をもつ教員同士の横のつながり
- 全市レベルでの活動
- 研修センターの使用
- 教材開発

課題

- 人的交流をよりスムーズに
- 会員、参加者数の増加
- 開発教育の認知度
- 個人のモチベーション

一人一人の力がスタートです

The future of the country

これからの教育の中で、帰国隊員に望むもの

林　賢三
（京都市教育委員会総合育成支援課専門主事，
京都市国際理解グローバルキッズ研究会顧問，
17年度シニア海外ボランティア，モンゴル，特別支援教育）

失礼いたします。京都市教育委員会の林でございます。実は私2005年の秋派遣のシニア海外ボランティアのOVでございます。実はJICAの要請種目では特殊教育になるんですが、現在では特別支援教育、モンゴルでは特別ニーズ教育というようになっております。モンゴルの国立教育大学のほうで活動しておりました。現在では京都市教育委員会で専門主事をしております。ですので、先ほど藤原一絵先生がおっしゃられた事等を、関連付けてということで、鎌田先生から言われておりまして、関連付けられるかどうか分りませんが、精一杯頑張っていきたいと思います。こういうふうに会の題名だけ書いているのですが、これから、皆さん方帰国されて、そして現場に行かれる、また現場から任国に行かれる方が多いと思いまして、いわゆる帰国隊員に期待すること、若干、学校の方々の話と熱い思いを協力隊のOBの方にうかがっておりますので、その辺も合わせて話していきたいと思います。よろしくお願いします。

少し硬い話になりますが、京都市の国際化の実態ということで、2007年京都市140万市民ですが、外国籍の市民という事で、4万1463人の方が市民としておられます。国数は書いておりませんが116カ国ということになります。特に、韓国、朝鮮の方が2万6876人ということで一番多いんですけれども、いわゆるニューカマーに対してオールドカマーという名称がありますが、そういう方です。開発途上国は、中国も含めて75カ国ありまして、1万1457人になります。その中で中国の方が京都市の場合、非常に多くて8489人です。次にフィリピンが935人ということで、断トツに中国の方が多いということです。平成9年から比べますと、1997年、ちょうど10年前の調査か比べますと、中国とフィリピンが約2倍に増えております。いわゆる、ニューカマーの問題、課題が出てきていると思います。京都市は、のちほど愛知県さんが報告されますが、南米ではなく、京都市の場合はアジアの方が中心だということがあります。グラフにしますと。

本市の学校での状況ということで、少し触れさせてもらいます。学校在籍、これは本年度の学校基本調査をもとにしております。ですから、インターネットを開いて頂きましたらすべて出るかと思いますが、学校に在籍する外国人ということで、1258人が、小学校、中学校、高校、特別支援学校、京都では総合支援学校と言うのですが、内訳は、韓国、朝鮮の方が1025人、中国の方が174人、その他ということで、開発途上国の方が59人。フィリピンの方も含んでおります。45人の方が開発途上国から来られている、フィリピン、

インドネシア、ペルーなど 18 カ国になっています。全児童生徒数が約 10 万、全学校数が 290 校です。ある小学校では、在籍数の 3 分の 1 が日本語の支援が必要という学校も出てきております。この学校は主に中国語が必要ということです。

京都市の国際化の方向性ということなんですが、本市、京都市では今後の 10 年を目指して、去年の 12 月に「京都市国際化推進プラン」を策定しました。その中にいろいろ書かれてあるんですけども、特筆すべきものとして 2 点挙げておきました。「青少年の参加型の交流の推進」というのが挙がっております。それから、「JICA 等の国際協力機関と連携した技術協力の推進」の 2 点が京都市では挙がっております。京都市は今まで、友好親善ということを中心に交流というものをやってきた、国際交流という形をやってきたんですけども、視点を変えまして、都市の発展に寄与する、技術交流や経済交流など課題解決型の授業や国際協力も求めて行こうということをうたっております。ですから、こういう技術交流や経済交流ということで、新生 JICA との協力ということも京都市は視野に入れて来たんだなあという風に考えております。

それでは学校教育についてはどうかとなりますと、文字がいっぱい並んでおりますけれども、京都市の「学校教育の重点」は、「確かな学力・豊かな心・健やかな体」の 3 つの目標で、下に、国際理解教育という分野がありまして、「国際協調や国際貢献の精神培う」と指導の重点に明記されています。それから教育の推進という項目のなかで、「体験活動、コミュニケーション活動の推進」というところが強調されて載っています。さて、こういう教育の中身を背負うのは教師でございます。こういう大きな京都市という社会から要請される教育界をリードしていくということで。

ここに持ってきたのは、経済同友会から出ております「大学変革への視点」、これはインターネットでも出ております。これからの即戦力となる教員をと私たちはすぐ言ってしまうのですが、経済同友会は、そうじゃなくて、むしろ、「社会の中で自らの能力を生かして挑戦するための基礎となる力や意欲など、人としての価値観を含む本質的な要素こそ重視したい。」ということを述べているのでございます。これを私が引用したのは、「私がモンゴルで一緒に活動していた隊員の気質やな」と思いまして、これは絶対これからの社会に役に立つ人材だなと思いました。それから、この文章の中で期待される 9 つの力として、たくさん挙がっているのですが、2 つだけピックアップしてきました。それは、協力隊の隊員が一番得意としていることですが、「自ら新しい課題を発見する力」それから「粘り強く取り組む力」「自分で解決方法を追求する力」、これは非常に得意とする力ではないかなと思います。それから、国際性、多様な価値観を理解し、これはもう当然あるでしょう。また、幅広い人々と対話する能力。これは、現在、藤原先生たちがやっておられるグローバルキッズ研究会は、非常に幅広い人々と対話する能力に長けた集団でございます。これを基にしましてですね、なぜ、協力隊 OB、国際貢献枠という制度を維持しなければいかんのかということを言っているわけです。

その次は、京都市が行ってきました現職参加の実態です。京都市では平成元年以来、11

名の現職参加（有給）を出しております。現在、フィジー1人派遣中で、そして、来年度1名、ここにも参加しておりますが、パラオに行くことになっております。それから、平成16年度に他の都道府県に先駆けまして、「国際貢献特別選考枠」というのを作りまして、およそ10名程度の教員採用、10名と言っていないのがみそであるのですが、10名を程度に毎年多くの先生が入ってきております。17年度の採用からありまして、27名の採用に至っております。平成19年度より、いわゆる協力隊にも行きたいし、教員にもなりたいという人が、教員試験を合格したのちに協力隊の試験を受けて、受かられた方には、留保権を持って行ってもらうというような制度もあります。その結果、現職参加は13名。それで、17年度から国際貢献枠の制度で27名です。18年度は10名合格していますが、若干少なくなっております。

そこでですね、先ほど藤原先生がおっしゃられました、京都市国際教育・グローバルキッズ研究会の立ち上げということで、実はこういう国際貢献枠制度を作ったのに、受け皿が全然無かったという状況が、私が帰ってきた時にありまして、気がつきまして声掛けを始めました。こういう国際貢献枠特別選考という制度を作ったのは、現在、京都市の市長をしております、当時教育長をしていた門川大作氏という方がおられるんですが、門川市長の熱い思いがありまして、教育改革には海外の経験した教員に入ってもらわないと困るということがあったんです。しかし、帰ってきてみんなでちりぢりばらばらになって力が発揮できないということでした。そこで、直接、私が中心になって声掛けを始めました。ざっとした流れなんですけど、京都市教育関係者の会というものを気合いをいれてやってみました。できましたら、京都市教育研究会の傘下でやっていく、公認団体を作っていく。そこで、京都市教育総合センターの所長と研修課長が力になってくれまして、40名が立ち上げ総会に参加してくれました。JICA大阪の酒井所長も参加してくれました。現在、この数が違うということで、藤原先生に怒られまして、会員数は87名で、OVが18名です。

研究活動の内容、先ほどもみられたはずなんですが、従来の国際理解教育の3Fといわれているものに加えて、自分の生活から世界を考えられる子供の育成、ですから、開発教育に力を入れてるということを考えています。それからもう1つは、JICAというものは何なのということをあまり知りませんので、京都市教員も含めて、それから、京都市の教員が国際貢献するという、京都市の教員は8000人いるんですが、経験者は0.5%くらいですね、できれば各校に1名くらいいてほしいな、290校あるんでしたら290名くらい欲しいなと思います。これは私、個人の希望であります。

それから、学校現場からということで、みなさんには耳の痛い話ですが、私が各校長から聞いて、こういう話を生の声を聞かせてもらいました。「現職参加させてもすぐ辞めるし、もう出さない。」という校長先生がいました。というのは、2年間海外で活動してきて、日本に帰ってきて、また行きたいという気持ちが出てきて、その時には辞めなくてはならないという状況でも行ってしまうということで、「期待していたのに、何や」というような、いわゆる落胆の声ですね。ですから、かなり、校長先生の役に立てたんでしょう。それか

ら、「経験者は組織の中で活動できない」「協調性がない」という声を聞きます。これは裏腹なんです。「自分たちの経験だけで仕事をする」こういう先生がいる。また、ODA の考え方でも色々ありますが、「なんで日本でやらへんねん、海外より日本の方がたいへんや」それから「自分の好きなことを勝手にやってきた」、これは割合いますね。逆に積極面をいいますと、「非常に OV は馬力がある」ですから生徒指導困難校にもってこいだと、じつは研究会活動やってるんですが、かなり困難校に入ってますので時間がないので、研究会に参加できないという、先生もたくさんいるということです。「困難にあってもめげない」「なんとかするっていう力がある」とか、「発想が面白い、個性的だ」というふうに評価される、「外国人に物おじしない」、非常に外国籍の生徒が多いというときでも力が出る。あと「知らない人とすぐ仲良くなってしまう」これは非常にフレンドリーだと。

課題としてまず、協力隊経験を必ず日本に還元するのが条件です。しかし協力隊経験のみでは評価されない。学級経営、教科指導、生徒指導などで十分力を発揮しなければならない。教員の世界は変わった経験をもつ人をなかなか認めないという傾向があります。同一性保持、同一集団になりたいという人が非常におおい。その中で OV は活動をするんですが、それはフィールドは日本であるということ、自分で考えて地方、地域でがんばりましょう。また、国際協力について、社会、学校現場での認知度を上げる。本当に多様な人間がいることを知っていることをやはり社会に知らせて行くということですね。それからさまざまな価値観を受け入れる社会にしていく、例えば障害のある人とか、男性、女性とか、いろんな人がいるというそういう話なのですが、ぼくは学校や地域に発信してほしい、皆様方が学校へ帰られた時に学校から地域に発信するとくに地域で困った外国人がいたら通訳とかボランティア活動に積極的にかかわってほしいと、特に通訳というのは非常に役に立っていると。

まとめですが、つねづねおもっているのですが、同質な集団は弱くてもろい集団でしかありません、ともにいい集団にするために多様性を認める集団の形成が必要である。ですから協力隊の OVの方が学校現場で活動してほしいと思っています。また得てきた経験でもって学校組織を活性化していくということが常に求められていると思いますし、行政としてもそれを望んでいると思います。中教審の方も 21 世紀型市民の育成を目指しております。それに対応していくのは青年海外協力隊に行ってきた皆様方ではないかなと、今、私は委員会に居らせていただいておりますが、活動してきたシニア OVという立場と時には板挟みのときもございますけれども、OVの方はどんどん学校現場に入ってきて活躍していただきたいと思っております。以上でございます。ありがとうございました。

平成20年度文部科学省・筑波大学 国際教育協力シンポジウム 「開発途上国における派遣現職教員の活躍—帰国隊員報告会—」

Think Globally, Act Locally

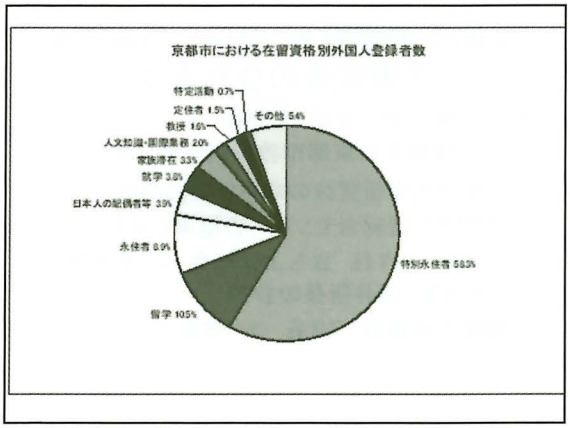
京都市教育委員会 総合育成支援課
専門主事 林賢三

（京都市における国際化の実態）
京都市国際化推進プラン（2008）より

（2） 在留資格別外国人登録者数（平成１９年（２００７年）１２月末現在）

（単位：人）

在留資格	人数
特別永住者	24,154
留学	4,357
永住者	3,701
日本人の配偶者等	1,611
就学	1,592
家族滞在	1,354
人文知識・国際業務	835
教授	667
定住者	639
特定活動	299
その他	2,254
総数	41,463



本市の外国籍児童生徒の実態

- 学校在籍に在籍する外国人
  1,258人（小，中，高，特）
- 内訳ー韓国・朝鮮1,025人，中国174人，その他の国59人
- 45人ー開発途上国
- フィリピン，インドネシア，ペルーなど18カ国
- （全児童生徒数105,713人）（全市学校数290校）
- ある小学校では在籍の3分の1が日本語学習の支援が必要な学校も存在する。

京都市の国際化の方向性

- 本市では今後の10年を目指して，平成20年12月「京都市国際化推進プラン」を策定した。
- 「青少年の参加型の交流の推進」
- 「JICA等の国際協力機関と連携した技術協力の推進」

平成20年度 京都市「学校教育の重点」

- 「確かな学力・豊かな心・健やかな体」
- 国際理解教育ー「我が国の優れた文化や伝統への理解を深め，尊重する態度を身に付けるともに，広い視野を持って異なる文化や歴史を尊重する国際協調や国際貢献の精神を培う」
- 国際理解教育の推進ー「地域に住む外国人や留学生，海外在住経験者の協力を得た取組や京都市国際交流協会と連携した取組，外国の学校との交流などを通して，世界各地の多様な文化・生活・習慣に触れ，親しむ体験活動の機会を増やすことにより異文化理解を深め，コミュニケーション活動を推進する」

社会から要請される協力隊OVの資質

- 経済同友会 「教育の視点から大学を変える」
  －日本のイノベーションを担う人材育成に向けて－2007，3,1
- 「これからの国際社会で，個人が生き生きと活躍するために必要な力とは，決して，目先の社会的ニーズや変化への対応，実務的な技術・知識といった意味での「即戦力」ばかりではない。むしろ，社会の中で自らの能力を活かし，挑戦するための基礎となる力や意欲など，人としての価値観を含む本質的な要素をこそ重視したい。
- 期待される力（9つの力）
- 【課題発見・解決力】 社会全般，または特定の分野の俯瞰や，日々の暮らしに対する観察などを通して，自ら新しい課題を発見する力。「解のない問題」にも粘り強く取り組み，自分で，解決方法を追求する力。
- 【国際性】国際社会と日本の関わりの理解や，異文化・多様な価値観を理解し，尊重する姿勢。語学力を含む，幅広い人々と対話する能力。」

青年海外協力隊経験者の教員採用と現職参加

- 平成元年以来，11名の現職参加者（有給）を出している。現在派遣中（フィジー）1名，来年度派遣予定（パラオ）1名である。
- 平成16年に青年海外協力隊，日系社会ボランティア経験者に対して「国際貢献特別選考枠」（1次試験の教職教養，一般教養を論文に変更）として10名程度の教員採用を決定した。その結果，平成17年から20年まで27名の採用に至っている。
- あわせて，平成19年度より，教員試験に合格し，青年海外協力隊に参加するものには合格資格を留保できる制度も作っている。

国際貢献枠特別採用者数

	17年	18年	19年	20年	合計
小学校	2	4	4	2	12
中学校	3	5	1	2	11
高等学校	1	1	1		3
特別支援学校			1		1
合計	6	10	7	4	27

24カ国

現職参加　平成元年～ 小6 中4 高3　　13名

合計 40名

京都市国際教育・グローバルキッズ研究会の立ち上げ

- 協力隊OVのつながりを作る
- 「JICA経験者の京都市教育関係者の会」
- 京都市教育研究会の傘下での会組織に
- 京都市教育総合センターの指導を得る
- 20年5月27日　立ち上げ総会　40名参加
- JICA大阪　酒井所長の参加
- 現在の会員数　78名　OV18名

研究会の活動概要

- 研究会のテーマ
- 「グローバル化社会の中で，共存することができる子をめざして」
- ～わかり合え，共に生きる子どもの育成～
- 目的
- OBの横のつながりの強化
- JICAに対する京都市教育界への啓蒙
- 国際的な子どもの育成
- 従来の3F（Fashion,Foods,Fesutival）に加えて，自分の生活から世界を考えられる子どもの育成 開発教育の実践，教材作成
- 京都市の教員から，国際貢献しようとする人材の発掘
- 海外で活動していた教員を増やす。（京都市教員　約8,000人）
  現在0，5%

学校現場から聞こえる声

- 消極的な声
- 現職参加させてもすぐ辞めるし，もう出さない。
- 経験者は組織の中で活動できない。協調性がない。
- 自分だけの経験で仕事をすると足並みが乱れる
- 海外でボランティアするより，日本でやるほうが有効だ
- 自分で好きな事をしてきただけだ

- 積極的な面
- 協力隊OVは，馬力がある。
- 困難にあたっても，めげない。なんとかする。
- 発想が面白い。個性的だ。
- 外国人に物怖じしない。
- 知らない人とすぐに仲良くなってしまう。

課　　題

1、協力隊経験を必ず日本に還元するのが条件である。

しかし，協力隊経験のみでは評価されない。
学級経営，教科指導，生徒指導などで十分力を発揮しなければならない。

- 教員の世界は変わった経験のある人を認めない傾向があるなかで、OVの活動のフィールドは、日本である。
- Think Globally,　Act Locally

- 2，国際協力についての社会（学校現場）の認知度を上げる
多様な人間がいて，普通の社会である。先進国や途上国の人々とのかかわりの上で，日本の生活が成り立っている事を知る。
- 3，多様な価値観を受け入れる社会（学校現場）を実現する。
宗教や文化の違う人々をどう理解するかということが，国際化した我が国には必須の条件となる。 内向き志向を打破する。
- 4，様々な人々が共に暮らせる（共生）社会（学校現場）を実現する
障がいがある人ない人，男性女性，若者高齢者，外国人日本人などが共に安心して暮らせる社会を作り上げる。学校から地域社会へ発信する。地域で通訳やボランティア活動を積極的に行う。

まとめ

- 同質な人々の集団は，弱くて脆い集団にすぎない。共に良い集団にするために，多様性を認める集団の形成が必要である。日本が国際化していくためにも必要である。協力隊OBが，様々な日本適応の課題がある中で，きっと国際社会で活躍する日本人を育成してくれるものと信じる。
- 21世紀型市民の育成（中教審）

本県における現職教員特別参加制度の実態

村　良弘
（愛知県教育委員会教職員課）

失礼します、愛知県教育委員会教職員課の村と申します。本県の現職教員特別制度に対する現況をお話しさせていただく機会を設けたいということに大変感謝をしております。ただ若干、中身の薄いお話になるかもしれないんですが、お許しをいただきたいと思います。手元に資料がありますのでそれを見ながらお聞きいただければと思います。本日皆様方の活動報告を拝聴しましてそれぞれ、職種地域によって活動はさまざまであったようでございますが、大きな成果をあげていただいているということをあらためて実感させていただきました。私どもは、実際のところ、机上だけで派遣をさせていただいているだけで、わたくし自身もそうした体験もございませんし、本課の職員にもそうした体験をしているものがいないということから、実際こういう場にお呼びいただいたことは本県の教育委員会としても、今後の派遣について考える良い材料をいただいたなと思っております。今後とも現職教員の派遣につきましては積極的に取り組んでいきたいと、また気持ちを新たにさせていただいております。

では、さっそく本題に入らさせていただきますが、資料に基づいて少しずつお話させていただきます。まず本県では派遣教員の資質向上または力量向上ということはもとよりでございますが、帰国後に派遣経験を教育分野に還元することで国際教育分野の人材の裾野を広げて本県の教育の質を上げてもらいたい、また外国人児童生徒の多い地域においてその教育や多文化共生活動の直接の貢献を期待したい、そんなことから平成 2 年より、いままで延べ 72 人の教員を 38 カ国の派遣をしてきたという実績がございます。本日も本県から今泉先生と稲葉先生が活動報告をされていましたが、まさに私どもが期待している効果が現実になっていると大変心強く思いました。お二人の先生を含め、今年も 9 人の方が戻ってきていただいているわけでございますので、その先生方の帰国の活躍を赴任された学校の校長先生やあるいは教育委員会の方にちょっとお伺いをしたところ、資料にもいくつか書かせていただいておりますが、道徳の授業で現地の写真を見せながら食物や物の大切さを指導する、あるいは総合的学習の時間の国際理解教育の推進者・実践者としての活躍、またその調整役をしての活躍、集会や朝会での講話、さらには他の学校や学年でのこの経験を生かした国際理解教育の推進、学校のみならず市の教育委員会の講演会でお話をされたり、PTA での講演活動や市町での研修活動の講師として活躍をされたりしているというお話を伺いました。それぞれの学校や教育関係からの評価を受けているということでございます。来年度も 9 人の方が戻ってきていただくいうことでますます裾野が広がるかなというように期待をしております。今後とも県の教育委員会として、教育事務所、そして市

町村教育委員会と連携をしながら復帰した先生方がその経験を十分に発揮できる環境整備に配備していかなければならないというように考えております。先ほど管理職の研修をやったということでございますが、そういうことはできないかもしれませんけれども、やはり校長先生方の意識の改革は大変重要でございますので、そういう意味で市町の教育委員会等々に働きかけをしていきたいと、今日の会議に参加させていただいて、あらためて感じさせていただきました。また来年度、21年度の派遣は4人でございます。ただ日系社会人の派遣が5人みえますので、結果的には9人の方が来年度からでがんばってもらうことになりました。

ところで、本県は日本語指導が必要な外国人生徒が全国的にみてもきわめて多く在籍しております。その推移を資料の2の（1）に文部科学省調査からですが、示させていただいておりますけれど、ご覧の通り年々増加しています。平成19年9月現在では約4900人になっているわけでございます。正式には発表されていませんが、平成20年度の9月現在ではさらに増えていると思われます。また母語別では、ブラジル系の外国人児童生徒が非常に多いということから圧倒的にポルトガルが多く、64パーセントを占めているということになっております。また本県では、承知のとおり自動車産業をかかえておりますのでその関係から、一つの小学校で200人くらいの規模のところで100人を超える外国人の児童生徒がいるという学校が二つ三つとあります。これはある意味、本県が、物づくり産業が中心であるということも含めまして、本県の特徴かと考えています。またこういう状況に対して本県では、青年海外協力隊の現職教員派遣も施策の一つと位置づけておりますが、その他にも、教育事務所に7人の語学相談員を配置しております。7人の内訳はやはりポルトガル語が多いということで、ポルトガル語が5人、スペイン語が2人ということでございます。この語学相談員はどんなことをするのかと言いますと、各教育事務所が所管をしている、特に外国人が多い学校を巡回して、児童生徒に対する日本語指導あるいは母語指導、また普段、母語での会話ができなくて精神的に不安になっているという児童生徒や保護者に対する教育相談ということで携わってもらっています。決して多くの相談員ではありませんが、本当に学校にとりましては貴重な存在となっております。また外国人児童生徒の多くいる学校には、日本語教育適応学級担当教員を配置して、外国人児童生徒に個別に授業を行ったり、あるいは日本語学級を設置したりして対応している状況でございます。

先ほど、選考試験への配慮という話がございましたが、本県におきましても教員の採用選考試験に際しまして、平成19年度の実施から、ポルトガル語、スペイン語、中国語が堪能な方を対象に、特別選考というのを導入してまいりました。一般の面接に加えまして、外国語の面接を行いまして、選考の資料に加えさせていただいているということです。今年度採用されたのが、小学校で11人、中学校で10人でありますが、その多くの方によって、各地域で語学力の活用が図られていると、教育事務所からは伺っております。本年度の採用選考では志願者数が前年とくらべて若干減ったということで、結果的に合格者も半数ほどになってしまいましてけれども、これについては非常に残念であり、本県としても

ぜひ、いろんなところでアピールしていきたいと考えております。それから社会人特別選考というのを実施しておりまして、受験資格のなかに青年海外協力隊の派遣実績もうたっております。受験年度からさかのぼって5年前までに2年間、青年海外協力隊として派遣されたかたについて、1次試験の中の教職教養と専門教養を小論文に変えて対応するということでございます。本年度もそういう特別選考で合格された方もたくさんいらっしゃいますので、そうした方の学校での活躍を大いに期待しているところでございます。

次に本年度より創設された日系社会青年ボランティアの現職教員参加についてでございますが、先ほども申し上げたように本県では、多くの外国人労働者が生活をしております、したがって、それにともない子どもたちも全国最多というふうになっております。今回、日系ボランティアの応募県は13県でございましたが、表を見ていただいてもおわかりのように、その4分の1以上の約27%を本県が占めているという状況でございます。この状況におきまして、本県の教育環境におきましては、教員のポルトガル語の語学力の向上と、現地文化について理解を深める、というのが喫緊の課題ということになっております。そうした中でこうした制度ができたということは、本県にとって意義深く、ぜひこの制度でもって派遣された先生が2年間、もちろん向こうでの職務は遂行してもらうのですが、それによって得た語学力を本県に発揮していただけないかと考えています。私どもとしては、非常に意味のある取り組みになるんではないかと思いまして、今年度、それぞれの市町村のへ呼びかけをさせていただきましたし、JICAさんからも声をかけていただいたものでございます。それによって今年度5人の方に行っていただくということになりそうでございます。会の冒頭、JICAの方より10名が行くという話でございましたので、そのうち5名が本県から行っていただくということで、そういうこともあって、今回こちらに声をかけてもらったのかなぁと思っております。

実は私も今は行政の立場でいますけれども中学校の校長をしていましたので、ブラジル人の児童生徒を受け入れた経験がございます。やはり言葉や文化の壁は思った以上に大きく俗にいう「取り出し授業」ということをしなければ、特に国語や社会といった授業ではお客さんになってしまう状況があります。体育や音楽といった体を使ったり声をだしたりするっていうのはいいんですけど、実際、日本語がわからない子供たちを普通の授業に入れるということは大変なことでございますので、そういった意味で非常に苦労をした経験がございます。それと同時に、まだ子供たちは、環境に慣れやすいものですから、時間が経過したらなんとかなるのですけれども、親御さんたちの対応というのは非常に難しいことが発生します。私の場合も日系の方なんですが、日本語が話せない、したがって派遣会社を通じて情報交換をするということで、給食費ひとつ払っていただくのにも大変な苦労をした記憶がございます。そういうときに思ったのがポルトガル語が分かる先生がいてくれたらなあ、あるいはボランティアの方でも地域の方でも分かる人がいてくれたらなぁ、と切実に願ったことでございます。先ほども言いましたが、ぜひこの5人の方には力を発揮していただき、帰国後には本県の教育の発展に寄与してもらいたいと願っています。

財政状況がこういう状況になってまいりましたので、外国人児童生徒の数が、二学期のはじめと三学期のはじめでは、クラスで20人ほども違うという話を聞いたことがあります。しかし、本県の特徴が物づくり産業である以上、外国人児童生徒は少なくなっても、その対応は必要だと思っています。財政状況がどうなるかわかりませんけれども教育委員会としては、青年海外協力隊と合わせて、ぜひこの制度を応援をしていきたいと思っております。そして最後になりましたが、制度のさらなる発展を願いまして、また参加された先生方の一層のご活躍をお願い申しあげまして愛知県教育委員会の報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

閉会挨拶

佐藤　眞理子
（筑波大学教育開発国際協力研究センター）

本日はお忙しいなか、平成20年度文部科学省、筑波大学主催の「国際協力シンポジウム―開発途上国における派遣現職隊員における帰国隊員報告会」にご参加いただきまして大変ありがとうございました。私事ではありますが、私の研究テーマは、「途上国における教育開発」と、「途上国に対する教育援助」であり、今まで、インドネシア、フィリピン、エチオピア、バングラディッシュなどに調査研究で行きました。

それぞれの国で、現職教員の隊員ではありませんが、青年海外協力隊員に会い、彼らが困難な生活環境、全く異なる異文化、異なる言語の中で、たくましくボランタリー活動を行っていることに大変感銘を受けてきました。先進国の青年が、途上国に派遣されてボランタリー活動を行うという制度はアメリカで1960年に設置された平和部隊にさかのぼることができます。それに、範をとった制度が日本に限らずドイツ、フランス、イギリス、スウェーデンと多くの先進国で実施され、各国内、及び国際的に高い評価をうけています。

日本の海外青年協力隊も、日本国内、国際的に高く評価されています。そのなかでも高い専門性をもった現職の先生方が派遣される現職教員派遣制度は、どの先進国にもない日本独自の制度です。本日のシンポジウムで、現職の先生方が教育現場だけでなく、さまざまな生活の場に入り込んで、各国の文化・社会・伝統に配慮した教育を実施していることや日本の教育を実践の場に取り入れたことに大きく感銘をうけました。

本シンポジウムでは大きな関心のもと、意義深い発言や活発な討論がされました。皆さんはアフリカ、太平洋諸国、中南米、南アジアと多彩な各国でご活躍された先生方の活動、それを支える大学等のサポート活動、教育委員会の期待の発表を通して派遣現職教員制度の全体像をご理解なさったことと存じます。派遣現職教員制度は現職の先生方に教育に限らず、その背景となる文化・社会・経済・言語といったことの体験を通して、教育における深い洞察のみならず、自己啓発につながる貴重な機会を提供していると確信した次第です。現職の先生方は、今回の活動を通して、日本の教育現場に世界に目を向ける、すなわち世界を理解するということに貢献されています。今後とも、できるだけ多くの現職の先生方がこの制度を利用して活躍し、日本と途上国の友好の懸け橋となり、そして、日本の子供たちと途上国の子供たちとの懸け橋をなることを願っています。それには、現職教員の皆様方のネットワーク形成と、それによる持続性が大きな力となることも今日学びました。

本日のシンポジウムの開催につきましては、ご尽力なさいました文部科学省、JICAの方々にお礼を申し上げると共に今後のご支援を願いまして、短い挨拶ではございますが、

以上をもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。

平成20年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における派遣現職員の活躍

―帰国隊員報告会―

報告書

発　行：平成21年3月
発行者：筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）
国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業
〒305-8572　茨城県つくば市天王台1-1-1
電話　029-853-7287　　FAX　029-853-7288
E-mail: jocv@criced.tsukuba.ac.jp
http://www.criced.tsukuba.ac.jp
編　集：佐藤眞理子、鎌田亮一（CRICED）
印　刷：前田印刷株式会社　筑波支店